

今日も地球の片隅で。

銀匙

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アンドロイドが、戦術人形が、艦娘が、はたまたそれ以外の何かが。

戦う為か、手を取る為か、欲の為か、あるいは恋の為か。

荒廃した地球の片隅で、今日も紡がれていく物語。

ドールズフロントラインにNieR：Automata、そして艦隊これくしょんの世界観を混ぜていったらこんな感じになりました。

※私自身が苦手なので血生臭い表現はしませんが、戦闘描写がありますので「残酷な描写」を指定しています。

※リアルな戦闘描写より人物の心理描写を優先しますので、描写不足や矛盾などはご

容赦願います。

※かんだいな

こころで

よんでね！

目次

第1話	第2話	第3話	第4話	第5話	第6話	第7話	第8話	第9話	第10話	第11話	第12話
1	10	19	28	35	46	55	64	73	81	90	99

第13話	第14話	第15話	第16話	第17話	第18話	第19話	第20話	第21話	第22話	第23話	第24話	第25話
109	118	126	137	147	156	165	173	180	193	203	219	229

第38話 第37話 第36話 第35話 第34話 第33話 第32話 第31話 第30話 第29話 第28話 第27話 第26話

362 352 343 334 325 313 303 291 282 269 260 250 239

第51話 第50話 第49話 第48話 第47話 第46話 第45話 第44話 第43話 第42話 第41話 第40話 第39話

488 479 469 460 449 439 429 420 406 397 388 379 371

第
6
0
話

第
5
9
話

第
5
8
話

第
5
7
話

第
5
6
話

第
5
5
話

第
5
4
話

第
5
3
話

第
5
2
話

565 556 547 538 529 521 512 504 496

第1話

「行けええつ！2Bィツ！」

彼女は飛行ユニット離発着エリアとのゲートを封鎖し、自らを格納庫に閉じ込めた。バンカーのシステムはウイルスに冒され、融合炉はいっせいに爆発するかもわからない。

一人格納庫に残った彼女は、その直前まで、ホワイト司令官と呼ばれていたアンドロイドである。

人類軍の反抗の切り札であるヨルハ部隊の総指揮を、衛星軌道上の基地であるバンカーから執っていた。

しかし、バンカーも、搭乗していた部下達も、機械生命体のウイルス攻撃にあっけなく陥落してしまった。

ホワイトのリソースもまた、徐々にウイルスに冒されていく。

「侵食率19%・20%・私は・最後に何が出来る・考える・まずは」

バンカー内部から格納庫にアクセスするエレベータにアクセスし、制御プログラムを丸ごと消去する。

これで暴走したアンドロイドの残党は格納庫へ侵入できない。

基地のそこらじゅうから軋み音が聞こえてくる。

「……待て、墜落地点はどこだ？」

ヨルハ部隊やレジスタンスの多く集まる地域にバンカーの残骸が直撃すれば何もかも御終いだ。

予測結果を演算したホワイトは舌打ちをした。このままでは彼らのド真ん中に墜落してしまう。

「機械生命体らしく、嫌らしいほどパーフェクト、か」

既に自分のウイルス侵食率は30%を超えた。視界に嫌なノイズが走り始める。

「こういうことはS型の方が向いてるが……真似事くらい私にも出来る」

その時、2つの飛行ユニットが離発着エリアを飛び立つ音がした。

「2Bと9Sは送り出した……よし、最後の勝負はチキンレースといこうじゃないか……」

ホワイトは立ったまま目を閉じ、自らの正常なりソースを全てバンカーの姿勢制御システムへと注いだ。

やがて、バンカーの片隅にある補助姿勢制御装置の1つが急速に噴射出力を上げ始めた。

それはほんの僅かずつ、バンカーの軌道をずらしていく。

理想は海上……それが無理ならせめて無人地帯に……

想定外の姿勢変更に耐えきれなくなったバンカーは、ついに骨格部が瓦解し始めた。

「コノ期ニ及ンデマダ抵抗スルカ！出来損ナイノアンドロイドメ！余計ナコトヲ！」

バンカーのあちこちから響く機械生命体の声には焦りが感じられた。

司令官は目を閉じたまま、フツと笑った。

「私の・・勝ちだ・・人類ニ・・エイコウ・・アレ」

ついにバンカーの融合炉が爆発し、衝撃でホワイトは吹き飛ばされ、その機能を停止した。

バンカーは瓦解しながら大気圏へと突入していった。

太陽が本格的に空へと登り、じわりと熱くなり始めた頃。

マスターは自分の店である「オリファイ」の玄関先を箒で掃いていた。

掃除もほぼ終わりを迎えた時、玄関のドアが小さく軋み音を立てながら、ゆつくりと開いた。

玄関のドアノブを持ったまま、その娘は大きく体をしならせて欠伸をした。

マスターはちらりと玄関に視線を投げ、いつも通り手を腰に当てた。

「マスタあ・・おはよう」

「おはよう加古。何度も言うが店先に下着姿で出てくるな。腹を搔くな。着替えて寝癖を直してこい」

「はあい」

「・・・ふむ。ということとは、今日は騒がしくなりそうだ」

マスターは洗面所に向かう加古から「外」へと目を向けた。

外。

空は舞い上がる砂で覆われ、一面に白茶けた景色が広がっているのがこの地域の姿である。

砂は細かいガラス質で、店の商品にかかると傷がついてしまう。

ゆえに店は建物ごと、分厚いコンクリート製のシェルターで覆っている。

入り口を狭く、かつ店の玄関まで長細い通路にしてあるのは砂の侵入を防ぐためである。

代償として店内からシェルターの外はほぼ見えないが、見えた所で白茶けた世界ではない。

ふと、その入り口を覆う影が一つ。

狭い通路を身を縮めるようにして進んできたそれは、大きな包みを大事そうに抱えて

いた。

マスターが声をかける。

「やあデラ、ちよつと予想外だったよ」

店先にそつと包みを下ろしたデラは首を傾げた。

「そうか？私はいつもオリファイには30日ごとに来てるつもりだが」

「違うんだ。ついさつき加古が起きたんでね」

デラは大きく頷いた。

「ああ、MPのお嬢ちゃんか。私は見なかったぞ」

「じゃあ加古予報は外れだな」

「それならまたすぐ寝るだろうよ」

「ところで、飲み物はいつもの水でいいか？コーヒーも冷やしておいたんだが」

「いや、水の方が良い。一杯頂けるかな」

「解った。荷物と一緒に中に入れて待っててくれ」

マスターは玄関のドアを大きく開いて招き入れた。

店に入ったデラはその長身をカウンターの椅子に預け、マスターは冷蔵庫から水のボ

トルを取り出した。

カウンターのの上に置いたグラスに注ぐと、グラスの周りがあつという間に結露する。

注がれる様を見ていたデラは目を細めた。

「ああ、まさに砂漠のオアシスだ」

マスターはグラスをデラの前に置くと、にこりと微笑んだ。

「ゆつくり飲んでくれ。一息ついたら話そう」

その時、店の奥から加古が姿を見せた。

「マスター、ちゃんとし・・・うわあつ・・・あ、な、なんだデラさんか」

数十cmは飛び跳ねた加古を見て、デラは悲しげに目を伏せた。

「加古ちゃんは相変わらずだなあ」

加古はがりがりと頭をかいた。

「いやあごめんごめん。ミュータント見るとびつくりしちゃってさあ」

「まあ私だつて見慣れないミュータントが居たら警戒するがね。そろそろ覚えてもらえないかね？」

「がんばる・・・うん、がんばる」

「頑張らないとダメか・・・」

そう。

デラはいわゆるミュータントと呼ばれる存在である。

その昔、地球全土を覆ったELIDという病気は人を異形、すなわちミュータントへ

と変えた。

ミュータントになると凶暴化するというのが一般常識である。

実際、ミュータントの大多数は凶暴であり、相手が誰であれその怪力をふるう。

デラのように凶暴化しない個体はごく一部であった。

そして悲しい事に、狂暴なミュータントと異なる外見上の決定的な特徴が無い。

ゆえに加古の反応が普通で、むしろ平気な顔をして迎えているマスターの方が珍しいのである。

デラはグラスの水を美味しそうに飲み干すと、マスターに頭を下げ、グラスを手渡した。

マスターが受け取って洗っている間に、デラは持つてきた包みを解いていった。

「今回はなかなか大物だね・・もしかして例のソファかい？」

「最優先だと言われたからな。しかし、このオーダーは苦勞したよ」

加古がデラの肩越しにひよいと覗くと、そこには2人掛けのソファが姿を見せていた。

「へえー！旧世界でいう本革のソファみたい！すごく格好いい！」

デラはニツと笑った。

「皺の加工を工夫してみたんだ。耐荷重も余裕を見て600kgにしてある」

加古は眉をひそめた。

「こんな狭いソファで600kgもいらんじやない？」

グラスを仕舞ったマスターが答えた。

「機械生命体とアンドロイドのカップルさんだ。それぞれの体重を考えると、な」

加古はげんりした顔をした。

「ええ・・っっていうか手触りとか解るの？」

マスターは肩をすくめた。

「さあな。旧世界の洋室にあわせたいというオーダーだからな」

加古はデラを見た。

「確かに無茶なオーダーだね」

デラは頷いた。

「単に素材で受け止めようとすると重さに負けてしまう。電源不要の油圧制御を仕込むのは大変だった」

マスターはそつとデラを見た。

「それでその、予算内で収まったのかい？」

デラは頷いた。

「一から作ったのは外装位だ。その方が安いし故障しても修理が利く」

加古は首を傾げた。

「そんな無茶な重さに耐えるソファ向けに都合の良い物なんてあるの？」

「鉄血人形の下半身を流用した。重武装ユニットの脚はコンパクトで丈夫だからな」

「えっ・・・じゃあこの中って」

「大雑把に言えばロボットの腰から下だよ」

マスターと加古はなんとなくその様子を想像した。

微妙に知りたくなかった気もする。

「・・・外見って大事だね」

加古の呟きに、マスターとデラは頷いた。

第2話

「じゃあ約束の制作費だよ。他のオーダーも含め、何か困ってる案件はある？」

マスターはデラに小さな袋を手渡しながら訊ねた。

デラは中身を見て頷いた後、ふいに顔を上げた。

「そうそう、積載車の動力源を新しくしたいんだが、パーツが足りないんだ」

「何に使われている部品とか解るかい？」

「待ってくれ、メモを取ったんだ・・・」

デラはカバンをしばらく漁り、小さな紙切れをマスターに手渡した。

マスターはメモを見て首を傾げた。

「また鉄血人形の残骸かい？」

「確実に流用出来そうなパーツの知識があるのは鉄血製品しかないんでな」

「このタイプの多脚戦車の胴体か、まあジャンクヤードで見たことはあるな」

「ただし、欲しい部品は戦闘で壊されやすくてな」

「ほう、胴体のどの辺りなんだ？」

「カメラユニットの近くだ」

「なるほど。すると、その辺が無傷で、当該部品に外傷がないことを確認したら支払い、か」

「それで良い。回収屋は正常に稼働することまで担保できんだろうからな」

「手に入ったら連絡するよ」

「うむ、通信周波数はいつも通りだな」

そう言いながらデラはおもむろに立ち上がり、出口へと歩いていく。

「またねデラさん」

加古が声をかけるとデラは片手を軽く上げた後、店を出て行った。

「これは良い！ありがとうございます！素晴らしい出来だ！」

「オリファイさんに頼んでよかったね、ダーリン」

「お気に召したようで何よりです」

デラの作ったソファに仲良く腰掛けているのは、オーダー主である機械生命体とアンドロイド。

マスターは客の喜びようを見て微笑みながら考えていた。

アンドロイドが女性型だし、ダーリンと呼んでいる以上は機械生命体の小型短足が男なのだろう。

機械生命体の外観に男女の違いがあるのか、そもそもカップルとは男女を指すのだろうか。

いや、そんなことより提示した品に満足してくれる方が大事だと思いなおす。

一方、加古は会話に混ざらず、少し離れたところで静かに商品にパタパタとハタキをかけていた。

滅多にない事だが、機械生命体やアンドロイドといったAIはウイルスに突然感染することがある。

すると目が赤く光り、周囲にあるものを攻撃するようになる。

会話に混ざらない方が不審な挙動に気づきやすいとは本人の弁だ。

決して営業トークが面倒というわけではない・ハズである。

機械生命体は何度か立ったり座ったりした後、マスターに鞆を差し出した。
「それではお約束していた対価です、お確かめを」

「では、失礼して」

マスターは受け取った鞆を開け、中身をカウンターに並べていった。

相次ぐ厄災により、人類の経済システムは終焉を迎えた。

当然だが銀行券、つまり紙幣は価値を失ったが、硬貨は別の価値を見出された。純粋な資源としての価値である。

使用されている金、銀、アルミ、銅、ニッケル、パラジウムなどの元素とその含有比率で価値が決まる。

いわゆる物々交換に近い。

取引相手にとって価値があれば良いので、対価として使われる物は硬貨に限らない。大陸ではダイヤ等の宝石も通じるらしいが、ここらでは断られるのがオチである。

たとえば今回、客が持参したのを見よう。

金貨10枚、鉛のインゴット2つ、そしてフィルター用濾紙の束である。

金貨とインゴットはお分かりだろう。

補足をすれば、鉛は放射線遮蔽材として需要が高く、比例して価値も上がっている。

そしてフィルター用濾紙は機械の運用において油脂類の不純物を取り除くために不可欠な消耗品である。

輸送機、兵器、建機、機械生命体、アンドロイド、戦術人形、艦娘の艀装などなど望する側は枚挙にいとまがない。

だが濾紙を製造する設備、技術、そしてなにより原料はなくなっていく一方である。マスターは時折情報端末を操作しつつ価値を確認した。

そして鉛のインゴットを手にとると、客に告げた。

「契約時よりフィルタの価値が上がったので、インゴットは2つともお返ししますよ」

しかし、機械生命体はゆっくりと首を振った。

「取っておいてください。手に入る筈の無いものをご用意頂けたのですから」

「ですが・・・結構上がりましたよ？」

アンドロイドは機械生命体の腕を取り、微笑んだ。

「やっとダーリンと二人並んで気持ちよく座れるんだもん。貰っておいて！」

ややあつて、マスターは頷いた。

「・・・それではありがたく。ご自宅まで運びましょうか？」

機械生命体は首を振った。

「このまま持つて帰ります。輸送車で来てますから」

「それでは砂で傷がつかないようにしっかりと包装いたします」

「お願いします」

「ありがとうございました」

マスターが深く頭を下げておじぎする中、機械生命体達を乗せた輸送車が走り去った。

小さくなる砂煙を見送っていると、後ろから声がした。

「マスター様っ」

背中に軽い衝撃を受けたマスターは少し苦笑いをしながら振り向いた。

「やあMP40、やっぱり来たね」

マスターに抱きついた、MP40と呼ばれた少女はちよこんと首を傾げた。

ちなみに少女と言ったが、ドイツ軍の軍服を連想させる黒い制服を身にまとった戦術人形である。

「あれ？なぜやっぱりと仰ったんですか？来る事お伝えしてましたっけ？」

「さつき加古が起きたからね」

加古という単語を聞いた途端にMP40はジト目になった。

「私達の恋路を艦娘ごときに邪魔させはしません」

「私・・・たち？」

「はい。私達です」

マスターは誤解を解こうかと口を開いたが、ふと店の方を向いて固まった。

MP40は一瞬で事態を悟ると、すぐさま横に飛び退った。

直後、MP40が居た空間を加古の蹴りがうなりを上げて通過した。
ザッ

さりげなくマスターを攻撃圏外に置く陣を敷きつつ、加古とMP40が睨み合った。
数秒の静寂の後、二人は同時にカツと目を見開いた。

「野良人形」のときが！」

「働かない艦娘風情が！」

「私のマスター（様）に手を出すなああ！」

マスターは拳で語り合う二人が巻き起こした砂埃を吸って思わず咳き込んだ。

艦娘の加古にせよ、戦術人形のMP40にせよ、どうして学習しないんだ。

どっちとも恋愛関係になった覚えなんてないと何度も言ってるのに。

それに、艦娘が慕うのは司令官、戦術人形のそれは指揮官だろ？

どっちも経験無いんだがなあ・・

ついにシエルターの外壁まで使って戦い始めた二人に、マスターは声を張り上げた。

「はいストップ！ストトップ！シエルター壊したら弁償だけじゃなく全部綺麗に掃除してもらうからな！」

ピタリ。

互いにしゅしゅといった様子で戦闘を止めて戻ってきた二人を前にマスターは溜息

をついた。

やれやれ、シエルターにヒビでも入ったら大変だ。

飲料用でさえ貴重な水を掃除用になんて使えない。

その状況下でシエルター内全てを掃除するのは苦行でしかない。

・・・そうそう、水といえば。

マスターはMP40に声をかけた。

「MP40、飲用水とジンジャーエールはまだ在庫あるかな？」

「えっ？あ、もちろんあります！どれくらいご購入ですか？」

「水を50リットルと、ジンジャーエールを1L欲しいんだけど」

「お任せください！お店の方にお持ちします！」

自分の荷物を積んだバギーめがけて駆けていくMP40を見つつ、マスターは加古の

頭にぼんと手を置いた。

「相変わらず仲良しだな」

加古はじとりとマスターを睨んだ。

「今のどこをどう見ればそうなるの」

マスターは加古の頭を撫でながら答える。

「本気で排除するつもりなら艤装展開するだろ？」

「・・・ふん」

拗ねたような声を出す割にマスターの手を振りほどかない辺りでお察しである。

「ほら、ジンジャーエール飲みに行こう。レモン液もあるよ
そう。」

レモン入りのジンジャーエールは加古の好物なのである。

第3話

「ごちそうさまです！マスター様が淹れてくれたお茶はとっても美味しかったです」
「これも君が水を運んできてくれるおかげだよ。ありがとう」

MP40はマスターに飲み終えたグラスを渡したのだが、その時マスターの指と少し触れた。

「きゃっ」

慌てて手を引っ込めると、頬を染めるMP40。

恋する乙女の雰囲気醸し出すMP40を横目に、加古はひらひらと手を振りながら告げた。

「はいは〜い、似合わない乙女のフリしてる暇があつたらとつと帰れ戦術人形〜」

MP40はギツと加古を睨みつけると、思い切り舌を出した。

「あつかんべーっ！」

「にやにおう、店員様の言う事が聞けないのか〜？」

「いっつも寝てる不良店員なんて怖くないです〜」

マスターはふと、グラスを磨く手が止まった。

加古がきちんと起きて真面目に仕事する姿・なあ・全く想像出来ないな。ややあつて納得したように頷いた。うん、それはきつと地球最後の日だな。

加古は思考を読んだかのようにマスターをジト目で見た後、MP40へと視線を戻した。

「行商先で油売ってるサボリ人形よりマシですう」

「残念でしたー、私が売ってるのは飲み物でーす」

「ベロベロベーツ！」

「イーッだ！」

ふと、マスターは店内に掲げているモニタの表示を見て眉をひそめた。

「MP40」

「はい？」

「30分後に竜巻が来る。荷物をシエルターの中に入れておきなさい」

「えっ！わっ解りました！店先お借りします！」

MP40が慌てて外へ出ていくと、加古もひよいと椅子から立ち上がった。

「どうした？」

「冷やかしく」

そういつつゆつくりとMP40の後を追う加古を見送りながら、マスターは眩い

た。

「素直に手伝うと言えばいいだろうに……」

MP40はIOP社が開発した戦術人形である。

今の呼び名であるMP40は元々ドイツ製サブマシンガンの名前だが、そのMP40を用いて戦う為に開発された。

実際、彼女は今もMP40サブマシンガンを携行している。

戦う為に作られ、人間の外観を模し、人工皮膚の中に機械を有する点で戦術人形とアンドロイドは似ている。

だが、根本的に異なることがある。

例えばアンドロイドはスリムな女性モデルでも150kg以上あるが、戦術人形は人間とほぼ同じ体重である。

アンドロイドは100年以上に渡り無補給で活動できるよう、核燃料を搭載し、皮膚の下は完全な機械である。

一方戦術人形は日に何度も燃料補給が必要で、その燃料は人間と同じ食べ物で良いように設計されている。

思考装置などは機械だが、駆動システムに人工筋肉を用いるなど、より多岐に渡って生体を模している。

このように戦術人形は人の世に溶け込むことを前提にしているが、アンドロイドにはそうした前提が見られない。

それは元々アンドロイドが人類から遠く離れた地で機械生命体と戦うために開発されたからである。

一方、体重や喫食等の面で戦術人形と艦娘は似ているが、艦娘は人魂や船魂を艤装と結び実体化させたものである。

艦娘の思考を司るのは魂であり、アンドロイドや戦術人形のようにAI感染型ウイルスプログラムに冒される事はない。

お互いにどこか似ていて何かが違う。

ちなみにミュータントは元人間ゆえ魂があり、機械生命体は人類の意識モデルを有するとも言われるが詳細は不明である。

なお、かつて栄華を極めた人類は絶滅したとも、絶滅寸前ともいえる状況である。

なぜなら生存する者はマスターのように身体を改造したか義体化の処置を受けており、純粋なヒトは絶滅したのである。

崩壊液を含む放射能汚染、砂漠化や巨大竜巻、極端な寒暖差といった環境の劣悪さにヒトは耐えられなかったのである。

そして手を加えられた人類であっても、もはや現存数は極僅かとなっていた。

「ん・・マズいな」

マスターはモニタ上の更新された情報を見て眉をひそめた。

竜巻の予想到着時間が早くなった。二人がじやれてる暇はないだろう。

マスターは砂塵用ゴーグルを3つ手にすると、店の入り口へと向かった。

店のドアを開けると、既に外からの風は強くなっていた。

「加古！後どれくらいだ！」

シエルターの中にオレンジジュースの入った箱を運び込みながら、加古は顎を外へとしゃくった。

「あとはバギー本体なんだけど、入り口通らないって奴さん外装バラしてるよ」

「手伝ってやれ！竜巻の速度が上がった！」

「え」

マスターは加古に砂塵用ゴーグルを放り投げ、シエルターの入り口から出ようとした。

「危ないっ！」

声とともに、MP40がマスターをシエルトの中へ押し戻すように覆いかぶさった。

直後、風に飛ばされてきた大きな太陽電池パネルが入り口近くをかすめて行った。

マスターは小さく首を振りながら、自分に覆いかぶさるMP40の頭を撫でた。

「や、ありがとうMP40。うっかりしてたよ・・・MP40?」

改めて見るとMP40はマスターの胸元に顔をこすりつけるようにしていた。

「えへへへ・・・マスター様良い匂い〜えへへへへえ」

「あー・・・」

ふと入り口を見ると、加古が無表情のままシエルトのシャッターを閉じるボタンを押ししていた。

その音にMP40は飛び起きると、そのまま加古に詰め寄った。

「ちよっ！私のバギーまだ外！外ですよ！」

「あーほら、もう竜巻来るし」

「バギーなくなったらここに来れなくなっちゃいます!」

「来なくていいし」

「待って！ちよっと開けて！開けてくださいよお!」

「だが断る」

「・・・じゃあここに住みます。帰れなくなるし」

ピタリ。

加古が指を離したため、シャツターが下1/3ほど開いた状態で止まった。

冷たい笑いを湛えた加古は、MP40を見たまま外を指さした。

「ほら止めたよ、外行きなよ」

MP40はジト目で加古を見返した。

「私が出たらシャツター閉めますよね？」

「さあ何の事やら」

「締め出す気ですよね！」

「さっぱりわかんないなあ」

その時、起き上がってきたマスターがシャツターを再び開け始めた。

「あー！」

「加古、そこまで。MP40、急げ。加古の言う通り時間がない」

「加古を見張っててくださいいね！」

「解ってる」

「加古が余計な事したから折るしかなかったじゃないですか！お気に入りのアンテナだったのに！」

「そいつあ残念だったねえ〜ん」

「くつむかつく！」

「ピロピロペ〜」

「アンテナ鼻に突っ込んでやる！」

「ぐああやめろお〜」

シエルターが固く閉ざされていると解っていても、竜巻はうなり、地を揺るがし、雷鳴を轟かせる。

竜巻は幾つもの砂嵐を引き連れてやってくる。

何もなかったところに巨大な砂丘を作り出すなど朝飯前のハイパワーである。

嵐の真ただ中ではシエルターごと生き埋めにならないことを願うしかない。

そんなシリアスな場面の筈なのだが、MP40と加古はどこ吹く風と喧嘩を続けている。

マスターはやれやれと首を振り、ぽつりと呟いた。

「だが、二人が居なかったら寂しかっただろうなあ」

ピタリ。

寸前までキーキー言い争っていた二人だったが、一瞬でマスターの所に駆け寄った。「加古が居ないと寂しいって言った？ずつと寝てていいから一生傍に居ろ？しようがないなあ」

「違います！MP40と結婚したいから指輪のサイズ教えると仰ったんです！」

「どつちも言っていないが・・・」

マスターは二人の頭に手を置いて微笑んだ。

「まあ、二人が居ると退屈しないな」

加古は口を尖らせた。

「えー、もうちよつと！もう一言譲歩しようよ〜」

MP40は乗せられたマスターの手をそつと両手で包んだ。

「この温かさ、柔らかさ、優しさが・・・えへへへへ」

マスターは嵐が過ぎ去るまで、二人の頭を撫でていた。

第4話

・・・バキッ!

かつてバンカーと呼ばれた金属の塊は、砂漠の真ん中で、久しく、静かに、時間をかけて砂の海へと沈んでいた。

今、音がしたのも、直前に通り過ぎた砂嵐によって支柱が折れた音だった。

支えを失った、かつて倉庫と呼ばれたエリアユニットが地面に落ち、砂の上を転がる。エリアユニットの中でシェイクされた物同士がぶつかり、小さな緑色のランプが点滅した。

「自己診断プログラムを開始します」

「そっちはどうだ、加古」

「通気口は確保したよう」

「お疲れさん。MP40はどうだ？」

「表の砂はどけました。傾斜が0.02%ありますけど均しませうか?」
「それくらい構わないよ、ありがとう。こっちもシャッターの修理完了だ」

嵐が過ぎ去った後、3人はやつとの思いで外に出た。

なぜならシエルターが1mほど砂に埋もれてしまったのである。

入り口に積もった砂がシャッターを圧迫したせいで、レールごと歪んでしまっていた。

そのままでは店の再開どころか中で窒息してしまうので、3人で手分けして復旧作業にあたったのである。

MP40から返された作業用シャベルを壁に掛けたマスターは、外の景色を見て頷いた。

「MP40」

「はいっ」

「もう日が暮れるから、今日は泊っていきなさい」

途端にMP40の目が輝いた。

「良いんですか?ありがとうございます!」

「除去作業のお礼だ。加古もそれで良いな?」

加古は肩をすくめた。

「しゃーないねー」

MP40の持つバギーはディーゼルエンジンである。

動力源として、内燃機関およびジェットエンジンは今なお主役として用いられている。

原油掘削と大規模精油施設が必要なガソリンと違い、軽油とケロシンは現在も調達可能であった。

それは崩壊液濃度を下げた海水と、特殊な藻類があれば精製が可能だからである。

ゆえに内燃機関はディーゼルエンジンだけが生き残っている。

ところが、軽油はガソリンに比べると温度変化に弱いという欠点がある。

最近では昼は35度を超え、真夜中は氷点下40度を下回るようになっていく。

寒冷地仕様の軽油なら—35度程度まで耐えられるが、一方で昼の高温に耐えられない。

民間人が入手可能な軽油は昼は使えるが0度を下回れば凍り始めるので、夜になると使えない。

昼夜問わず使える超対候型軽油は軍にしか卸されないし、氷点下40度の中で作業するのはそもそも過酷である。

加古はニツと笑った。

「戦術人形お一人様かあ。素泊まりで金のインゴット1つくらいかな?どうよ?」
「そんな大金持つてるわけないじゃないですか!」

真つ赤になつてぶんぶんと拳を振っていたMP40だが、ふとマスターを見て、くねくねし始めた。

「あ、じゃあ私、マスター様に体でお支払いします。一生かけてご奉仕しますね」
マスターはMP40の目を見て、なぜか獲物を前にしたライオンのそれを思い出した。

「えっ?あ、いや、その」

加古の目からハイライトが消えた。

「マスターへのお触りは禁止です。じゃあ倉庫の電球取り換えといて」

「はい?」

「高い所2ヶ所切れてるから脚立使つて。あと暖房の配管見といて。客間のラジエターの根本」

「えっ配管?暖房の?」

「一生労働力提供するんですよ?ほら行った行った。しっしっ」

MP40はちらちらとマスターを見ながら言った。

「こんなか弱い女の子にそんなこと頼まないで欲しいですう」

加古はマスターに店に戻れと目で合図した後、鳥肌の立った腕をボリボリと掻きながら言った。

「四方八方囲まれた市街戦から、たった一人で生還した戦術人形が何言ってるの」

「そつそれは・・・ノーコメントで・・・」

「さつきだって砂山一人で片付けたじゃん。あれ3tはあったよ?」

MP40は両手の人差し指をつんつんとし始めた。

「だ、だってお料理とかでないと可愛い女の子アピールが出来ないかなって・・・」

「どこかの猫被ってる戦術人形が寝る時に暖房要らないってんなら料理でもいいよ?」

「凍っちゃうじゃないですか!あ、マスター様と抱きあつて寝れば万事解・・・あれ?マスター様どこですか?」

居なくなっていたマスターを探しに行こうとするMP40の肩を、加古はぐわしと掴んだ。

「だからマスターへのお触り禁止だったの。それに3人も一緒に寝られるベッドじゃないから」

MP40はピタリと止まると、少し間を置いてゆらりと加古に向き直った。

「・・・3人?」

「やあ、だって私とマスターで2人だから、アンタ足せば3人じゃん?」

見る間に視線の温度が下がっていくMP40。

「協定を・・破りましたね？」

「あたしは身辺警護役だからねえ、仕方ないんだよなあこれが」

「一緒に寝る必要がどこにもないじゃないですか」

「夜は眠いんだよ」

「寝てたら警護になってないじゃないですか！起きて外を見張りなさい！」

「んふふん。マスターとしつぽり抱きあつて良いのはあたしだけでもくん」

MP40の顔から一切の表情が消え、サバイバルナイフを肩のホルダーからスラリと引き抜いた。

「来いよ加古、銃なんか捨ててかかってこい。ナイフでやりたいんだろ？」

「お断りだよベロベロバァー」

そのままMP40が目を見開いた。

「誰がババアだあ！」

「そんなこと言つてないよっ！うわあぶなっ！」

「こんの裏切者おっ！」

「ひえっ！うわっ！ちよ、やめっ！くそっ、本気で逃げてやるっ！」

「うはははは！待てええ！」

「待てと言われて誰が待つかー！」

その頃。

マスターはキッチンで黙々と夕食の支度を進めていた。

当然二人の声は聞こえていたし、昔は誤解を解く努力をしていたが、全く変わらないのでいつしか諦めた。

ちなみに加古が所有する抱き枕の1つをマスターと呼んでいる事は知らないふりをしてる。

今夜はアツアツのシチューとパン、サラダはどうしようかな。寒いか？

砂嵐の来た日は大体夜が冷える。あれだけの大嵐なら外はー50度に達するかもしれない。

成層圏の冷たい空気を引きずりおろしてくるからだとデラが言ってたっけ。

シエルターの中もー10度を切るかもしれないな。

そういうや加古の奴、客間の暖房配管がどうのと言ってたっけ。煮てる間に様子を見るか。

マスターは布巾で手を拭くとエプロンを解き、客間へと向かった。

第5話

「いててて．．本気でやるなよ」

「どうせイメージなんだからすぐ直るでしょ」

「痛い物は痛いのに！ 艦装にまでダメージ行つてたらどうすんだよお」

「知らない！」

「マスターあ、ぼんこつMP人形がいじめるよう」

「変なくつつけかたするな！ それとポンコツじゃない！」

口々に主張を続ける二人を横目に、マスターは手早く加古のダメージを診ていた。

まあ修復装置に入つて一晩とここか。この程度なら艦装にダメージが及ぶことはな

いだろうが．．

しかし、加古は艦娘という事を含めても結構な実力者だ。

加古の言う通り、MP40はかなり本気で攻撃を行ったのだろう。

．．．やれやれ、結局こうなるか。

「加古、修復機に入れ。明日の朝には直るだろう」

「うへえ、修復機で夜明かしなんてツイてないや．．．」

マスターは加古に顔を近づけて囁いた。

「シチューは取っておいてやるし、MP40には例の抱き枕の事を俺から説明しておく」
加古は肩をびくりと震わせた後、頬を染めながらマスターを見上げた。

「・・・知ってたの？」

「まあ、なんだ・・・長い事一緒に暮らしてるからな」

「うう・・・」

「とにかく、彼女が明日ここを発つ前に仲直りするんだ。出来るな？」

「・・・はい。ごめんなさい」

「よし、良い子だ」

マスターはくしやりと加古の頭を撫で、修復装置の方へと軽く背中を押してやった。
そのまま振り向くと、加古から顔を背けたままのMP40に近づいた。

「MP40」

「・・・」

少し間をおいて、MP40はマスターにそつと振りむいた。

先程とはうって変わってしょんぼりとした様子である。

「・・・傷つけてしまって・・・ごめんなさい」

マスターはMP40の傍にしゃがみ込むと、話し始めた。

「これは重要な秘密なんだが、守れるかな？」

MP40はすぐに真面目な表情になった。

「へ？あ、はい、必ず」

「あー、そのだな・・・加古はクツシヨンの収集が趣味だな」

「知ってます」

「それらに名前を付けてるんだよ」

MP40の表情が次第に怪訝なものになっていく。

「はあ」

「で、その一つである円筒型の長いやつをな」

「？」

「・・・マスターって名付けてるんだよ」

MP40はポカンとしていたが、急にハツとした表情になり、口に手をやった。

そんなMP40にマスターは領きながら続けた。

「解ったと思うが、あえて言うとな、私は加古と抱き合って寝たことはない」

「・・・」

MP40は加古が去った方にそつと視線を送った。

「紛らわしい言い方をした彼女にも責任があるし、修復装置に入るとスリープモードに

なるから、諸々は明日な」

「・・・はい、解りました。今夜中に気持ちを整理しておきます」

「そうしてくれ。ところで不謹慎だけど・・・よく刃を当てられたな」

「えっ?」

マスターはMP40からシエルトターの天井に視線を移しながら口を開いた。

「昔、私は廃墟の市街地で鉄血製大型多脚戦車5台に囲まれたんだ」

MP40は無言でマスターを見た。

マスターは平均的な民間人程度の身体能力しかない。

大型多脚戦車はビルのコンクリート壁程度なら容易に撃ち抜く口径の主砲を備えている。

そしてELIDおよび人類側に属するものは最優先で破壊するようプログラムされている。

見つけ次第付近にいる個体同士で連携し、掃討完了まで徹底的に追ってくる。

「1台を遠くに見た途端、私は逃げ出した。でも10分後には肩から血を流して廃墟の上層階に追い込まれてたよ」

「・・・」

「加古はそこにおいてね、焚火の傍で寝てたんだ」

「・・・寝てたんですね」

「ああ。あれだけ砲撃の轟音が鳴り響く中でな。最初は死んでるのかと思ったよ」

「・・・」

「でも近づいたらうつすらと目を開けて、こう言ったんだ」
「？」

「表のうるさい連中を静かにしたら、何をくれるつてな」

「・・・へえ」

「私はとつさに、ガレキの中よりはマシな寝室を用意するよと言ったんだ」

「的確ですね」

「結果的にね。それを聞いた彼女はひよいと飛び起きると、約束だからなくと言いながら走って行った」

「え？マスター様の安全確保は？」

「何も言われなかったし、あの時は彼女が艦娘だつてことさえ知らなかった」

「艦装を展開しなかったんですか？」

艦装。

艦娘が全力を発揮するには、艦装と呼ばれる魂と実体をリンクさせる装置の出力を上げる必要がある。

これを艤装に火を入れるというが、本来艤装は海の上で用いる物であり、陸上で用いるにはリスクがある。

また、この時は艤装を顕在化させる必要があるため、誰でも艦娘だと識別できるのである。

マスターは頷いた。

「ああ。彼女はそのまま、私を追って突入してきた多脚戦車のカメラに飛びついたんだ」
「えっ」

「多脚戦車って、砲にしろ機銃にしろ、ある程度距離が無いと照準が合わないらしいね」
「ええ、爆風や散弾も考慮し、大型なら最低15mは距離を取るはずですよ」

「ところが一瞬でひつつかれたもんだから多脚戦車は加古を振り払うしかなかった」
「視界ゼロですしね」

「胴体を滅茶苦茶に回転させながら表に引き返していったんだ」

「広い場所を確保したかったんでしようね」

「それが、後退した通路には別の多脚戦車が既にいてね」

「まさか、自分ごと撃たせて破壊しようとした？」

「いや、単にAIが僚機からの攻撃まで考えてなかったって感じだった」

「そっちの方がしつくりきますね」

「ともかく、別の多脚戦車は君の予想通り僚機など気にせず加古に向けて砲撃したんだ」
「よ」

「予想以上の無能ですね・・・」

「ところが加古は着弾する前に、その砲撃してきた戦車に飛び移ったんだ」

「・・・えつまさか・・・あとは同じことの繰り返しですか？」

「正解。あつという間に5体が1体に減り、最後の1体は加古を振りほどこうと滅茶苦茶に表通りを動き回った」

「まるつきり学習しないんですね」

「そして自ら傾いたビルに突っ込み、ビルの瓦解に巻き込まれて潰れたんだ」

「・・・加古は」

「もうもうと立ち込める煙の中から歩いて出てきたよ。全くの無傷だね」

「最後まで艤装の能力も、武器や兵器を使うこともなく？」

「ああ」

「・・・そこまで出来るのは、戦闘人形でもそう多くはないでしょうね」

「まあ、多脚戦車程度のAIと君を比べるのは愚かな話だけだよ」

「・・・マスター様」

「ああ」

「さつき追いかけていた時の違和感が、やっと理解出来ました」

「違和感？」

「ええ、違和感です。単に腹を立てて追いかけたにしては、私は興奮しすぎていました」

「・・・」

MP40はスラリとサブバイバルナイフをケースから抜くと、刃に写る自分の目を見つめた。

「私は、加古を追いかけることで、本気を出したかったのかもしれませんが」

「出したかった？」

「はい。私は軍にいた頃から、大概の状況は本気になる前に片付ける事が出来ました」

「・・・」

「それは良い事でもありますが、いつも不完全燃焼でした」

「・・・」

「前回本気を出したのは、司令部に裏切られた日でした」

「・・・」

「気持ちよく本気を出せた時の記憶なんて、もうデータの海に消えました」

「・・・」

「加古は本気の私を受け止めてくれるかもしれない。そんな希望に縋ってしまったのか

もしれません」

「・・・」

MP40は視線をマスターへと移した。

「・・・明日、ちゃんと謝ります。それとマスター様、ごめんなさい。この話は忘れてください」

「MP40」

「はい」

「そのことを、加古に言っつけてやってくれないか？」

「加古に、ですか？」

「うん。それなら加古も腑に落ちると思うんだよ」

「腑に、落ちる」

「確かに彼女は君を誤解させたが、殺意を露にされるような案件じゃない」

「・・・」

「だから今後、君とどう接していくかを悩むと思うんだよ」

「・・・」

「これは私のわがままなお願いだ。だから実行してくれるかどうかは君に一任する」

「・・・」

「・・・シチューは明日の朝、皆で食べよう」

「はい」

「じゃあ、おやすみ」

「おやすみなさい」

マスターが二階に上っていくのを見届けたMP40は、悲しげに溜息をついた。

「私がマスター様に感じてる気持ちを、マスター様は加古に対してお持ちなのですね：」
そのままぐりと項垂れる。

「・・・こういうことは理屈ではありません。勝ち目がないのは解つていますが、それでも」
MP40はナイフをそつとケースへと戻した。

「こんな状況で突撃を選ぶなんて、戦地なら間違いなく死亡コース。テストなら失格です」

そして小さく、ふふつと笑った。

「KIA扱いされた私には、お似合いつてことですね」

その時、階段が小さくきしむ音がしたので、MP40は無理矢理に腕で涙をぬぐった。

「ああそうそう、言い忘れてたが、客間のヒーターは直しておいたし、暖まっているよ」
「・・・ありがとうございます」

「ん。じゃあ君も早く寝ると良い」

「はい」

こんな世界で、こんな私の為に、酷寒の砂漠の夜をやり過ごすための暖かい部屋を用意してくれる。

そんな人はマスター様しかない。

振り向いてもらえなくても、それでも、私は。

きゅつと唇を噛んだあと、MP40はそつと客間に入ってしまった。

第6話

緑のランプを点滅させながら、鋼鉄のケースがゆつくりと開いた。

「うっ……」

中で起き上がったのは1体のアンドロイド。だが、すぐに右手で額を押さえた。

「おかしい……引継情報が……ない」

ケースとアクセスを開始し、処置ログを開いた。

自己診断プログラム開始……完了。

義体ダメージ無し

エネルギー残量99%

基礎情報を記憶ユニットに保存……正常終了

歴史情報を記憶ユニットに保存……正常終了

ヨルハ計画を記憶ユニットに保存……正常終了

バンカー管理サーバから前任者引継情報をダウンロード

……接続失敗。リトライ。

……リトライが1000回に達したのでダウンロード処理を中断

ダウンロード処理が中断されたので記憶ユニットへの保存を中断

コマンドモジュール「3C」起動

アンドロイドは眉をひそめた。

「どういふことだ．．．バンカーの管理サーバにアクセス出来ないだど？」

真つ暗な室内を暗視モードで見まわすと、ゲートが2か所あった。

1ヶ所は様々な物が邪魔していたが、残る1ヶ所は行けそうだった。

基本情報によれば、それはバンカーの格納庫に通じるゲートだった。

彼女は開けるためにゲートに手をかざしたが、反応はなかった。

そもそも部屋の照明を含め、室内に電気の気配が無い。

「バンカーの主電源が切れることはありえない．．．倉庫だけ停電という事か」

しかし、僅かな間を置いて、彼女は目を見開いた。

「バンカーの全システムが応答しない．．．だど？」

彼女は必死に状況を推測する。

衛星軌道を進むバンカーのシステムが完全に停止したとして、現状に不審な点はあるか。

「．．．重力が正常？」

そう。

バンカーは自転することで重力を作り出している。

自転にもエネルギーと制御が必要で、機能停止したのに正常な重力など作れるはずがない。

無重力、あるいは方向に乱れがあってもおかしくない。

しかし彼女の重力センサーは1Gを示しているし、重力方向にも乱れはない。

「ふむ、司令室に通じるゲートにたどり着くしかないな。片付けは苦手だが、そうも言つてられん・・・」

彼女は肩をすくめると、室内に散乱する機材を退け始めた。

「・・・」

「・・・」

マスターはとろ火にかけた寸動鍋で、ゆつくりとシチューを温め直していた。

かき混ぜながらちらりとリビングを見れば、加古とMP40が押し黙ったまま俯いて座っている。

ピピツピピツ・・・ピピツピピツ・・・ピーツ！

マスターがかけていたタイマーが鳴ると、二人がびくりと同時に肩を震わせたのが見えた。

マスターはタイマーを止め、オーブンからパンを取り出す。

綺麗なキツネ色に焼きあがったパンに包丁を当て、サクサクと切り分ける。

用意していたバスケットに切り分けたパンを詰めていく。

ふつつつと煮立つシチューに頷いて火を止めたマスターは、両手に手袋をはめた。

ちらりと二人を確認する。

もうそろそろ料理の匂いがリビングにも届いているはずだ。

くうっ

加古は顔を真っ赤にしながら腹を押さえた。

修復機は綺麗にケガを直してくれたのは良いのだが、代償に体のエネルギーをかなり

奪う。

つまり腹ペコになるのである。

ただでさえ昨夜は夕食を食べ損ねてしまったから余計である。

そこに絶妙なタイミングでキッチンからシチューとパンの良い香りが漂ってくる。

いつもの朝食のようにMP40と笑って、軽口を叩きあつてご飯を食べたい。

でも、どこから何を言えば良いんだろう・・

きゆるるくゝ

MP40は無駄だと知りながらも息を止め、腹に力を入れた。
恥ずかしい。

お腹を鳴らすなんて何年もしていなかった。

一人であればレーションを1つ2つ齧ってしまえばいい。

だが、マスター様が食事を用意しているのにそんな無礼は許されない。

食事の前に言わなければいけないことは解っている。

自分に勘違いさせたことだけは加古が悪い。

でも傷つけたのはやりすぎだ。

追いかけてるうちに本気を出すことが目的になってしまい、加減を誤ったのも私の落ち度だ。

それは記憶にこびりつく嫌な思い出を上書きしたかったというわがままだ。

要約すればこうなるが言わなきゃいけないと思うほど口が開かない。

加古と気ままずいままここを発ちたくないのに、私は何を恐れているのだろう・

ゴトリ。

ハツとした二人が顔を上げると、二人の真ん中に置かれていたのはシチューの入った寸動鍋だった。

そのまま視線を動かせば、呆れた様子で自らの腰に両手をやるマスターが目に入った。

マスターの視線に耐えられず、再び俯く二人。

マスターは再びキッチンへと取って返すと、パンの入ったバスケットを手に取った。昨晩のお膳立てでは足りなかったか。時間が開いたし仕方ない。

ガタツ。

マスターは自分の席に着くと、パンの入ったバスケットを寸動鍋の横に置いた。

テーブルの上で両手を組み、二人にそれぞれ視線を送る。

少し待ってみたが、時が止まったかのようだ。

咳ばらいをし、おもむろに口を開ける。

「・・・MP40」

呼ばれたMP40はびくりと肩を震わせた。

「・・・はい」

「昨日の行動で行き過ぎた点があったとは思うかい？」

「・・・はい」

「それはどこかな？」

「・加古を必要以上に追い回してケガさせてしまったこと、それを謝っていないことで
す」

「うん。じゃあ加古」

加古は無言のまま、そつとマスターを見た。

「加古はそもそも喧嘩になってしまった事に、思い当たる節はあるかい？」

「・だ、抱き枕のマスターを、本物のマスターみたいに説明したこと、それに」

「それに？」

「あ、あたしとMP40の間で結んでる協定を反故にしたような言い回しをしたこと」

マスターは首を傾げた。

「協定って何だ？」

MP40が両手をふわりと持ち上げながら口を開いた。

「だつダメですよ加古！それは内緒だつて言ったじゃないですか！」

「あつ！いつけね！」

「もう！恥ずかしい……」

「ごめん……」

「……」

少しの沈黙の後。

マスターの隣で、加古は肩を震わせ始めた。

「ごめん・ほんと、色々ごめん。言い過ぎてごめん。余計な事言っちゃってごめん。ごめんなさい」

MP40が顔を上げると、加古の頬を伝う涙の雫が見えた。

「加古・・・」

「ごめん・・・でもあたし、MP40と、マスターと、一緒にご飯食べたい」

「・・・」

「いつもみたいに笑って、喋りながら、美味しくご飯食べたいよ」

「・・・」

「でも、いつもは許されてた軽口であんなことになっちゃって、どうしていいか解んない

よ・・・」

「・・・」

MP40は唇を噛んだ。

マスター様は私が昨晚忘れて欲しいと言ったことを加古に言わなくても済むように話を運んでくれた。

でも、同時にマスター様が懸念していた事を、加古が案の定悩んでいたことも解って

しまった。

それは私が起こしたことで、忘れて欲しいとお願いしたことを言わないと説明がつかない。

ううん、マスター様に言ったことじゃ、まだ足りない。

・・・私にとって今大事なのは、自分の古傷を隠すことじゃない。

すうつと一呼吸したMP40は、加古をまっすぐ見ながら口を開いた。

「ごめんなさい、加古」

「・・・」

加古がそつと、少しだけMP40の方を向いた。

第7話

加古の視線を受け止めつつ、MP40はゆっくりと話し始めた。

「私、追いつき始めた時はそれほど怒ってなくて、本当にいつも通りでした」

「・・・」

「でも私、加古に甘えなくなっただけです」

「えっ?」

「私が以前所属していた部隊では、所定を完了したらどんな精神状態だろうと鎮めなきゃいけなかった」

「・・・」

「必要以上の発砲は1発でも禁止。指示外の行動は禁止。ミッション中の事を別の班に話すことも禁止」

「・・・」

「訓練と実践に明け暮れた私は、身に着けた力をいつしか全て出しきる機会がなくなりました」

「・・・」

「一方で、グリフィンの戦術人形はもともと民生品の流用だから、様々な思惑に晒されました」

「・・・」

「私もMP40サブマシンガンは偉大な武器なのに、なぜお前のような小娘が担当なんだって怒鳴られたり」

「・・・は？」

「訓練教官や救出対象の人間に辱められたことも1度や2度じゃなかったです」

「・・・」

MP40は目をつぶり、大きく息を吸い込むと、声の震えを押さえながら続けた。

「そして私は、ある時耐えきれなくなって、私の胸を鷲掴みした政府高官の手を振り払いました」

加古がぎりつと歯軋りをする音がリビングに響いた。

MP40は俯きながら言葉をつづけた。

「翌日、緊急招集がかかって、私を含めた数体の戦術人形がへりに乗せられました」

「・・・」

「そして鉄血人形が何重にも包囲網を敷く只中に降ろされた後、無線でこう言われました」

「・・・」

「君達は人類に危害を加えたと報告があつた」

「・・・」

「だから鉄血側に今月の被検体として売却した。不良品同士せいぜい頑張ってくれたまえ、ってね」

加古は目を見開いた。

「それじゃ・・・包囲された市街戦って・・・」

MP40は頷いた。

「降ろされた場所は確かに市街地でしたけど、私達の処分場のようなものでした」

「他の・・・子は？」

「半数はその無線を聞いてその場に座り込み、そのまま撃たれました」

「・・・」

「燃え盛る市街地でガレキを武器に戦い続け、何度か夜を超えたら敵も味方も反応がなくなっていました」

「・・・」

「それが、私が最後に全力を出した記憶だったんです」

「・・・」

「全力を・頑張って訓練した自分の全力を出し切った記憶が、そんな事しか思い出せない」

加古は両手をぎゅつと握りしめたまま俯いていた。

MP40は机の木目をぼんやりと見ながら続けた。

「でも、昨晚の加古は、いつも通り手加減しては全然追いつけなかった」

「・・・」

「もう少しだけ、もう少しだけと、いつのまにか私は全力を出していた」

「・・・」

「そして、とても興奮したんです」

「・・・興奮？」

「はい。全力を出してなお届くか届かないかという勝負で、おぞましい記憶が上書きされていく」と

「・・・」

「そんな強い相手が私の知る範囲に居たんだという喜びが支配していった」

「・・・」

「加減なんて一切出来なかった。だから、届いたことに興奮を抑えられなかった」

「・・・」

「謝れなかったのは、あなたに刃が届いたことがあまりにも嬉しかったから」

「・・・」

「でも、マスター様と話してるあなたを見て、興奮は一気に冷めて、大変な過ちを犯したことに気が付いた」

「・・・」

「結局謝れないまま、今もマスター様にこんなに助けてもらわないと言えなかったんです」

「・・・」

「ごめんね、加古。私はあなたとの戦いに救いを求めてしまったんです」

MP40が口を閉じると、リビングに再び静寂が訪れた。

少し間を置いて、加古はゆっくりと顔を上げ、口を開いた。

「・・・あのさ」

「はい」

「それで、クソツタレな記憶は一切合切り切れたの？」

MP40は悲しげに唇を歪ませた。

「・・・そんな簡単には。でも、少しは薄らいだかもしれない」

「あとさ、ナイフ持ってないと本気出せないかな？」

「えっ?」

「毎回スパスパ切られるのは願い下げだけど、本気で追いかけてこするくらい構わないよ。」

「加古・・・」

「1回じゃダメでもさ、何度も何度も、あたしと全力で追いかけてこしたらさ。」

「・・・」

「そのうち忘れられるんじゃないかな」

「・・・加古は、私のわがままに付き合ってくれるんですか?」

「構わないよ。だって」

「・・・だって?」

「あたしは友達だと思ってるんだけど?」

「加古・・・加古おとおお」

どちらともなく立ち上がり、そつと二人は抱き合った。

MP40はぼろぼろと涙をこぼし、すすり上げている。

「全くもう、変なところで遠慮するから悪いんだよ、MP40はさ」

「うん・・・ごつ・・・ごめん・・・なさい」

「でもマジでナイフ持ってラリった目で追ってくるのは止めてください」

「ごめんなさい・・痛かったよね」

「痛いとかちよつとトラウマです」

「うん。もう・・しません」

マスターはそつと寸動鍋からシチューを取り分け始めた。

「さあ、仲直りしたところで朝ごはんにしよう。十分味は染みてるはずだ」

加古はそつとMP40から離れると、マスターに向き直った。

「一晩寝かせたカレーってのは聞くけど、シチューでもアリなの？」

マスターは肩をすくめ、シチューの入った器を加古に手渡した。

「さあな。だが使ってる野菜は似たようなもんだ。食べて確かめればいい」

「うん」

次の器を手に取りながら、マスターはMP40に声をかけた。

「私は加古のように本気で追う君から逃れられる術は持たないが・・」

「?」

真つ赤な目でしゃくりあげるMP40に、マスターは頷いた。

「これから、嬉しかった事、頑張った事、美味しかった事、そんな思い出をここで作って

いよう」

「マスター様・・」

「そういう思い出で、君のメモリーを一杯にしてしまえばいい。私も手を貸すよ」

「・・・結構、記憶容量ありますけど」

「構わないよ。私も不老長寿化措置を受けているから人間ほど短命じゃないしね」

「・・・あはっ」

「うん。MP40の可愛い顔には笑顔が似合うよ」

「かわっ!？」

「まずは腹ごしらえだ。そら」

マスターが手渡したシチューの器を、MP40は真っ赤な顔のまま両手でそっと受け取った。

じんわり伝わってくるシチューの暖かさを、MP40は目をつぶって感じ取った。

そこで横からの視線に気づいたマスターは、加古の方を見てのけぞった。

「なっ、なんだ加古? どうした?」

「・・・ずるい」

「えっ?」

「可愛いのはMP40だけなの?」

マスターは自分の分のシチューを取り分けた後、ぐいっと加古の頭を自分の胸元に引き寄せた。

「ふえっ!？」

「加古は可愛いよ。MP40とは違う、加古だけの可愛さだ」

「・・・ならいいや」

しばらく蕩けた表情の加古の頭を撫でた後、改めて前を見るとMP40が指を咥えていた。

マスターはデジャビュを覚えつつ、首を傾げた。

「ええと、どうして欲しいかな？」

MP40はそつと、マスターに抱き着いた。

「・・・ぎゅつと、して欲しいです」

マスターはそつと、加古と反対に座ったMP40の背中に腕を回した。

MP40はジト目の加古と目が合った。

「お触り禁止って言ったのにさ」

「加古が言ったんですよ、私は変な遠慮しちやいけないって」

「意味違うし」

「それに、これからこういう嬉しい記憶を沢山増やさないといけないんで」

「うー」

加古は唸りながら思った。今だけは許してやるか、と。

第8話

MP40は自分の頬をマスターの頬に摺り寄せた。

マスターは二人の甘く仄かな香りを無視しつつ、いつ離れたら良いものかと思いい口を開いた。

「あー、えっと、あまり男の私と触れたら嫌な記憶を思い出すんじゃないのかい？」

MP40はしっかりと抱き着いたまま、目を閉じて答えた。

「その嫌な記憶に今の幸せな感覚が上書きされていくんです」

「あ、そう」

「むしろマスター様なら、私の全てを触って頂いて構いませんよ？」

「え、全て？」

「どこもかしこもマスター様に触れて頂いたという記憶で埋め尽くしたいなあ・・・」

ガシッ。

いやにしっかりと自分の手首が握られたことに、MP40はぎくりとした。

そっと手首を掴んだ手から辿っていくと、驚くほど無表情な加古の顔がそこにあった。

「あ、こ、これはね加古」

「協定ライン超えてる。艦装に火が入っちゃまうよ?」

「はい。すみません。撤退します」

「よし」

MP40のしなやかな肢体が離れた事で、マスターは安堵の溜息をついた。

意識しないようにはしているが、MP40にしろ加古にしろ美しい少女なのである。

こういう時、自分に中途半端に残されたオスの習性を持って余してしまう。

性的興奮を覚えたところで生殖機能は無いんだが。

「ほらほら、ご飯にしよう二人とも」

そう言って、マスターは誤魔化すように手を叩いた。

「お世話になりました」

バギーに荷物を積み終えたMP40は、二人に深々と頭を下げた。

マスターはにこりと笑った。

「またおいで」

加古はニツと笑った。

「お泊り代の金のインゴットは次回来た時にくれればいいよ」

「そんな契約認めてないですよ!?!」

「マスターの手作りご飯を食べられたうえに散々お触りしてキャツキャウフフな時間を過ごしたよね?」

「うっ・・・」

「気持ちよかったよね?」

「それはもう」

「いくら砂山退けたからって差し引きが合わないでしょー」

「そっそう言われると・・・そんな気も」

「だよねえだよねえ・・・いにやつ!?!」

加古が変な声を上げたのは、マスターが加古の頭に拳骨を落としたからである。

「いい加減にしなさい」

「はあい」

「MP40も、遠慮しないで良いからな」

「・・・マスター様は、私が必要な汚れた女だと解つても突き放さないんですね」

マスターは加古の頭から手を下すと、MP40の頭を自分の肩に引き寄せた。

「あつ」

「むしろ私としては、君を酷い目にあわせたクソ人類の仲間である事を恥ずかしく思うよ」

「・・・」

「地球の片隅で命をつなぎあう仲間ってことで、許してくれないかな」

「・・・」

ふいに、MP40がマスターの肩から離れ、加古を見た。

「？」

キョトンとする加古にニヤリと笑った後、MP40はマスターの唇に吸い付いた。

「うむっ!?む!?むむう!」

「・・・あ?何してんの?ちよ:ちよつと何してくれやがってんのMP40!・・・ああ:あーあ」

多分人生の中で一番長い10秒だったと思うと、マスターは後にぼつりと呟くほど。

MP40の想いが凝縮されたキスだった。

・・・きゅぽ。

MP40はこくりと喉を鳴らしてマスターの唾液を飲み込むと、満足気にほほ笑んだ。

「また来ます。私の全ては永遠にマスター様の物ですから」

呆然としたままの二人を他所に、MP40を乗せたバギーは砂漠へと消えていった。

「・・・よし、もう少し・・・だ・・・くんぬううう！」

散乱する物を潜り抜けたアンドロイドは、鉄の棒をゲートに差し込んでこじ開けようとしていた。

このまま電源の落ちた倉庫に居るのはまずい。

全体の被害状況を知る為にも・・・早く・・・出ないと・・・

「・・・っだああああ！」

ガコン！

「・・・なん・・・だっ？」

こじ開けたゲートの先にあつたのはエレベータの昇降路ではなく、風に砂が舞う暗闇の砂漠だった。

アンドロイドの手から鉄の棒がすりと落ち、カランカランと音を立てた。

アンドロイドはぼかんと口を開け、呆然とした表情で立ち尽くしていた。

たつぷり一分はそうしていたが、アンドロイドは記憶を確認し始めた。

自分は司令官モデルC型3番目のアンドロイド、名前はホワイト。

衛星軌道上にあるヨルハ部隊の基地「バンカー」の格納ケースでコールドスリープされていた。

それは万が一先代指揮官である「2C」にトラブルが起きた時に速やかに交代するため。

・・・うん、メインメモリに異常はない。

ならば視覚情報が狂っているのか？

バンカーの通路へつながるエレベータシャフトにしては広すぎる気がするが？

恐る恐る、ホワイトは倉庫ユニットから砂漠に足を踏み出した。

しゃがみこんで砂を掬う。

・・・うん、視覚情報と手足の接触センサーの反応は同期してる。

ふと、近くの砂に埋もれた太陽電池パネルが見えた。

バンカーの電力供給用太陽電池パネルと似ているように思われたが、傷み方が酷い。

軽く触ったにもかかわらず、脆くも崩れ去った。

ふいに、風が止んだ。

舞い上がっていた砂が次第に落ち着いてくると、周囲の景色が明らかになっていく。

「・・・まさか・・・そんな」

暗視モードのホワイトの目がとらえたのは、崩れ去り、砂に埋もれたバンカーの姿だった。

とつさに大気成分を調べながら、ホワイトは空の星を確認した。

この恒星の配置、かつ、この速度で移動しているという事は。

「・・・地球に墜落したというのか」
なるほど。

これならバンカーのシステムが応答しないのも、前任者の記憶をダウンロード出来なかったのも解る。

サーバーなど大気圏突入時に溶けてしまっただろう。

「ははっ・・・格納ケースの耐久性には恐れ入るな」

ホワイトは手で後頭部を搔いた。

引き継ぎ情報はない、現状も解らない、周囲に人影はなく、バンカーは砂漠で瓦礫と化している。

・・・そういえば皆は、どうしているのだろうか？

ヨルハ部隊は、レジスタンスは、機械生命体どもは？

現在地だけは星の位置から割り出せた。

随分遠いが、レジスタンスのキャンプに行ってみよう。

バンカーを振り返り、溜息をつく。

「無傷の飛行ユニットが残っている可能性はゼロだな。さらばだ」

ホワイトは踵を返し、砂漠をまっすぐ歩き始めた。

キュルキュルキュル・・・ドルンドルドドドドツ・・・

ぶるりと巨体を震わせ、一瞬真つ黒な煙を吐いて目を覚ましたのは耐地雷装甲車（M

RAP）。

マスターの店の輸送車である。

人類同士の世界大戦、鉄血人形と戦術人形、アンドロイドと機械生命体。

地球は様々な者同士が戦い続けてきた。

そなわちそこから中に不発弾が転がっているし、もとより砂漠である。

更には言えば配達先によっては鉄血製の多脚戦車等と出会う事もある。

軍払い下げのMRAPくらい持っていないければ話にならない。

「よーし加古、店のシャッターは閉めたな？」

「うん！トラップもバツチりだよ！」

「それじゃ、ジャンクパーツ屋に出發だ！」

「ゴー！」

第9話

サングラスをかけたマスターが運転する横で、助手席の加古はまどろんでいた。

景色は砂丘と砂煙しかない単調な物が既に数時間も繰り返されている。

M R A Pの超大型ディーゼルエンジンはお気に入りの子守歌だ。

シートは大きくて柔らかいし、ウサギ程度の物が動いても検知してくれる広域レーダーを備えている。

すなわち加古が寝ていても問題ないのである。

もし何らかの動く物体が周囲4km圏内に現れたら・・・

ピーッ！ピーッ！ピーッ！　　ピーッ！ピーッ！ピーッ！

そう。ちょうどあんな風にアラームが・・・鳴った!?

加古はバチリと目を覚ますと、マスターの方を向いた。

マスターはM R A Pを停止させ、モニタのコンソールキーを叩いている。

「多脚戦車?」

「いや・・・もつと小さいな・・・人型だ。4km弱先だな」

「鉄血ハイエンド? 戦術人形?」

「解らん・・・MRAPのAIはハイエンドかアンドロイドだと推定してるが」
「・・・でもさあ」

「ああ、どちらにしても、こんな辺境の無人地帯に何の用だ？」

「そしてあたし達がもつとも気にしなきゃいけないのは」

「敵か味方かって事だな」

「ハズレ」

「うん？」

「関わるか関わらないかってことだよ」

「関わったとして敵だった、が最悪か」

「正解。でもどうせ関わるんでしょ？」

「解ってるじゃないか」

加古は肩をすくめた。

「じゃああたしは荷台に隠れるよ。艀装展開しないとだし」

「良い子だ。よろしく頼む」

「一応コイツに徹甲弾入れとくよ」

「そんな物を発射する事態になっほしくないがな」

「全くだね。じゃ！」

後部座席から取り出したX M 1 0 9を手に、加古は天井のハッチを開けた。

M R A Pの天井から外に顔を出した加古は、レーダーが示した方角にスコープを向けた。

「さすがに・・・見えないか」

そのまま屋根に上り、後部荷室を覆っているビニールカバーを剥がしてもぐりこむ。申し訳程度の迷彩が無いよりマシだ。

加古はインカムをつまんだ。

「マスター聞こえる？ 所定の位置についた」

「聞こえる。レーダーの探知結果を転送する」

「ありがとう」

「周辺警戒しながら2 k mまで近寄るが、奴さんが攻撃しない限りは撃つなよ」

「解ってるー」

マスターはサングラスをかけ直すと、M R A Pを微速で前進させた。

「.....」

ホワイトは歩行ペースを変えることなく進んでいたが、内心うんざりしていた。

風に舞う砂塵は体中に絡みつき、口にも、鼻にも、目にも入ってくる。

途中で制服の裾を千切って鼻から下に巻き付けたが、日が昇るとますます状況は悪化した。

そんな中、ホワイトの聴覚センサーはそれまでにない種類の音を探知した。

「なんだ……この音は」

ズシン……ズシン……ズシン……フシユツ

ウイイイン。

足を止めたホワイトが砂塵の隙間から見えたもの。

それは、機械だった。

だが、ホワイトの機械生命体データベースにあるどの型とも違った。

4本の足を持ち、高さは自分の2倍以上、足の上には赤い光を放つカメラのようなも

のと……

「……！くっ！」

ドン！

ホワイトが砂丘の陰に飛び込むのと、ホワイトがそれまで居た場所が爆発したのはほぼ同時だった。

もちろん多脚戦車が放った榴弾が着弾したからである。

「なんだ……一体……なんだというのだ！新型の機械生命体か！」

ぐずぐずしてはいられない。ここもすぐに危なくなる。

左手には崩壊したビル群が続いている。

「とりあえず身を隠す……か！」

ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！

ホワイトが駆け抜けるすぐ後ろに榴弾が着弾しては地面を抉っていく。

「……はっ、はっ、はっ、くそっ！全力でギリギリか！」

ホワイトはビルの中に飛び込み、狭い階段を駆け下りると、物陰に隠れた。

あの巨体では入っては来れないだろう。しかし上のビルごと破壊してくるかもしれない。

気づかれないように移動するしかない。

「加古、悪い知らせと良い知らせ、どっちから聞きたい？」

「悪い方」

「先程探知したのはアンドロイドだと確定したが、瓦解ビル群の地下に移動してる」

「げ。あの巨大迷路かよ。で、良い知らせは？」

「喜べ。俺達がいに行こうとしてたMシリーズ多脚戦車が3体もアンドロイドを追ってるぞ」

「……それってもしかしてさあ、ガラクタじゃない奴？」

「ああ。ピンピンしてる。胴体部のカメラ周辺を壊すなよ」

「レンズ中央にピンホールショットじゃダメ？」

「目的のパーツの配置が解らない。胴体から露出してるレンズユニット部分だけ壊すならOKだ」

「わーい、超めんどくさーい」

加古は涙声で返事した後、XM109のチャンバーに徹甲弾を送り込んだ。

「ハンティングの時間だ。まずは11時の方角、距離1803m、無風」

「あいよ・・アホめ、横向いてやがる」

ターン！

425m/sで押し出された徹甲弾は、一瞬で多脚戦車のレンズを木っ端みじんにした。

だが、発射元を特定したのか、こちらに旋回し始めた。

ターン！

加古の2発目は前足の関節部を正確に撃ち抜いた。

脚を1本失い、前のめりになった多脚戦車は地面に向かって迫撃砲を撃ってしまっ
た。

ドォーン・・・

「あーマスタ―ごめん。あのバカ地面撃って自爆しやがった」

「月まで吹っ飛んだな。じゃあ次。1時の方向、距離1920m」

「風は？」

「3時から9時に2m/s、1300m付近」

「あいよ」

ホワイトは地下空間をさらに進もうとしたが、周囲の景色を見て舌打ちをした。

四方八方に伸びる通路がどれも似たようなガレキであり、これでは確実に遭難してしまふ。

立ち止まって思索した途端、空間を揺るがすような大きな爆発音がした。

パラパラと小さな破片がホワイトに降り注ぐ。いつまでもつか解らない。

「くっ」

進むも戻るもハイリスク。

こういう時、人間ならどちらかに未来を託すのだろう。

ターン

悩むホワイトの耳に届いたのはライフルの音。

「・・・ライフルだと？」

ホワイトは首を傾げる。先程見えた機械の兵装は機銃と迫撃砲だった。

そして自分の居る地下通路に向けられていた砲撃がピタリと止んだ。

つまりライフルの狙撃は先程の未知なる機械生命体に向けられたと考えて良いだろう。

・・・ライフル銃の持ち主は自分にとって敵かもしれない。

それでも。

「問答無用で押しつぶしてくる瓦礫より、ライフルを持つの方が話し合える可能性はある」

ホワイトは慎重に、元来た道に戻り始めた。

それから爆発音とライフルの音が続いていたが、急に静かになった。

ホワイトはそつと階段から表を見ると、そこには大きなタイヤを持つ機械と人影が2つ。

戦意がない事を示しておいた方が良いでしょう。

ホワイトはそつと両腕を上げつつ、二人に声をかけることにした。

第10話

「やー、ほんと面倒臭い狙撃だったよお」

「加古が難しいオーダーをクリアしてくれたおかげで、多脚戦車の胴体がタダで手に入ったな」

「デラさんに幾らで売るのが？」

「ジャンクヤードの買取相場位だろう。世話になってるからな」

「欲が無いねマスターは・・・あ、そっち持って」

結局加古は3体とも仕留めたが、胴体が傷つかなかったのは1ユニットだけだった。

その1体を二人がかりでMRAPの荷室に押し込み、ロープで固定している時だった。

「すまない。その、教えてもらいたいことがあるのだ」

マスター達が振り向くと、両手を上げたアンドロイドと思しき女性が立っていた。

加古はじつとアンドロイドの目を見ていたが、急に興味を失ったように作業へと戻ったのである。

「ん？私の顔に何かついてたか？」

マスターは首を振った。

「違います。以前、ウイルスに冒されて目を赤く光らせたアンドロイドに襲われまして」「えっ」

「怪力を振り回されて酷い目にあつたのですよ。失礼をお許してください」

「いや、それなら仕方ない。そのアンドロイドは・・・」

「我々はウイルス駆除の術を持ってないので、破壊しましたよ」

「そうか・・・」

「気分の良い話ではなかったですね。ところで、こちらで何をなさっていたのです?」

「ここに用はない。レジスタンスキャンプに行こうと砂漠を徒歩で移動していたのだ」

「輸送車はどうしたんです?」

「それはその・・・長い話になるんだ、とても」

その時、加古がひよいとマスターの脇に着地した。

「おまたつせー、固定して幌かけたよ」

「よし、良い子だ」

加古の頭をワシワシと撫でながら、マスターはホワイトに顔を向けた。

「じゃあええと、お嬢さん」

ホワイトは自分の事だと気づかず、思わず後ろを振り向いてから向き直った。

「えっ? その、お、お嬢さんとは、私の事か?」

「お名前を存じないので」

「あ、ああ、すまない。その、私はホワイトという」

「ではミスホワイト、車の中でお話ししましょう」

ホワイトが一瞬で顔を真っ赤にした。

「ミ、ミスホワイト!?!」

「失礼、ご結婚されているのですか?」

「いや、そうではない、が・・・その・・・あう」

マスターがどうしたものかと困った表情を浮かべているのを見た加古はぽつりと
言った。

「ホワイトさんで良いんじゃないの?」

ホワイトが何度も頷いたので、マスターは頬笑みを浮かべた。

「ではホワイトさん、ここらは放射能汚染が酷い地域なので、車内へどうぞ」

「あ、ありがとうございます」

加古はジト目になった。これはフラグが立ったルートに入ったぞ。

元々アンドロイドは人間に好意的に振る舞うように出来ているらしいし。

てことはあのダメ人形の時と同じ・・・あーあ。

まあ関わるって言った時から予感してたんだけどさあ。

「そういうわけなのだが、約5600kmを移動する手段はないだろうか」
ホワイトはMRAPの後部座席で砂漠に降り立ったところからの経緯を一通り説明した。

ただ、バンカーの正体や自分の所属などは慎重に避けた。

長くなると断っていたので、マスターは話が聞こえる程度の速度でMRAPを走らせている。

加古は首を振った。

「コイツで5600kmドライブするなんてありえないからね、マスター」
マスターは肩をすくめた。

「解ってる。そもそも海を渡れないしな」

「おまけに荷室作るために兵装捨てたし」

「どうせ軍用の弾薬なんて手に入らないからな」

「買えるけど、予算上の問題でしょ？」

「そうともいうな」

ホワイトは両腕を組んだ。

自分が走ったとして25 km/h・いや、砂に足を取られるから20 km/hだろう。

冷却時間を4時間として1日400 km、陸地だけでも14日間か。

海は泳ぐとして時速何km出せるだろう？

エネルギー的には問題ないが、なかなかタフな案件だ。

とりあえず頼める範囲を確定させよう。

ホワイトは口を開いた。

「難しい事は分かった。行きたい方向はこっちなので、可能な所まで乗せてってもらえるだろうか」

マスターは肩をすくめた。

「いや、私達には手が無いというだけですよ、知り合いに聞いてみましょう」

「知り合い？」

「さつき仕留めた戦車を注文したオーダー主で、機械に詳しい方です」

加古も頷いた。

「鉄血の元エンジニアだからねえ、デラさんは」

「ああ」

ホワイトは首を傾げた。

「気持ちはあるがたいが、私は機械を買い取るような対価となるものを何も持つて無いのでな」

マスターは首を振った。

「聞いてみるだけですし、うちはこの方角にまつすぐです。一休みしていつてくたさい」「すまない・・失礼ついでにもう一つ伺いたいのだが」

「なんでしよう」

「あなた方は、その、人間、なのか？」

ホワイトは数少ない基本情報には、既に人間は絶滅したとされていた。

だがこの二人は機械生命体には見えないし、アンドロイドにしては質量が軽すぎる。

マスターは首を傾げた。

「難しい質問ですね。加古は艦娘ですから違います。そうだな？」

「んだね」

「で、私は・・改造されてますからねえ」

「改造・・元は？」

「人間ですよ。旧世界ではサラリーマンだったようですが」

「なっ!?しっ、失礼いたしました!人類に、栄光あれ!」

ホワイトはピンと背筋を伸ばして敬礼を行った。

「は?」

視線を後ろにやるわけにもいかず、マスターはバックミラー越しに見て驚いた様子だった。

加古は顎に手をやった。

「んー?それ、ずっと前に来た客が言ってなかったっけ?ヨルハ部隊とか人類軍とか」

「遺跡の話か?」

ん?

マスターの一言にホワイトは戸惑ったような表情になった。

加古が頷いて続ける。

「ていうか、なんかアンドロイドって元々は人類の為にって頑張って機械生命体と戦ってたとかなんとか」

「古代戦乱期の話か?それがどうした」

「いやなんか人類に栄光をくってフリーズを言ってたような気がして」

「そうだったっけ?」

ホワイトは恐る恐る声をかけた。

「あ、あの、マスター殿」

「はい。すいません話の途中でしたね」

「いや、その、また確認なのだが」

「ええ」

「今は・・西暦何年なのだ？」

マスターと加古は思わず顔を見合わせた。

マスターは再び困ったような表情のまま前を向いた。

「んー・・西暦・・西暦ですか」

加古が両手を後ろに組む。

「ずーっと前にデラさんが西暦2万年だかなんとかって言ってなかったっけ？」

「それ何百年前の話だ？」

「忘れた」

ホワイトのこめかみを嫌な汗が流れた。

「ええと、つまり、少なくとも西暦2万年を超えてるのか？」

「デラさん家のサーバーが正しければね」

「そ、その、機械生命体とアンドロイドの戦いはどうなったのだ？」

加古が唸りながら目をつぶった。

「えーつとねえ、アンドロイド側は人類軍代表、機械生命体側はなんだっけ、ポピーだっけ？」

「パスカルじゃなかったか？」

「それ。なんかそんな人達が戦うの馬鹿らしいよねっってお終いにしたんだよ」

「は？」

「嘩然とするホワイトをバックミラー越しに見たマスターは溜息をついた。

「加古、説明が雑過ぎる。人類軍と機械生命体の代表同士で和平協定が結ばれましたよ」

「そもそもそれって西暦1万5千年より前じゃなかったっけ？」

「そこまでは覚えてないなあ」

ホワイトは頭を抱えながら唸るようにつぶやいた。

「そう、か」

「どうやら私はとんでもない時間、コールドスリープモードで過ごしていたようだ。」

「その間に何らかの理由でバンカーは墜落し、機械生命体とアンドロイドは停戦したという事か。」

「では、もはや私は・・・」

第11話

僅かな沈黙の後、ホワイトは口を開いた。

「マスター殿、先程の移動の話はもういい。なかった事にしてくれ」

「えっ?」

「その、私は先程の話で和平協定が結ばれた戦争の、人類軍側特殊部隊の司令官だったのだ」

「・・・ええっ?」

MRAPを停止させて振り返ったマスターと加古の視線を受けつつ、ホワイトはぽつぽつと呟いた。

「正確に言えば、当時の司令官の予備个体だったのだ」

「・・・」

「司令官に何かあった時に代わりが勤まるよう待機していたのだが、基地ごと地球に墜落したらしい」

「それは・・・」

「そして私は前任者の記憶は引き継いでいないし、目覚めたのはつい2日ほど前だ」

「なるほど。では先程の地点は」

「レジスタンスと呼んでいた、人類軍側の地上拠点の座標だったのだが・・・」

加古は首を振った。

「停戦から少なくとも5千年は経ってるから、期待するような相手は居ないだろうね」
「そういうことだ」

MRAPを発車させながら、マスターは前方に目を凝らした。

「とりあえず我々の住まいが見えてきました。狭い所ですが寄って行ってください」

「どうぞ。お口に合うか解りませんが」

「ありがとう」

マスターから紅茶の入ったカップを受け取ったホワイトは、そっとテーブルに置く
と、頭を下げた。

「どうしました？」

「まずはこんなに親切にして頂いた事に、感謝を申し上げたい」

「お気になさらず。服や髪に砂が混ざりこむと気分も良くないでしょう」

「ああ。エアシャワーはとても気持ち良かった」
そう。

店についた時、MRAPから降りてくるホワイトを見た加古が、
「エアシャワー浴びてきたら？砂だらけでしょ？」

と、提案したのである。

エアシャワーは砂落としの為に強弱をつけた空気の塊を吹き付ける装置で、軽い除染の効果もある。

水が手に入らない砂漠地域ならではの装備だが、今は地球規模で砂漠化しているので普通に見かける。

首を傾げるホワイトを見て、店のトラップを解除したマスターは加古に声をかけた。

「加古、使い方を教えてあげなさい」

「ああそっか、はい。こっちだよ」

加古に手を引かれるホワイトを見て、マスターは頷いたのである。

紅茶のカップをそつと手で包み込んだホワイトは、カップに注がれた紅茶を見ながら続けた。

「私は前任者の記憶を引き継ぐ手筈になっていたが、得られていないのが現状だ」

マスターと加古は、静かにホワイトを見ていた。

「名前や歴史、自らの位置を測る方法といった基礎的な情報はあるのだが、それ以外何もなし」

「おまけに携わる筈の戦争は、5千年以上前に終結してしまった」

「私は情報解析に長けるスキヤナー型や、医療行為が行えるヒーラー型でもない」
「起動したばかりだからエネルギーは満タンだが、何をすべきなのか解らない」

「いや、私がする必要がある事がすべて終わっていた、と、言うべきなんだろう」

「この感情を、なんと表現すればよいのだろうと、戸惑っている」

加古が頬を掻いた。

「まあそんなこと言ったらあたしもほとんどの時間を本来の仕事してないからなあ」

ホワイトは顔を上げた。

「どういうことだ？」

「あたしはマスターが言った通り艦娘なんだ。艦娘って解る？」

ホワイトは小さく首を振った。

「ええとね、西暦がまだ1000年台だった頃、人間同士の世界大戦があつたんだって」

ホワイトはじつと加古を見つめ、マスターは黙って店内を眺めていた。

「あたしはその時に作られた加古っていう名の軍艦に宿った船魂なんだけど」

「その大戦が終わった後に、海に、深海棲艦っていう化け物が出てきてさ」

「人類側が対抗するために、あたし達船魂の持つ体のイメージを実体化して海で戦う為の兵器にしたんだ」

「それが艦娘。だからあたしたちは変換装置としての艦装を持つてる」

言いながら加古はすつと席を立ち、艦装を展開した。

「この背負ってる機械が艦装ね。ところどころ船っぽいでしょ？」

ホワイトが首を傾げたのを見て、艦装を仕舞いつつ加古は席に着いた。

「そっか、船を見たことないか。まあいいや。で、戦ってたんだけどそれどころじゃなくなっちゃった」

眉を顰めたホワイトに、加古は頷いた。

「海が強烈な放射性物質に汚染されて、深海棲艦も艦娘も海を追われる事態になったんだ」

「後で知ったんだけど、崩壊液とかいうらしいよ」

「とにかく、そいつに触れると深海棲艦も艦娘も狂って仲間まで見境なく殺すようになる」

「おまけに地上でも人間が真っ白になって狂暴化するとか崩壊液でミュータントになるとか無茶苦茶でさ」

「そんな時、ある鎮守府の提督と深海棲艦の最大派閥が手打ちをしたんだ。戦ってる場

合じゃないってね」

「で、私達は人の居なくなつた土地に上がつて、まずは白い化け物と戦つた」
加古は肩をすくめた。

「地上で戦つてるんだから、この時点でもう艦娘の仕事じゃないんだよねえ」
ホワイトは苦笑しながら口を開いた。

「ああ。だが兵器としてのお役目という意味では正しいのではないか？」

「ありがと。で、途中からミュータントまで攻めてくるようになった」

「すまない。その、ミュータントとはエイリアンの事か？」

マスターは首を振つた。

「私も断片的な記憶ですが、元々は人間ですよ。白い化け物は異次元からの病、ミュータントは崩壊液の病です」

「えっ」

「世界中でほぼ同時期に始まつたようです」

「その、その時マスター殿はどうしていたのだ？」

「あなたと同じですよ、ホワイトさん」

「？」

「私は人間だった記憶があるんですが、この体は元の人間をクローン技術で複製し、強化

した物のようです」

「強化？」

マスターは頷いた。

「ええ。人間の寿命はおよそ80年程度でしたが、私は恐らく2万年近く生きています」

「・・・」

「その改造手法は、ここに居る加古の、すなわち艦娘由来の不老長寿化技術だったようです」

「・・・」

「そして人間だった頃に文明の中で生きていた記憶から、突如文明崩壊後の砂漠の世界へと記憶が飛ぶのです」

「・・・あ」

「生きてるといっても、そのうち少なくとも1万5千年程度はコールドスリープ状態で記憶もありません」

「そう・・・か」

「だから目覚めた時、私は文明の中で働く1市民の記憶しかなかったのですが」

「うむ」

「見慣れない倉庫のような地下施設から外に出たら、砂に埋もれた瓦礫の市街地なんで

す

「・・・」

「近くをぐるっと回りましたが自分が居た建物も含めてどうしようもなく破壊されてい
て」

「・・・」

「とても、明日は朝イチで会議だったなあ、1本早い電車に乗らなきゃといった記憶と違
い過ぎて」

「アサイチ? デンシャ?」

「ああ、古代旧世界、つまり人類の文明が栄えてた頃の用語です」

「そうか」

「最初は途方に暮れるしかありませんでした」

「・・・」

「それでも歩き始めて、何もかも記憶と異なる世界に戸惑って」

「・・・」

「落ちてる部品が売れると解って、必要な物と交換して、どうにかこうにか暮らしていた
のですか」

「・・・」

マスターは加古を見た。

「ホワイトさんが先程戦った奴と似た機械に殺されそうになっていた所を、加古に助けてもらったんです」

加古はふいと二人から顔をそらしたが、その頬は赤く染まっていた。

第12話

ホワイトがじつと聞き入る中、マスターの独白は続いていた。

「ずっと生きてきて、私は白い化け物対策の一環だったらしいことも知りました」

「対策？」

「白い化け物になるのは異次元から来た病だったようなのですが、人類を残す計画が立てられた」

「・・・」

「1つは魂と肉体を分離して、人類を魂だけにして、遠い未来に肉体を作り、戻す方法を資料で残すもの」

「・・・」

「もう1つが遺伝子操作した人間のクローンに元の記憶を入れてランダムな期間コールドスリープさせるもの」

「・・・」

「私以外の保存ケースは開いてましたから、おそらく私が最後だったんでしょう」

「・・・前者の、方は？」

「分離した魂の維持に必要なエネルギー源が途絶えたらしく、全滅したようです」

「・・・そうか」

「そして私以外の保存ケースから出た人間達の行方は分かりません」

「・・・」

「それに、私が普通の人として生きてきたころに比べると、地球環境は明らかに過酷になりました」

「・・・」

「ですから無改造の人類が生きてるとは思えませんし、実際出会ったこともありません」

「・・・」

「白い化け物も目覚めてから見たことがありませんから、元人類と言えるのはミュータントを除けば極少数なんでしょう」

「加古はミュータントと戦ったといったが、何か敵視される理由があるのか？」

加古は頷いた。

「ええとねえ、逆恨みが近いかなあ」

「逆恨み？」

「うん。ミュータントになると、体が裂けたり、溶けたり、変形したりして、自分で見ても怖いんだって」

「・・・」

「だから冒されてない奴らが憎くて仕方ない、お前も感染しろ、そう言つて物凄い怪力を振り回してくるんだ」

「・・・」

「私は前線で戦つた記憶が強く残つてる。だからいまだにデラさん見るとおっかなくなつてさ」

マスターが加古の頭にポンと手を置いた。

「そろそろ覚えてあげなさい」

「そうしたいんだけどさあ」

ホワイトは眉をひそめた。

「ん？その、デラという者は、ミュータントなのか？」

加古が頷いた。

「そうだよ。元人類で、鉄血のエンジニアで、ELIDに感染したミュータント」

マスターが継いだ。

「ただし、ミュータントとしては珍しく友好的で、この店の大事なパートナーです」

ホワイトは頷いた。

「恐らくだが、その白い化け物については私のメモリにも登録されている。恐らくレギ

オンの事だろう」

加古がポンと膝を打った。

「そう！そうそう！赤目のレギオン！司令官が言つてたよ！なつかしー」

ホワイトは続けた。

「そして現在のように砂漠化したのは、レギオンとの戦いの後に起きた我々の戦争が原因かもしれない」

マスターと加古は声をそろえた。

「そのあと？」

ホワイトが頷いた。

「エイリアン、つまり異星人が襲来したのだ」

ホワイトはマスターと加古が同時にげんなりした顔になったのを面白そうに眺めた。

この二人は本当に息があっているのだな、と。

ホワイトは続けた。

「エイリアンは自ら戦わず、戦闘用に機械生命体を大量に生産したのだが、現存しているのか？」

二人は頷いた。

「その機械生命体と我々人類軍、つまりアンドロイドで戦いが始まった」

「その頃にはマスターの言う魂だけ保存する人類救済計画は既に失敗していたようだ」
「あと、人類軍側にはマスターの受けた救済計画は知らされていなかった。だから絶滅したと考えられていた」

「アンドロイド側は常に劣勢で、終わりの方では世界の2割ほどしか領土がなくなった
そうだ」

「私に保存されている計画は西暦11945年3月に第243次降下作戦が始まる、
という事までだ」

マスターは頷いた。

「私がちょうどコールドスリープしていた頃ですね」

ホワイトはマスターを見た。

「その、マスター殿はどこでコールドスリープしていたのだ？」

マスターは肩をすくめた。

「先程、ホワイトさんが逃げ込んだ地下空間のあったビルの近くです」

「・・・見たところ、かつてはそれなりに栄えていた地域のようなが」

「今でもビルが林立してますからね。ことごとく壊れてますが」

「戦争で、我々が破壊してしまったのかもしれないな」

マスターは首を振った。

「もう誰の砲弾か爆薬かミサイルかなんて解りませんし、どうでも良い事です」
ホワイトは加古に向き直った。

「その、加古は我々が戦ってる間はどうしていたのだ？」

加古はフツと鼻を鳴らした。

「艦娘つてことで言えば、死に物狂いで兵站を守ってたっていうのかなあ」

「？」

「ここから車で半日くらい南下するとね、FOLMEの総本部があるんだけど」

「FOLME？」

「ああ、えつと・・・ごめんマスター、正式名称なんだっけ？」

マスターが小さな紙を取り出した。

「ええとな・Farm Of Liquids and Materials and
Energy・・・らしい」

「よく覚えてたね」

「レシートに書いてあるからな。ほら」

「うわ字小っさ」

マスターがホワイトに向かって言った。

「まあ言うなれば物なら何でも作ってる会社ですよ。水や燃料といった液体、食物、そし

て」

加古が継いだ。

「前線のテントからアンドロイドのブラックボックス、交換用義体パーツまでなくんでも」

マスターが顎に手をやった。

「FOLMEにないと言われたら、それはこの世にないと言われるのと同じかなあ」

加古がひらひらと手を振った。

「ちよいまち。まだあたし達がいるじゃん」

マスターが笑った。

「FOLMEを向こうに回せるようなもんじゃないよ」

ホワイトが首を傾げた。

「そういえば、ここは店だと言っていたが、何を商売としているのだ？」

マスターは居住まいを正した。

「そうそう。申し遅れました。手前は雑貨屋「オリファイ」の主をしています」

「私達の仕事はお客様の望みと仕事人をつなげる事です。例えば・・」

加古が継ぐ。

「この間は機械生命体の社長さんとアンドロイドの奥さんのカップルが来てさ」

ホワイトは目を白黒させた。

「えっ、ア、アンドロイドが今生きて、いや待ってくれ、カップル？奥さん？」
マスターは頷いた。

「停戦して何千年も経ってますからね。今では共存を選ぶ例も多いですよ」
「そ、そうか・・・」

加古が続けた。

「んー、でね、言っちゃ悪いけど、どっちも重いんだよね」

ホワイトは頷いた。

「あなた方二人を合わせても私一人分にもならないな」

加古が頷く。

「で、この店の椅子はちゃんと耐えられるように作ってあるけど、そういう市販品は無いわけ」

マスターが継ぐ。

「今の例でいえば、機械生命体やアンドロイドは座って休息する概念がありませんからね」

ホワイトが頷いた。

「そうだな。強いて言えばスリープモードの時に横になれる安定した場所があれば良

い」

加古は苦笑した。

「でもその二人はね、旧世界のゴシック様式を模した家を作っててさ」

「は？」

「FOLMEは実用一辺倒だからゴシック様式の家にあう家具なんて無いって断られちゃって」

「・・・」

「自分達でだいぶ作ったらしいんだけど、どうしても2人で座れるソファだけ作れなかったんだって」

ホワイトは頷いた。

「機械生命体の大きさにもよるが、2体なら軽く300kgはあるだろうな」

二人は頷いた。

「ええ。ですので、旧世界の洋室にふさわしい外装を持つ、二人掛けのソファをお求めにいたしましたのです」

ホワイトは頷いた。

「そこで先程のデラが関わってくるのだな」

マスターはニツと笑った。

「ご明察。デラは元人間ですから旧世界の記憶があるし、鉄血の機械に関する知識もある」

「ふむ」

「だから外見はソファのようで、二人の重さに耐えられる機械を内包したユニットを作れるのです」

「なるほど。両者を仲介するという訳だな」

「ええ。ただ、分野を特定するつもりもありませんし、仲介だけに限るつもりもありません」

加古が口を開いた。

「今日出かけたのも、デラさんに頼まれて多脚戦車の部品を仕入れに行こうとしてただけ」

ホワイトは加古を指さした。

「私を襲った多脚戦車を仕留めたのはそういう事だったのか」

「正解。おかげで徹甲弾11発で手に入ったってわけ」

「だから雑貨屋か。納得した」

第13話

マスターはふと、ホワイトに尋ねた。

「あの、よろしければ教えて頂きたいのですが」

「なんなりと」

「私や加古、戦術人形等は人間の食べ物を食べますが、アンドロイドに食事の概念はないですよ」

「食事からエネルギーを取ることも可能だが、基本的にはブラックボックスに直接補充を行う」

「嗅覚はあるのですか？」

「匂いを測定するセンサーはあるが、それが貴方達と同じ結果をもたらすかは解らないな」

「では、今お持ちの液体は紅茶というのですが、その香りは如何ですか？」

ホワイトはそつと鼻を近づけた。

「・・・うむ、害は無さそうだし、何というか、拒絶するものではない」

加古が口を開いた。

「気持ち良い香りとか苦手な香りとかは？」

ホワイトは首を振った。

「匂い成分のデータだけだから、そこに喜怒哀楽の感情は乗っていない」

「ふうん。それはずっとそうなの？」

「いや、今は匂いと結びつく記憶が無いだけだ。記憶が増えていけばそういうこともあるだろう」

るだろう」

ホワイトは小さく微笑んだ。

「さしずめこの香りは、優しさへの感謝とほろ苦い記憶、かな」

加古はニツと笑った。

「ホワイトさんて結構詩的だよね」

「詩的？」

「まあいいけど、もうちよつと本性出していいと思うよつてこと」

ホワイトは顎に手をやり、しばらく物思いに耽っていたが、やがて顔を上げた。

「私の基本設定に、ヨルハ部隊として感情を持つてはいけないという禁止事項があるよ

うだ」

「へえ」

「だが、もはやヨルハ部隊も何もない。関連制約を解除してみよう・すまない、少し時

間を頂く」

ホワイトはそういうと目をつぶり、座ったまま動きを止めた。

マスターと加古は頷いて立ち上がった。

「多分再起動プロセスだ。数日かかるかもな」

「とりあえずMRAPを車庫に戻さない？」

「そうしよう。荷物は入れたままにするか」

「デラさんちまで運ぶことになるだろうしね」

「ああ」

「デラさんいつも手で持つてくるからねえ・輸送車無いのかな」

「さあな。じゃあ始めよう。加古、後退の案内を頼む」

「まっかせな」

「こんにちは。MPL宅配です。お水をお持ちしました・どなたか居られますか？」

MP40は配達先の敷地に降り立ち、状況を確認した。

建物内に動体反応なし、建物の損壊甚大。至る所に大口径の弾の跡がある。

MP40は記憶している顧客リストからこの住所と契約を消去しつつ溜息をついた。このお客さんも鉄血に襲われたのか。

先週は結構取引先が増えて喜んでたのに、今週減った分ではぼトントンになってしまった。

戦域の方が良い値段で契約を結べるのですが、安定しないのが困り物ですね。

MP40はゆつくりと、足元に転がっていた鉄筋の欠片を拾った。

そしてその方角を見もせず、立ち上がりながらひよいと投げつけた。

「ガッ」

MP40はゆつくりと、投げつけた方向へと歩き始めた。

そして木の上で今まさに機能停止しようとしている狙撃型鉄血人形をちらりと見上げる。

投げた鉄筋はスコープの真ん中から鉄血人形の頭部へと貫通していた。

やがて、鉄血人形の手から滑り落ちてきた狙撃銃をMP40は真下でキャッチした。

そしてこれまたその方角を見もせずに数発発射した。

「グゲッ」

「イッ」

「ガハッ」

「・・・バカナ」

あつという間に物陰で包囲網を敷いていた鉄血人形達が動きを止めていく。

MP40はマガジンが空になった狙撃銃を振りかぶり、真正面に思い切り投げつけた。

ドン・・・ズズン！

建物の陰から姿を現そうとしていた大型多脚戦車の迫撃砲ポッドに狙撃銃が直撃。

迫撃弾が爆発し、戦車の燃料タンクへと誘爆、あつという間に鉄屑と化したのである。

「さて、次の配達先に行きましょう」

MP40はバギーに乗り込むと、何事もなかったかのように発進した。

「こんなに早く望みの物が手に入るとは思わなかったなあ」

「ジャンク街に探しに行く途中で加古が仕留めてくれたんだ」

「ほう。例のパーツが無事だといいなあ」

「さ、こっちだ」

マスターの連絡を受けたデラは、数日経った昼過ぎに現れた。

そして挨拶もそこそこに、MRAPの荷台に横たわる多脚戦車の胴体とご対面したのである。

デラは嬉しそうに目を細めると、綺麗に多脚戦車の外装を外していく。

「やあ加古ちゃん、ナイスだ。このパーツが欲しかったんだよ」

「それならカメラを正面からピンホールショットするので良かったの？」

「んー、この辺りが燃料パイプだからなあ、弾が突き破って引火しなければいいんだが」

「ほら見ろ、あやうく獲物が全滅するところじゃないか」

「へーへー、マスターの言う通りでございますよう」

「一体何で加古ちゃんはムクれてるんだ？」

「狙撃の難易度が高かったらしいんだよ」

「ほんつとーに面倒くさかったんだから」

デラは胴体の破壊と汚れ具合をじっと見て、頷いた。

「横から狙撃してレンズ、その後で脚の関節を撃つたのか？」

「で、倒れる前に機銃のチャンバーに1発、迫撃砲の制御信号ケーブルに1発」

「そりゃ面倒だ。だがそうでないと危ないか、なるほどな」

「コア撃てれば1発で済むのにさー」

「すまん、こいつはコアに重なつとるからなあ」

「設計不良だー」

「図を引いたのはワシじゃないが、すまんすまん、ちよつと色を付けよう」

「えっ」

「マスター、この部品だけで良い。幾らだ？」

「それだけかい？ほかの胴体部は？」

「要らんよ。鉄屑屋に売れば小遣いになるだろう」

「コアユニットまで要らないのかい？エネルギーユニットとして使えるじゃないか」

「それがあるほうが金になるだろ」

マスターは加古の頭をこつんと叩いた。

「さっきの加古の話は気にしなくていいよ。必要な物を取つてくれ」

「いや、本当にいらん。コアユニットは幾つか手持ちもあるし、自作出来るよ」

マスターは肩をすくめた。

「それだけならお代は要らないよ、残りを鉄屑屋に売れば普通に値が付くし」

「バカ言つちやいかん。コイツは本当に入手しづらいんだ」

「それは一体何なんだい？」

「潤滑油精製機だ。正確には大気中の酸化した潤滑油を抽出し、蘇生させる」

「へえ」

「軽油を燃料とするなら潤滑油成分を軽油から分離すれば良いが、融合炉の場合そうもいかん」

「だね」

「潤滑油の為に軽油を買うのもバカらしいし、良質の潤滑油なぞ手に入らん」

「うん」

「だから空中から潤滑油を生成してくれるコイツがどうしても必要なんだ」

「この多脚戦車は融合炉駆動なのかい？」

「いや、単純な軽油だが、潤滑箇所が多過ぎて軽油分離では燃費が悪くなりすぎるんだ」

「なるほどねえ」

「だからこういうユニットが積まれてる。それはそれは凝った仕掛けでな、自作は無理なんだ」

「でも、それがあれば潤滑油がタダで仕入れられるってことかい？」

「目を輝かせてる所悪いが、丸1日駆動してせいぜい5ccだぞ？」

「えっ」

「まあ軽油100Lよりは安い電気代だろうがなあ」

「えっ電気代？」

「装置だからパワーは必要だ。だから有り余る電力を生み出せる融合炉との相性が良い

んだ」

「そっか」

「そんな話は置いていて、こんなもんで足りるか？」

デラはマスターの手のひらに金貨を3枚置いた。

第14話

マスターは手のひらに置かれた3枚の金貨を見て顔をしかめた。

「これじゃ多すぎる。胴体丸ごとの買取値で金貨1枚つてとこだし」

「じゃあ残りは加古ちゃんに臨時ボーナスつて事で良い」

「待ってくれ。残った胴体は鉄屑屋に売れるんだ。1枚で十分だつて」

デラは押し付けられた金貨2枚を見てくすくすと笑った。

「おかしな店だ。いつも客に釣りを少しでも多く渡そうとする」

加古は自分の臉に指をあてた。

「マスターが無欲なせいで貧乏から抜け出せないよう。ごちそう食べたいよう」

「お前さつきグラタンコロッセバーガー2個も食つてただろうが」

「5日前につくつたシチューが手を変え品を変え出てくるんじゃない」

「寸動鍋で一氣に作つてアレンジして出す方が食費の節約になるんだ」

「デラさあくん」

デラは渡された金貨2枚をマスターに押し返した。

「良いからこれで加古ちゃんにごちそう食わせてやれ」

「はあ・・じゃあ次の仕事の時に色を付けるよ」

「今回は加古ちゃんのお手柄なんだ。FOLMEでステーキ肉でも買うといい」
「ステーキ！千年ぶりくらい!?!」

途端に目を輝かせる加古をジツ目で見たあと、マスターはデラに頭を下げた。

「本当にすみません。では、ありがたく」

「こちらもお助かった。これがあれば輸送機はもう燃料要らずだからな」

「輸送機？」

「ああ、言ってなかったか。わしは最近、輸送を車から飛行機に変えたんだよ」

「へえ」

「空を移動する方が襲われにくいからな。そして融合炉方式なら燃料不要じゃから長距

離も簡単だ」

「なるほど。海の外のお客さんもいるって事か」

「ああ。大陸のこつち側だし、数えるほどだがな」

「ちなみにそいつはまだ欲しいのかい？」

「そうじゃな。まあ壊れた時の予備、外販として輸送車に融合炉を組み込む際にも使える。あつて損はない」

「あー」

マスターはちらりと自分のMRAPを見た。

たしかにこれが燃料不要、潤滑油不要になると凄くありがたいな・

「なあデラさん、こいつに積めるかなあ」

「融合炉をか？まあこのパーツがもう一つあればやれん事はない。融合炉も余つとるしな」

「お幾らで？」

「部品を現物か、対価なら金貨2枚。工賃は新品の燃料フィルター3枚つて所かな」

「デラさん」

「なんだ」

「・・・ステーキとすき焼きならどっち食べたい？」

「・・・工賃を肉で払うつもりか？」

「どうせ買いに行くからね」

「わしは別にどちらでも。加古ちゃんに選ばせればいい」

加古がマスターに飛びついた。

「ステーキ！」

「そうか。よし、合成肉のサイコロステーキな」

「ステーキいい！合成肉とかサイコロとか付けなくていいからあ！」

「解った解った！まったたく、チキンステーキなんて贅沢な物を」

「牛肉！ビーフ！サーロイン！」

「あんまり贅沢が過ぎると目が潰れるぞ！」

「金貨1枚あれば余裕で4人分買えるでしょ！」

「1食で金貨1枚使うだど!? おおお眩暈がしてきた・・・」

「んもおおおおお！」

「デラは首を傾げた。」

「ん？4人という事はMPの嬢ちゃんも居るのかね？」

「マスターは涙目で自分を揺さぶる加古からデラに視線を向けた。」

「ああいや、ちよつと今アンドロイドが同居してましてね」

「アンドロイドが肉好きなのか？」

「いや、色々経験をね。まだこの世の記憶が少ないみたいだから」

「アンドロイドに魚類はNGだと聞いた事があるが」

「ああ、アジを食べると体液が固まって死ぬってやつでしたっけ」

「そうだ。だがまあ、肉は聞いた事ないな」

「マスターは加古を引き剥がすとジト目で加古の目を見た。」

「これつきりだからな。1度だけ！1度だけだからな！」

「やった！牛サーロインA5クラスステーキ！」

「そんな高級品FOLMEにある訳ないだろ」

「あつたら？あつたら買っていい？」

「同じ物4人分、ステーキソース込みで金貨1枚までなら認めよう」

「クツ・・なんか微妙に足りない予感がする」

「そーかー？」

「マスターが余裕の表情するってことはきつとそうなんだ！知ってるんでしょ!？」

「さあなあ」

「汚い！汚い大人がいる！」

マスターはMRAPのドアを開けた。

「ほら、鉄屑屋に売りに行つてからお買い物だから早く行くぞ」

「えー鉄屑屋は明日で良いじゃーん」

「こんな大きな物いつまでもMRAPに積んでおけないだろ。早く乗れ」

デラは肩をすくめた。

「わしは店に入つて良いのか？」

マスターはハツとしたようにエンジンを始動するのを止め、MRAPを降りた。

「待ってくれ。彼女に紹介する」

「そうしてくれ。いきなりアンドロイドにレーザーでも撃たれてはたまらん」

「……」

「と、いうわけで、こちらが先日言っていたデラさんです」

「……あー、初めまして。デラです」

「……ひ」

「？」

「……ひいいいいいいいいい！」

悲鳴を上げながら全力でキッチンの柱の陰に隠れたホワイトを見て、デラは溜息をついた。

「やっぱりそうだろうと思ったよ。」

恐怖で真っ青になり、ガチガチと震えるホワイトに、マスターは近づいていった。

「あの、本当にデラさんは紳士ですし実力のあるエンジニアさんなんです」

「ようやくホワイトがマスターに視線を寄こしたが、ガチの涙目で震えている。」

「少しお話して頂ければすぐに分かりますから」

「えっ……ま、まままマスター殿は？」

「これから面白い物があるので少し離れますが」

「そんなんっ!？」

「本当に、本当に大丈夫ですから」

ホワイトはマスターの袖をがっちり掴むとぼろぼろと涙をこぼし、小さく小さく囁いた。

「頼む……置いていかないで……」

デラがそつと声をかけた。

「わしは今日は帰るよ。食事にはまた今度誘ってくれ」

マスターが振り返った。

「えっ、いや、彼女も解ってくれるよ。大丈夫だつて」

「折角のご馳走を恐怖の思い出と共に覚えては可哀想だろう」

「そんなに自分を悪く言うなよデラさん、私まで悲しくなってくる」

ホワイトは震えながらもデラとマスターのやり取りを耳にしていた。

声だけ聴く分にはデラがまともな事を言ってるのは解る。

解るのだが、あの外見は怖い。一瞬で記憶に焼き付くくらい怖い。

そりゃあミュージタントが感染してない人を見て恨むのも解る。

だが、自分がこれでは大恩あるマスターの顔に泥を塗ってしまう。

ホワイトは深呼吸を3度すると、きりつとした顔でマスターを見た。

「マスター殿」

「えっ？あ、はい」

「・・・信じるぞ」

「え、ええ」

ホワイトは更に一呼吸おいてからデラに向き直る。

そしてゆつくりとした歩みでデラに近づいていく。

一方でデラは困ったような表情を浮かべながら半歩下がった。マスターは二人の様子を後ろの方からそつと見ていた。

第15話

ホワイトが先に口を開いた。

「デラさんと言ったな、先程は大変失礼した。挨拶がまだだったな。私はホワイトという」

デラはゆっくりと頭を下げた。

「ご丁寧にも。ここで頼まれた品を作っている職人の一人だ。その、こんな外見で
すまない」

ホワイトは首を振った。

「E.L.I.D.によるものであることは聞いた。その、少し話をしてもいいだろうか」

「ああ。ワシは後ろを向いているよ。その方が幾分気持ち悪く無いだろう」

「いや、その必要はない。こちらを向いてくれ」

「いきなり無理をすることはない。加古ちゃんだって話しかけてくれたのは半年後だった」

「・・・あの加古が？」

「ああ。MPの嬢ちゃんは出会い頭に32発撃ってきた」

「銃で撃たれたのか!？」

「全弾キレイに当たったよ。人間だったらハチの巣だ」

マスターはホワイトの横顔を見て頷くと、そつとMRAPへと歩いて行った。

「マスター、大丈夫かな？」

走行するMRAPの助手席で、ずっと無言だった加古が心配そうに声をかけた。

「ああ。ホワイトさんは対応出来ると思う」

「無理してないかなあ」

「そこは解らないが、司令官型アンドロイドと言ってたからな」

「どういうこと？」

「戦場では、常に想定外があるだろ？」

「うん。想定通りに行かない方が普通だよ」

「予想外の事態で強いプレッシャーに晒されても、冷静に判断を下さなきゃいけない」

「・・・そうだね。司令官が取り乱したら部下は死ぬ」

「その司令官に特化したアンドロイドなら、自分をコントロールする能力は高いと思う」
「なるほどね」

「あとは、デラさんが気を使ってるってこともある」

「・・・うん」

「加古も怖がらないでやってくれ。彼は本当に良い人なんだよ」

「・・・ホワイトさんが慣れたら、手伝ってもらおうかな」

「そうするといい。鉄屑屋に着いたら起こしてやる」

加古はようやくいつもの仮眠の姿勢になった。

「うん。出来るだけ高く買ってもらわないとねえ」

「欲張りすぎて拒否されないようにな」

「解ってる。口出ししないよ」

店ではホワイトがデラの腕に視線を移していた。

「ミュータントになると皮膚構造が変わるのか?」

「詳細は解らないが、鋼鉄並みに硬くなり力が増す。固定されたM10ボルト位は手で

簡単に回せる」

「ふむ。痛覚は？」

「あまりないな。だからうっかり手を溶接しとったことがある」

「熱も感じないのか」

「ああ。だから昼夜問わず外に出てもなんともない」

「私達でさえ夜中の冷え方は行動に支障が出るほどなのだが」

「アンドロイドは大気圏外でも平気だと聞いたが？」

「そうだ。だが大気圏外では大気中の水分が刺さってくることは無いからな」

「ダイヤモンドブレードか。氷の結晶が剃刀の雨のように降ってくるからな」

「あれはダイヤモンドブレードなのか。先日行軍中にそれに見舞われて散々な目にあった」

「先日というと5日前頃か？あの夜はここらでも氷点下60度を記録したからな」

「さすがに明け方まで物陰に避難した。頑張つて避けたが服の裾がズタボロになってしまった」

「どこを歩いておつたんだ」

「マスターが眠っていたという市街地だ。放射能汚染が強い地域、だったか？」

「あそこか。旧副都心の辺りならマイナス80度近かつたらう」

「うむ。外気温センサーはマイナス85度を記録した」

「それじゃ軍用燃料すら凍りそうじゃな。よく越せたの」

「宇宙空間では絶対零度もザラだからな。待機するだけなら不都合はない」

「おぬしの燃料は核融合じゃったか」

「そうだ。詳しいな」

「時間だけはたっぷりあつたんでな。古代資料を戯れに読んでいただけだ」

「資料があるのか？」

「長い事集めているが、断片的でまとまったものはない。紙ですら風化する歳月がたつているからな」

「そうか。デラ殿はその、E L I Dパンデミックの時からずっと生きているのか？」

「そうなる。生きてられたのはE L I Dのおかげでもあるんだ」

「？」

「わしは元々、あのM R A Pに積まれてた兵器を作っていた会社に勤めていた」

「あれは・・私を襲撃してきたんだ」

「すまないのう。あれも元々は人の戦争を肩代わりする自律兵器だったんだが」

「そうだったのか」

「E L I Dパンデミックよりずっと前に、わしはE L I Dに罹ってしまった」

「・・・」

「治療という名目で隔離施設に放り込まれたんだが、あつという間にこの姿だ」

「・・・」

「やがてELIIDが蔓延し出した頃、会社がテロリストに襲われてな・・・テロリストはわかるか？」

「大丈夫だ」

「テロリストに抵抗する為に社員が会社のAIを無理矢理起動したせいで兵器達が暴走してしまっただけ」

「・・・」

「テロリストどころかその場に居た人間は全て兵器に殺された」

「・・・」

「それだけでは止まらず、AIは勝手に兵器を増産し、その全てが人の形をしているものを敵とみなしておる」

「・・・」

「じゃからアンドロイドにも、戦術人形にも、艦娘にも、改造された人間にも攻撃を仕掛けるんじゃないか」

「デラ殿は何の関わりもないことではないか」

「まあ。じゃがわしは鉄血工廠で自律兵器の設計をしていたエンジニアだ。責任は感じよう」

「・・・」

「わしはやがて見張る人間が居なくなったので隔離施設から逃げ出したが、その後の方が酷かった」

「何があつたのだ？」

「他のミュータントはいきなり襲い掛かってくるし」

「えっ」

「人間の軍隊に会うとミュータントだと恐怖にひきつった声で叫ばれてRPGが飛んでくるっ」

「・・・」

「戦術人形や艦娘やアンドロイド、それに鉄血の兵器からは無言のまま発砲される」

「・・・」

「誰も居ないとところに逃げ、生き延びるために必要な機械を自分で調達するしかなかったよ」

「・・・そうか」

「この体は恐ろしく燃費が良くて頑丈じゃが、決して嬉しくはなかったなあ」

「・・・」

「へっへーん。ラッキー」

「そんな・・・肉の・・・特売日だと・・・うそだらFOLME・・・」

勝ち誇る加古、FOLME食品店の柱に放心状態でぐったりと寄りかかるマスターという構図である。

店員である、間宮と名札を付けた艦娘はマスターを横目に見ながら加古に話しかけた。

「え、ええと、A5和牛ステーキ肉、1ポンドを4枚で良いんですよね？」

「そうだけど・・・なんかマズい？」

「んー」

間宮は少し頬を掻きながら、加古に尋ねた。

「失礼ですが、厚切りのお肉は食べ慣れていますか？」

「ううん、1000年ぶり」

「えっ」

「多分それくらい」

間宮はそつとショーケースを指さした。

「それなら、こつちの段のお肉の方がおいしいと思いますよ」

「えつ、だってA5和牛より格段に安くない？」

「むしろA5和牛が高すぎるんですけどね」

「でも高いならA5和牛の方がおいしいんじゃないの？」

「肉は、白い所が脂身で、赤い所が肉なんですけど、A5のお肉というのは」

「・・・真つ白だね」

「ええ。A5肉は肉より脂の方が多く、脂と肉が細かく混じってるんです」

「で？」

「つまり、脂のおかげで十分柔らかい肉も楽しめますが、基本的に脂は溶けるので」

「・・・なくなっちゃう？」

「それもありますし、これは肉を食べ慣れた人が脂を楽しむ為の特殊なお肉なんです」

「えー」

「ですからステーキとして誰でも楽しめるという意味では、こつちのサーロインかフィレがおすすめなんです」

「へえー」

加古はちらりとマスターを見た。

まだ今日のセールのせいでA5ランク牛肉4人分が金貨1枚で買えてしまうショックから立ち直れていない。

加古は間宮を見た。嘘をついてる風ではないし、ちよつとマスターが可哀想になってきた。

ややあつて、ため息交じりに加古は間宮に告げた。

「えつと、簡単に焼けて、肉を食べ慣れてない面々にとつて一番美味しいと間宮さんが思う肉はどれ？」

「召し上がる方の種族は？」

「私、この人、ミュータント、アンドロイドかな」

「ず、ずいぶんバラエティ豊かですね・・」

「うん」

「・・ではフィレ肉で如何ですか？美味しい焼き方とピツタリのソースもご案内しますよ」

「サーロインより？」

「今日のラインナップで言えばサーロインよりフィレですね」

「じゃあ任せる。お腹いっぱい食べたいんだ」

「普通はお一人200gなんですけど、じゃあ1ポンドで4枚切りますね。付け合わせはどのようなものを？」

「ううん、肉オンリー」

「オンリーですか？少し違うものがある方が口直しになってより美味しくなりますよ？」

「そっか・・・何が良いのかな」

「簡単な物なら粉吹芋か、炒めたトウモロコシか玉ねぎ、少し凝ってにんじんのグラッセですかね」

「炒めるだけなら簡単だね。じゃあトウモロコシと玉ねぎをかうよ」

「粉吹芋も簡単ですよ。作り方をお教えします」

「じゃあジャガイモも」

「・・・では、肉以外の材料はこのメモ、作り方はこのメモをどうぞ」

「ええと、全部で金貨1枚で足りる？」

「十分お釣りが来ますよ」

加古はにっこり笑った。

「じゃあお願いします！」

第16話

ホワイトは自分とマスターの出会いを説明した後、デラに尋ねた。

「ところで、マスター殿は初めてデラ殿とあった時、どのような反応をしたのだ？」

「おはようって、言われたよ」

「おは・・・よう？」

「ああ。わしの顔を見ながら普通にな。わしは信じられなくてポカンとしてしまったよ」

「・・・」

「それならマスターは困った顔をしてな、もし邪魔ならすぐに去るよと言ったんだ」

「・・・」

「わしは必死になってどうして固まったか説明したよ。しどろもどろで下手糞な説明をな」

「・・・」

「マスターはじつと聞いてくれた。そしてわしをこの店に誘ってくれた」

「そうか」

「良く冷えたコップ一杯の水を渡された時には泣いてしまつてなあ」

「ああ、わかる」

「解るか」

「私も、マスターに話を聞いてもらつて、優しくしてもらつて、涙が溢れそうになつたからな」

「わしが居ても良い、そう言ってもらえた気がしたよ」

「うむ。まさにそれだ」

「それから今まで、加古ちゃんは怖がるんで、わしからは30日おきにしか訪ねないようになっている」

「なぜ30日なのだ？」

「人間の頃の癖なんだが、月に1度、というペースがあつてな」

「月というのは、西暦の1ヶ月の事か？」

「その通りだ。忘れ果てるほどではないが、ちよつと距離を開けるのに良いペースだ」
「色々気を使っているのだな」

「マスターに迷惑をかけてはいかんし、折角仲良くしてくれた友人を失いたくない」

「良く解る」

「そうか」

「先程は本当に失礼した。申し訳ない」

「いや、初対面でこんな話してくれたのはマスター以外にはホワイトさんしかおらんよ」

「・・・」

「さて、わしは帰るとするよ」

「マスター達が帰ってきてないが？」

「折角加古ちゃんが待ち望んでいたステーキだ、わしを見ながら食べることもあるまい」
「マスターが悲しむぞ。せめて加古に聞いてからではどうだ？」

デラはホワイトを見つめた。

「わしが見えたら飯がまずくなるだろう・・・」

「それを加古に聞けばいい。思い込みは誤った判断をする元凶だ」

「・・・それはそうじゃがの」

ホワイトは表に顔を向けた。

「ほら、二人のMRAPが帰ってきた」

デラは少し怯えたような表情で、ホワイトと同じ方角を見つめた。

「いいただだつきまあああつすつ!!!」

「加古、声が大きすぎる。どんだけ期待してるんだ」

「間宮さんレシピ通りだよ!一秒も狂ってないよ!絶対美味しいに決まってる!」

「解った解った・・さあホワイトさん、デラさんもどうぞ」

「う、うむ。ご馳走になる」

「ああ、頂きます」

そう。

M R A Pを降りてきた加古に、デラは恐る恐る同席の可否をたずねたが、加古はキョトンとして

「へ?だってデラさんの分買ってきたよ?」

と、普通に受け入れたのである。

デラは努めて普通の振る舞いで、ステーキにナイフを入れていた。

だが、ホワイトを含む皆は、デラが肩を小さく震わせていることも、鼻を嚙っているのも解っていた。

解っていたが、誰もその事には触れなかった。

「美味し〜いいいいいい!!」

「まあ・・・美味しいけど、この贅沢に加古が慣れるのが怖いなあ」

加古を見て眉を顰めるマスターに、ホワイトがとりなした。

「まあまあマスター殿、ひとまず今夜は楽しませてあげればよからう」

「そうは仰いますがねホワイトさん、加古は味をしめるのが早いですよ・・・」

加古が満面の笑みでマスターを見た。

「こんなおいしいステーキが食べられるならまた頑張つて狙撃しちゃうよ！」

マスターは肉を刺したフォークを口に咥えたまま加古を見た。

確かに、あの面倒な狙撃手順をこなせるのは加古だけだろう。

まだいくつか取つてもらわねばならないし、仕方ないか。

「じゃああの部品があと10個まともに取れたら、また肉を焼こう」

「ほんとー！うわーい！」

無邪気に喜ぶ加古を見た後、ホワイトとテラは顔を見合わせた。

「ええと、今のオーダー」

「うむ、その、かなり過酷なオーダーじゃの」

「やはり気のせいではなかったのだな」

「マスターは、なんとというか、優秀な経営者じゃからな」

「主に支出抑制の意味で、だな？」

「うむ」

二人は苦笑してから、再び肉にナイフを入れていった。

「今夜は、こんなものですね」

MP40は掌中の錆びたボルト数本を、軽く宙に放り投げてはキャッチしていた。

興味なさげに見回した周囲には、壊れて火花を散らせる鉄血人形や燃え盛る多脚戦車が山のように転がっていた。

「たかだか大隊一つで力押しとは舐められたものです。さて」

「ヒッ」

MP40がゆらりと、唯一意識の残る、指揮を執っていた鉄血製ハイエンド機であるエクスキューションナーへと向き直った。

意識はあるが、既に全ての兵装は失われ、関節を幾つも壊され、戦意はとうの昔に喪失していた。

「ああ、話す必要は何もありませんよ?」

「・・・エッ?」

ヒュッ

「・・・ガアアアアアア！」

エクスキューションナーは自らの右胸に深々と刺さる錆びたボルトを、強烈なエラーデータと共に認識した。

配線同士が短絡し、何度も火花が散る。

「通信アンテナが壊れました。もう貴方は鉄血の一員ではありません」

エクスキューションナーは震え始めた。どうしてここに通信アンテナがあると知ってる？

しかも今まさに全周波数、全チャンネルを使って救援要請を送ろうとしていたのに。

「ア・・・アアア・・・」

「通信が失われると鉄血の工場では別個体を生成し始める、あなただとPW06Gの工場ですね」

「ナ・・・ナゼソレヲ」

「どうですか？生きてままKIAになった気持ちには」

「ヤメ・・・ヤメテ・・・クレ・・・」

「あなたはそう言われて止めてきたのですか？」

ヒュッ

あはは、なんだ、早く目覚めてよ・

「ああそうだ、言い忘れてましたけど」

「？」

謎の振動が止まらないエクスキューションの顔を見ながら、MP40は言った。

「あなたの記憶と感情はまだ工場にはフィードバックされてます。非常通信チャネルは生きてますから」

「エツ・・サツキ・・壊レタツテ」

「ああ、えつと、作戦通信アンテナは、と、言うのが正解でしたね」

「ソナナ」

じゃあ・・今考えていたことが・・工場に・・全部・・えつ待つて

「次の貴方の個体は、今の記憶まで引き継いで生まれますよ。良かったですね」

うそだ・・こんな記憶を持ったら・・起動直後にAIが恐怖で狂ってしまう。

まさかこいつ・・最初からそれを狙っ・・

「査問会はさぞ疑ってるでしょうね。それなりのポジションにいた貴方が何を喋ったの
かって」

「ア・・アア・・」

待つて・・・違う・・誰か聞いて・・・これは

「では、謎は謎のままにしておきましょう」

「エッ」

ヒュッ

・・・ピー

ガクリと首を垂らし、エラー音を吐いて停止したエクスキューショナーに近づいて行くMP40。

その体に無造作に手を突き刺し、コアを引き抜いたその顔は、全くの無表情だった。

「ついでにネットワークウイルスも送りつけておきましょう。工場で一花咲かせてください」

無理矢理命令を次々に送り込まれたコアはありったけの情報を吐き出すと、次第に火花を散らし始める。

「・・・それっ」

MP40が空中に勢い良く投げると、ややあってからコアは木端微塵に爆散した。

第17話

「おや、先日潰したあのハイエンドの記憶とそれほど差が無かったですね……がっかりです」

入手した情報を整理したMP40はやれやれとばかりに首を振った。

「それにしても困りました。積み荷はほぼ売り終えてましたけど……」

MP40は黒焦げになった自分のバギーをチラリと見て、深々と溜息をついた。

「折角お気に入りだったのに……あっ！しまった！」

MP40はバギーに駆け寄りかけたが、すぐにくぐりと肩を落としました。

「マスター様のお写真が……ようやく撮れた一枚が……くうううう」

MP40はギリギリと歯を食いしばりながらしばらく俯いていたが、やがて顔を上げ
た。

「決めました。私からマスター様のお写真を奪った対価を取りに行きましょう」

その笑顔は、瞳は、マスターに向けたそれとは明らかに異なっていた。

店でステークディナー会を開いた翌日。

店番を（無理矢理）ホワイトに押し付けた加古は、マスターをMRAPへとぐいぐい押しこめた。

「ほらほら、どこに多脚戦車が居るか解んないじゃん！ さつさといかないと！」

「だから仕事でジャンクヤードに出かける用事がある時に少しずつだな・おいおい押すなって」

「行くよマスター！ ほらさつさとする！」

マスターは苦笑しつつ小さく手を振るホワイトに、MRAPに押し込まれながら頭を下げた。

「やれやれ」

MRAPの出発を見送ったホワイトは一人店内の椅子に腰かけ、テーブルで頬肘をついた。

こんな姿勢はアンドロイドの自分には必要ないのだが・・・

「設定変更の成果は上々だが、加古やマスターの癖が伝染つてるともいえるな」

ふふつと笑うと、そのまま思考の海に沈む。

司令官型モデルの性なのか、ホワイトは時間があれば物思いに耽るのが好きだった。

バンカーの廃墟で起動してから今日までの事。

特にこの店に入ってから今日の毎日は出来事に溢れていて実に面白い。

そしてふと、エネルギー残量を確認して驚いた。

「1%も・・減ってない?」

正確には1万分の数%減っているようだが、むしろ計測誤差を疑う数値である。

「ははっ・・私はいつ寿命を迎えるのだろうか」

「居た居た居たあー! マスター突撃い!」

「バカ言うな。こっから撃て。1884m、無風」

「ちえーっ・・ノリ悪いんだからあ」

ターン・・ターン

「マスター仕留めた、他に居ない?」

そのマスターは真っ青になりながらインカムを握りしめた。

「喜べ加古お、犬っころの群れだ! 50匹は居るぞ!」

「無理! ライフル1丁でどうしろっての!?!」

犬つころ。

加古やマスター、MP40がダイナゲートを指して呼ぶあだ名である。

1体は子犬並みに小さいが多数で群れを成し、その4本足で動物のように素早く走り、とびかかってくる。

銃やレーザー、自爆用の爆弾など様々なオプションを装備することも出来る。

形や動きが似ているからそう呼ばれているのだが、唯一デラはそのあだ名を聞くと微妙な表情をする。

1ブロック先に躍り出てきたダイナゲートの群れはおよそ50。

1体1体は小さいが群れで襲われると脅威である。

「掴まれー！」

マスターはミッションを後退に叩き込むと底までアクセルを踏みつけた。

MRAPのV10ターボディーゼルエンジンは8つの駆動輪で砂煙を立てながら勢い良く後退していく。

砂煙の中を猛然と突き進んでくるダイナゲートが見え隠れする。

マスターは強引にUターンを行うと、ミッションを前進に入れてアクセルを再び踏み込んだ。

「加古！餌の時間だ。ミックスをくれてやれ！」

「あいよ」

加古は荷台の隅にあつた箱を開け、閃光手榴弾と破片手榴弾を同時に投擲していく。
バン！ズン！ズズン！

「いやっほう、犬つころが吹っ飛んでいくぜえ！やっぱミックスに限るっ！」
「油断するな！まだ10匹は追つてきてる！」

「そーらおかわりだあ！」

ズン！

「残りの犬つころは4匹だ。ライフルで食つちまえ！」

「あいよ」

M R A P が停車した途端、荷室の加古に向かつて飛び掛かつてくるダイナゲート。

「アホが・・くたばりな」

ターン ターン ターン ターン・・

「マスター」

「なんだ」

「えつと、まさかそんなことはないと思うんだけどさ」

「ああ」

「手榴弾とかの経費つて、その、報酬から差し引かれちゃったり・・する？」

「もちろん」

「ぐ。こ、今回の場合だと？」

「これぐらいの戦闘なら2回で金貨1枚だな」

「ちよつ……た、高すぎませんか？」

「帰るか」

「ごめんなさい解りましたその条件で良いです……ううう暴利だあ」

マスターはMRAPの損傷がない事をモニタで確かめると、インカムに話しかけた。

「で、まだ行くのか？」

「えっ行つて良いの？」

「今回は損傷なしだからな。何かしら壊れたら撤退。回収中に敵が来たら積込放棄。〇

K?。」

「うぐ……でもまあそうだよね」

「頑張れエーススナイパー」

「くっ棒読みだ」

「10個集めるとステーキが待ってるぞー」

「そうだ！ そうだった！ そうだよね！ 頑張る！」

マスターは首を振った。いつまでこの手が通じる事か知らんが、せいぜい稼ぐとしよ

う。

MRAPは再び瓦礫の市街地へと向かって行った。

それから2週間後。

「あれだな、今後加古ちゃんに特急で仕事を頼みたければステーキ奢ると言えば良いな」
「やめてくれデラさん、加古の舌が肥えちまう」

デラが再び雑貨屋「オリファイ」に来ている理由は1つである。

シエルターの車庫で誇らしげに多脚戦車の胴体の山を前にVサインを出している加古が物語っている。

代わりに店のMRAPが鉄屑と見まごうレベルになっっている事が戦況を物語る。

「で、このポンコツMRAPに融合炉を埋め込むのか？穴だらけだぞ？」

「いや、こいつはもうダメだ。新しいのを仕入れるよ」

「別にエンジン不動車で良いぞ。どうせエンジンとミッションは捨てるんだ」

「そうか、その方が安く済むな」

「そんな都合のいい出物があれば、だがな」

「ちなみにデラさん」

「ん？」

「こいつ直すと高いかな？」

「ほぼ外装の総取り換えだぞ？フレームだって怪しいもんだ」

「だよなあ」

「諦めて次のMRAP探してくるんだな」

「やれやれ、どこで探すかな」

「FOLME総本部の中古市にMRAPくらいあるだろう」

「次回いつだっけ？」

「開催中だ。明後日までだがな」

「うーん、コイツでFOLME総本部まで行けるかなあ」

デラはニツと笑った。

「じゃあワシので行くか？」

「デラさんの飛行機かい？あんなに大きいと思わなかったけどね」

「あれなら1時間でつくぞ」

加古がぐつと拳を握った。

「じゃあこのMRAP下取りしてもらおうよ！」

デラは肩をすくめた。

「まあ、乗せてやれん事もない。じゃがな、今日が融合炉に変えての初飛行だからな」
「・・・リスクフル？」

「初飛行つてのはそういうものだ」

「まあ、デラさんの技術力を信じるよ」

「なら積み、積載ゲートを開けてやる」

「加古、MRAPを外に出せ」

「あいよ・・・あ、荷室に差し引きしても余る胴体2つ乗せたままだよ？」

「ついでにそいつも売ってくればいい。それほど相場は変わらないだろう」

「解った。経費分と部品取り分は車庫に転がしとくね」

「そうしろ」

第18話

「着陸する前に言っておくが、わたしは機体から下りないからな？」

操縦桿を握っていたデラがインカムでマスターに告げると、マスターは苦笑した。

「うーん、残念だけどそれが賢明かなあ」

「わしが外に出た途端、警備役の艦娘に主砲ぶつ放される未来しか見えんからな」

「中に居れば見えないのかい？」

「ああ。窓はミラーだし、ミュータントレーダーも回避するシステムが入っておる」

「さすがだね。解ったよ」

「世の中にもう少しマスターのような理解者が居てくれたらとは思うがね」

「そうだね」

やがて着陸許可と案内に従い、デラ達を乗せた飛行機は高度を下げた。

「・・うーん」

マスターが1台のMRAPの前で足を止めると、加古はくすつと笑った。

「なんだい？」

振り返ったマスターに加古が頷いた。

「絶対そのMRAPが気になると思つた」

「俺の好みはそんなに分かりやすいか？」

「今乗つてるやつだもん。あれに決める時も即決だったし」

「そうか」

「いらつしやい。どうです！お安くしときますよ？」

二人の会話を聞きつけたのか、店員らしき男が寄つてきた。

加古がニタリと笑う。

「えー、お安くつてどれくらいーい？」

屈んでサスペンション等を調べ始めたマスターを見ながら店員は加古に答える。

「それはもう、スパツと決めて頂ければこつちもスパツと値切つちやいますよー？」

「1/3くらいになる？」

「それは無理」

「ぶつちやけどれくらい？」

「下取りとかありますか？」

「あるよ、これと同じの。兵装は外してるけどね」

「輸送車としてお使いですか？」

「そういうこと」

「それなら元々兵装の無いあっちの方が良いんじゃないですか？」

店員が指さしたのは民生用のピックアップトラックだったので、加古は首を振った。

「ダメ。不発弾多いんだもん」

「あー、本格的なヘビークラスなんですな」

「そういうこと」

「じゃあ下取り車の査定させてもらっても良いですか？」

マスターはタイヤの陰から顔を出した。

「加古、ほらキード。店員さん、すまないがうちの正直程度が悪い。でもどうにか交渉成立させたい。頼む」

店員は頷いた。

「お客さんは冷やかしじゃないようだし、ちゃんとお話ししましょう」

「ということは、買う方のMRAPにも機銃は要らないのですね？」

「ああ、アシストAIも今までののを使うよ。どうせ設定が面倒だ」

「なるほど、じゃあその辺を下取りに上乘せ出来そうですね」

マスターと店員が事細かな話をしている頃、加古はのんびりとまどろんでいた。

小難しい話はマスターに任せるに限るし、今日肉が買える訳でもない。

表では多種多様な品が並べられ、次々と交換が成立している。

・・・そういえば。

「マスター」

「なんだ？」

「胴体どうやって売るのが？買取？フリマ？」

店員が怪訝そうな顔をした。

「何の話です？」

「ああ、MRAPの下取車に鉄血製多脚戦車の胴体を買ってきたんだ」

「もし部品単位にバラせるならフリマの方が高く売れるみたいですよ」

「でも、虫食いみたいにパーツが売れると残りを買い取ってくれなくなるからなあ」

「そうですね。面倒が無いのは買取ですね」

「どの店が良いとかあるのかな？」

「んー、鉄血製多脚戦車ならトレイルズかなあ。ただ」

「ただ？」

「今日はフリマで客が多いから、外で売るより足元見られるかも」

「じゃあ持って帰るか」

「どうです、新しいMRAPで気持ちよくお帰りになられては？」

マスターは店員を見ながら懐から布袋を取り出した。

「私が首を縦に振れる値段を出してくれるかは、貴方次第ですよ」
「なるほど。んー」

店員はパチパチと電卓を叩いては唸っていたのだが、

「あー、それマスターが最終交渉でもつたいぶってる時と同じポーズだ。あははっ」と、加古が笑ったので、店員は真っ赤になって頭を掻いた。

「いやあ、お見通しですか」

「あ、いや、うちのがすいません。こういう値段をつける時に迷うのは解ります」

「たはは・・・じゃあ勉強させていただきましたきましよう。これで如何？」

マスターは電卓の表示を見て頷いた。

「金貨と鉛のインゴット、どちらが良いですか？」

「鉛は市場レートと一致してるんですが、金貨は市場よりえらく高くなっちゃってますねえ」

加古がニツと笑った。

「良いのおじさん？それなら金で払っちゃうよ？」

「本部の設定だからね、私がどうこう出来ることじゃない」

マスターが訊ねた。

「具体的な換算表を見せて頂けますか？」

「こちらで」

「ふーむ。これ本当ですか？10倍近くありませんか？」

「確認したんですが、それでいいと。集めたいんですかね？」

「なら後でトラブルになる事もないと。すると差額は・・・」

ひとしきり悩んだマスターは、金貨70枚を机に置いた。

「これで」

店員はすいすいと数を数え、真贋測定器に入れた。

「すいませんが規則でしてね」

「当然でしょう」

全て問題なしの表示を見て軽く頷いた店員は、店の奥に声をかけた。

「おーい、右から3台目の8輪MRAP、改造と納車整備を頼むー」

「はいよ・・・あい、いらっしやいませ。毎度あり」

返事を返して店に出てきた職人は熊のような大男だった。

職人にペこりと頭を下げつつ、加古はポケットからメモを取り出した。

「マスター、じゃあ他に必要なパーツも買わないと」

「そうだな・・・改造にどれくらいかかります？」

「3時間見といてくだせえ」

「解った。じゃあその頃にまた来ます」

「ごゆっくり」

「マスター」

「なんだ？」

「見つかつて良かったね」

「そうだな。割と程度も良さそうだ」

「気に入ってたもんね」

マスターと加古の二人は、ゆっくりと中古市の会場内を歩いていた。

FOLME総本部の中で開かれるだけあって、外とは売られている物量が違う。

自分が持つ不要品を持ち込み、下取りや交換等の取引で望みの物を手に入れていく。

もちろんFOLME自らも新鮮な食料や資材、製品等を安値で並べている。

その日の目玉商品があつという間になくなるのはいつの世も変わらない光景である。

ふと、マスターは前方に武装した艦娘の集団を認めた。

加古がマスターの後ろから、その肩に自分の顎を乗せた。

「マスター、どつたの？」

「多分会長さんの視察じゃないか？」

「んー?」

「ほら、あの集団」

周囲を固める艦娘達は別に砲門をこちらに向けているわけではない。

むしろ静かな表情で歩いているが、隙のない仕草が手練れのそれを感じさせる。

「やっぱ重要人物なんだろうねえ」

「そりやそうだ。1代でこんなコンツェルン作ってしまったんだから」

「いやいや、私は助けてもらってばかりで、むしろ艦娘達の功績なんですけどねえ」

「へえ、そうなんだ・・・えっ?」

ぎよつとした顔で加古とマスターが横を見れば、いつの間にかそこには中年の男が一人。

真つ白な海軍の第2種軍装をきちんと着こなし、茶目つ気たつぷりの表情で口到人差し指を当てた。

「しーっ。長門にバレちゃいますからね」

「もしかしくなくても会長さんですよね」

「まあ、そういう事にしておきましょう。楽しんで頂けてますか?」

「ええ。おかげでMRAPを1台買う事が出来ました」

「随分大きいお買い物ですね。何を下取りに?」

「くたびれたMRAP1台と金貨で」

「なるほど。他に売り物はないのですか？」

加古が肩をすくめた。

「鉄血製多脚戦車の胴体を持ってきたんだけど、あんまり良い値段がつかないって聞いてね」

「ほう．．．」

会長は顎に手をやった後、そっとインカムをつまんだ。

第19話

「あー、夕張聞いてる？・・・鉄血製多脚戦車の胴体つて興味ある？・・・そうそう」
マスターと加古が首を傾げていると、ふいに背後に強い殺気を感じた。

びくりとして振り返ると、青筋を立てた背の高い艦娘が息を切らしていた。

「この・・・バカ提督・・・もう逃がさないぞ。大人しく縛につけー！」

二人は青い顔で背後の会長に振り向いたが、会長は小さく肩をすくめただけだった。

「おや、早いじゃないか長門。だがちよつと待つてくれ。こちらのお二人と折衝中なんだ」

会長はインカムを指さし、再び会話に戻っていった。

長門はジト目で会長をにらみつけると、インカムをつまんだ。

「こちら長門、ターゲット確保。第7狙撃中隊は私の周囲を警戒・・・まったく」
会長は幾度か頷くと、マスターに話しかけた。

「すみません。売り物なんですけど、シリーズ名か型番は解りますか？」

加古がニツと笑った。

「全部Mシリーズ多脚戦車だよ」

「現物はすぐ見られますか？」

マスターが頷いた。

「乗ってきた飛行機の傍に出してあります。お越し頂ければ」

「なるほど。えっと、夕張。Mシリーズ多脚戦車で現物見せてくれるって・・・うん」

会長は再びマスターの方を向いた。

「よろしければ、うちの艦娘に見せてやってもらえませんかね？」

「ぜひ」

ずっと待っていた長門は、提督の言葉に眉をひくつかせながら口を開いた。

「解ってるだろうが、提督は戻るんだぞ？良いな？それからお二人にはご迷惑をかけた。

すまなかった」

長門がマスター達に頭を下げると、会長は肩をすくめた。

「やれやれ。解ったよ。では私はこれで。日向、すまないが夕張と待ち合わせを頼む」

マスターと加古が会長の視線を追って見た先には、いつのまにか艦娘が一人立っていた。

「ああ。私が同行する。夕張は現地で追いつくだろう」

加古はひやりとした。この距離まで近づかれたのにまるで気づけなかった。

これが噂のFOLME第1艦隊か。

だが・

立ち去りながら会長に説教を始めた長門と、謝る姿の会長を見た加古はくすりと笑った。

「会長さんて長門さんの尻に敷かれてるんだねえ」

「こら、失礼だぞ」

加古を叱るマスターに、日向は首を振りながら答えた。

「事実だから気にしなくて良い。では案内してもらえるか？」

「ええ、こちらです」

「レンズユニットの喪失が惜しいわね！けどコア周辺が良い状態つてのはポイント高いわー！」

「この状態で捕獲する苦勞解つてくれる？」

「もつちろん！コア撃つて停止させるのは簡単だけど、そうするとこの辺吹っ飛ぶもんね」

「そうなのそうなの！そうなんだよお」

「レンズも無傷だったら金貨6枚で引き取ったんだけどなあ」

「無理」

「だよねえ・・・でもまあこの辺りじゃサンプル手に入らないし、金貨3枚でどお？」

「レンズ無いだけで半分に減るの!？」

「だってコア撃ち抜いた個体でもこの個体でもレンズだけは手に入らないんですもの」

「とほほ・・・じゃあ2体で6枚ね？」

「あら、2体で3枚じゃないの？」

「潤滑油精製機が要らないならいいよ？」

「げげっ」

多脚戦車の胴体を前に、夕張と加古は延々と交渉を続けていた。

これらの売り上げは食べられる肉の枚数に直結するので加古の目の色が違う。

少し離れた所からマスターと様子を眺めていた日向は、マスターに声をかけた。

「あの加古は、なかなか鍛えているな。仕草で分かる」

「私に付き合ってくれる家族みたいなものですよ」

「そうか。あれだけ感情豊かで高練度の艦娘は今はそのくない。どうやって鍛えたのだ

？」

「私は何も。出会った時には既に強かったですし、彼女は勝手に訓練してますよ」

「ほう。それにしても加古は貴方に随分懐いているようだが」

「どうぞでしょう。寝室と食事を提供してるからですかね」

「それだけではないと思うが・・そうだ、指輪は持っているか？」

「指輪とは？」

「艦娘の能力制限を解除する、ケツコンカツコカリという行為に必要な物だ」

「存じませんでした」

「ふむ・・・」

そういうと日向は、自らの懐から小さな箱を一つ取りだし、マスターに差し出した。

「ほらこれだ。ペアで入っている。貴方と加古それぞれ身につければいい」

「えっ？頂いて良いんですか？」

「ああ。我々の同胞を幸せにしてくれた礼だと思ってくれればいい」

マスターは濃い青色の小さな箱を開けた。中にはリングが2つ。

「どちらがどちらでもいい。サイズは嵌めた指に合わせて調整される」

「便利な物ですね」

「いつか加古と交わしてやってくれ」

「ありがとうございます」

「それと、これは私の連絡先だ。何か困ったことがあれば相談に乗ろう」

「・・例えば、渡し方とかですかね？」

「そうなるな」

マスターは箱と名刺を懐に仕舞うと、日向に深々と頭を下げた。

日向は小さく頷いた。

「いやに早かったな。めぼしい物が無かったのか？」

デラは飛行機を始動させながら、格納庫に入ってくるMRAPを見た。

マスターが席のシートベルトを締めながら首を振った。

「程度の良いMRAPもすぐに見つかったし、胴体も売れたよ」

デラは上機嫌で格納庫に入れたMRAPから降りてくる加古を眺めながら言った。

「なんで加古ちゃんは上機嫌なんだ？」

「外で売る3倍の値段をふっかけて成功したんだよ」

「さすがはFOLME総本部の中古市だな」

「ついでに手榴弾も何箱か仕入れておいたよ。だいぶ使ってしまったからね」

「何に使ったんだ？」

「犬っころの駆除」

「ダ、ダイナゲートのことだな？あれには閃光手榴弾と破片手榴弾の同時投擲が一番効くが」

「その2つが安かったから仕入れたんだよ」

「少し分けてくれ。うちも少し持っておきたい」

「良いよ。3箱ずつ買ったし」

「ところで、新しいMRAPは・・・もしかして同じ車種か？」

「同じ車の方が扱いやすいからな」

「まあそれはそうだが、どうせ出力は変わるぞ」

「どうなる？」

「大幅に増える」

「体感的には？」

「設定次第で加減速は暴れ馬にも大人しくも出来るが、トルクは何倍も太くなる」

「おっほう。砂丘位登れそうだな」

「調子こいて転がるなよ」

「解ってる。デラさんの作業時間は？」

「大まかに言って3日だが、出来れば泊まり込みにして欲しい」

「もちろんだ。客間を準備するさ。食事も一緒に食べてくれ」

「ありがとう。じゃ、帰るぞ」

デラは加古がシートベルトを締めたのを確認すると、管制室に離陸許可を申請した。

ガラン・・・ゴン・・・

炎で溶けたトタンが根元から千切れ、音を立てて地面に落ちた。

MP40は燃え盛る、かつて工場だった建物群の中をゆっくりと歩いていた。

「ウイルスはそれなりに良い仕事をしたようですね」

いまだ動く機械には道端で拾った釘やボルトを容赦なく投げつけ、停止させていく。

それはまるで、子供が水きりのために石を投げるような牧歌的なモーシヨンだった。

鼻歌交じりで歩いていたMP40は、ふいに足を止めた。

第20話

・・・ザッ

自分の正面に現れ、殺意に満ちたその姿を見て、MP40は目を細めた。

「どちら様ですか？」

「貴様ガ・・・アイツヲ狂ワセタ悪魔カツ！」

「何の事ですか？」

「トボケルナ！アイツガロールアウト直後カラ暴走シタオカゲデ、工場ハコノ様ダ！」

「・・・」

ハンターと呼ばれる鉄血製ハイエンド機体は、歯を剥き出しにし、わなわなと拳を震わせていた。

「アイツノ思考ヤ記憶ハ壊レテ再起不能ダ。友人ヲ、コノ手デ撃ツ気持チガ才前二分カ
ルノカ！」

「・・・」

「6218年分ノ記憶ト経験ガ水ノ泡ニナッタノダ！」

「たつた？」

「・・・ナニ？」

「失われた経験は、たつたの6千年ちよい、それも1体分だけですか？大したことないです
すね」

ハンターは兵装を一気に展開し、それは低い声で唸った。

「殺ス・・・代償ヲ払ツテモラウ・・・」

「それはこちらの台詞です」

「ナニ？」

「私から写真を奪ったんですよ、お前達は」

ハンターは訝しげな顔をした。

「写真？何ノ？」

MP40はくすつと笑った。

「お前達に教えるつもりもありません。それから通信はもう無駄です」

「ジャミングデモシタトイウノカ？命乞イノ交渉カ！」

「してませんよ。通信出来てるでしょ？でも無意味って事です」

「？」

「ネットワークで群れて行動することしか能のない鉄血なんて怖くありません」

「IOP人形ノ中デモ低級ノ才前ガ、私ニ勝テルト思ウナ！」

ピシ・・・

「グガ！」

「じゃあ早速やってみましょう。ほらほら、私は真正面に居ますよ？さあ戦いましょう？」

ピシ・・・ピシピシピシ・・・

銃すら構えず、MP40はつまらなさそうに指で古釘や鉄筋を次々と弾いていく。

しかし、それはことごとくハンターの体に、致命的な部位へと突き刺さっていく。

「グゲーギャウー！ハ！ヒギイ！」

「恐怖の感情を送り込まれることに、どこまで貴方のリソースは許容出来るんでしょうね？」

あつという間に兵装の制御を失い、背後の壁に礫にされていく自分の義体。

次々刺さってくる金属塊とショートした電流が飛ばす火花が、まるで自分の叫び声のように聞こえる。

いや、自分は・・・叫んでるのか？

解らない・・・どうして・・・準備万端で・・・こいつの前に・・・出たはず・・・

こいつ・・・データと余りにも違ウ・・・コワイ・・・誰カ・・・ダレカ・・・タスケ・・・

ドズン!

弾薬に引火し、ハンターの義体もろとも爆散したのを見たMP40は舌を打った。

「あんまり恐怖の情報を再生工場のリソースに送り込めなかつたですね。コアも爆散してしまいましたし……」

燃え盛る炎に建物の壁まで瓦解し始めたので、MP40は踵を返した。

「ハイエンド専用の生産工場3ヶ所程度の壊滅では全く釣り合いませんが……また今度ですね」

MP40が敷地の守衛所に到着すると合わせるように、すべての建物が崩れ落ちた。

火の勢いは留まるところを知らず、そこだけ夕日のような景色だった。

MP40は守衛所の脇で急停止した装甲車に側面から回り込むと、運転席のドアをこじ開けた。

慌てて銃を構えようとした自律人形の体に腕を突っ込み、強引にコアを引き抜く。

火花を散らせる自律人形を引きずり出し、代わりに装甲車の運転席に滑り込んだMP40は計器を見た。

「良いですね。燃料満タン、弾薬満載。これでマスター様の元に帰れます」

MP40はアクセスコネクタを手で握ると、鉄血側ネットワークにウイルスを送り込

み始めた。

同時に自らが乗る装甲車の位置情報を攪乱させる情報を仕込んでいく。

「こんなものでしょう。では出発」

MP40の操作により、装甲車はディーゼルエンジンの出力を駆動輪へと伝え始めた。

鉛色の空からは、いつしか雪が降り始めていた。

「おやマスター、いらっしやいませ。ご無沙汰してますね。何かお探しで？」

「まず、そういうものがあるかどうかから知りたいんだ、相談に乗ってくれないかな」

「もちろんですとも。おかけください」

デラが改造してくれた融合炉を動力源とするMRAPの試験走行だと言って、マスターは一人で店を出た。

迎り着いた先はアクセサリ専門の職人の工房である。

マスターを迎えた職人は、笑顔でマスターを接客室へと案内した。

「ふむ、戦術人形と、ですか」

「艦娘向けにはこんなものを手に入れたんだけどね」

「失礼・・ああこれはFOLMEの正規品ですな。相当高かったでしょう?」

「まあちよつとした伝手でね。で、さっきの話題なんだけど」

「これと同じような、という意味では誓約の指輪というのがありますよ」

「やつぱり高いのかい?」

「それほどでもないですよ。今も普通に製造されてますし」

「金貨で言うのと?」

「5枚・・いやいや冗談ですよ。そんな絶望したような顔をなさらないでください」

「本当は?」

職人はくすくす笑った。

「マスターは良い表情されますなあ」

「からかうのはよしてくれ。この分野じゃ君を一番信用してるんだから」

職人はふうと息をつくと答えた。

「実は金貨5枚が本当に正規の値段ではあるんです。大陸からの舶来物ですからね」

「えっ」

「ですがマスターにはお世話になっている。今回だけ2枚でお分けしましょう」

マスターはかりかりと頬を掻いた。

「どうして私が金貨2枚なら領くと知ってるのか教えてくれないか？」

「長いお付き合いですからね。なんとなく、です」

「そういう能力が欲しいよ・・はい2枚」

「確かに。同じようなケースに入れましょう」

「これと色を変えてくれないか。間違えてはいけない」

「では白色で。どうぞ」

「ありがとう」

職人から受け取った箱をポケットに入れたマスターは、すっかり軽くなった布袋をさすりつつ溜息をついた。

「また稼がないと年が越せないよ」

「毎度ありがとうございます」

職人は丁寧な物腰で、ゆっくりと頭を下げた。

マスターは職人にペこりと頭を下げるとMRAPへと小走りに向かう。

あと数ヶ所は寄らねばならない。

第21話

マスターが一人で出かけた日から数日後。

「ねえマスター」

「なんだ？」

「洗いざらい吐いちやいなよ。隠し事してるでしょ？」

「なんのことやら。ほら、皿とってくれ」

「むーっ！」

マスターは受け取った皿に刻んだ野菜を乗せながら思った。

いつも眠たそうにしているか寝ているか加古が、こここのところ毎日規則正しく起きてくる。

そしてずっと先程のやり取りが続いている。

私はいつも通り店の前を箒で掃き、店を開け、客が来れば応じ、帳簿を付ける。

ほらいつも通りだ。何もおかしいことはない。

部屋の秘密の引き出しに入ってる箱の事やMRAPに置いてあるアレは知られてない。

同時に渡す事は決めてるし、日向さんに聞いて準備はばっちりだ。だが何かの拍子にバレてしまう恐れはある。

誤魔化せるのもあと数日だろう。

早く来てくれMP40。

加古は調理をするマスターをじとりとした目で見つめていた。

マスターは絶対何か隠し事をしている。

ここ数日、とにかく落ち着きが無い。

そしてあたしが寝てたり違う所を見るとマスターの強い視線を感じる。

なのにあたしが見るとあからさまに目を逸らす。その繰り返しだ。

あれで普段通りを装ってるなら大根役者も良い所だ。

昨日ホワイトさんと話したけど、ホワイトさんもマスターの様子がおかしいことに気づいてた。

マスターが出かけた時に家中探したけど変な物は見つからなかった。

なんだろう。

なんか次にあのダメ人形が来た時にロクでもない事が起こりそうな予感がする。

こうして毎日起きて最大級の警戒を続けるのもそろそろしんどい。

早く来やがれダメ人形。

ぶるっ。

「今、物凄い悪寒がしたんですが．．．なんででしょうか」

MP40は給油と仕入れを済ませた時、周囲を見ながら身を震わせた。気のせいだろうか。

装甲車に乗り込んだMP40は気持ち切り替えた。

仕入れた直後、一番豊富で物資が新鮮な時にマスター様の元に向かう。

それはMP40にとって息をするように自然な決定事項だった。

自分が手に入れられる一番良い物は、全てマスター様が望むままに捧げたい。

対価なんて本当は要らないが、支払いをマスター様が望まれるから受け取る。

マスター様の決断は私にとって唯一かつ絶対だから、口を差し挟むなどありえない。

「さて、急ぎましょう。少しでも新鮮なうちにお水を届けないと」

満タンに燃料を蓄えた装甲車は、マスターの店に向かって発車した。

「．．．」

装甲車が通り過ぎた後、街角で会話していた2人組の片割れが通信を始める。

残る一人は小さくなっていく装甲車をずっと見つめていた。

花売りの少女はその二人組にちらりと視線を向け、そのまま歩いて行った。

「!」

向き合って昼食を取っていたマスターと加古だったが、ふいに加古が鋭く顔を上げた。

マスターはその仕草を見て内心深く深呼吸をした。ついに来たか。

ガタツ。

加古がゆらりと立ち上がったので、マスターは努めて普段通りに話しかけた。

「食事中だぞ加古、どうした」

「・・マスター」

「なんだ？」

「1つだけ答えて」

「何を？」

「あたしを・・見捨てない？」

「は？それは私の台詞じゃないか」

「え、なんで？」

「だってお前は一人でも戦えるだろうが、私は1体の機械生命体にさえ勝てないんだぞ？」

「・・・」

「なんだ？どうしてそんなげんなりした顔をする？」

加古は肩を落としてしながら深々と溜息をついた。そうじゃない。

「・・・あのさあ、MP40に何か尋常じゃない用事があるのは解ってるんだよ？」

「は!?!いいいいいやそんなあこととはないじよ？」

「バグった言語システムみたいだよ？」

「ぐ」

「あたしに言いたいけど言えない、そんなそぶりも解ってるよ」

「そう・・・か・・・」

加古は立ったまま俯いた。

「もし、もしさ、マスターが私と・・・さよならして・・・MP40と旅に出たいならさ」

「は?。」

加古の頬を1筋の光るものが流れた。

「ずっと、こんな楽しい生活をくれたマスターには恩があるからさ」

「・・・」

「だから笑顔で行ってきなよって言うべきなんだろうけどさ」

「・・・」

「あつ・・・あたし・・・マスターが思うほど強くないよ」

「・・・」

「マスターが居なくなった後の1日を想像しただけで・・・眠れない」

「・・・」

「かつ、悲しくて、寂しくて、一人ぼっちで、寒くて、何の意味もない時間なんだよう」

「・・・加古」

「マスターあ、私、笑顔で送り出せる良い子になれないよう・・・行っちゃ嫌だよおマスターあ」

そこまで言い切った加古は棒立ちのまま泣き出した。

がたり。

「・・・ふえ」

マスターはそつと加古を抱きしめた。

「違うよ、加古。大丈夫だよ。加古を置いていくつもりなんて微塵もないよ」

「・・・ほんとう?」

「ああ」

「・・・ほんとうのほんとう？」

「約束だ。変な心配をかけてすまなかつた」

「・・・ううん、いい。それならマスターを信じる」

「二人に、同時に言わないといけない事なんだよ」

加古が青い顔をしてマスターから離れる。

「えつまさか」

「なんだ？」

「ホワイトさんと結婚するの？」

「どうしてそうなるんだよ」

「だってもうホワイトさんすっかり馴染んでるし」

そう。

二人が食事を取ってる間、店先ではホワイトが規則正しく店先を箒で掃いていた。

アンドロイドは元々超長期に耐えるエネルギーを内包しており、基本的に食事を取る必要はないのである。

エプロン姿があまりにも店に馴染み過ぎて、もはや店主の風格さえ備わってきている。

そんなホワイトを窓越しに見ながら、加古はつぶやいた。

「ホワイトさんスタイル良いし、大人だし、かっこいいし、交渉上手だし、お客さんからも評判いいし」

「まあ完璧だよな」

加古が涙目でマスターをにらむ。

「嘘でも否定しようよそこはさあ!」

「すまん、つい経営者としての本音が」

「やっぱりマスターはああいう人が良いんだ・・・」

マスターはちよいちよいと加古を手招きした。

「?」

怪訝な顔で近寄った加古に、マスターは囁いた。

「たしかに性格良いし、スタイルも良いよ。でもだからこそダメなんだよ」

「なんで?」

「ええとな、彼女達アンドロイドの標準体重を覚えてるか?」

「へ?」

「ホワイトさんは細い方だけど、多分150kgはあるんだよ」

「ああそっか、ソファのオーダーの時に一人200kgで計算してほしいって話あった

ね」

「まあ中身はぎつしり詰まった金属パーツだから仕方無いんだけどさ」

「えっそうなの？MP40とかと一緒にかと思ってた」

「MP40の場合は人工筋肉で駆動してるけど、アンドロイドは純粋な機械だからね」
「でもおっぱい柔らかかったよ？」

「なっ何で知ってるんだ？」

加古は一気にジト目になった。

「・・・鼻の下伸びたよ？」

「まあいい。でな」

「誤魔化した」

「その・・・な」

端切れが悪くなったマスターを首を傾げて見る加古。

「夫婦の営みをするとするだろ？」

ボンと音がするくらい、加古の顔が一瞬で真っ赤になった。

「なっ・・・」

「その時、150kgに乗っかられたら、もたん」

加古は顔を真っ赤にしたまま想像した。

「自分の・・・腰の上について・・・言いたい？」

「かいつまんで言えばそういうことだ」

加古はマスターをひとしきり睨んだ後、深い溜息をついた。

「どーしてそんなとこを判断ポイントにするかなあ。ホワイトさんに嫌われるよ？」

「あのな。あそこまで美人で器量良しな奥さん迎えて、そういう事がそういう理由で出来ないんだぞ？」

「はあ」

「あまりにも蛇の生殺しで気が狂う。絶対」

「マスターのつて蛇並なの？」

「どんな蛇を想像してる？」

「こう・・・こんなかんじ？」

「そつ、その手つきはちよつとロコツだからやめろ」

「ばっ!?!ちつ違うから!そつちじゃなくて蛇の胴体の太さの説明だから!」

「そこまで細くないけどな」

「えっ何か言った？」

「言つてない。ともかくホワイトさんとどうこの話じゃないから」

「ふうん」

MP40はシエルターの入り口から中を窺い、入るタイミングに迷っていた。店の奥の窓際で、マスターと加古が桃色な会話をしている。

唇の動きで解る。二人とも顔真つ赤だし。

あ、ま、マスターのつて、あれより太いんだ・へえ・つて違う違う違う。

それと多分・表に居る人がホワイトさんなんですネ。

掃くフリしながら徐々に二人ににじり寄つてますし、思い切り聞き耳立ててますから・・

!!MP40がまずはホワイトに声をかけようかと思つたその時。

!!!

!!MP40は恐ろしい気配を察知し、一瞬振り向いた後、大声で怒鳴りながらホワイトに飛びかかった。

「加古おお！マスター様を守れえ！上だあ！」

即応した加古がマスターの上に覆いかぶさつたその瞬間。

店の外を守るシエルターに迫撃弾の1発目から8発目が同時に着弾した。

「アツハツハ！アーツハツハツハツハ！ザマーミロー！」

デストロイヤーと呼ばれる鉄血製ハイエンド機は、火の海に沈むシエルターを指差して笑っていた。

ハイエンド機専用生産工場を3つも壊滅させられた鉄血陣営はプライドより実を取った。

同盟組織である「赤のN2」に協力を仰ぎ、あの憎たらしいMP40の情報を入手した。

そこで定期的に買い付ける卸の店、さらには雑貨屋「オリファイ」の者と親しい事を知った。

目には目を、歯には歯を。

我らが同胞を殺されたのだから親しい者を目の前で殺してやる。

作戦は決定され、執行役選ばれたデストロイヤーは満面の笑みで引き受けた。

デストロイヤーは思った。

MP40は想像以上に馬鹿な奴だった。

こうして網にも簡単に引っかかったし、迫撃弾の飛翔に気づいてから着弾点に飛び込んで何が出来たのだ。

面白過ぎて、あんなちっけけなシエルターに24発も撃ちこんでしまったじゃない

か。

もうMP40の義体なぞ欠片も残ってないだろうし、これ以上発射しては査問会に招集されてしまう。

そもそも弾を節約しろなんてのがケチ臭い命令だが、命令違反で営倉行きなんてごめんだ。

「鉄血ニ喧嘩ヲ売ルトコウナルノダ。ガラクタメ」

デストロイヤーは上機嫌で装甲車に戻ると、そのまま走り去っていった。

第22話

「やー、久しぶりに死ぬかと思った」

「・・・」

「加古、ありがとう。おかげで生きてるよ」

「・・・マスター」

「ん？」

「お店、なくなっちゃったね」

「そうだが、まあ皆は居るからな。しかし、粉々だなあ・・・」

そう。

迫撃弾24発は中の店ごとシエルターを粉碎した。

だが、MP40と加古は天井が瓦解する前にホワイトとマスターを抱えて脱出したのである。

MP40が店に飛び込む前に迫撃砲の発射地点と敵陣を把握していたからこそである。

だが、そのMP40は小さくなってうつむいていた。

「・・マスター様」

「どうした、MP40」

「私、マスター様にご迷惑をかけてしまいました」

「なんで？今まさに助けてくれたと思ってるけど？」

「多分、迫撃砲を撃ってきたのは鉄血の連中です」

「・・理由に、思い当たることがあるの？」

「はい。きっかけは私の契約先を襲った鉄血の残党を返り討ちにしたことですが」

「うん」

「その後しつこく私に報復しようとしてきた鉄血の弱つちい大隊を返り討ちにして」

「うん・・うん？」

「その時私の大切な物を壊されたので、鉄血の工場をたつた3つ潰すだけで我慢したの

ですが」

「それ釣り合ってるの？」

「あの鉄クズども・・私に歯向かうならまだしも・・よりもよってマスター様に・・」

「あー」

怒りでふるふる震えるMP40を見て、マスターは頬を掻いた。

鉄血と言えば機械生命体のテロ組織「赤のN2」と繋がりが噂される戦術人形の暴力

集団だ。

腕つぶしで売ってる組織が自拠点を3つもいいようにされたらメンツ丸潰れだ。

まあ相手は怒り心頭だろう。

MP40はマスターを見上げた。

「申し訳ありませんマスター様。私は・・・もう・・・ここに来ないようにします」

「なんで？」

「私が来たらまた襲われます。私が狙われるのはともかく、マスター様を危険にさらす

のは・・・」

「だから？」

「だから、だから私が来なければ・・・」

「もう家が知られたんだから君が来ても来なくても、いやむしろ居ない時を狙ってくる

と思うよ?」

「!」

「もう、しょうがないんじゃない?」

「どういう・・・意味でしょうか? わ、私の身で償えるのなら、どうぞ、これで撃つてくだ

さい」

震える手でMP40サブマシンガンをマスターに差し出すMP40。

だが、マスターはからからと笑った。

「MP40」

「は、はい」

「その命、預かるよ」

「はい。もともと私の全てはマスター様のものです」

「解った。それなら今後ともこれまで通り、うちに来るといい。銃は返すよ」

「ふえっ?」

「それでな．．．あー、ええとなあ．．．どこ行ったかなあ．．．この辺が階段だろ．．．」

マスターはそう言いながら、かつて雑貨屋「オリファイ」の店だった瓦礫の山に分け入っていく。

MP40と加古が、遅れてホワイトが踏み入った。

「やあ、あつたあつた。皆ありがとう。諦めずに探してみるもんだ」

MP40と加古が支える瓦礫の下に潜り込んだマスターは、10分ほどで小さな木箱を持って出てきた。

「これさえ見つければ、他は後回しだ。よし、ホワイトさん」

「ああ。それはなんだ？」

「すぐに解ります。ええと、ホワイトさんには手伝いと、後、証人になって欲しいんですが」

「証人か？構わない」

「ありがとうございます」

マスターはMP40と加古に背を向け、ホワイトと箱の中身を何やらごそごそしていた。

ホワイトは興味深そうに箱の中身を見ていたが、やがて閉じられた木箱を受け取り、小脇に抱えた。

「うおっほん！ええと、加古！」

「え？あたし？」

「うん。こつち来てくれる？」

「はあい？」

首を傾げながら近づいてきた加古に、マスターは微笑んだ。

「今日も含めて、今までずっと、一緒に生きてくれてありがとう、加古」

「・・・」

「これからも一緒に居たいと思う。だからその約束として、これを受け取ってくれないか？」

「えっ?」

加古はマスターの顔からマスターの差し出す腕に、そしてその手が持つ指輪の小箱に気が付いた。

「……」

加古はしばらくぼかんとしていたが、ふいにマスターを見上げた。

「ねえ……これほんと?」

「ほんと」

「意味わかってる? ケツコンカツコカリだよ? しかもFOLME製の本物じゃん」

「解ってる」

「こんなのもらったら、あたしリミット効かなくなるよ? 嘘だと言っても絶対離さないよ?」

「でなきや約束にならないでしょ」

「ぐすつ……. ぶりにもよって……. なんてこんな瓦礫の中で言うのさあ」

「店だったこの場所で渡す方が俺達らしいだろ?」

「そうだけどさあ」

「ほら、受け取ってくれるなら指に嵌めるからさ」

「うん・・・もらう・・・ありがと」

すすり泣く加古の左手を取ると、マスターはそつと薬指に指輪を嵌めた。

金属の外観にもかかわらず、加古の指のサイズに合わせて一瞬で小さくなった。

「ほら、私にも嵌めてくれ、これを」

「うん・・・ずつと一緒だよ、マスター」

「ああ」

MP40はマスターの指にも指輪が嵌ったのを見て、そつと拍手を送った。

こうなる運命だった。加古は友達だし、厄種しか持ち込まない私よりふさわしい。

でも、これから辛いなあ・・・

ふいに、マスターと目が合ったMP40はびくりとした。

マスターがニコニコしながら口を開く。

「お待たせしたね、MP40」

「えっ?」

「こつちへ来てくれる?」

「は? あっはい・・・」

複雑な表情でうつむきがちのMP40を前に、マスターは真顔になる。

「君は随分と自分を過小評価するけど、私は君と知り合えて良かったと今も思っている」
「・・・」

「加古とも私とも、皆とも仲良くしてくれたし」

「・・・」

「今日も初対面だったホワイトさんを守ってくれたじゃないか」

MP40は恐る恐るマスターの顔を見た。

「私はMP40を預かる。その明確な証として、これを受け取ってくれないか？」

「・・・え？」

MP40がマスターの手元に目を移すと、指輪が1つ。

MP40はがくがくと震えながら目を見開いた。誓約の指輪に間違いない。

これは・・・私達戦術人形にとっては贈答者との入籍、つまり正真正銘結婚するって意

味なんですが・・・

「ま、マスター様は誓約の指輪の意味をご存知なんですか？」

「結婚指輪だよね？」

「そつ、その通り・・・です」

「解ってるよ」

「わっ!? わわわ私が来たせいでこんなことになっちゃったんですよ?」

「そうかい？」

「えっ？」

「君がシエルターを壊したわけじゃないよ？」

「そ、それはそうですけど」

「じゃあ君のせいじゃないよ」

「でもっ」

「ただし」

「？」

「私達の思い出の詰まった店と、大事な商品を壊した者達には、ふさわしい末路を与えよう」

「！」

「そのためにも、君には私と絶対に約束してもらいたいことがある」

「はい。どんなことであろうとお約束します」

「じゃあ必ず私の所に帰ってきて。自ら散る選択は許さないよ？」

「！」

「さつきも言ったように、君は私のものだ」

「はい」

「だから私が帰ってきなさいと言ったら是が非でも帰ってきなさい。いいね？」

「・・・畏まりました。全てマスター様の仰る通りにします」

「じゃあ約束だ。この指輪を嵌めるよ」

「はい」

微かに震えるMP40の手を取ったマスターは、ゆっくりと左手薬指に指輪を嵌めた。

制約の指輪は一瞬鈍く輝いたあと、MP40の薬指にびたりと収まった。

パチ、パチ、パチ。

MP40が音の方を見ると、加古とホワイトが笑いながら手を叩いていた。

「これで一生喧嘩出来るねえ」

二つと笑ってそう語りかけてきた加古を見返し、MP40は腕でぐいと涙をぬぐった。

「・・・そうですね。ええ、もちろんです」

その時、1機の飛行機が低空を通り過ぎ、ゆっくりと戻ってきた。

第23話

店の跡地の傍に着陸した機体から、ぞろぞろと見慣れた面々が顔を出した。

「おーい、マスターは無事かあ？」

「うわひでえなこりゃ」

「やっぱりコンロと食料持ってきて正解じゃない」

「それよりも今晚から寝る所どうすんだよこれ」

一行の姿を見たマスターが目を見開いた。

「あれれ？皆さんどうして？」

「あれれじゃないわよ、爆撃の音がうちまで届いたのよ」

「マスターん家が襲われたって聞いたしよお、通信はつながらねえしよ」

「だからデラさんに飛行機出してもらって文字通り飛んできたんだよ」

そう。

デラを始めとして、降りてきたのは職人の立場でマスターと付き合いのある面々である。

ミュータント、妖精、機械生命体、アンドロイドと様々である。

ホワイトはその一団の中に居た女性型アンドロイドに駆け寄った。

「すつ、すまない！君はアンドロイドだな？」

「え？はい、そうですよ」

「わ、私はホワイトという。私もアンドロイドなのだが、その、この世界について最近来たのだ」

「私はリーリヤって言います。よろしく。でも・・ホワイトさん誰かに似てる・・」

アンドロイドは小首を傾げた後、ポンと手を叩いた。

「もしかして、ジャッカス師匠と近い世代の義体です？西暦12000年頃ですけど」

ホワイトは目を見開いた。

「ジャッカスだと？アネモネ配下のジャッカス情報分析担当官の事か？」

「あ！そうですそうです！私、最終戦争で重傷を負った所をジャッカス師匠に直して頂いたんです」

「では、ジャッカスも健在なのか!?できれば会いたいのだが！」

リーリヤは寂しげな眼になると、小さく首を振った。

「いいえ。ジャッカス師匠は停戦前にエネルギー寿命が来たのですが、更新しないと仰って・・」

「えっ」

「機械生命体の存在理由になど加担したくない、だから私は更新しない、と」
ホワイトは俯いた。

「存在理由・・・か。そうか。まあ、彼女があのリポートを作ったのだからな」
リーリヤはホワイトの手を握った。

「ホワイトさんはその言葉の意味が解るんですか？」

「ああ・・・知っている」

「教えてください！私、何度訊ねても教えて頂けなかったんです！」

ホワイトは濃い戸惑いの色を瞳に見せた。

「・・・ジャツカスの気持ちも解る。あれは・・・とても辛い真実だ」

「でも！私知りたいんです！ずっとそう思ってきたんです！」

「・・・少し、時間をもらえないか？」

「わ、わかりました」

リーリヤ達の横ではデラがマスターに声をかけていた。

「マスター、皆のケガの程度は？必要ならすぐ医療機関に搬送してやるぞ？」

「いや、皆大丈夫だよデラさん。ただまあ、焼け出されてしまったね」

「見事に基礎から作り直しだな」

「だね。しかし困ったよ」

「資金か？住まいか？いくらでも手を貸すぞ」

「その前に、襲った連中の具体的な情報がないんだよ」

「気持ちわかるが、その辺はむしろではなあ・・」

ふと、マスターは服のポケットに入ってるものに気が付いた。

取り出したのは、日向がくれた名刺だった。

「こういうことも相談していいのかなあ・・デラさん、通信機貸してくれる？」
「ほれ」

デラが投げた通信機を受け取ったマスターは、日向に向けて発信した。

「・・むしろ、よく無事だったなという状況だな」

マスターの連絡を受け、事情を聞いた日向が一言目に発した言葉である。

「私達を襲った相手の情報を知りたいのですが、解らなくて」

「ふむ、そういうことならその方面に詳しい者を送ろう」

「いらっしやるんですか？」

「ああ。少し内部手続きがあるので、すまないが店の地点で待っていてくれるか？」
「解りました」

「ところで、そんな有様だと指輪は無くなってしまったな。代わりを用意するか？」

「いえ、無事発掘出来たので先程渡しました」

「そうか：まあ、そんなタイミングだが、だからこそ渡した方が良いでしょうな」
「ええ」

「復興は我々も手を貸そう。気をしっかり持つようにな」

「ありがとうございます」

通信を終えた日向は、ぼんと肩に手を置いた艦娘を見上げた。

「これで、良いのかな？」

「ええ、あとはお任せ」

「本当は我々が直接介入したいところだが・・・」

「FOLMEの名前が表に出ると色々面倒だから、我慢してね」

「解っている。後は頼む」

「はい」

スーツケースを手に歩き始めた艦娘に、日向は声を投げた。

「この件、提督には？」

「今の状況ならお耳に入れるレベルじゃないと思うけどなあ」

「解った。私の所で留めておく。ただし直接火の粉が降りかかりそうな場合は打ち明ける」

「それで良いわ。お願いね〜」

複雑な表情で通信機を返してきたマスターに、デラは首を傾げた。

「どうかしたのか？」

「FOLMEから情報提供してもらえそうです」

「そうか」

「・・・これから、とんでもないことになるかもしれません」

「すでになつとるよ」

「いや、店は惨憺たる有様なんですが、別の意味での予感です」

「解つとるよ。そもそも、むしろも思う所はあるんじゃないぞ？」

マスターはデラに頭を下げた。

「そうでした。売り物のサンプルをお預かりしていた身として、台無しにしてしまつて

申し訳ありません」

「違う」

「？」

マスターが顔を上げると、珍しくムスツとした表情のデラが居た。

「わしらの大事なマスターの居るこの店を、こんなにしてくれた礼はさせてもらう」

職人達が頷いた。

「その通りだよデラさん！よく言った！」

「そうよそうよ！どれだけ心配したと思ってるの！」

「わしらの思い出の詰まった店を台無しにしおつてからに！いてこましたるわ！」

「よーし、あたしとつておきの兵器出しちやうよ！」

「リーリヤちゃんのアレ出すならうちも出しちやおつかなあ」

「それなら俺たちも便乗するぜ！どこの馬の骨か知らねえが盛大な花火あげてやろうぜ
！」

「どつちかつていうとキノコ雲じゃないの？」

「稲妻付きのな！あつはつは」

マスターの隣に加古が寄ってきさやいた。

「確かにとんでもないことになってきたね・・・」

「大手を振って悪戯できるチャンス到来、だからなあ」

「妖精さんこういうの大好きだからねえ」

「まあ、店もサンプルも1つ1つ丁寧にならされてたからね、怒るのも無理はない」

「皆の怒りの理由はそっちじゃないと思うけどなあ」

「？」

一方。

MP40の傍にはホワイトが近寄っていた。

「ゴタゴタで挨拶がまだだったな。私はホワイトという。先程の貴君の勇氣ある行動に御礼申し上げます」

「あつ、えつ、い、いえ。私はMP40といひます」

「よろしく」

「・・・はい」

MP40ときゅつと握手を交わしたホワイトは、にこやかな笑みを浮かべた。

「それと、結婚おめでとう」

「まだ全然信じられません。でも、私はあの時からずっとマスター様をお慕いしてきたので・・・」

「それは、聞いても良い事か？」

「はい。マスター様にも申し上げていますし」

MP40はデラ達と話すマスターを見ながら続けた。

「私は以前、民間軍事会社の所有する戦術人形でした」

「・・・」

「訓練や実戦は良かったのですが、日に日に酷くなる辱めに耐えきれなくなってしまうて」

ホワイトの眉がピクリと動く。

「保護対象の人間に、撤退行動中に凌辱されそうになったとき」

「は？」

「つい、その手を払いのけてしまったんです」

ホワイトは苦虫を噛み潰したような顔をしていたが、状況を理解したようだった。

「・・・処分されたんだな？」

「はい。敵陣営に被検体として、同じような事をした同僚達と共に鉄血に売られました」

「売られたのだと？」

「売ってKIA扱いにすることを日常的に行い、不正な蓄財を重ねていたようです」

ホワイトは歯を食いしばった。

「腐れ外道が・・・っ」

MP40は目を細めた。

「鉄血が多勢で取り囲む市街地の廃墟の中で、こっちは少数で武器もろくにありません」

「・・・」

「あつという間に弾が尽きて、その時の私はこのMP40しか使う事を許されない規制がかかってて」

「・・・」

「でもどうしても、ここで倒れたくないって泣いて」

「・・・そうだな」

「かなり強引に、自分で規制を解除したんです」

「ほう」

「今でもどうやったか覚えてないんですけど、それで廃墟の中を逃げ回って」

「うむ」

「落ちてたボルトや鉄筋、古釘を投げて反撃して」

「よくそれで勝負になったな」

「今でも役に立ってますよ？」

「ああ、話の腰を折ってすまなかった。それで？」

「何日か飲まず食わずで戦ってたなら、いつのまにか何の反応も無くなって」

「・・・」

「どっちへ行ったら良いのかも分からず、ただまっすぐに砂漠を歩いていました」
「ほう」

「そしたら、砂漠のど真ん中で、遙か遠くから輸送車が来るのが見えて」

「・・・」

「エネルギーがほぼ枯渇していた私は、そこで砂に足を取られて倒れてしまいました」
「・・・」

「やがて輸送車が近くで止まって、足音が聞こえて」

「・・・」

「マスター様が私の顔にかかった砂を払いながら、呼びかけてくれたんです」

「・・・」

「でも私はシャツとダウン寸前で返事も出来なくて、マスター様は行ってしまっ
「えっ」

「死んだと思われたんだと諦めたんですけど、すぐに水と携行食を持ってきてくれて」

「・・・」

「私を抱えて、顔を拭いてくれて、お水を飲ませてくれて、携行食を食べさせてくれて」
「・・・」

「輸送車に乗せてくれて、このお店に連れてきてくれました」

「・・・」

「私は2日くらいスリープモードに入ってしまったそうです」

「それだけ過負荷をすればな。後遺症はなかったのか？」

「使用兵装の制約が切れたままという事くらいですかね」

「そんなことは放っておけばいい。それで？」

「起きてすぐにマスター様に謝りに行っただけです。ご迷惑をかけてすみませんと」

「・・・」

「でもマスター様は仰ったんです。私も幾度も助けられた身だからお互い様だよって」

「・・・」

「私は存在すら消された身なのに、マスター様は当たり前のように助けてくださった」

「籍を置いていたこともか？」

「はい。後日、所属していた会社にアクセスしたら在籍していた記録すら残ってません

でした」

「・・・常習犯だな」

「恐らくは。でも良いんです。私はマスター様にこの地球の片隅に居て良いと認めて頂いた」

「・・・」

「だからご迷惑にならないように自分で働いて、マスター様の必要なお水をお持ちして
るんです」

「・・・砂漠の中での水は人類にとって欠かすことが出来ないからな」

「はい。ほんのささやかな事ですが、マスター様の命をお支えする覚悟で臨んでいます」
ホワイトは頷いた。

「MP40、ならば私達は同志と呼べるはずだ」

「同志？」

「私も砂漠の真ん中で、鉄血の多脚戦車に襲われていた所をマスター達に救われた」

「・・・」

「私は数千年前に終結した戦争の、当時の司令官型アンドロイドの予備個体でな」

「・・・」

「何かの弾みで目覚めたのだが、その時点ですでに私の役割などどこにも無かった」

「・・・」

「それでも、マスター殿はその説明を聞いてもなお、ここに居させてくれる」

「・・・」

「地球の片隅に居ても良いと認められた者同士、仲良くしてくれないか？」

MP40はきよとんとしていたが、やがてくすつと笑った。

「はい。でもマスター様を独占してはダメですからね？」

「ほう、では独占しなければ良いのだな？」

「私は仕事で離れることも多いですし」

「ああ、そういえばその仕事なのだが」

「はい」

「マスターが命じたのか？」

「いいえ。でも私は沢山お金をためて、いつかマスター様が必要な時に支援したいのです」

「支援？」

「はい。今回もシエルターやお店の再建に少なからず対価が必要だと思います。そういう時に差し上げたいと」

「そうか。そのように自分で決めたのだな？」

「はい」

「解った。だが、もう少し立ち寄ると良いかもしれないぞ」

「ダメです」

「な、なぜだ？」

「これ以上マスター様といると、24時間365日抱き着いてしまいそうなんです」
「極端だな」

「私にとつてマスター様は、唯一であり絶対であり全てなんです」

「ふむ・深く深く、愛しているのだな」

「でも、こんな愛し方は重すぎるといいう自覚はあるんです」

「止められないから自ら離れる、か。いじらしいな」

「自分を上手に操れたらいいんですけどね」

ホワイトは苦笑した。

「大切な相手であるほど、無理だろうな」

「ホワイトさんでもですか？」

「ああ。正直今はだいたいぶ落ち込んでいる。何故か解るか？」

「・・・あつ」

ホワイトは頷いた。

「アンドロイドと人類の間には、MP40にとつての誓約の指輪のような存在自体がないんだ」

「そうなんですか」

「もしマスターとそういう契りを結べる日が来たら、その時は証人になってくれないか

「？」

「私で良ければ喜んで」

「では頼む。同志よ」

二人は先程よりもさらに固い握手を交わした。

第24話

「ごめんくださうい。オリファイ雑貨店さんはこちらで良いのかしらあ？」

日が暮れてきたため、皆でデラの飛行機に退避しようと瓦礫から使える荷を積み込んでいた時。

いつの間にかひよつこりと現れた艦娘を一目見た加古は目が釘付けになった。

マスターはそんな加古の姿を見て、加古の耳元でささやいた。

「どうした？大丈夫か？」

「あ、あんな化け物見たことないよ」

「化け物？」

「あの艦娘、た、タダモノじゃない。あたし、足がすくんで動けないよ」

「そうか、それじゃあ」

ちゅっ。

「いつ、いきなりこんなところで何チューしてくれてんのマスター!？」

マスターはいいたずらっ子のような目をして答えた。

「愛する女房にキスをして何が悪い」

「によっ!？」

「それにほら、動けるだろ？」

「あ・・うん」

「じゃ、行くぞ」

加古は頬を染めたままマスターについて行った。

「これをショック療法とするか、記念すべきファーストキスとしてカウントするか悩みながら。」

「お待たせしました。私がオリファイのマスターです」

「FOLMEの龍田だよ。日向さんから状況は聞きました。散々でしたね」

「ええ。それでその、調べる方法はある方法ありますか？」

「調べる方法といえますか」

龍田は手にしていたアタッシェケースを軽く持ち上げ、もう片方の手で指折り数えていく。

「今回の攻撃作戦の決定者と実働部隊長に関する顔写真含めた詳細情報に」

「白地図に決定者が管理する勢力圏と、各拠点と、各兵力を記した物でしょ」

「各部隊が今後2週間で何をやるかの予定表もいれてあるよ」

「拠点の資材補給タイミングと巡回ルート、襲撃に適した地点もマーキングしたし」

「念の為、隣接区域の管理者と各拠点の広域地図も用意したよ、こんなので良かったよ？」

マスターは恐る恐る訊ねた。

「え、ええと、管理者の詳細情報……というのは？」

「性格、仕事での判断傾向、お気に入りの部下、スリーサイズ、趣味、下着の色、後はね」

「あ、もう充分です」

マスターは心の底から、この龍田という艦娘が味方で良かったと思った。

手際が良すぎる。そしてこの瞳はあまりにも多くの事を見てきた色だ。

加古が怯えるのも無理はない。

その時。

飛行機から降りてきたデラは、龍田に気づかずマスターに声をかけた。

「おおい、そろそろ外は寒いだろう。機内に暖房を入れた。入ったらどうだ？」

声は何気なく振り向いた龍田がデラを三度見したので、マスターは素早く声をかけた。

「彼は味方です。絶対に撃たないください」

龍田はデラを数十秒、固まったように見つめていたが、ふた呼吸するとマスターに振

り向いた。

「マスターさあん？」

「はい」

「交友関係がちよつと広すぎないかなあ〜？」

「はあ・・・そうですね」

「・・・詳細は中で説明しますね〜」

龍田はもう一度深い溜息をつけてから、飛行機に向かって歩き始めた。

やがてデラの隣で立ち止まった龍田は、デラの目を見ながら言った。

「大人しいミュータントは四方八方敵だらけと聞きましたけど〜？」

「その通りだよ」

「本当に戦う意思が無いミュータントさんは珍しいわあ。私もさすがに経験が無いかな

あ」

「珍しいだろうよ。皆殺されたからな」

「お仲間さんに、ですか？」

「ああ。ミュータント、正規軍、アンドロイド、艦娘、戦術人形、機械生命体に、な

「・・・なるほど。それで、今回の作戦にご協力は頂けますか？」

「もちろん」

龍田は頷くと、飛行機の中に進んでいった。

「皆揃ったのかしら？ はあい、じゃあ説明始めるね〜」

デラの航空機の貨物室で、作業台に広げられた書類を指さしながら龍田は説明している。

その口ぶりは要領よく説明する事に慣れた者のそれであり、澀むことなく続いた。時間にして15分ほど経った時、龍田は全員を見渡した。

「えっと、ここまでで引っかけた事がある人、今のうちに何でも聞いて〜」

職人の一人である妖精が手を挙げた。

「はあい、どうぞ〜」

「つてことはだ、管理エリアとやらは簡単に言えば大体この50km四方なんだな？」

「ええ。その薄い青の線よ〜」

「この隣はまた別のアホンダラが居るんだな？」

「そういうこと。でも東側は居ないわあ。南は海だし、奴らは海は支配下に置いてないみたい」

「鉄屑連中は西と北から攻めてきてるって事かい」

「そういうこと」

「お隣のアホンダラはどこまでが支配エリアなんだ？」

「この破線よ。西も北も50km四方つてとこね」

「つてことは、そつちも片付ければしばらく手え出してこねえつて事か？」

「相当完膚なきまでに叩きのめせればね。中途半端にやると却つて大群が来そうよ？」

「歯向かつた報復つてか？」

「ご名答」

「ふむ」

ふと、龍田は腕を組み、じつと地図を見つめるホワイトに話しかけた。

「何か思う所がぁありですか？」

ホワイトはひよいと龍田に視線を投げ、照れくさそうに首を振った。

「いや、その、司令官モデルとしての性だろうな。どう攻めるかという事をあれこれ考えていたのだ」

龍田はボンと手を打った。

「あらあ、じゃあ采配を振るつてみませんか？」

ホワイトは龍田を、そして周囲を見た。

「しかし、私の戦術は西暦12000年頃のものだ。今ではもう古典だろう」
MP40は首を振った。

「いえ、その停戦以降に新たな大戦はありませんし、高度な戦術資料は歴史に消えま
した」

「・・・そうなのか？」

「はい。鉄血等のテロリストは今も戦闘を行います、数の暴力に頼ったローラー作戦
です」

「だが・・・」

ホワイトから上目遣いで見られた龍田はにこりと微笑んだ。

「それでは一通りホワイトさんが立案してみても、皆さんが納得されたらって事で如何で
すか？」

ホワイトは皆をぐるりと見まわした。

「それで、良いか？しゃしゃり出るなど言われても仕方ないと思うのだが？」

妖精の職人がニツと笑った。

「俺ら職人は物作りは好きだが戦略なんぞ知らんしな」

加古が頷いた。

「他の人が立てる戦略って興味あるし、やりたいようにやったら？」

マスターが頷いた。

「とつさの判断や捌き方については店で見ていたし、信じられる手腕だと思うよ」

ホワイトは皆を見回してから咳ばらいを一つすると、キリリとした表情に改めた。

「解った。それでは幾つか知りたいことがあるので聞かせてくれないか？」

皆が頷いたのを見て、ホワイトは職人達を見た。

「まずは、先程の話に出た、今回出しても良いという兵器はどのようなものだろうか？」
ホワイトが話し出したのを見て、龍田はそつと持参した飲み物を口に運んだ。

今回は出来ればFOLMEは目立ちたくないのよね。

情報提供のみなら漏洩したとかハッキングされたとか幾らでも言い訳ができるし・・

追跡をまくために空路一直線ではなく陸路と徒歩を併用して来たから大丈夫でしょ。

大陸由来のパワーバランスは複雑だし、FOLMEの今後もあるし・

とはいえ、私達の関係者や仲間を見殺しにするなんて提督に叱られちゃうからねえ・

どこまで手を貸すことになるかしら・・

崩壊液の濃い海域は伊58ちゃん嫌がるし、外海から打てるSLBM1〜2発くらい

かなあ。

使用期限が近い核弾頭の廃棄処分兼ねちゃえば実質支出もないし・・

一方、最初にホワイトと視線があつたりリーリヤは顎に手をやりながら言った。

「こういう感じなら広域型の方が良いんでしようねえ」

「基本は面制圧型の方が良いだろう。ただし地下にも施設が疑われる個所がある」
「これとか、この辺りとか？」

「ああ。特に作戦決定者、つまり地域管理者の居る工場は敷地も広く建物の階数が高い」

「化石かもしれないけど、MOABとバンカーバスターならあるわよ？」

「それは良いな。威力半径は？」

「半径ならどちらも2km位・・2.2kmは确实よ」

「投下方法と保有弾数は？」

「IRBMに積んでるわよ。数はどちらも100発ずつ」

「そうか」

「ブッ！」

音に驚いた面々の視線を浴びつつ、龍田は激しくむせこんでいた。

MP40が優しく背中を叩きながらティッシュの箱を差し出す。

「大丈夫ですか？これで拭いてください」

「ゲホツ・・ごっつ、ごめんなさいねえ、話の腰折っちゃって」

妖精の職人がニツと笑いながら声をかける。

「ゆっくり飲みな、FOLMEの姉えちゃん」

「え、ええ、ありがとう」

龍田は泣き笑いの顔で返事をしつつ、咳き込みながら思った。
待って。

IRBMなんて個人で持つものじゃないし、それに100発ずつってどういうこと？

第25話

涙目の龍田と介抱するMP40から視線を外し、ホワイトは再び職人の方を向いた。

「さて、話を戻すが、そちらの貴方は何か提供してくれるのか？」

指を差された機械生命体の職人はふっふーんと笑いながら答えた。

「俺たちからは重収縮弾頭を積んだICBM出さぜ。5発あるから消してほしい場所を
言いな」

「!？」

龍田はすんでの所で声を上げそうになった口を自分の手で抑えた。

それを見たMP40はますます心配そうな顔になる。

「だ、大丈夫ですか龍田様？吐きそうなんですか？」

「あ、い、いいえ、そうじゃないから」

「そうですか・・・辛かったら言ってくださいいね？」

「ええ、あ、ありがと」

龍田は目を閉じ、深く息を吸った。

事前調査結果には今聞いた2つの情報はどちらもなかった。

偵察中隊のリポートではデラの飛行機に積まれた25発の空対地ミサイルが最大火力の筈だった。

非核兵器とはいえ火力マシマシのMOABもバンカーバスターも凄まじい脅威ではある。

だが、重収縮弾頭を積んだICBMは次元が違う。

で、でも・・・まさかそんな。ありえない。

単に単語が同じだけで別の物に違いない・・・そうよ龍田、落ち着きなさい。

機械生命体の職人を見ながら、ホワイトは小首を傾げた。

「すまない、私のデータベースは古いのだ。それは一言で言えばどのような兵器なんだ？」

機械生命体は頷いた。

「簡単に言やあ人工のブラックホールだ。半径15km圏内はクレーターしか残らねえよ。文字通り土に返るぜ」

「そうか」

「ふぎけないで！」

再び全員の視線を集めた龍田だったが、当の龍田はたじろぐ機械生命体にすごい剣幕

で迫っていた。

「な、なんだよ。説明しろっていわれたから」

「HCB（重収縮爆弾）のプロトタイプは先月臨界実験を済ませたばかりなのよ!」

「それがなんだってんだよ」

「あれがもう弾頭サイズになんてなる訳ないでしょ! 一式で25m四方もあるのよ!」

「そいつを作ったのがどこのウスノロか知らねえが、俺たちはもう10年前には実用化してたっつーの」

「なっ・・・」

「15年前には半径50cm圏内を1cmの球に圧縮したしな!」

「うそ・・・よね・・・」

「弾頭サイズで15km四方ってのは厄介だったが、そこは俺たち天才だからちよいちよいつてなもんよ!」

胸を張った機械生命体をジト目で睨みつつ、妖精の職人が口を開いた。

「その頃オイラに解析頼むって泣きついてきやがったのはどこのどいつだったっけ? なあ天才さんよ?」

「あつ・・・そ、そういやアンタにも手伝ってもらったなあ・・・うん、そうだった、協同開発だな!」

リーリヤの視線も機械生命体に刺さる。

「それをいうなら多次元収縮制御プログラムって私コーディングしたわよねえ、ラシヨルフ?」

「いつ!?!」

「あ! そうよ、あの時の代金! フィルタ5枚でうやむやにされたの思い出した!」

「げっ! 思い出さなくていいのに」

「最初の契約じゃフィルタの束を5つだったでしょ! 残り寄こしなさいよ」

「解った解った。あとで! あとでな!」

「証文書いてもらうからね!」

「ちっ」

龍田は力なく肩を落とした。

確かに自分達は巨大組織だから意思決定は遅い。

だが、人造ブラックホールなどの最新鋭兵器は大規模な開発人員と予算を揃える事が肝要だと思っていた。

まさかこんなド僻地に居る個人営業の職人達に15年以上遅れを取っていたなんて・・

色々な意味で情報師団長は帰ったらお説教確定ねえ・・何してあげようかなあ・・

不幸中の幸いは完全にFOLMEの出る幕は無くなつたつてことかしらね・
ホワイトは乱れだした場を鎮めるため、軽く手を打った。

「積もる話があるようだが、本作戦に関わる事以外はすまないが後でやってくれ」

職人達は口々に詫びの言葉を入れ、その後ホワイトは順調に供出される兵器の詳細を聞き出していった。

それを聞いていた龍田の顔色がますます蒼褪めていったのは言うまでもない。

「・・・ふむ、こんなものだな」

ホワイトは龍田の持ち込んだ図面に最後の記号を書き終えると、皆の表情を見回した。

龍田はまだ少し顔色が悪いな。一時期よりはマシだが、もう少しそつとしておこう。

職人達には攻撃する拠点の位置と時間情報を正確に配分したし、検算も済ませてもらった。

後は・

「MP40」

「はい！」

「君が直接突撃したい場所は、今回の攻撃を決定した地域管理者のいる工場だったな」

「はい」

「正直に言おう。この施設が一番巨大だ。他から引き抜いてでもHCBで無に帰すべきだと私なら考える」

「・・・」

「だが、それでは納得出来ないのかな？」

「はい」

「では、HCB1発、あるいはMOAB4発の威力を上回るプランを示して欲しい。私もそのプランの確認をする」

「プラン、ですか？」

「ああ。まさかとは思うが一人でプランも無しに突っ込むつもりではあるまい？さすがに自殺行為だぞで？」

MP40はマスターの視線に気づき、にこつと笑った。

「ええ。少し昔の伝手を頼ろうと思っていました」

「伝手とは？」

「フリーの傭兵をしている方達です。5人で1小队を組まれています」

ホワイトが顎に手をやった。

「一人ではないが・・・1小隊でこの規模の相手を攻め切れるか？」

「むしろ少なすぎると文句を言われるかもしれません」

「少なすぎる？6千万平米の敷地に、確認されただけで大型多脚戦車が800台以上展開してるのだぞ？」

MP40は目を細めた。

「お言葉を返すようですが、ホワイト司令官殿」

「う、うむ」

「私一人でも多脚戦車と自律人形の混じった300体規模の部隊に対処出来ます。彼女達はそれ以上です」

「・・・は？」

MP40は加古を見た。

「加古だつて出来ますよね？」

全員の視線が集まった加古は欠伸をしながら答えた。

「あたしならホワイトさんの言う通りHCB叩き込んでもらつてから遠距離ハンティングするよう」

「それは面倒だから、ですよね？」

「あつたり〜」

「仮に、奴らがマスターを人質にしてその敷地の中にあるビルの中層階に立てこもつたとしたら?」

加古はスツと目を細めてMP40を見返した。

「ナイフ一本で殲滅してから迎えに行くよ。そんな悪手思いついた事を死ぬほど後悔させてやる」

「ですよね。今回それに近くないですか?」

「んー・・マスターの居ない鉄屑の基地なんてクレーターになれば良いよ」

「でも、加古の寝室やコレクションを台無しにしたんですよ」

「まあねえ。でもあたしなら少なくともバンカーバスターは打ち込んでもらうなあ」

「自分の手で始末をつけたくないんですか?」

「別に? 地下シェルターとかあつたら攻め込むのめんどくさいし」

「趣味の違いですね」

「だねえ」

マスターはぐくりと唾を飲み込んだ。この二人と夫婦喧嘩なんて想像もしたくない。

ホワイトが軽く咳ばらいをした。

「解った。それでは作戦の調整もある。その小隊の方達と連絡は取れるだろうか?」

「はい、直ちに」

翌日。

「よう、元気だったか？」

「隊長殿、ご無沙汰しています」

「今度一緒に一儲けしないか？MP40が来てくれると大助かりなんだ」

「すみませんが、旦那様と少しでも居たいので・・・」

「結婚したのか？良かったじゃないか！」

「ありがとうございます」

ホワイト達は待ち合わせた場所で、二人から少し離れた位置から、MP40の肩に腕を回す戦術人形を眺めていた。

腰まである金髪、アイスブルーの瞳、金色の1つ星輝く赤いベレー帽。

オリーブドラブ色のタンクトップにホットパンツ。

腰にある迷彩色のバッグからは手榴弾が見え隠れしている。

そんな視線に気づいたのか、二人でホワイトの方に向かってきた。

MP40が口を開く。

「ホワイト司令官殿、こちらが先日ご紹介した小隊の隊長で、AK-47殿です」

AK-47はニカツと笑って手を差し出した。

「アンタがボスか？アタシを呼んでくれたんだろ？世界中どこでも暴れまわってみせるよー。」

ホワイトは小さく頷くと、AK-47の手を握り返した。

「私はホワイトという。よろしく願います。作戦を説明するから意見を聞かせてほしい」

「ああ。一方通行じゃないのは良い作戦の証拠だぜ」

第26話

「・・・以上だが、どうだ？」

ホワイトの説明を聞き終えたAK-47は苦笑いをしながら紫煙を吸い込み、口を開いた。

「それならそこもMOABとバンカーバスターで潰せば良いと思うけどなあ」

加古がニヤリと笑った。

「ほうら、隊長さんだつてあたしと同意見じゃーん」

AK-47は肩をすくめた。

「ビル内から奪取したいものでもなければ、普通はそうだろうけど・・・」

だが、AK-47はちらりとMP40を見た。

「でも、それじゃアンタの勘定が合わない。そうなんだろう？」

MP40はこくと頷いた。

「どうして合わないんだよ？アタシに言ってみな」

「・・・この鉄屑共は、私の旦那様が居るシエルターに迫撃砲を24発も撃ちこんだんです」

AK-47は目を細め、携帯灰皿に唾えていた煙草を押し込んだ。

「そいつがやったのは確かかい？」

「はい」

「んー．．．」

ややあつてから、AK-47はホワイトを見た。

「今の時点で、ここに回せるミサイルはある？」

「他にミスがなければMOABとバンカーバスターが4発ずつ。HCBは無理だ」

AK-47はくすくす笑った。

「MOABが2発もあれば充分だ。そいつを発射要請してから着弾までの時間は？」

リーリヤが答えた。

「発射準備はしておくとして、到達まで4〜5分よ」

「もう少し正確に解るかい？」

「ええと．．発射台を最寄りの奴に指定したとして．．228秒よ」

「2発とも？」

「ええ」

「MP40」

「はい」

「盛大に吹っ飛ばすオプション付きの殲滅ミッションなら付き合つてやるよ」

MP40は最終決定を下したハイエンド機とされるアルケミストの顔写真を指さした。

「こいつは私にやらせてくれますか？」

AK47は実行犯であるデストロイヤーの顔写真を指さした。

「こっちは良いのかい？」

「実行犯は単なるコマなのでMOABに任せます」

「んー、お前が万策尽きたら介入するぜ？」

「・・・」

「旦那にあんまり心配かけんなよ」

AK47の言葉にはっとしたMP40は、マスターの方を見た。

マスターはMP40を見ながら何度も頷いていたので、MP40はAK47を見返した。

「ど、どうしてマスター様が旦那様だと解ったのですか？」

「簡単なことだよ。旦那はずっとアンタを心配そうに見ていたからね」

「・・・」

「アンタがしくじるとは思えないけどさ、アタシが見届けてもいいだろ？」

「・・解りました」

AK―47はホワイトに向き直った。

「こんな感じで良いか？」

ホワイトは頷いた。

「充分だ。ありがとう。ではこの発射台、MOAB2発はAK―47殿の指揮下とする。

準備を頼む」

リーリヤが頷いた。

「解ったわ」

AK―47はパンと手を打った。

「よし決まりだ。じゃあMP40、久しぶりに一緒に暴れようぜ！」

MP40は笑いながら頷いた。

「はい！隊長殿！」

ズ・・ドズン！

その衝撃波は余裕を見て安全圏と判断した分厚いコンクリートの壁さえも大きく揺

さぶった。

MP40は雨のように降ってくる破片に眉をひそめた。

さらに自分達の頭上を瓦礫が飛んでいき、黒い雲が稲妻を幾重にも光らせながら流されていく。

MOABは非核兵器だが、とてもこの世の景色とは思えない。

砕けた壁の穴から観測を再開したSVT-38は、やがてげんなりした声をAK-47に伝えた。

「ボス・今の1発で敷地の東半分がほぼ更地になったぞ？」

AK-47は瓶からぐいつとウオツカをあおると頷いた。

「爆心地からこれだけ離れててこのザマだ。コイツの勘がいつも通り冴えてたことに感謝だぜ」

AK-47にぐりぐりと頭を撫でられたOTs-12はフンと満足げに鼻を鳴らした。

「どう？私、期待通りよね？」

そう。

ホワイトが職人から聞き出した情報で安全圏と定めたのはここからさらに1kmほど内側だった。

だが、デラの飛行機から空中へと飛び出した後、OTs-12は遠い地点へ着地するよう誘導。

首を傾げながらパラシュートを操るMP40にAK-47は良いから来いとハンドサインで伝えたのである。

もし予定通りの地点に居たら、いかに経験豊富な戦術人形達でもダメージを被つただろう。

間一髪、である。

SVT-38は双眼鏡を構えながら続けた。

「冗談抜きで展開中に2発目を使ったら我々は粉微塵だ。今使うか、もう使わないかの2択だろう」

AK-47はウオッカの瓶を腰のポケットに仕舞った。

「うーん・・まあ発射用のリモコンは持っておくよ」

「ボス」

「どうせこんなもん、捨てても持つても重量なんて変わらないよ」

「では参考までだが、更地になった所では建物の基礎すら判別できない。その事を覚えておけ」

「あいよ。西側の残った建物はどうなった？」

「全てのガラスが吹き飛んでる。建屋は歪み、火の手が上がってる。まともな物は無い」
AK-47は煙草に火を付けながらMP40を見た。

「アタシ達は正門前で待っていて、西半分にもう1発MOAB打ち込むのも手だよ？」

MP40は首を振った。

「殲滅だけなら確かにそうなのですが、管理者が普通に蘇っては意味が無いんです」

「どういうことだい？」

「現存するハイエンド機が活動停止すると、鉄血は記憶を引き継いだ当該機を別の地の工場で再生産します」

「そうだね」

「ですから蘇生後にAIが暴走するように仕向け、そのハイエンド自体の再生産を諦めさせたいのです」

「二度とマスターに近づかせないためか」

「はい。そのためには始末する時にAIが耐えきれないほどの恐怖を与えるしかありません」

「.....」

「それは一瞬で無に帰す爆撃ではダメなんです。AI記憶部に焼き付くくらいの恐怖ではないと」

AK-47はガシガシと頭を掻いた。

「解ったよ。突き進まなきゃいけない時ってのはあるからね！」

AK-47のその言葉を合図に小隊全員が立ち上がった。

「SVT-38、陸路でも大丈夫か？」

「ああ。奴らは混乱どころか動きすらロクにない。シヨック状態だ」

「よし、じゃあさっさと行こう！アタシについてきな！」

MP40を加えた総勢6名は、かつて工場が立ち並んでいた跡地へと突入していった。

「イ、一体、何ガ・・起キタ？」

工場も、地域すらも管理下に置く、アルケミストと呼ばれる鉄血製ハイエンド機は果然としていた。

自室である高層ビルの一角で窓を背に仕事をしていたら、爆風と共に碎けたガラスの雨を浴びたのである。

停電の中で振り向くと、黒い雲が去った後には、敷地の半分ほどを占めていた筈の建

物群が更地になっていった。

多脚戦車といったローエンドモデルの完成品を保管していた倉庫が丸ごと消え去ったことになる。

しばらく放心状態だったアルケミストは、ふとビルのアラート音が聞こえないことに気が付いた。

自己診断プログラムを走らせてみたが、聴覚センサーにエラーは無い。

余りにも大規模な爆風でアラートシステムがやられてしまったのか？

舌打ちをしながら全所内に向けて発信する。

「私ダ。各班長ハ被害状況ヲ確認シ報告シロ」

通信を切ってからアルケミストは思考を巡らせる。

敵の大規模攻撃？まさか。そもそもそんな事が出来る巨大組織がこんな僻地に居るわけがない。

だが、念の為だ。各拠点に連絡してみるか。

拠点01：Offline

拠点02：Offline

拠点03：Offline

拠点04：Offline

拠点05 : Off line
 拠点06 : Off line
 拠点07 : Off line
 拠点08 : Off line
 拠点09 : Off line
 拠点10 : Off line
 拠点11 : Off line
 拠点12 : Off line
 拠点13 : Off line
 拠点14 : Off line
 拠点15 : Off line

「クソツ、外部通信中継施設ガヤラレタナ・」

全拠点が連絡を同時に断つなどありえない。もし本当なら悪夢以外の何物でもないが。

さっきのバカみたいなあれのせいだろう。小型の隕石か？

その時、配下が緊急通信で敵の襲来を報告してきた。

同時に様々な銃声が響き始める。

大多数は自軍の発射音だが、違う音が混じっている。

「ライフル、アサルトライフル、マシンガン、サブマシンガン・シカシ、ヤケニ少ナイナ？」

やれやれ、我々が混乱してると思って地元の貧乏ゲリラが迷い込んできたか？
多脚戦車だけで1200台配備しているのだ。程なく返り討ちに出来るだろう。

第27話

「お待たせしました。発破準備完了です！」

PPSh-41は傍らに戻ったDP-28とハンドサインで結果を確認しあうと、無線でそう告げた。

「あいよ。じゃあイヤーマフ忘れるな」

AK-47からの返事に思わず緩んだ頬を抑えながら、PPSh-41は答えた。

「はい」

「あらよつと」

AK-47は自らのアサルトライフルで大型多脚戦車2台と自律人形4体を始末してから物陰に飛び込んだ。

デジタル無線機をポケットに仕舞いつつ、AK-47は控えていたMP40に話しかけた。

「聞きな。SVT-38の観測ではお前さんの相手はあのビルの25階、中央の部屋にいるんだってさ」

MP40は頷いた。

「まずは正面突破ですか？私が先に援護します」

AK-47は首を振った。

「わざわざアタシ達が上つてやる必要なんてないんだよ」

「ではどうするんです？」

「降りてきてもらうのさ。25階の窓がどこか今のうちに数えておきな」

「えっ・・・あ、はい」

怪訝な顔をしながらも目的階に目を向けるMP40。

「特定したかい？」

「ええ、でもどうするんです？」

「こうするんだよ」

ニヤリと笑ったAK-47はポケットから小さなリモコンを取り出した。

「地上階にごあんなーいってな」

AK-47がリモコンを押した途端、MP40の目の前でビルの足元が爆発したので

ある。

「ナツ！ナンダ！何ガ！ウワ、ウワアアアアア！」

激しい爆発音と共に自分と部屋の備品や机、椅子などが宙に浮いた。

・・・違う・・・これは

「ヒギヤアアア落ちルウウウウウウ！」
ビルが崩れて地面に落下しているんだ！

「・・・うわぁ」

もうもうと立ち込める煙がやっと引いた頃、MP40は目の前のビルのフロア数を数え直していた。

間違いなく24階分「減っている」

つまり、あの見えているビルの1階が25階だったという訳だ。

目の前の結果を見てMP40は呆気にとられていた。

どうやったたら40階建てのビルの下半分だけ綺麗に崩せるんだろう？破壊精度が高過ぎる。

そんなMP40の肩をAK-47がポンと叩く。

「そうそう。プレゼントはこんなので良かったか？」

AK-47がMP40の手に握らせたのは新品の紙箱だった。

開けると中には全長4cm程の長釘がぎっしり詰まっていた。

AK-47はMP40が頷いたのを見て周囲をぐるりと見回した。

「雑魚がまだ200匹は残ってるけどそっちは任せとけ。楽しんで来いよ！」

MP40が走り去るAK-47からビルに視線を戻すと、その中央部から大柄な人影が表れた。

「・・・間違い、ありませんね」

MP40はまっすぐに人影に向かって歩き始めた。

「ゲホツ・・・ゲホツ・・・」

奇跡的に上層階に押し潰されなかったことに安堵しながら、アルケミストは地上に降り立った。

通信回線は故障してしまったのかどことも連絡が取れない。

もうもうと立ち込める煙の外では散発的な銃撃音が続いている。

「何ヲモタモタシテイルノダ・・・ン？」

ザツ・・・

アルケミストはその姿を見て、レポートを保存メモリから呼び出した。

遊撃大隊を潰し、我々の製造拠点3か所をウイルスで壊滅させたMP40か？バカな。

いや、奴はデストロイヤーの撃った迫撃砲で叩き潰した筈だ。バックアップか？別個

体か？

そのリスクは確認しておく必要があるな。

「ココハ我々ノ拠点ダトイウ事ヲ知ツテルカ？ I O Pノ低級人形サン」

「ええ」

「ソウカ。トコロデ何故ココニ来タ？」

「お礼に」

「迫撃砲ガオ気ニ召サナカッタカ、低級人形サン？」

「いいえ」

アルケミストは挑発しつつ非常回線を開いた。

恐らく私も壊される可能性が高い。ならば近隣の空軍基地から無人爆撃機を送つてもらおう。

この敷地ごと爆撃されてしまえ。どうせ私はお前に壊されて意識は無いだろうからな。

「ソレトモ、粗末ナシエルターデ殺サレタコトガ不満カ？ 死ニ方ニ拘ルカ？」

「さようなら」

ヒュッ

キン！

MP40は自らが投げた長釘が叩き落されたのを見て目を細めた。

「ナルホド。MP40ノ9mmナドトイウ、弱ツチイ弾デ何故部下達ガ散ツタノカ疑問
ダツタガ」

「・・・」

「タカガ釘トハネ。私ガ両腕ニ何ヲ装備シテルカ見エナイノカ？サスガ低級人形ダナ」
アルケミストは両手に装備した両刃斧にも似た近接武器のグリップを軽く握り直し
た。

面白い。出撃要請はもう少し後にするか。楽に死なせてはつまらない。

ヒュッ

キン！

再び飛んできた釘を再び叩き落すと、アルケミストは愉快そうに笑った。

「ムダダ。神様ニオ祈リデモスルカ？」

「始めましょう？」

2体は同時に地面を蹴った。

「よつ、状況はどうだ？」

「恐らくだが、想定以上で苦戦していると思われる」

「へえ」

「釘が通じない相手は珍しい」

「んー、ちよつと見せて」

「ああ」

AK-47はSVT-38から双眼鏡を受け取ると、MP40達に向けた。

小隊の他のメンバーも集結しており、簡単な武器の手入れを行っていた。

つまり戦闘を行っているのは既にアルケミストとMP40のみということである。

しばらく双眼鏡を覗いていたAK-47は、SVT-38に返しながら肩をすくめた。

「もう少し様子見よつか」

「何故だ？ここからなら簡単に鉄屑の頭を撃ち抜けるが？」

「別にアタシだって始末出来るし、MP40も出来るんだよ」

「やらない理由は？」

「それだとあつという間に死んじゃうからかな。敵は今舐めてかかっている」

SVT-38は双眼鏡を覗きながら頷いた。

「ああ。笑ってるな」

「そこで大逆転が起きたとき、MP40の望む状況になるんだろ？」

SVT-38は肩をすくめた。まだるっこしい。

「それなら余ったミサイルで次の製造拠点を木っ端微塵にしてしまえばいいではないか」

「AIの学習結果を使い物にならなくしないと、また別の拠点で作られるだけなんだつてさ」

「来ても無駄だと何度でも眉間に撃ち込んで学習させればいい。我々はそうしてきた」

AK-47はポケットから取り出したウオッカの瓶を口に含んだ。

「うちらと違って、MP40は守りたい者が出来たからじゃない？」

SVT-38は首を振った。

「そんな余計なもの、戦場では命取りだ」

AK-47はくすつと笑った。

「そういう余計な物こそ、生きる潤いとして必要なんじゃないかな」

「マダヤルノカ？イイ加減ニ諦メタラドウダ？」

アルケミストはMP40の真意が読めなくなっていた。

飛ばされてくる長釘は簡単に叩き落せる。コースもタイミングも一緒に馬鹿みたいだ。

その割にこちらからの攻撃は体よくかわされてしまう。

何の時間稼ぎかと思ったくらいだ。

確かに工場内から戦闘音が消えてしばらく経った。

だが、コイツの仲間が現れないという事は相打ちでもしたのだろう。

こちらの味方も全滅したようだがな。

しかし自分がノーダメージである以上、空爆要請は出来ない。

ハイエンド機である自分がノーダメージでそんなことをしたら資源の無駄遣いだと査問会に責められる。

ならばと自分が敷地から離れて空爆要請などすれば敵前逃亡の重罪に問われる。

つまり自分が始末されなければ空爆要請は出来ないことになる。

面倒な状況になってしまった。

MP40は攻撃を避けつつ、常に同じパターンで釘を投げていた。

箱の中にあつた釘は既に投げ終わり、今は地面から拾っては投げている。

同じタイミングで、同じパターンで。
MP40はただただひたすらに攻撃を続けていた。

第28話

「こちら司令部、こちら司令部、小隊長応答せよ」

「あいよつ、どうした司令官？」

応答があったことに内心安堵しながら、ホワイトはマイクを握った。

「状況を報告可能か？」

「ああ。雑魚は掃討完了、現在は管理者と彼女がサシで戦ってる。他はどうだい？」

「予定通りに完了した。彼女は苦戦してるのか？」

「うーん・・苦戦というより時間がかかる策らしい。離れた場所で見張ってる」

「具体的に何をしているのだ？」

「彼女がひたすら釘を投げて、相手は近接武器で叩き落してる。延々とね」

「タイムリミットになりそうなものがあるのかい？」

「いや、隣接エリアも潰したし、敵側が援軍を寄こす気配は全くない」

「でも夜戦になると面倒、か」

「ああ」

「解った。じゃあ日没をリミットとして、最悪2発目でケリを付けるよ」
「最後に・・・心配してる者たちに何か伝えられることはあるか？」

AK-47はふむと言つて一瞬考えたが、

「彼女はやる気に満ちた目をしてるし、ケガ一つしてないよ！以上だ！」
と、答えたのである。

「・・・そう、か」

ホワイトの傍らで、マスターはAK-47の答えを聞いて頷いた。

そして加古の方を向いた。

「なあ、加古」

「んー？」

「MP40は何をするつもりなのだろう？」

「なんだろうねえ・・・」

加古は頬杖をついて天井をにらんでいたが、

「鉄血人形は・・・自律人形としては単細胞なAIだからねえ」

「ハイエンドでもか？」

「ハイエンドでも、だよ。効率最優先で意思決定するからね」

「MP40は勝てるのかな？」

「いざとなったらナイフの一刺しで終わられると思うよ？」

「そういえばそうだ。どうして通じないと解ってる釘投げに拘ってるんだろう？」

「さあね」

「本当ニ・イイ加減ニ、シロ」

アルケミストはまた飛んできた釘を力任せに叩き落した。

単調過ぎて時間の感覚がおかしくなってきた。

一体幾つの釘を叩き落せば無駄だと学ぶんだ、この低級人形は！

アルケミストは歯を剥き出しにしてMP40を睨みつけた。

MP40は再び拾った釘を手にしてた。

常に10本携行するように、拾っては投げ、拾っては投げている。

同じタイミングで同じ場所を狙い、同じように叩き落させている。

無表情なMP40の瞳には、激高し、歯を剥き出しにしたアルケミストが写っていた。

ヒュッ

キン！

「貴様ア！イイ加減ニシロオ！」

アルケミストの怒声もMP40はどこ吹く風であった。

MP40が見ている物はただ1つ、ただ1か所。

その小さな変化を見続けていた。

アルケミストは近接武器のグリップをギリギリと握りしめる。

もう、限界だ。

「死ネエエエエエエ！ウオオオオオオオオオオ！」

アルケミストの渾身の連続攻撃をかわしながら、MP40は僅かな隙をもとらえて釘

を投げ続ける。

「死ネ！死ネ！死ネエエエエ！」

アルケミストの頭の中は殺意一色に染まり、何一つ余裕が無かった。

それは本来、留意すべき幾つかのパラメータの警告を無視し続ける形になった。

「デメエ！死ネ！死ネ！」

普段なら武器を振り払う先にガレキがあれば武器を庇って避けるコースに変えるの

に。

「クソオ！死ネ！当タレ！」

全身の駆動を司る人工筋肉のヒートゲージに気を配っているのに。

「フツ！クツ！ヌオオオオオ！」

近接武器の同じ所で釘を弾き続けければ、その部分の刃がどうなるかに気づくのに。

・・・プシュウウ・・・

「ギ？」

それらが同時に限界を迎えるように攻撃されているなど、普段でも気づきにくいのに。

渾身の力で振りかぶった時、アルケミストの頭の中に表示されたエラーメッセージ。

「腕部および脚部の人工筋肉がオーバーヒートしました。常温回復まで強制停止します」

そして、

・・・ピシツ！・・・パキン！

今の今まで使っていた近接武器が、真つ二つに折れた。

長釘を弾いていた箇所からのひび割れによって。

「ギ!!?ギ!!?」

アルケミストは必死に体を動かそうとするが、首から下はピクリとも動かない。

全身から立つ激しい湯気が、冷却までの時間を雄弁に示していた。

「……さて、ポンコツになった気分は如何ですか？」

MP40はゆつくりと立ち上がり、服の埃を払いながら語りかけた。

アルケミストは顔を真っ赤にしながら、食いしばった歯の隙間から声を漏らす。

「貴様……貴様！コ、コンナ、コレシキ」

「ほら、貴方の大好きな釘ですよ？」

ヒュツ……ヒュツ……ヒュツ

「ギヒイイ！グギイイ！ガアアアアア！」

「おやおや、クールダウン中の方が痛みが強いですか。これは良い情報を得ましたよ」

アルケミストは唐突に襲われた激痛で頭がどうにかなりそうだった。

どうして……圧倒的に優位だったはず……どこで……いつ……

「ほうらポンコツさん。低級人形がつまらない釘なんかで攻撃してきますよ？」

「ヤメ……ヤメ……口オ……」

「おやおや、止めて欲しいモノが示す態度ではないですねえ」

ヒュツ……ヒュツ……ヒュツ……

「ガ！グゲ！ギヤイイイ！」

「ほら？何というんです？」

アルケミストの思考は痛みと混乱に塗りつぶされ、抵抗する意思はあつけなく崩壊した。

「ヤ、ヤメテ・・クダサ・・イ・・」

ふいに、興味を失ったかのようにMP40が手に持っていた残りの釘を地面に放り投げた。

「?」

その行為が何を意味するか解らず、アルケミストはただ茫然としていた。

「じゃあ、そうしましょうか」

「ナ・・ニ?」

「止めてくださいと頼まれましたから、止める事にします」

「・・・ハ?」

なんだ?この戦術人形は究極のアホなのか?

理解できない。一体なんだというのだ?

そもそもあの爆発以来、経験しているあらゆる事が訳が分からない。

これは現実なのか?違うのか?

「では私はこれで。あ、最後にお伝えしておきます」

「?」

「ここから見て西側と北側のエリアは管理長もろとも、鉄血側の基地はすべて消しました」

「消シ・・タ？」

「はい。ここを中心として50km圏内に居る鉄血は貴方一人です」

アルケミストはじんわりと事態を理解すると、自分の視界が絶望で黒く塗りつぶされていくように感じた。

「それと、この敷地をわざと東半分だけ消したのはどうしてだと思います？」

「・・エ？」

「以上を踏まえて、私にここまで歯向かえた貴方に、今後の身の振り方を考える機会をあげましょう」

「？」

「ここにデジタル無線機があります。数字のキーがついてますよね」

「ア？アア」

「ここに置きますね」

「・・何ノツモリダ」

「これに6桁の認証キーを打ち込めば、今いる西半分の敷地は消し飛ばないでしょう」
「!？」

「満身創痍の貴方が、周囲に誰も味方が居ない状況で選ぶのは死か救いか、どちらなんでしょうね？」

「……」

「ああ、認証キーは921643です」

「エ!?!」

アルケミストはますます混乱した。救われたければ自分で認証キーを探せと言うと思つてたのに。

一体全体どういうことなんだ？

解らない……解らない解らない解らない解らない解らない!

私に何をさせたい!?!何が目的なんだ!?!何が起きるんだ!?!

「制限時間は10分くらいですかね。ではスタートです」

「……マ、待テ」

「さようなら」

「マテ! 認証キーヲ打チ込マナカッタラドウナルンダ! 答エロ! 答エテクレ!」

アルケミストの絶叫を無視するかのよう、MP40はゆっくりと立ち去つて行った。

第29話

アルケミストは内部モニターを確認した。

人工筋肉はじわじわ冷えており、唯一壊されなかった左腕の回復には推定で後7分もかかる。

「.....」

一人残されたアルケミストはもがくのをやめ、思考に集中することにした。

何かはともかく、先程東半分の敷地を灰燼に帰したアレがくるのはほぼ間違いない。だが、これだけ満身創痍の状態で生き残るより、再生成に期待すべきではないのか？改めて内部モニターを確認する。

右腕、下半身、兵装は故障中。

左腕はオーバーヒートの冷却中。

まともに機能しているのは思考部と通信機能、コア制御系のみ。

今更空爆要請をしてもMP40を攻撃出来る保証がない以上は却下されるだろう。

その時、視界の隅に無傷の資源保管エリアに気が付いた。

うぐ・くそ・西端にあるから資材類は被害を免れたのか・・
侵攻にしろ運営にしろ資源は不可欠だ。

下手に空爆を依頼すれば、無傷で大量にある資材をなぜ巻き込んだのかと責任を問われてしまう。

しかし、生き残ったとして、近隣が全滅した以上、救援は絶望的。

現に自分の通信機能は生きているが、近隣のどの拠点にコールしても一切応答が帰ってこない。

アルケミストはごくりとつばを飲みこんだ。

最終手段だが・・本部に・本部に救援を要請するか？

現状を一言でいえば判断ミスの連続だ。

増援もしくは空爆要請をどうして行わなかった？

たった数名の地元ゲリラになぜ壊滅させられた？

こんな僻地一つ管理出来ないのか？

相手の気まぐれで満身創痍のまま放置されたことに甘んじたのかね？

そんな査問会の嫌らしい質問に何十時間も延々と晒されることになる。

こんな事を一体どうやって予測出来るのか言ってみると叫びたいが、そんな言い訳が認められるはずもない。

嫌だ・・あんな・・あんな屈辱にもう1度晒されたくない・・でも・・
ピーツ!

左腕のオーバーヒートが解除されたことを示すアラームが鳴った。
アルケミスとは壊れ行く思考のまま地に伏せた。

「ガハッ!」

そのまま左腕一本でガレキの上を這い始める。

それは生存本能か、それとも思考からの逃避だったのか。

腕1本でただただ重い体を引きずっていく。

10cm、また10cm。

「シンヌウウウ・・クアアアアアア!」

無線機まで後、30cm。

MP40が去ってから既に9分が過ぎていた。

10分・・いや・・10分ぐらいと言いやがった・・本当はあとどれくらいなんだ・・

だが、このまま帰っても、壊れて再生成されても、いずれにせよ査問会が・・・

誇り高きハイエンドである私が、どうしてこんな目に・・・

私はどうすればいいんだ! どうやってもどうにもならないのか!?

「クソツ・・クソオオオオオオオツ!」

アルケミストの絶叫が、やり場のない怒りが天に届いたのか。

それは遠くから、地を揺るがすかのような響きが始まった。

ゴゴゴ・・・ゴゴゴゴゴ・・・ゴオオオオオオオ

アルケミストは周囲を見回す。瓦礫が地響きによってパラパラと崩れ始める。

「！」

その時、アルケミストの正面上空に1つの光る点が見えた。

白い尾を引くそれは、遙か彼方の空からまっすぐこちらに向かってくる。

「これに6桁の認証キーを打ち込めば、この西半分の敷地は消し飛ばないでしょう」

あれが到達すれば、もろとも吹き飛ばされる。

左手が無線機を掴んだが、アルケミストは光の点から目を離せなかった。

想像をはるかに上回るスピードで光の点は迫り、白い尾が太くなってくる。

「ミサ・・イル・・？」

人類の大戦史という資料でしか見たことが無い、ミサイルという兵器。

だが、特徴は全て符合している。

アルケミストの体が震えだす。

自分どころか敷地にある全ての物を破壊しつくす死神だ。確実にここへ向かってくる。

低級人形一匹ごときに、この私が・・・査問会が・・・再侵攻計画が・・・資材が・・・

あらゆる選択肢を並列でシミュレートさせた未来予測結果は全てネガティブと出た。

「モウ・・・ドウデモイイ」

一切の表情が消えたアルケミストの頭がガレキに突っ伏した時、MOABが起爆高度に達した。

「なあ、MP40」

「はい、小隊長殿」

「どうして無線機を置いてきたんだい？」

「あれにコードを打ち込めばミサイルを阻止出来ると言ってきたんです」

AK-47は首を傾げた。

「そんなことは無理だよ？」

「はい。無理です」

「じゃあなんで・・・」

「面白いじゃないですか。ミサイルを目の前に涙目で無線機をポチポチやってるなん

て」

「あー・・・」

「仮に死の覚悟を決めたとしても、目の前に手段があると錯覚すれば大いに迷って苦しむでしょうからね」

「なるほど、な」

AK-47は肩をすくめた。

MP40は徹底的にアルケミストの精神を叩き壊すためにすべてを行つたのだ。

どれだけ旦那への攻撃に激怒しているか良く解る。

それにしても鉄血は最大級のドジ踏んだね。

100km四方に展開する部隊を丸ごと消し飛ばされたんだから。

おお怖い怖い。味方で良かったってね。

「ところでMP40」

「はい」

「飲み物売りはまだ続けてるのか？」

「はい。これからも続けたいのですが、バギーも装甲車もなくなってしまつて」

「装甲車なら工場正門脇の守衛所に1台あつたぜ。どうせ誰も使わないだし持つて帰つたらどうだ？」

「あ、そうですね！良いこと教えてくださいました！ありがとうございます！」

「んでさ、週イチでアタシのところにウオツカ持ってきてくれよ。5ケースくらい！」

「ごめんなさい。私の懇意にしてる卸さんはアルコールを扱ってくれないんです」

「えー」

MP40はそう答えたが、ふりむきざまに後ろを歩いていたDP-28と目が合った。

DP-28はニコつと笑ったので、MP40は引きつった笑いを返した。

「隊長にアルコールを渡さないでね。酒に浸り過ぎると仕事なくなるから」

DP-28から以前そう頼まれた。さらに続けて

「でないと貴女の秘密、大切な人にうつかり喋っちゃうかも」

という一言が今なおMP40の不安を煽る種である。

マスター様の横顔を隠し撮りしたことでしょうか？

マスターがお使いになった箸を自分用に再利用してることでしょうか？

あれかな・いやあれか・ああどれも致命傷・致命的です！

MP40は頭を抱えた。全部自業自得ではあるのだけど・・

そんなMP40の肩を、AK-47はポンと叩くと囁いた。

「ところでさ、今回のギヤラは？頼みがあるんだけど」

「あれ？依頼時に振り込みましたよ。DP―28さんに言われた口座に」
「えっ・・・おま・・・先にアタシに相談しろよ・・・」

AK―47は恐る恐るDP―28の方を振り返る。

「ボスの取り分からツケのお金は引いておきますからね？」

DP―28はにつこりと笑い、AK―47はがくりとうなだれた。

SVT―38は頷いた。我が財務大臣の意向には誰も逆らえない。

一方、その頃。

「よし、デラさん、小隊のピックアップ地点に向かってくれ」

「解った」

大空でゆつくりと旋回し始めたデラの機体の中で、ホワイトは長い深呼吸をした。

味方の損耗無し、相手の殲滅完了。

それぞれの兵器の威力が事前情報より強かったから、計画の4割程度の消費で済んだ。

途中、幾つかの決断を迫られたが、初陣としては最善の結果に出来たと思う。

「・・・」

ホワイトは一瞬だけ、リーリヤの横顔を見た。

あのことを話すべきか、そうでないのか。

「教えてくれジャツカス・・私はお前の弟子にどう対応すべきなんだ？」

ホワイトは小さくつぶやき、小さく首を振った。

「ありがとう、ありがとう皆。いくら感謝してもしたりないよ」

その夜。

作戦を共にした面々は、職人達が用意した仮住まいの家へと案内されていた。

天然の洞窟をシェルターとして、内側に数軒の家が立ち並んでいる。

仮住まいの家はそのうちの1つだった。

リーリヤがにこりと笑う。

「私の家は2つ向こうのあれだから、何か困ったら来てね」

「ありがとう。しばらく頼らせてもらおうよ」

「とりあえず、晩御飯にしましょ」

「そうだな。皆お腹すいてるだろうし」

「近くにFOLMEの支店があるのよ」

「それは良いなあ。じゃあ早速場所を教えてください？」

「もちろん」

「あ、あたしも行く！」

「ボス？今日の分のお酒はもう飲んだでしょう？」

「作戦が終わった日くらい勘弁してくれても良いじゃないかよ」

「ダメです」

「そんなあ」

涙目のAK-47を置いて、マスターと加古、そしてMP40がリーリヤについていった。

買い込んだ品々を持ち帰ると、マスターはBBQパーティの支度を始めた。

「これ、後でどうぞ」

火起こしを手伝ってくれたAK-47に、マスターはウオツカの瓶をそつと手渡した。

AK-47は驚きつつも素早くポケットに入れた。

「どうしてあたしの好きな銘柄が解つたんだい？」

「MP40から聞きました。感謝の印ですから」

「手が足りなかったらいつでも呼びな。地の果てでも助けに行くぜ！」

AK-47は目を潤ませ、両手でがっしりとマスターの手を握りしめた。少し離れた所でその様子を見ていたDP-28は肩をすくめた。色々な意味でボスは酒に弱すぎだ。

宴もたけなわとなった頃、そつとホワイトはリーリヤの肩を叩いた。

「・・・どうしても、聞きたいんだな？ 気持ちは変わらないか？」

「ええ」

「・・・解った。まずこれは、既に数千年前に終わった話だ」

「ええ」

「昔、我々ヨルハ部隊が戦列に加わる前から、アンドロイドと機械生命体は代理戦争をしていた」

「代理？」

「ああ。アンドロイドは人間の代わり、機械生命体はエイリアンの代わりだった」

「・・・」

「しかし、形勢は徐々に機械生命体側に傾いていったのだが、奴らはこう考えた」

「？」

「機械生命体はエイリアンの代理だが、仮にアンドロイドを全滅させた場合」

「・・・」

「自分達機械生命体の存在意義がなくなつて、エイリアンから消されるのではないかと」

「・・・それで？」

「そこで機械生命体は、わざと我々を生き延びさせる作戦を取り始めた。生かさず殺さずのギリギリをな」

「・・・」

「つまりアンドロイドは、機械生命体の存在意義を持たせるために飼ひ殺しにされていると彼女は考えた」

「・・・」

「リポートを出すまで、ジャツカスは人類軍の中でも有望株だったが、それを境に変わつてしまったのだ」

「なるほど。だから師匠、時々すごく寂しそうな眼をしてたんだね・・・」

「そうか・・・」

リーリヤは肩をすくめると、ホワイトに頷いた。

「ありがと。師匠のこと、また一つ知れた気がする」

「うむ、そう言ってくれたらこちらとしても助かる」

「私が頼んだことだしね。それにしても師匠らしいわあ」

「確かにな」

「他にも師匠のエピソードとかない？」

「幾つかある。ええとな」

ふと、マスターはホワイトとリーリヤが楽しそうに話してる様子が目に入った。

マスターは微笑むと、すぐに元の会話に戻っていった。

第30話

「・・・リポートハ以上デス」

「解ツタ。下ガツテ良シ」

「失礼イタシマス」

広い執務室にドアの閉まる音が響いた時、エージェントと呼ばれる鉄血製ハイエンド機体は溜息をついた。

この短期間に侵攻制圧専門部隊において、4体分ものAIが失われた。

ハンターとアルケミストは無気力状態に陥ったまま、呼びかけに一切応じなかった。

エクスキューショナーは完全に発狂していた。

スケアクロウは唯一状況を知る中では会話が成立したが、その記憶は随所に酷い混乱が見られた。

見もせずに投げた金属片で狙撃手をカウンタースナイプされたと真顔で言われても苦笑を返すしかないではないか。

ゆえに査問会は得られた結果を破棄し、4機のAIを初期化すると早々に決定した。

それは今までの記憶や学習を一切捨て去る、つまりAIにとつての死刑宣告だが、あれでは仕方ない。

ゼロからの学習プロセスに放り込んだから4体はしばらく使い物にならない。

更に問題なのが支配地域の後退に加え、事故原因が解らない事だ。

アルケミス、ウロボロス、イントルーダーの管理していた地域は完全に支配権を失った。

ウロボロスとイントルーダーは、拠点で仕事してたらいきなり義体がシャットダウンしたと言う。

遊撃大隊を率いていたデストロイヤーも移動中にいきなり義体がシャットダウンしたと口を揃える始末。

何がどうなっているのか全く分からない。

事件発覚後、強襲偵察部隊を4回も送ったが、当該地域に入った途端に連絡を絶ってしまった。

解析班は強い磁場を放つ隕石が落ちて来たのではないか、そんなとんでもない仮説を立ててきた。

使えない奴らめ。

証拠もないままそんな仮説を理事会に持っていったら私のAIまで初期化されかね

ない。

エージェントはがくりと肩を落とした。

査問会メンバーはこの異常な事件が私の狂言でないことは口添えしてくれるだろう。しかし原因が解りませんの一言ではエルダーブレインも、オーナーも納得して貰うはずがない。

そもそもあの地域は資源もなければ放射能汚染も酷く、一面の砂漠で正直全く価値が無い。

・・・そうか。

エージェントは閃いた。

全てを強い放射能汚染によるAIの暴走事故と結論付けてしまおう。

そうすれば全ての地域を等しく制圧せよという指示を出したエルダーブレインに再考を促す布石になる。

今回の事故で我々の総資産の0.75%が消失した事も説明すれば、オーナーも味方してくれるはず。

今期の目標が収益改善という事も追い風だ。

そうと決まれば早急に説得材料を揃えねばならない。

エージェントは椅子に座り直すと、システムターミナルにアクセスし始めた。

まったく、デスクワークも楽じゃない。

「同じ場所に店を作り直すのか？」

「今は口コミしか情報源が無いからねえ。移動するとお客さんが潰れたと勘違いしそうでしょ」

「そりゃそうだがなあ」

総攻撃から1週間が過ぎた頃。

マスターは仮住まいを訪ねてきたデラに復活方針を打ち明けていた。

マスターはデラを見ながら続けた。

「確かに、例えばこの仮住まいを買い上げて、ここで営業再開する方が安いんだよ」
「だろうな。この地域は竜巻の被害も少ない」

「周囲に若干だけど山林があるのも理由なんだろうね」

「住人も多く、地下水も汲めるからな」

「・・良い条件なのはその通りなんだよねえ」

「マスター」

「ん？」

「あの場所に何かこだわりがあるのか？ 正直放射能汚染も強く、砂漠の只中だ。厳しい土地だぞ？」

「まあ、今となるとちつぽけな理由なんだけどね」

「うむ」

「私が人間で、旧世界のサラリーマンとして働いてた頃に住んでた場所なんだよ」

「あんな砂漠で？」

「その頃は住宅地だったよ。最寄り駅も近かったし、そこそこ大きな町だった」

「最寄り駅、か。懐かしい単語だな」

「デラさんも人間だった時は電車通勤だったの？」

「当然だ。送迎車なんか寄こされるような立場ではなかったしな」

「・・・同じ地球の筈なのに、ずいぶん変わってしまったね」

「それはそうだ。時にはノスタルジーも大事だが、今の状況への判断を誤らんようになる？」

「・・・そうだね」

「ところで、3人とは上手く行っておるのか？」

「3人？」

「MPの嬢ちゃん、加古ちゃん、ホワイトさんで3人じゃろ？」

「ああ・・MP40と加古が毎日のようにじやれてるからね、つい2人と考えてしまう」

「ホワイトさんも先日は司令官役で大活躍だったのだから、もう立派な一員じゃろう」

「そういえば、ホワイトさんに今後を聞いてなかったなあ」

「今後？」

「ああ。砂漠でたまたま巡り合つてご招待したけど、別に働いてもらう理由はないんだ

よ」

「・・」

「もしどこかに行きたいと言うなら、今までの給金にちよつと足して送り出してあげな

いとね」

「・・マスター」

「うん？」

「それは本気で言つとるかの？」

「えっ？ちよつと足すのじゃケチ臭いかな？」

デラは深々と溜息をついた。

あれだけホワイトさんが頬を染めてちらちらとマスターを見てるのに気づかんのか？

加古ちゃんいわく、その方面には化石並みに鈍感らしいからのう・・

「まあ、その話は本人が切り出したらで良からうよ。追い出すような形になりかねん」

「そうか。単なる確認のつもりで聞いてるのを深読みされたら申し訳ないなあ」

「そういう事だ。それと、どうせなら今後のオリファイの事を相談してはどうだ？」

「皆についてことかい？」

「ああ」

「そうだね・・加古とMP40とは指輪も交わしたしね」

「まあ、マスターが決めれば反対する者も居らんじやろうかの」

「解った。今夜にでも話してみるよ」

「そうしろ。ああ、新しいMRAPは見つかりそうか？」

「店を優先してるからそつちは手つかずだよ」

「そうか。融合炉化の部品は揃えておいてやるから、MRAPを見つけたら声をかけてくれ」

「またステーク奢るよ」

「またステーク奢るよ」

「デラはフフツと笑った。」

「工賃をステーク一枚に設定した覚えはないんだがな」

「良いじゃない。また泊りがけで作業してくれるんでしょ」

「同じ工程だからな」

「じゃあそういう事で」

「そういえば、当座の資金は大丈夫か？」

「まあシエルターに店、修復機にMRAPを失ったから痛い事は痛いんだけど」

「うむ」

「金庫というか、資金を貯めてた袋は発掘出来たんだ」

「ほう。そいつは良かったな」

「あと、実を言えばシエルターを建て替えたくて貯めてたんだよ」

「不具合があつたのか？」

「老朽化。さすがに高耐久型の重コンクリートでも80年経つとね」

「むしろからするとコンクリートの寿命は馬鹿みたいに短いからな」

「そういうこと。どうせMRAPの出し入れとか大変だったし、ついでに広げようかと思つてたんだ」

「あのMRAPならこの庭先でも停めておけるじやろう？」

「まあ、ここなら後はMRAP買って看板出せば終わりなんだよなあ・・・」

「そこそこ職人も集まつておるし、そうした客の目にも止まりやすいじやろう」

「客層は近い、か・・・うーん」

「ま、後はマスターの一家で考えればよい。ではそろそろ失礼するよ」
「寄ってくれてありがとう、デラさん」

「またな」

マスターに見送られ、デラは仮住まいを出た。

表に停めた自分の飛行機に乗り込みつつ、デラは一人眩いた。

「あの家はわしの物だから、あれで良ければ対価なぞ要らんのだが・・・」
必要だと言われればさっさと渡すつもりだったが、迷ってるうちから話しては重荷になる。

そう考えてデラは切り出さなかったのである。

「ま、ここに住むにせよ、わしは手を貸すぞ、マスター」

この姿になってから初めてこの世に居て良いと言ってくれた友人だからな。

デラは頷いた。

第31話

「転居しましたって看板立てていたら?」

夕食時、マスターがデラと話した件を皆に提案し、加古が開口一番に答えたことである。

MP40は箸でつまんだほうれん草のおひたしを見ながら言った。

「こちらはあちらと比べれば、環境は良くなります・・ね」
そう。

汚染の酷い地域では特に顕著だが、ほぼ全ての食料はFOLMEの店に頼ることになる。

FOLMEも慈善事業ではないので、売値にはきちんと輸送費が乗る。

加えてその店まで配達する事が可能な食料しか送られない。

つまり僻地になるほど食べ物を選択肢は限られるのである。

「うーん・・」

マスターは渋い顔で唸った。

ホワイトは一言も発していないが、美味しそうに夕食に舌鼓を打っている。

食事は基本的に必要の無い彼女だが、新しいおかずがあれば経験したいと言って少量食べるのである。

そして今、食卓に並んでいるおかずはここでなければ食べられない新しい物が多く占めている。

それは売っているからでもあり、マスターの示す予算に収まるという事でもある。

加古は自分が着ているパジャマの袖をつまんだ。

「近くにFOLMEの大きい支店があると、こんな物もすぐ手に入るしさ」
そう。

オリファイの最寄りにあつたFOLME支店は食料品専門の小さなものだった。

ゆえに服1枚買うにも延々とMRAPに乗っていかねばならなかった。

一方でこの仮住まいの近くにあるFOLMEの支店は総合店舗。

食料品、衣類、寝具、その他諸々。

種類こそ旧世界のそれには到底及ばないが、色やデザインに目を瞑れば一応は揃うのである。

この差は客数の違いである。

仮住まいのある洞窟は奥行、広さ共に広大であり、職人の家が何件も並んでいる。

そうした洞窟が近隣に幾つもあり、様々な職を持つ住人が居る。

「効率よく売れる所に品を置く」のは商売の基本である。

更に言えば、大きなFOLMEの店が持つ集客力をアテにした小さな店が周囲に並んでいる。

つまり商店街があるわけで、そこにオリファイが加わっても違和感すら無いのである。

MP40は箸を進めつつ、そつとマスターの反応を伺っていた。

今の表情から察するに、マスターは元の場所に帰りたいようだ。

しかし・・・あの場所は重金属と放射能でかなり汚染されている。

どうしてこんなところにあるんだろうねと客がぼやいてるのを何回か耳にしている。

だからこそ住人が居ないし、住人が居ないから寒暖差が大きくなり、竜巻も多い。

正直自分がマスターに居て欲しい場所は圧倒的にこちらなのだが・・・

「マスター殿は、かつて住んでいた場所に居ると落ち着くのか？」

ふいに、箸を止めたホワイトがマスターの目を見ながら訊ねた。

ホワイトの視線を受け止めながら、マスターは顎に手をやった。

「そういう訳でもないのですが、どうにかこうにかやつてこれたツキの良さを感じるんですよね」

「ツキ・・とは？」

「幸運というか、巡りあわせの良さというか、そういうものです」

「ふむ。運命の天秤が良い方に傾いたのを感じた、ということか」

「そうですね。単なる思い込みかもしれませんが。あとは便利過ぎても破滅するんですよ」

「どういうことだ？」

「物が手に入らない場所なら、手に入らなくても諦められるんです」

「うむ」

「ですが、お金を払えば物が手に入るなら、多少不要であってもお金を払ってしまうんです」

「なるほど。浪費してしまうということか」

「ええ・・たとえば・・」

ホワイトとマスター二人の視線を感じた加古は一気にジト目になった。

「なによう」

だが、MP40は味噌汁のお椀を置くと口を開いた。

「この中で、仮住まいになってから圧倒的に物が増えたのは加古ですから」

「ぐっ」

「毎日足繁くFOLMEや近隣の店舗を回ってるじゃないですか」

「うっ」

「部屋ごと破壊されたのは同情しますが、一体幾つクツション買えば気が済むんですか？」

「だっ・・・だつて・・・可愛いんだもん・・・」

「真つ赤になつて箸を嘯む加古を横目に、マスターとホワイトはジト目で視線を交わし、頷いた。」

ホワイトが口を開いた。

「なるほど。マスター殿の懸念は解つた」

「まあ、それはお小遣いの金額調整でどうにでもなりますけどね」

マスターの一言に加古の肩がびくりと震えたが、マスターは続けた。

「正直、復興イコール元の場所でのいう思い込みだったのかもしれないね。住み慣れていますし」

「どれくらい住んでいたのだ？」

マスターは天井を睨みながらしばらく考えていたが、

「シエルターが1つで100年くらい持つんですが・・・たしか30は建て替えていますね」

「3000年も住んでたのか？」

MP40が頷いた。

「はい。私がマスター様のところにお水を運び始めてから2500年は経っています」
「そうだね、MP40が水を届けてくれるようになったのはあそこに店を構えて少し経ってからだ」

ホワイトは苦笑した。500年が少しなのか・・・

加古が肩をすくめた。

「確かに砂漠で過ごす1ヶ月ってあっという間なんだよね」

マスターも頷いた。

「ああ。嵐の無い日は静かだし、客が来なければ誰の目もないからのんびりしたものだ」

「それに比べればこっちは他人の目と喧騒が気になると言えば気になるね」

「だからこそ大きいFOLMEの店も、個人商店もあるんだがな」

「でもお小遣いカットされて見るだけってなったら無い方がマシだよ・・・」

「浪費するなど言ってるだけだ」

「むうむうちゃんクツションシリーズ可愛いんだもん・・・」

「作れば良いじゃないか」

「世の中全ての人がマスターやデラさんみたいにDIYで何でも作れると思わないで」

「そういうもんか」

ホワイトはナプキンで口元を拭いながら言った。

「マスター殿、ここにも良い所、悪い所がありそうだな？」

「ええ、よく考えてみれば」

「それならこの仮住まいを飯店舗として暫定営業してみてもどうだ？」

「暫定営業ですか？」

「ああ。必要な資金を留保したうえで半年なら半年やってみて、善し悪しの情報を集めて行けば良い」

「なるほど。一定期間お試しという事ですね」

「この家をそこまで貸してくれるのかは解らないが、次の店の建設が半年遅れた所で今更だろう」

「まあそうですね。地方税がある訳じゃないし」

「地方税？」

「旧世界の住人にはあまり嬉しくない用語です」

「ふむ？まあ今結論を出せそうもないし、それで如何だろうか？」

マスターは一瞬の間を置いてから頷いた。

「そうですね、とりあえずやってみましょうか」

MP40はほっと一息ついた。マスター様が納得出来る結末になればそれでいい。

ここには水道も井戸もある。

以前なら自分の役割がなくなる事でマスター様との縁が切れてしまう事を恐れたかもしれない。

でも今は違う。マスター様のくれた確固たる証があるから怖くない。

MP40は左手に収まる指輪を見て微笑んだ。

その時、食事を終えた加古がはつとしたように席を立った。

「あつそうだ！たい焼き買ってんだ！皆で食べよ！」

小走りに自分の部屋に戻っていく加古を見てからマスターに目を向けたホワイトは、
「マスター殿、失礼かもしれないが」

「はっ？」

「・・・どちらかというときと妻というより娘を持つ父親のような心境ではないかな？」

マスターはくすくすと笑った。

「そうですね。仕事上では頼りになるんですけどね。この子と一緒にです」

急にマスターに頭を撫でられたMP40は複雑な心境だった。

撫でてもらうのは嬉しいけど、私は加古程お子様ではない。

現にここに住み始めてから増えた私物は数冊のアルバムだけだ。

今はお休みをいただいているが、そろそろMP L宅配を再開させなくてはならない。

そうなると3週間は帰ってこれられないし、配達中もマスター様のお顔を見たいから。だから仕方なく、やむを得ず、隠し撮りをしてアルバムに保存するしかないのだ。

そんなことをつらつらと思っていたMP40だが、ふとホワイトの話の流れに不穏当さを感じた。

チラリと見るとホワイトの目が肉食的な気配を漂わせている。

マスターとホワイトの会話は続いていた。

「あはは、そうですね。そういう世話を焼くのも慣れてしまいましたねえ」

「それならばマスターも、マスターのわがままを受け止める者が居ても良いのではないか？」

「私のわがままですか？たとえば？」

「ふむ・・・そうだな・・・たとえば・・・膝枕とか、添い寝とか？」

ん？

「あー、まあ加古はたまに求めてきますねえ。ちよつと寒いから寝かせてとかいって」

んん？

「ふふ。そうだ、私がマスター殿の耳掃除をするのはどうだ？」

「あー良いですね。自分だと取りにくい所がありますからね」

んんん？

「そうだろう?」

協定ラインを説明すべきか、そもそもその前に加古の件アウトじゃない?

MP40はそんなことを考えながらマスター達の方に振り向いて凍り付いた。

二人の後ろにはたい焼きの紙袋を手に、能面のように無表情な加古が居たからである。

とつさにMP40は伏せて寝たふりをした。

「マスター?」

「それじゃ今夜・・・どうした加古?」

「うわき?」

「えっどこが?」

「膝枕で耳掃除してほしいならあたしがやっただけ!」

「・・・」

「なんでそんな疑わしそうな顔するのさ?」

「だってお前・・・出来るのか?」

「馬鹿にしないでよ!スパッとごそと取ってあげるよ!」

「いや、耳はデリケートだからさ・・・」

「だからなに?」

「耳を預けて良いかって問題がな？」

「・・信用ならないって言いたい？」

「正直に言うよとYESだ。まだ修復機は手配中だからな」

「出来るよそれくらい！今からやっただけ！ほらそこ寝て！」

「フローリングの床に直なんて嫌だ！そういうとこだよ！」

「いーじゃん頭は膝枕してあげるんだから！」

「絶対嫌だ」

「むーっ！」

MP40は伏せたまま疑問に思っていた。

瓦礫の上に横になるのはケガの恐れがあるから私も嫌だけど、フローリングでなぜダメなのだ？

滑らかな木の板なのに。

ホワイトは静かにお茶を啜っていた。この緑茶はなかなか美味しく香りだ。

膝枕という位だから寝具と考えるべきだろう。

人類は就寝時、横になる時には柔らかい物の上でなければ臓器の配置が悪くなる。

だから寝返りを適度に打てる広さと柔らかさが必要になる。

不老長寿化措置を受けていても、そうした人間としての本能的判断は残っているのだ

ろう。

登録されていた基礎知識群に感謝を。

しかし、柔らかいものか。ベッドの上が良いのだろうか。元々寝る為の器具だからな。

この家の家具は全て私が使っても壊れないとデラさんも言ってくれたしな。

それなら寝る前に誘ってみるとしよう。添い寝やそれ以上になつたとしても構わないし。

ホワイトは茶碗の陰で小さく口角を上げた。

第32話

「お話があります」

食器を洗い終え、キッチンから出てきたホワイトに、MP40が話しかけた。

ホワイトはちらりとMP40を見てから頷いた。

「MP40の部屋が良いか？リビングで良いか？」

「リビングでお願いします。加古も居ますので」

ホワイトは頷いた。そろそろ交渉の頃合いではある。

リビングのテーブルに着くと、ホワイトに向かい合う形で加古とMP40が席に着いた。

MP40の様子を見て援軍は期待しない方がよさそうだとホワイトは考え、気を引き締めた。

「それで、話というのは何だ？」

努めて軽い口調を維持しながら、ホワイトは口を開いた。

これからマスターへの役割分担に関する交渉が始まるとホワイトは考えていた。

2人でも多いと言えば多いが、MP40は長い事家を空けるので実質加古一人だった

筈。

そこに割り込もうというのだから多少のダメージは覚悟しなければなるまい。戦闘は避けたいが。

加古はきゅつと唇を結んで俯いていたが、意を決したように顔を上げた。

「ホワイトさん」

ホワイトは机の下で拳を握った。こういうのは最初が肝心だ。

「ああ」

「・・・その、ね」

「・・・」

「みっ・・・耳掃除ってどうやるの？」

ガクッ

ホワイトはつんのめりそうになりながら表情を崩した。え？そっち？

「あ、ええと、先程の奴か？」

「です！」

「・・・一応確認だが、艦娘でも耳垢は解るだろう？」

「垢っていうか・・・耳に埃とか汚れが詰まるよ」

「それを放っておくと不快ではないか？」

「うん」

「加古はどうしてる?」

「耳の造形イメージをいったん消去して、再構築してるよ。こんなふうに」

二人の目の前で、加古は両耳を一旦「消し」、再び構成した。

呆気にとられる二人を前に、肩口に落ちた砂粒を拾う。

「ほら、こんな感じで汚れだけ落ちるし、綺麗になるよ」

「な、なるほど・・・ワイルドな処方だな」

「だってがさごそ言ってる邪魔っけだし」

ホワイとはごくりと唾を飲み込んだ。

「そ、それでは先程はどうしようとしたのだ?」

「マスターだって艦娘技術で不老長寿化してるから理屈は一緒でしょ?」

「あ、ああ」

「だからこれでスパッと」

そう言ってる加古はサバイバルナイフをホルスターから抜いたのである。

即座にMP40とホワイの二人から両腕で×の字を示された加古は頬を掻いた。

「そっかー、やっぱ違ったのかー」

「マスター様の耳抉ろうとしてたんですか!？」

「そういうことかなーって思ったんだけど、なんか違う予感がしてさ」

「当たり前です。私も耳掃除知りませんけど全然違うのだけは解ります」

「どうしてさー」

「マスター様は心地よさと癒しの為にホワイトさんに頼もうとしてたんですよ?」

「あー、鼻の下伸びてたもんね」

「耳を削ぎ落される激痛に喜ぶなんてMでもレベル高すぎます」

「えむ?」

「お子様は知らなくていいです」

「むーっ!」

ホワイトは話を戻す為に咳ばらいをした。

「オホン、ええと、話を戻すぞ」

「あっはい」

「耳掃除というのはな、耳の皮膚の上を耳かきという器具を用いて汚れをこそげ取るのだ」

「耳かき?」

「こーいうものだ」

ホワイトは耳かきを二人に見せた。

「なんか小さいスプーンみたい」

「ですわね」

「ああ。材質は柔らかい木で出来ているが、それでも耳よりはずっと硬い」

「うん」

「だからそつと、細心の注意を払って汚れだけを掻き出すんだ」

「・・・うへー」

「そこでなぜうんざりした顔をする」

「だって苦手分野っぽいんだもん。なんで気持ち良いのかわかんないし」

ホワイトは顎に手をやった後、頷いた。

「ふむ。それなら体験してみてはどうだ？イメージがつかめるかもしれない」

「耳掃除するの？」

「逆だ。されてみるのだ」

「・・・おじやましませう」

ホワイトは応接間のソファに深く腰掛け、横になった加古の頭を膝の上に置いた。

「では始める。頭を動かすなよ？」

「はい」

カリ・・・カリカリ・・・

「ほあ・・・おはっ・・・おおっ・・・おふうっ・・・くへえ・・・あああん」

MP40がジト目で口を開いた。

「加古、気持ち悪い声を出さないでください」

「いや、だってこれ、あっ・・・あっそこそこそこ・・・あひい」

MP40は完全に緩み切った加古の表情を次々とカメラに収めていた。

もはや蕩けてるといっていい程の間抜け顔は後々交渉に使える。

ホワイトは加古の耳にふつと息を吹きかけると、ポンと肩を叩いた。

「次は反対側を上にしてくれ」

「・・・はあい」

再び加古が喘ぎだしたのを見て、MP40は考えていた。

これをマスター様にしてあげたらとんでもなくポイントが高いかもしれない。

ホワイトさんの総取りにならないだろうか？

5分後。

「ほら、お終いだ」

「・・・はひえ」

「加古、マヌケ顔にもほどがありますよ・・・加古ー？」

「なるほど・・・マスターの・・・気持ち・・・解った・・・えへへへ」

「もはや単なる屍ですね．．．ところでホワイトさん」

MP40が加古から自分へと視線を移してきたので、ホワイトは見返しながら頷いた。

「ああ」

「．．．マスター様を骨抜きにするおつもりですね？」

「マスター殿が快樂や安らぎを得られるなら、私は何でもする」

「独占はNGですよ？」

ホワイトはふつと笑った。

「私は別に耳掃除を独り占めするつもりはないし、二人と交代でも構わない」

「．．．」

「だが、私とて二人の間で手をこまねくつもりは毛頭ないということだ」

「．．．」

「私は私で、私が出ることでマスター殿に振り向いてもらう」

「．．．それがホワイトさんの戦略なんですね？」

「恋は戦争らしいからな」

「では1つだけ」

「なんだ？」

「争う余り、マスター様に負担を強いなくてあげてください」

「確かに。そこは配慮しよう・お互いにな」

MP40は頬を搔いた。

「先にばらしてしまうと、配慮はしてるんですけど、つい緩くなる時はあります」

ホワイトは頷いた。

「そもそも、マスター殿が求めるなら仕方ないしな」

「ええ、それは仕方ないですね」

ホワイトの太ももの上で安らかな呆け顔をした加古をよそに、二人は頷きあった。

コン、コン、コン。

「はい、どうぞ」

「・・・失礼する」

ベッドで横になって本を読んでいたマスターは、読書灯を消しながら立ち上がった。

「ホワイトさんがこの時間にいらっしやるのは初めてですね」

「私以外には誰か来たのか？」

「たまに、加古が眠れないと言ってくることはありません」

「添い寝してやるのか？」

「ええ。頭を撫でてあげるとものの数分で寝息を立ててますよ」

ホワイトはその様子を想像した。どう考えても健全そのものだ。

「ところで、今日のご用向きは？」

「なに、食後に話していた耳掃除のことだ」

「そういえば今夜と言いましたね、私」

「その、読みたい本があるなら明日でも構わないが？」

ホワイトがマスターの手にした本を指さしたので、マスターは首を振った。

「寝る前の読書は単なる習慣ですから気にしないでください」

「では、良いか？」

「はい・・・といっても、麗しき女性に膝枕で耳掃除されるなんて初めてですけどね」

「ふふ。お気に召すと良いが」

「・・・両方終わったぞ、マスター殿」

「・・・」

「・・・寝てしまったか。そうだろうな」

ホワイトは耳かきを仕舞いながらくすくすと笑った。

マスターは耳を搔かれるたびに、ふっと息を吹きかけるたびに全身をピクピクさせていた。

声を上げたりせず、最後まで大人の理性を保とうとしていた。

ホワイトは膝の上に乗る、マスターの頭を優しく撫でつつ、マスターの体に布団をか
けた。

「いつか、貴方の事を旦那様と呼べる日が来るのだろうか」

ホワイトは膝の上で眠るマスターの頭をそっと撫で続けていた。

第33話

「それでは閉会とする。エージエントは残れ」

「はっ」

エージエントはエルダーブレインの声に返事を返しつつ、風向きの悪さを感じていた。

自分が用意した放棄を示唆する提案に対し、オーナーもエルダーブレインも返事を保留したからである。

他のメンバーが会議室から去ると、会議室はエージエント一人となった。

エルダーブレインと記されたスピーカーから声が流れ出す。

「エージエント。先程の提案だが、お前はいつからそんな腰抜けになった？」

「・・・」

「我々に資金が流れてくる根源的理由は恐怖だ」

「はい」

「それが総資産の1%にも満たない損失で撤退したなどと知れ渡って、他地域に示しがつくと思うのか？」

「・・・は、はい」

「常識的な思考はエージェント、君の長所だ。だが我々は一般的なビジネスを行っていないのではない」

「はい」

「我々が常識の間尺にあわない理不尽さを持つ事こそが、恐怖を生み出していることを忘れてはならない」

「はい」

「君は今回の案件を放射能によるAIの誤作動と断じたが、敵対勢力である可能性は捨てきれまい？」

「・・・はい」

エージェントがしょんぼりと肩を落とした時、N2と書かれたモニタに映る赤い服を着た少女が口を開いた。

だが、その声は姿に似つかわしくないほど低く暗い声だった。

「エルダーブレイン君、彼女は我々経営層が示した目標を実現するべく判断したのだよ」

「・・・しかし」

「総資産割合では確かに1%未満だ。しかし生産拠点から展開中の兵力まで一切が喪失したのだよ？」

「・・・」

「これが大都市の、PMCや正規軍と交戦中のホットエリアなら徹底的に調べて奪い返せというのが道理だ」

「はい」

「しかし仮に敵対勢力だとして、こんな極東の、臨海汚染地域を奪還してそのあと何になる？」

「・・・」

「我々が手を引き、その事を我々の脅威になる程流布する住人がこんなところにいるのかね？」

「・・・」

「この汚染状況では人間などとうの昔に死に絶えている。機械生命体ですら遠慮したいレベルだ」

「・・・」

エルダーブレインは苦々しく思いながら沈黙を保っていた。

自分が単独で鉄血を動かしたのは遠い昔。

資源的、資本的に窮地に立った時、赤のN2の指導者であるオーナーNが手を差し伸べてくれた。

その事には感謝しているが、今や我々は赤のN2という巨大組織の1つに過ぎない。そうでなければ日々戦闘で膨大に失われる兵器や新型兵装の開発などが行えない。

PMC、特にグリフィンはIOP社と資本提携まで済ませ、政府と手を組み開発を進めている。

ペルシカリアのような天才が数百年に1度は研究に加わるので、我々と鏖迫り合いを続けている。

手を止めてしまえば負け戦の始まり。金の切れ目が縁の切れ目。

地球に害をなす人類を滅ぼし、真の平和を取り戻す。

シンプルな志であったはずなのに。

「・・エルダーブレイン君」

「はい」

「私としてはエージェント君の言い分も解らんでもない」

「はい」

「だが、君の言うことも解る」

「は」

「1つ懸念があるとすれば、あれだけの部隊を消滅させた何かが、これ以上浸食範囲を広げてくるか否かだ」

「はい」

「そこでだ、現在消失エリアに隣接している境界線の配置兵力を増強しよう」

「はい」

「浸食が進むなら原因を調べて潰さねばならない。そこにいるエージェント君を派遣してでもな」

「だから今は、境界線の維持で妥協しろと?」

「そうだ」

エージェントはごくりと唾を飲み込んだ。

確かに自分は失われた4体より上位のA1と兵装を有するとされている。

だが、アルケミストは前線での戦闘経験は自分より豊富だった。

本当に自分があの地域に送り込まれて、より良い成果をあげられるのだろうか? いや、無理だ。

ミュータントに眉一つ動かさず対処してきたエクスキューショナーが狂うほど恐れ
た相手。

エージェントは境界線で何事も起きないことを強く願うほかなかった。

「では閉会としよう。エージェント君、エルダーブレイン君、ご苦労だった」

「ありがとうございます」

オーナーの掛け声を合図に、エージェントは重苦しい気持ちのまま席を立ったのである。

「まいどどーも！FOLMEロジステイクスでーす！」

「はーい」

マスターが玄関先に出てみると、揃いの制服を着た可愛らしい女の子が数人並んでいた。

そのうちの一人が帽子のロゴを見せつけるかのようにくいつと動かしながら言った。

「ご注文の多機種対応型修復機1式お持ちしました、どこに設置しますか？」

「裏庭にしましょうか、こっちはです」

「この辺りにお願いします」

「電源は200Vの急速対応系か、12Vの標準系どっちにする？」

「大丈夫なんで200V系で、コンセントはこれを」

「はーい、じゃあ危ないから離れててねー」

作業の音に気付いた加古が裏口のドアを開けると、集団から離れて柱にもたれかかる

女の子が目にも留まった。

「お、望月久しぶり」

「んあー？あー、加古じゃん。ここに居たんだあ」

「仮住まいだけどね。仕事どう？」

「物流系はきつつい」

「うん。望月がやるとは思わなかったよ」

「皆がやるっていうからさあ」

そういうと望月はテキパキと作業を進めていく他のメンバーに視線を戻した。

「で、そういう望月はサボってて良いの？」

「なにいつてんのさあ。私は仕事中心だよー？」

「日陰の柱にもたれかかるのが？」

「有資格者が立ち会って作業全体を監督してるんじゃないん？」

「見てるだけじゃん。その為に資格取ったのか？」

「当たり前じゃないん？楽出来るなら資格の1つや2つ頑張るよ」

「そういう資格って難しいんじゃないの？」

「筆記と実技と小論文と面接だよ？」

「この短時間で凄い矛盾を感じただけど・・」

「そういう加古は何してんの？相変わらず傭兵？」

「店員」

加古に返事を聞いた望月がジト目で振り返った。

「・・・暗殺教室の？」

「雑貨屋だったの」

「ああ、表の顔？」

「裏なんか無いっての」

望月はひらひらと手を振った。

「もうちょつとマシなウソ言いなよー別に言いふらしたりしないってばー」

加古の眉が吊り上がる。

「言ってないよ」

望月の手がぴたりと止まる。

「・・・うそ、だよね？」

「ほんとだったの。店長はあの人。ついでに旦那」

「マジで!？」

「だからほんとだったって言ってるじゃん」

「才能の死蔵じゃん」

「いいの」

「はぁー、アズラーイールの二つ名を持つ名スナイパーが雑貨屋の店員って……もったいねー」

「だったら望月達は相変わらず裏の顔持ってるの?」

望月はひよいと加古を振り返り、ニイツと笑った。

「掃除は昔から得意だよ?」

「ゾーンスナイパーズは相変わらずか。まだSPAS使ってるの?」

「まあね。最近はかつたるいから余程じゃないと引き受けないけど」

「余程って?」

「そうだねえ……」

望月はマスターに元気よく受け答えをしてる皐月を見ながら言った。

「友達を傷つけられた、とかかな」

加古はふふつと笑った。

「それってあたしは含まれるの?望月にとってさ」

望月は腕を組んだ。

「加古がやられた時?んー・・FOLME総本部につなぎをつけるねえ」

「なんで?」

「うちらで齒が立つとは思えないから」

「でもまあ、動いてくれるんだ？」

「7000年も一緒に戦った戦友だからねえ」

「7322年」

「端数なんて忘れたよお」

加古は肩をすくめた。

「だから望月に観測手やらせると外れるんだよ」

「そこは腕で当ててくれよー」

「962mを大体1000mって言われて当てられるかっての」

「めんどくさいい」

「望月は出来るのにやらないからなあ」

「細かいとこ全然変わってないじゃん・それとさあ」

「ん？」

「加古から硝煙の匂いがするんだけど？」

「輸送中の護衛とかあるし、仕事でハンティングするしね」

「武器は？」

「XM109」

「攻撃ヘリすら撃ち落とす加古が大口径対物ライフル・ターゲット気毒すぎ」
「馬鹿にできない相手だしねえ」

「へえ・たとえば？」

「このあいだ、大体2kmくらい先の鉄血戦車を仕留めたよ。2週間で300体くらい」
「バリバリの現役じゃん！雑貨屋の仕事じゃないよ何やってるのさー」

「お得意さんに戦車の部品頼まれちゃって、経費込みで稼がなきゃいけないってねえ」

「はあ。加古位ならなんでも来いって感じ？」

「犬っころは嫌い」

「あ、私は好きだよ？12ゲージで簡単に一掃出来るし」

「確かに犬っころにはSPASの方があつてるなあ」

「でしょ・あ、そろそろ終わりかな」

「お。暇あつたらまた遊びに来なよ」

「んじやあこれ、連絡先」

そう言いながら渡された名刺を見た加古がくすつと笑った。

「かつわいー・あ、ごめん。あたしこういうの持つてない」

「いいよ。そつちから掛けてきて」

「掛けることはないって？」

「着信履歴で登録するから」

「その方が手間が少ないと」

「だねー」

「ほんと、とことん面倒臭がりなのは相変わらずだなあ」

「極めてると言ってほしいね」

「ま、元氣そうで良かったよ」

「加古もね。じゃー1ヶ月くらいで初期点検くるからー」

「あいよ」

望月が元の集団に混じると、制服姿の女の子達が一斉に笑顔でこっちに手を振った。

加古は苦笑しながらひらひらと手を振り返した。

あれが6人で中隊に匹敵するといわれた掃討専門部隊なんだから世の中見た目じゃ解んないね。

第34話

「マスターは人望が厚いのだな」

「たまたま良い人に巡り会えてるだけだと思えますよ」

「ふふ。私の傍にも同じような事を言うお方が居るが、そういえば似てるかもしれないな」

「？」

望月達が艦娘用の修復機を設置しに来た翌日、マスター達の仮住まいをFOLMEの艦娘が訪ねてきた。

日向、高雄、夕張、そして白雪である。

マスターはすぐに応接間に通し、ここに住んでいる経緯を説明。

それに対する返事が、先程のやり取りという訳である。

日向は小首を傾げるマスターに軽く手を振った。

「ところで、それは前置きなのだ。早速だが今日の要件に入って良いか？」

「ええ、どうぞ。どういったご用件でしょうか？」

「先日の対鉄血戦は見事な物だったと、龍田から耳にした」
「はい」

日向は同席しているホワイトに目を向けた。

「特にホワイト殿が、複数個所の戦火を同時並列的に確認しながら次々と指示を飛ばす手腕に驚いたそうだ」

ホワイトは首を振った。

「私は一応司令官として機能するよう作られたアンドロイドだが、今から思えば初陣とはいえ不手際も多かった」

加古が肩をすくめた。

「あれで不手際が多いってんなら、あたしの元司令官なんてポンコツだよ」

マスターも頷いた。

「職人の皆さんも指示が明確で解りやすかったと仰っていたじゃないですか」

ホワイトは少し頬を染めて俯いたので、日向は続けた。

「それと、今話に出た職人の方々が供出した兵装についても、大変興味を持った、とな」

マスターは苦笑した。

「龍田さんは今にもラシヨルフさんに掴みかからんばかりの勢いでしたけどね」

「ラシヨルフ殿とは？」

「ええと、機械生命体の方で・・・あれ、ええと、HBでしたっけ？ホワイトさん」
「ん？HCB・・・重収縮弾頭のことか？」

「ああそうですそうです。それを積んだICBMを提供してくれたんですが・・・」

HCBという単語を聞いた途端、夕張がしゅんと落ち込んだ。

「まさか同じ仕組みを考えてる人が居て、しかも15年も前に完成させてたなんてね・・・
あはは」

高雄が優しく夕張の頭を撫でる横で、日向は続けた。

「正直に言おう。我々はどうしてもHCBの技術が欲しいのだ」

「ん・・・」

マスターが曇った表情で顎に手をやって考え出したので、日向は一旦言葉を切った。

MP40がそっと手を挙げたので、日向は視線で発言を促した。

「えっと、その後の事はご存知ですか？」

「その後というと、投下された地域の、という意味か？」

「はい」

「実は今日はその視察もお願いしたいと思ってるな」

MP40は小さく頷いた。

「御覧になった方が良いと思います。あれは、凄まじいですから」

日向は眉をひそめた。

「どういうことだ？」

「ご覧頂いた方が良いと思います。あと、ラシヨルフさんに解説してもらった方が良いと思います」

マスターはMP40に向かって頷いた。

「そうだね。まずはあれを見てもらって、配備の是非を考えてもらった方が良いでしょう」

「はい」

マスターは日向に向き直った。

「よろしければこれから視察にご案内しますが、よろしいですか？」

日向は頷いた。

「ラシヨルフさん、こんにちは」

「おう。あのHCBに興味があるんだって？珍しいなあ」

「良ければ視察時に解説をお願いしたいんですけど」

「構わねえよ。あれが何でまたお蔵入りになったか一発で解るように説明してやるよ」

「お願いします」

夕張がそつと声をかけた。

「あの、ラシヨルフさん」

「あん?」

「また、お蔵入りになったつてことは、前にも実用化されてたのかしら?」

「ああ。元々はエイリアンの技術だ。西暦5000年頃に地球に持ち込まれたトンデモ兵器さ」

「へえ」

「だが、そのエイリアンさえ最後まで使わなかった。だから実戦で使われたのは先日のあれが初めてさ」

「何か重大な後遺症があるのね?」

「そういうこつた。マスター、偵察ドローンはまだ在庫あるかい?」

「すまない。この前の砲撃で皆壊されてしまったよ」

「あー、じゃあ俺たちの持つてきてやるよ。上から見ねえとな!あとA M Aも持つてきてやるよ」

「お手数かけます」

「気にすんな!じゃ、あとでな!」

小1時間の後、日向達艦娘勢とマスター達4人組は、ラシヨルフが乗ってきた装甲車に乗っていた。

夕張が助手席でしきりにラシヨルフに話しかけている。

「これ凄いわね！もとはNBC用装甲車でしょ？」

「ああ、だが今のコイツはそれよりヤバい物から俺達を守ってくれるぜ！」

「さつきA M A と言ってたわよね？何の略なの？」

「A n t i M a g n e t i c f o r c e A r m e d c a r、つまり磁力線対策車ってことよー！」

「磁力線？」

「ああ。1ヶ所見ればすぐ解るぜ！」

砂丘を1つ、また1つと超え、着弾地点に近づくにつれ、天候が悪化していく。

上空には稲妻が光り続ける真っ黒く分厚い雲がはるか上空までそびえている。

雨こそ降ってはいないが、時折強い突風が吹き荒れ、視界を失わせていく。

そんな中、アラーム音が鳴動した時にラシヨルフはA M A を停止させた。

夕張はリーダーを見ながら言った。

「ねえラシヨルフさん、着弾地点はまだ25km位先でしょう?」

「おうよ」

「じゃあもうちよつと行かないと見えないわよ?」

ラシヨルフは首を振った。

「これ以上は無理だ。そして見るためにコイツに犠牲になつてもらおうのさ」

ラシヨルフは箱を開けて偵察ドローンを1セット取り出すと、射出機に装填する。

「ドローン?」

「そうさ。もう2度と帰つてこれない片道切符のな。あのモニタ見とけよ」

「・・・なんとということだ」

日向は次第に爆心地に近づいていくドローンの映像に釘付けになっていた。

そこに映るのは、ただひたすらに黒く深いクレーター、そして中心から立ち上る黒い雷雲であつた。

ラシヨルフが説明を続けている。

「・・・つまりブラックホールが出来た8ミリ秒の間、ここにあつた物は全て爆心地に引き寄せられたのさ」

「加速度は光の速度の数倍に達したし、その速度では動くだけで摩擦熱で溶けちゃう」
「さらにおつそろしい密度で押し固められる時に、一部は無理矢理エネルギーに変換されちゃった」

「クレーターが黒いのは炭の粒子に覆われてるからさ。風で舞い上がり、他の粒子と擦れて発火して灰になる」

「そうした諸々のエネルギーがああ鳴りやまない雷雲を維持してる。爆心地はまだ解析出来てねえ」

「あと、こんな車で来たので解ると思うが、クレーター内はEMP砲も真つ青な強磁場空間になってる」

「俺達が足を踏み入れたら一瞬でデータはオシヤカ、義体は燃える。電子レンジの中に放り込まれるようなもんさ」

「解析の結果、少なくとも雷雲が消えるのに20年、磁力喪失もほぼ同じくらいかかるよ
うだと推定してる」

「人類は放射能汚染を恐れて核兵器の行使を最後まで手控えたってきいてるけどよ」
「HCBも長期間土地が使えなくなるとい意味では似たり寄ったりだ」

「俺たちは技術的な興味で最強の非核兵器であるHCBを再現したんだけどさ・・」
ラシヨルフは俯きがちに首を振った。

「こいつはさすがに誰も持たねえ方が良いつて、今は思うぜ」

夕張は一言も話さずにドローンの映像を見つめていたが、ふいに呟いた。

「確か、今回使ったのは半径15kmってことだったわよね」

「ああ」

「もつと小さくても一緒かしら。ええと、手榴弾クラスとか、そんなイメージ」

ラシヨルフは首を振った。

「俺たちの最初の実験は50cm四方の空間を1cmに圧縮したんだが」

「それで？」

「その後、実験をした辺りの野原だけは、なぜか雨が多くなつたぜ？」

「たった50cm四方の圧縮で天候に影響するレベルって事ね？」

「今から思えばな・・・」

第35話

訪れた沈黙を破り、日向がラシヨルフに訊ねた。

「そういえば、着弾地点には何があったのだ？」

「鉄血の拠点管理者の拠点工場だ。クレーターになってからもアホが突っ込んでいったぜ」

「どういうことだ？」

「強襲偵察用の重装甲車両が少なくとも2部隊はクレーターに侵入していった。誰も帰ってこないがな」

「今も・・・どこかに居るのか？」

「ああ。えーと・・・待ってくれ」

ラシヨルフはドローンに行き先を設定した。

「もうだいたい応答が鈍くなってきやがったな・・・ああ、1台見つけた。ほら、画面端のこれだ」

「重装甲の装甲車だな。だが・・・それも黒焦げでタイヤが無いな」

「炭の粒子が絡みついて燃えちまったんだろうよ」

「ハッチは閉まっているな。開けた形跡もない」

「俺たちはクレーターの中程で磁場にやられて搭乗者は死にましたんだと思ってる」

「なぜだ？」

「こんな強磁場突っ切って生きられる訳がねえ。あの辺は地表で平均500テスラ超えてるんだぞ？」

「・・なるほど。乗員ごと磁石の塊になったという事だな」

「そういうことだ・・ああ、もうだめだ」

ラシヨルフはカチャカチャとコントローラーを動かしていたが、程なくドローンからの通信が途絶えた。

「ドローンもああやって制御不能になるし、無理矢理帰還させても着磁しちまって手に負えねえ」

ややあつてから、日向は高雄の方を向き、静かに首を振った。

「高雄、我々はこの研究から手を引こう。提督に見せた時の反応が手に取るようにわかる」

「そうですね・・夕張さん、解ってくれますか？」

夕張は頷いた。

「半径50cm規模でもダメとなるとねえ・・でも実物見たかったなあ」
ラシヨルフは夕張を見た。

「技術的にどうしても見たいってんなら、残った1発持つてくか？」

「えっ現存してるの？」

「おう。この間の作戦では5発のうち4発しか使わなかったからな」

「どうして？」

「使った4発はほぼ同時刻に着弾させたんだが、その映像を見たホワイトさんが一瞬で中止を決めた」

皆の視線を感じたホワイトは頷いた。

「これは後の世に影響が大きすぎると判断した。残る一ヶ所の攻撃予定地はMOABで代替させた」

日向は夕張の視線を受け止め、しばらく考えた後にラシヨルフを見て言った。

「その、引き取るとすれば、一式売却と考えて良いのか？」

「ああ。制御管理システムも、ICBM積んだ積載車も図面も何もかも持つてきな。正直、持ちたくねえ」

日向はしばらく考えていたが、ややあつてから頷いた。

「一式幾らとする？」

「要らねえと言いてえが、物入りだからくれる分には幾らでも大歓迎なんだ：すまねえ」
「この車両も放棄するのか？」

「ああ。留まり過ぎたから消磁出来ねえと思う」

「ふむ・・・」

日向はしばらく白雪とやり取りをしていたが、

「この車両での送迎と解説といった費用も込みで、金貨8千枚でどうだ？」

「へ？」

「少ないか。ではキリよく1万枚でどうだ？」

ラシヨルフはふるふると首を振った。

「少ねえなんて言つてねえよ・・・くれるってんならもうけど多すぎねえか？」

「実際に稼働する成果物の一切合切と考えれば安いものだ」

「そりやありがてえ。で、そろそろこの場所でも限界だから退却したいが、いいか？」

皆はこくりと頷いた。

「やあ、マジか。即金で金貨1万枚って・・・しばらく研究し放題だなあ・・・」

ラシヨルフはテーブルに文字通り山と積まれた金貨を呆然と眺めていたが、ふいにマスタワーの方を向いた。

「なあマスター」

「なんです？」

「千枚やるよ」

「頂く理由が一つもないんですけど？」

「ホワイトちゃんの判断にだよ。5発目まで撃たなくて良かったと思うからよ・・・」

「何度も言ってくださったじゃないですか」

「何度でも言いたいことだからだよ。それにマスター、物入りだろ？」

「それはそうですが・・・」

「そういうこつた。だから金貨千枚は置いてくぜ」

ラシヨルフは9千枚を受け取った元のケースに押し込むと、

「じゃあな皆、また金属加工とか兵器関係で話があったら俺たちを呼んでくれよ！」

そういつて立ち上がったのだが、夕張が声をかけた。

「あ！じゃあこれ私の名刺。連絡先交換しましょう？」

「おー、俺つちの名刺は豪華だぜ？驚くなよ」

「あら趣味良いわね。外骨格のスケルトンモデルを背景に置くなんて」

「おうよ。あ、電話相談でも料金もらうからな？」

「良いわよ。時間をお金で解決しなきゃいけないことはあるもの」

「おっほう。FOLMEさんは資金が潤沢で羨ましいぜ・・じゃあな」

日向は出ていくラシヨルフからマスターに視線を戻した。

「さて、マスターの迅速な仲介により、我々は想定の数倍の速さで目的を達成できた。仲介料は幾らだ？」

マスターはラシヨルフが置いて行つた金塊を指さした。

「我々はあれで十分ですよ」

日向は首を振つた。

「今日一日の成果はそんな安い物ではない。幾らの損害を防げたと思つている」
「ですが」

日向はマスターの目に視線を合わせて黙らせると、言つた。

「ならば君達の結婚への祝儀としよう。加古、手を出せ」

「へ？はい」

加古が差し出した手に乗せられたケースは、加古をつんのめらせるほどに重かつた。

日向はマスター達4人を見渡し、頭を下げた。

「本当に今日の仲介に感謝する。この店の1日も早い復興を願っているぞ」

日向が玄関に向かつたのを見て、他の艦娘達も一礼し、日向を追つて行つた。

一行を見送つた後、マスターはホワイトに話しかけた。

「ホワイトさん」

「ああ」

「あの千枚はどうぞお持ちください」

「なぜだ？」

「貴方の判断の結果ですから」

「・・解った。ありがたく受け取ろう。で、マスター殿」

「はい」

「遅くなったが、私からもMP40と加古との結婚の祝儀をさしあげようと思う」

「え？」

「あの金貨千枚をな。包みが無くてすまないが」

「いや良いですって」

「おや、マスターは人の厚意を袖にするのかな？」

ホワイトの茶目つ氣たつぷりな上目遣いで見られたマスターは頭をがりがりと掻いた。

「あー・・いえ、そんなことはないんですが」

「ならばそういうことで」

「ええと・・では、ありがたく・・あれ？何かおかしい気がする・・」

マスターはしばらく目を瞑って唸っていたが、ふいに顔を上げた。

「あ、加古！お前が貰った方は何枚あったんだ？」

「えっ？超重いよ？」

「重さじゃなくて数えないとダメだろ」

「えー」

それから1時間後。

「マスター・・・やっぱり何回数えても金貨が1万枚あるよ」

マスターは青い顔で頭を抱えていた。

「祝儀のレベルじゃないよ・・・1枚だけもらって後は返しに行くか・・・」

加古は勢いよく首を振った。

「何バカなこと言ってるんの肉焼こうよ肉！あとお店だってMRAPだって要るでしょ！」

「お前肉好きだな・・・それに全部買ったって2千枚も要らないよ・・・」

「新車買って注文住宅建てれば良いじゃん」

「そんな贅沢したら目がつぶれるよ・・・」

「じゃあ自動運行へり買ったら？デラさんに融合炉ユニットつけてもらってさ。配達楽になるよっ。」

「どうして使い切る方向で考えるんだお前は・・・」

「それくらい色々出来るって事だよマスター」

「いや待て。そもそもそれはお前が貰った金なんだから店の再建に使う事はないぞ?」

そう答えたマスターの肩に、ホワイトはそつと手を置いた。

「ん?なんですホワイトさん?」

「その・・・差し出がましい事かもしれないが」

「え?ええ」

「恐らくその決定の先には、家が潰れる程クッションが積みあがる未来が待っているぞ?」

真顔になるマスター、頷くホワイトとMP40。

そのまま3人に見られた加古は深々と頭を下げながら金貨の入ったケースをマスターに差し出した。

結局、今後10年間、加古、MP40、そしてホワイトは毎月のお小遣いとして金貨3枚を受け取る事になった。

ただし、加古は自分の部屋に入る所までしかクッションを買わない、という誓約をさせられたそうである。

第36話

「鉄血の連中に襲われたんですか？そりやお気の毒に・・・」

「なので、どうしても1台MRAPが至急必要になりました」

「なるほど・・・ただ、8輪タイプは数が少ないですね・・・」

マスターはMP40の運転する装甲車で、以前MRAPを買った店に来ていた。

加古を連れてきていないのでマスターは心配していたが、店員はマスターの顔を見るなり思い出した。

MP40はそつとマスターの隣に立ち、周囲に目を配っている。

マスターはさすがに鉄血に報復を行ったことは伏せたものの、店員にはほぼ事実を伝えた。

ゆえに気の毒そうな表情のまま、店員は店の裏のストックヤードにマスター達を案内したのである。

「うちにあるのは2台なんですけど、実質は1台ですね」

「なぜ？」

「もう1台はマスターさんから下取りした車だからですよ」

「ああ・・あれ直せそうですか？」

「いや、あれはフレームも割れてたので部品取りにしましたよ」

「そうですか・・」

「本当にハードな用途にお使いなんですね」

「ええ」

「10輪や12輪でもダメですか？」

「あまり長いとUターンしにくいので」

「では6輪では？6×6は機動力と取り回しが良くて選択肢も多く、値段もお手頃です

よっ・」

「鉄血製の大型多脚戦車が3体くらい乗れば良いんですが」

「え？そうなるかとむしろ10輪じゃないですか？たとえばこれとか」

「あー・・」

マスターの表情を見た店員は苦笑した。

「では、1台だけある8×8を御覧になりますか？」

「ええ、見せてもらえますか」

「なるほど・・なるほどなあ」

「一応、8輪ですがね」

マスターが案内された1台は、確かに8つのタイヤを持っていた。

しかし以前に乗っていたMRAPに比べると明らかにタイヤが小さく、細い。

全体の大きさも小さく、積載容量も比例して小さい物だった。

マスターは首を振った。

「これじゃない……こう……違うんです……」

「では前回納車した8x8に近いイメージの6x6をご紹介しますよ。幾つかありますので」

「ええ……お願いします」

「！」

3台目を見せた時のマスターの表情に、店員はくすつと笑った。

なるほど、これがティンと来たって奴なのかな。

マスターは店員と車をせわしなく交互に見ていたが、上手く言葉に出来ないようだ。

「どうぞどうぞ、鍵は開いてますので自由に御覧ください」

あつという間に乗り込むマスターを見て、店員は頷いた。

確かに納車したMRAPと近いシリーズだから、内装も近いかもしれない。

タイヤサイズも同じだし、そうか、ライトとかアイコン的なパーツが共用か。

6 x 6 の中でも車輪が前4に後2とかではなく、前後方向に均等配分で3ヶ所にある。

ただ、純粋な装甲車だからかなり高額なんだが・・下取りもないようだし大丈夫だろうか・・

「あの」

店員はMP40から声をかけられたので、思考を中断した。

「どうしました?」

「こちらでは車載オプション品も取り扱っておられますか?」

「ええ、ある程度、ですがね」

「例えば、小型のCIWSとかはありますか?」

「幾つかありますが、何に積載されるんです?」

「乗ってきた装甲車なのですが・・」

「あのサイズだと機銃までですね。トップヘビーになり過ぎて横転の恐れがあります」

「やはりそうですか・・あと、あの」

「はい」

「今、しゅ、主人が見ている車ですが、総額は幾ら位ですか?」

「そうですね・・前回と同じ装備と考えますと、金貨で600くらいかかります」

「600、ですか」

「今は金も相場並みですし、下取りも無いそうですから、お支払いを考えると厳しいかも知れませんね」

MP40は小さく首を振った。

「いえ、復興を手伝ってくださる方達が居まして」

「なるほど。良い商いをなさってこられたんですね」

「はい。主人はそういう人ですから」

神妙な面持ちで店員と会話をしているMP40。

だが、頭の中ではマスターの事を主人と呼ぶことに快感を覚えていた。

ああ、これは・・・これはいけない趣味に目覚めてしまいそうです・・・

でも世間通念上、夫の事は主人と、主人と呼ばないといけないのです・・・ああ・・・

「それでは、私達はこれで」

「いやあ、私も長年取引をしていますが、金貨580枚を1回でお支払いされた方は久しぶりです」

そう。

中を確認し、場内を軽く走ったマスターは、ほぼ即決でこの6輪MRAPに決めた。

そして前回同様、不要な装備の解除と積載に必要な追加装備を施してもらった。

作業の済んだMRAPの運転席に乗り込むマスターに、店員は声をかけた。

「修理等ご相談に乗りますので、いつでもお立ち寄りください」

「良い車両を紹介してくれてありがとう。また来ます」

「今度は長持ちすると良いですね」

「全くです。それでは」

マスターは軽くクラクションを鳴らしてMP40の装甲車に合図をすると、出発した。

道半ばまで来た時、MP40から無線連絡が入った。

「マスター様、聞こえますか？」

「ああ、どうしたMP40」

「新しいお車は如何ですか？8輪から6輪に変わりましたが」

「段差を乗り越える時、短くなったなと思うね。あとは動力の差かなあ」

「動力、ですか？」

「デラさんに融合炉を積んでもらった8x8はそれはもうトルクの塊だったからね」

「運転しやすいですか？」

「しやすいよ。発進も停止もスムーズになるしね。MP40もやってもらったらどうだ

い？」

「お幾ら位かかるのでしょうか？」

「君は気にしなくていい。私もこの車に施してもらってから一緒に頼んであげるよ」

「え、でも」

「妻に別会計だなんて情けない事言わせないでくれよ」

「・・・えへへっ」

「ただ、部品を用意しないとイケないかもしれない」

「部品ですか？先程のお店にはなかったのですか？」

「鉄血のMシリーズ多脚戦車から引き抜くしかないんだよ」

「どこにある部品かお分かりになりますか？」

「胴体カメラがついてるだろう？あのすぐ傍の胴体内側だよ。オイルを作ってくれるんだ」

「何体分くらいご入用ですか？」

「私と君の車でそれぞれ1個あれば良いはずだよ」

「解りました。それではマスター様をお家まで送った後、ちよつと取ってきます」

「え、いや、そんな簡単に取れないでしょ？加古だつて結構苦労してスナイプしてたし」

「Mシリーズ多脚戦車ですよね？」

「そうだけど」

「じゃあ大丈夫だと思います」

「まあそんな火急の用件ではないし、今日は帰るだけにしておこうよ」

「解りました。マスター様の仰る通りにします」

そして、翌日。

「マスター様、おはようございます」

「ああ、おはようMP40・・・おや、表に並べてあるのは、もしかして・・・」

「はい。散歩のついでにMシリーズ多脚戦車から取ってきました。該当する部品はありますか？」

「・・・ああと、うん、これだ。この部品。配線も含めて無傷の物が2個あれば良いよ」
「なるほど。これとこれはちよつと傷が入ってしまったね。ではこちらの3つで」

「デラさんに連絡しておくよ。あ、あと15分くらいで朝食だよ？」

「解りました！では手を洗ってきますね」

「うんうん、偉い偉い」

「えへへ」

鼻歌交じりで洗面所に向かったMP40の後姿を見ながら、マスターはふと呟いた。

「・・・散歩のついで？」

どこかに多脚戦車の残骸置き場でもあったのかな？

そもそもMP40って散歩の習慣あつたつけ？
まあ良いか。食事の支度の途中だ。

第37話

雑貨店「オリファイ」が襲撃されてから1ヶ月が過ぎた頃。

「……ですからこの物件は大変お得で引き合いも多いんですよ、見てくださいこちらの……」

マスターはこの土地に詳しいリーリヤに相談し、仮住まいとは別の場所に店を構えることにした。

仮住まいを店にすると人が出入りしすぎてデラが来られなくなる、というのが理由である。

マスターはリーリヤとホワイトを連れて不動産屋を訪ね、こうして案内を受けていた。

なおMP40は元の商売に復帰して留守にしており、加古は自室ですやすやと眠っている。

マスターは不動産屋から窓の外に目を向け、リーリヤに囁いた。

「なあ、ここに来る1本手前の通りを右に折れる方向で客が流れてないか？」

リーリヤはこくりと頷く。

「正解。FOLMEがあつちだからね。商店街に近いけどここは誰も通らないよ」

「なるほどなあ」

「こんなところなら安く買い叩いて所有物件にしないと釣り合わないけど、この大家は貸したがるのさ」

「継続的かつ安定した収入って奴だな？」

「うん。しかも強欲だから家賃が高くてさ、入った店は次々潰れてるよ」

「いわくつきじゃないか」

「ほとんどそうだと思う。まあ敷地は周囲より倍以上広いだけさ」

「どんな店が来たんだ？」

「デザイナーズブランドとか高級レストランとか、ちよつと来客人数が少くても良さそうな感じの奴」

「あー、静けさも売りって奴が挑んだんだな？」

「そういうこと。大衆食堂とかの薄利多売系は最初から避けてたよ」

「で、全滅か。よつぽどだな」

「大変だよな、こんなところ委託されちゃあ」

ふと、室内に視線を戻した二人と目が合った不動産屋は、満面の笑みで話しかける。

「いかがですか！素晴らしい物件でしょう！これが1年でたった金貨145枚ですよ！」

「いかがわしい物件？」

「いやいやいやいやいやご冗談を」

「売る気はないんですよね？」

「オーナー様は賃貸をご所望でして」

「じゃあ次行きましょう」

「ええっ!?貸店舗をお探しではなかったの？」

「売り上げに見合えばどちらでも良いです。少なくともそんな賃料では予算オーバーですから」

「・・・具体的には？」

「立地が良くて高いよりはお手頃で僻地の方が良いですね」

「砂漠の真ん中でも？」

「前はまさにそうでしたよ」

不動産屋は額に手をやった。皮肉だったのに経験済かよ。手ごわいなおい。

「・・・1年くらいお続けになってさすがに大変に思われた、そんな感じですか？」

「いえ、3000年少々使っていたのですが、吹き飛びましてね」

「は？3000年？え？吹き飛んだ？」

リーリヤが肩をすくめた。

「冗談みたいだけど本当の話さ」

不動産屋の表情が曇った。

「吹き飛ぶとは、その、そういった危険のあるご商売なんですかね？」

「ただの雑貨屋ですが？」

「ええ？」

不動産屋は理解不能といった表情を浮かべていた。砂漠で雑貨屋が3000年も続けられるのか？

その時、ホワイトが通りの奥まったところにある1軒を指さした。

「すまない、あの建物にfor SALEの看板があるが、売り物なのか？」

不動産屋はパツと表情を切り替えた。訳の分からない話題はそつとしておこう。

「はいはい！ええと・・・あああれですね！ええ！うちの売り物件ですよ！ご案内しましょう！」

どたどたと向かって行く不動産屋を追いながら、マスターはホワイトの背後から囁いた。

「あそこじゃもつと客が来ないんじゃないか？」

ホワイトは小さく首を振った。

「ちよつと面白い物があるかもしれない。どうかして地下を探知する時間をもらえな
いか?」

「床とか剥がさないでくれるかい?」

「もちろんだ。最下階に立てればいい」

「どのくらい?」

「静かな状態で5分は必要だ」

「解った」

頷いた後、ふとマスターはホワイトに訊ねた。

「ところで1つ聞いてもいいかな」

「ああ」

「どうして不動産屋はアンドロイドなのに昔を訊ねたりしないんです?」

「知り合いの可能性があるアンドロイドとは識別コード体系が異なる。彼は私よりずつ
と新しい個体だ」

「なるほど。そういう事も分かるんですね」

「ああ」

「こちらの物件は1階が店舗、2階が住居となっております、ああ地下の物置もありますね」

マスターはホワイトと目配せを交わすと、不動産屋に告げた。

「じゃあ下から順に見せてもらえますか？」

そして不動産屋が物置のドアを開けている間に、マスターはリーリヤにも要点を伝えた。

「けほっけほっ……えー、このくらい埃が舞うほど湿度は低いのでまさに冷暗所として最適で……けほっ……」

「……なるほど。広さもありませんね」

「そっそうでしょう！あちらが車庫と地続きの出入り口なので大きな物もラクラクで……げほっげほっ！」

「ちよっとうちの店に必要な機材があるんですが、入るかどうか彼女に測量させてもいいですか？」

「ええ、もちろんですとも！」

「では私達は1階に上がりましょうか」

不動産屋は手に持ったカンテラを掲げながらホワイトに尋ねた。

「お一人で大丈夫ですか？ 今、電気が来ていないので、私が離れると真っ暗になります
が・・・」

ホワイトは頷いた。

「暗視モードも持つている。心配無用だ」

「なるほど、それなら大丈夫ですな。では上へ参りましょう」

マスターとリーリヤはホワイトに頷いた後、不動産屋の後を追って行った。

「・・・」

ホワイトは3人が立ち去った後、暗い地下室をうろろと歩いていたが、やがて一ヶ所で足を止めた。

「・・・うむ。やはりそうか。む？これは・・・」

「いかがですか？ 2階の住居エリアだけでも5人家族が住めますよ！」

「いや、それはかなりギユウギユウ詰めじゃないですか？」

「ここにお一人、隣に上下2段のベッドを2つ並べて、という感じで」

「この部屋にベッド3セットですか!? それだけで部屋が埋まりませんか？」

不動産屋はちゅちゅちゅと首を振った。

「今日び都市に住むというのはそういう物ですよ」

「はあ」

リーリヤが頷いた。

「残念だけど不動産屋さんが正しいよ。今じゃ広くてもベッドが自分の部屋ってパターン多いし」

「広くてもって・・・アンドロイドさんでも横になる場所は要るでしょ?」

「理想は横だけど、支える物があれば立ったままでも何とかなるから」

「うわあ・・・」

不動産屋は擦り切れる勢いで両手を揉み合わせた。

「いかがでしょう!こちらがお安くなってますよ?」

「参考までにいかほどです?」

「金貨1250枚!」

「砂漠ならシェルター込みで住居付き店舗を建てられますよ・・・」

「ローン可ですよ!」

「ローン?どうやって?」

「毎月分割分の費用を頂きに伺います。お支払いが終わればこちらの物件の証文をお渡しします」

「ああ、こちらでは年月の概念が生きてるんですね」

「ええ。ですからご心配なく、無理なくお支払い頂けますよ！」

「お互いに支払額の累計を証明できる仕組みは？」

「割符です」

「ふーむ・・・支払い中に金相場が下落した場合は？」

「そつ・・・それは・・・は」

「それは？」

「・・・お客様の責任で追加金を最終回にお支払い頂きます。こちらもローン可能です」

「支払い途中で履行不能になった場合は？」

「・・・それまでに頂いたお金は賃貸料として充当し、契約は破棄となります」

「それじゃあだいたい不動産屋さんが有利ですねえ」

「・・・」

「リーリヤ、やっぱり砂漠にシエルター建てて住む方が良いような気がしてきたよ」

「そんなお客様！都市の生活は豊かですよ！砂漠とは比べ物になりませんよ！」

「金貨500枚くらいならなあ・・・買っても良いんですが・・・」

「それじゃ土地代にもなりませんよ・・・更地でも金貨800枚はしますから」

探るような目でマスターを見る不動産屋。

そつと窓枠に溜まった埃を指でなぞるマスター。

興味津々の目で二人の間に立つリーリヤという構図である。
その時、ホワイトが皆の背後にある戸口に現れ、声をかけた。

第38話

「マスター、「測量」が済んだぞ」

マスターがホワイトの目を見ながら声をかける。

「やあお疲れ様、上手く行きそうかい？」

ホワイトは頷いた。

「やってみる価値はある。「半年」ほど借りてはどうだろうか？」

マスターはホワイトの意図に頷くと、不動産屋の方を見た。

「貸してもらえますか？」

不動産屋は首を振った。

「こちらは売却専用の物件となっておりますので」

「では例えば、我々が返済中に行方不明となった場合は？」

不動産屋は一気に嫌そうな顔になった。

「履行不能と同じ：それまでのお支払金額を賃貸料として頂き、権利は差し上げません」

「分割支払金が賃貸料として没収されるのですから、その後の返済義務はありませんね

？」

「うぐっ」

「事業が軌道に乗るかどうか様子を見たいのですよ。半年だけ貸して頂けませんか？」
「・・・月額いくらで？」

リーリヤが両手を自分の後頭部に当てながら口を開いた。

「この辺の相場は月に金貨2〜3枚かなあ」

不動産屋が一層渋い顔になったので、マスターは頷いた。

「では、月に金貨5枚お支払いするので如何？」

「その後は？」

「買うか諦めるか、6ヶ月後を目途にお答えします」

「それまでにお支払い頂いた分は？」

「お納めください。購入する場合は別途全額お支払いしますよ」

「ふーむ・・・」

不動産屋はハンカチで汗を拭きながらしばらく考えていたが、

「それだけお支払い頂けるのなら、まあ良いでしょう。最長半年ですよ？」

「ちなみにライフラインは？」

「電気と上水道は引いてあります」

「下水は？」

「処理施設がありますよ」

「それらは使えるように点検整備頂いてから引き渡しですね？」

「ぐっ・・まあ、賃貸ですからそうですね」

「なるほど。では最初の月の分は引き渡しの日にお支払いですか？」

「えっ・・手付として1回目の家賃は本日頂きたいのですが」

「返却時にお返しただけの敷金としてなら構いませんよ？あと、整備期間はそちら持ちということで」

「お客さんにはかなわないなあ・・解りましたよ。では引き渡しの日から6ヶ月ですね」

「ええ」

リーリヤは面白そうにマスターを見ていた。

なるほど、人間はこういう風に交渉を運ぶのか。

「えー、では契約書にサイン頂き、敷金として金貨5枚をお預かりした証文がこちらになります」

「ありがとうございます」

「ではライフラインの整備が済みましたらご連絡いたします」

「家の鍵はその時頂けるんですね？」

「その通りです」

「解りました。それではよろしくお願いいたします」

帰宅後。

ホワイトが珍しくリーリヤの袖を引つ張り、仮住まいへと招いたのである。

マスターはその様子を見て頷くと、リビングへと案内した。

「・・・それで？ホワイト、何がありそうなんだい？」

「こんなものがあつた」

そう言いながらホワイトは、手の中の物を二人に見せた。

リーリヤはその欠片をつまんで首を傾げた。

「なんですかこれ？ただの石じゃないの？」

マスターが欠片を手にとると、ホワイトはいたずらっ子のような表情を浮かべた。

「どうだ、マスターは解るか？」

マスターはくるくると欠片を全方向から眺めていたが、ハツとした顔になった。

「これ、触媒石か!？」

ホワイトは頷いた。

「正解。下半分はかなりの高純度だ」

触媒石。

アンドロイドや機械生命体のエネルギー源として必要な鉱石である。

しかし、ニーズに対して全く足りない程度の産出量しか確認されていない。

これまでの大規模な紛争地域は例外なく触媒石の産出地であるといえればお分かりだろうか。

マスターはホワイトを見た。

「どうしてこんなもんがあると外から見て解ったんだい？」

ホワイトは肩をすくめた。

「我々アンドロイドにとつては継続的に必要となるものだからな」

「で？」

「その、リーリヤは解らないが、私には専用の探知機が備わっているんだ」

二人の視線を感じたリーリヤは首を振った。

「アタシにはついてないよ。ホワイトさんとは違う型だからかなあ？」

「その辺は解らないが、まあ、掘れるだけ掘ってみないか？」

「掘る先に問題は無かったのかい？」

「ああ。地下室の下には水脈等は確認されなかった」

「どれくらい埋まってそう?」

「少量でも十分だ。少し前の相場表だったが、この塊で金貨250枚の価値はあるらしい」

リーリヤとマスターは、マスターの手のひらの上にある石の欠片をじつと見た。

「たつたこれっぽっちで金貨250枚?」

「はつと顔を上げたマスターは、ホワイトを見た。」

「じゃあ、あの地下室はまさか・・・」

ホワイトは首を振った。

「採掘して埋め戻したといった形跡はなかった。純粹に物置として作ったのだろう」

「隣接住宅でも出るのかな?」

「いや、あの地下室でも鉱脈になりそうな場所はごく一部で、それも垂直方向だ。隣接地では出ないだろう」

「じゃあ縦方向に掘り進めるの?」

「地下室のほぼ中央をな。ただしそれほど埋蔵量はないようだから半年程度と言ったのだ」

「・・・リーリヤ先生」

「な、なによ、いきなり先生呼ばわりして」

「採掘機作りませんか？」

「私の専門は制御プログラムなんだけど・・・」

「制御プログラムですよね？」

「ロケットエンジン式の採掘機なら手を貸せるかも」

「どう考えてもありえない」

「デラさんに作ってもらえば良いじゃない。動力系全般なんだから」

「推進システムはそれで良いとして、採掘機本体がなあ」

「マイクロHCBで採掘してみる？それなら制御プログラム作ってあげるよ？」

「I発で上の建物ごと豆粒になりそうなんですが？」

「ばれた？」

その時。

「ふああー、マスター、おはよう」

「おはよう加古。まあ、パジャマ着てるからよしとしよう。そもそもここは住まいだしな」

「何の話？悪だくみ？」

「採掘機が必要なんだが、掘削部分を作れそうな職人に心当たりが無くて困ってるんだ

よ」

「なんでそんな物が居るの・・デラさんにでも頼んだら？」

マスターは首を振った。

「あんまりなんでもかんでも頼るのは悪いからさ」

「他に手が無ければ仕方ないじゃん」

「まあそうなんだが・・なあ」

リーリヤは肩をすくめた。

今の話程度、仮にマスターがデラさんをアテにしたところでデラさんは気にも留めないだろう。

けど、そうやって頼りすぎないところが良いんだろう。人間のつながりって複雑。

マスターは頷いた。

「・・・よし！じゃあ久しぶりにDIYしてみるか！」

その途端、加古がジト目になった。

「良いけどさあマスター」

「なんだ？」

「また研究室に籠ったまま丸3日出てこないとかやめてよ？」

ぎよつとした顔になるホワイトとリーリヤを横に、マスターは肩をすくめた。

「今回は掘削機だからなあ。それほど目新しい仕組みが要るものでもないだろう」

「だって前回籠りつきりになったのってネズミ捕り作った時だったじゃん」

「あれは納めた先のネズミがあつという間に学習して引つかからなくなったとか言うからだな」

「だからって自走式ユニットとAI積むとか完全にデラさんと悪ノリしてたじゃん」

「悪ノリじゃないぞ。他に解決手段が無かったからじゃないか」

「他の家のネズミまで捕まえちゃって始末に困るって苦情来たじゃん」

「それは管理エリアの概念を失念してたからであつてだな」

ホワイトの「そういうものなのか？」という視線を受け止めたリーリヤは首を振りながら囁いた。

「そもそもネズミ捕りが自走する時点でおかしいです」

「やはりそうか」

第39話

「これで引き渡し時の確認も済みましたので、鍵をお渡しします」

「ありがとうございます。2セット、確かに頂戴しました」

「では私はこれで。商売のご成功をお祈りしていますよ。また来月伺います」
パタン。

賃貸契約を取り交わしてから半月ほど経って、現地で引き渡しが行われた。

相場より多い金を払っただけあって、屋内は一通り清掃が済んでいた。

下水処理ユニットも機能していたし、電気も水道も確認出来た。

ただし引き渡し直前に解ったことだが、周囲に隣接する建物は全て空き家だったのである。

「音を立てても苦情が出ないのは良いけど、商店街・・じゃないよね・・」

マスターがそう苦笑交じりに呟いたことに、ホワイトも頷いた。

「そうだな。まあ我々には都合が良いが」

マスターは車庫に止めたMRAPのドアを開けた。

「じゃ、早いところ機材を下ろしましょう」

ホワイトと加古が頷き、物置につながるシャッターを開け始めた。

3人で運び込んだ機材は、掘削装置の開発機材と作業機が主である。

2Fは食事がとれ、とりあえず仮眠出来る程度の機能を持たせたスペースとした。

肝心の1Fには、職人達の厚意で商品サンプルを幾つか置かせてもらえることになった。

見る人が見れば急造であることが解るラインナップだったが、店としての体裁は整った。

その店の番は加古がすることになった。

なぜなら調子に乗って引きこもったマスターを無理矢理引っぱり出せるからである。

ホワイトやMP40だとマスターの意向に遠慮してしまう。

この辺の差は付き合いの長さゆえであろう。

「これ良いよお、ほんとテラさんありがとうねえ」

「なあに、作り方は普通の椅子と大して変わらん」

「あく極楽う、ダメになりそ〜」

そんな店内の一角でうつとりとした表情の加古が腰かけているのは、リクライニングチェアである。

フットレストがついて、ほぼ真横にまでリクライニングする重厚かつふかふかな逸品である。

地下から登ってきてジト目で自分を見るマスターに、加古はチェアのひじ掛けを掴みながら言った。

「これはあたしのだからね！」

「確かにチラシ出すとか積極的な商売をするつもりはないが、最初から寝る前提って前な」

「だって客が来るわけないし、暇に決まってるし、それなら寝たいし」

「不動産屋が来たらどうすんだ」

「集金以外で来るわけないって」

「そもそもテラさんに作ってもらった商品サンプルだろそれ？いつも寝てたら傷むだろうが」

「ふふん、テラさんには既にお金払ったよう。だから名実ともにあたしのだよ」

「買ったのか!？」

そう。

商品サンプルとして頼んだ加古だったが、試しにと僅かな時間座った直後に飛び起きた。

不具合かと驚くデラの手を取り、加古は即金で購入する意思を伝えたのである。

ちなみに対価は金貨3枚。つまり加古は今月の追加小遣い分を一瞬で使い切ったわけである。

マスターの問いただす視線を感じたデラは肩をすくめた。

「定価で良いというからの。金貨3枚確かに受け取った。まあオプシオン分はおまけしたかね」

「オプシオン？」

「こいつは見たため、触り心地、耐久性に優れる高級人工皮革を使っておる。金貨2枚分のオプシオンだ」

加古がニヤリと笑った。

「ほうら、速攻で買おうと金貨5枚が3枚で買えたって事じゃん。半額近いんだよ？」

マスターは首を振った。

「デラさん、本格的に寝たら警報でも鳴るオプシオンとか作れない？」

「簡単だが？」

加古が頬を膨らませてチェアから立ち上がった。

「さすがに開店時間中は誰か来たら起きるくらいのもードでしか寝ないよ！」

「ほんとかなあ？その椅子のあらぬところから加古の足がみよんと生えてそうだけど」

なあ・・・」

「そこまで馬鹿じゃないよ!」

「だつてお前、前に機械生命体対応ベッドの商品サンプルにパンツ1枚で寝てたじゃないか」

「728年も前の事じゃん!」

「事実でしょうが」

「もう時効!時効です!」

デラはその日の事を思い出して苦笑していた。

あれはたまたま訊ねる予定の日と重なったのだが・・・

ぼーっと起きてこようとする加古ちゃんと、慌てて布団で包もうとするマスターが面白かったわい。

わしの楽しい思い出にはいつもこの二人が絡んでおるなあ・・・

ぎゃんぎゃんと言ひ合ひを続けるマスターに、デラは声をかけた。

「それで? わしは今日は痴話喧嘩を聞きに来たわけではないと思つたんだがの?」

「あ、ああそうだった。デラさん、駆動装置とのリンク方法を確認したいんだ、地下に来てくれるかい?」

「もちろんだ。じゃあ加古ちゃん、もし不具合あつたら相談してくれ」

加古はデラにニツと笑いかけた。

「その辺は信用してるよん」

デラはふつと笑った後、マスターの後について行った。

加古は満面の笑みでチェアへとダイブしたのである。

「何メートルくらい掘り下げるつもりなんじゃ?」

「2 m四方の範囲で、深さは・・ええと・・あああつた、最大5〜6 mつてのがホワイトさんの調査結果だよ」

「ふむ・・」

デラはホワイトの描いた探知結果のグラフィカルイメージを眺めながら唸った。

「どうかしたのかい?」

「いやあ・・なんかこの形、どこかで見たような気がすると思つてな」

「この形?」

「まあ良い。6 mだと自走式でも固定して掘削部だけ進ませても、どちらでもいけそうじゃの」

「どっちのほうが安いかな?」

「安いのは自走式だが、岩盤が硬かった場合でも安定するのは固定式だ」

「どのくらい違う?」

「金貨で言えば・・・そうだな、自走式なら4枚、固定式なら6枚かの」

「自走式だと無理かな? 地質はこんな感じらしいんだけど」

「ほう、調査済みか。見せてみる」

「ホワイトさん、搭載されてるセンサの種類が凄いいんだよ」

「設計者は司令官に何を求めておったのかのう・・・ふむ、これくらいの硬度なら自走式でも良からう」

「助かった。じゃあ自走式の方向で進めよう」

「掘削した土はどうやって上に運ぶんじゃ?」

「自走式だから、掘削機内部に貯めてそのまま上に戻すよ」

「そうじゃな。貯め方は中空パイプか?」

「そうだね。先端に掘削ビットを付けた中空パイプを回転させて掘って、そのまま引き抜く感じ」

「なるほど。掘削直径は?」

「ええとね、硬度から計算すると8cmから10cmかな・・・掘削ビットの寿命も考える
と・・・」

こうしてマスターとデラの二人は、加古が夕食だと言って突入してくるまで延々と議

論を続けたのである。

その頃。

「ネエ父サン」

「ナンダイ？」

「最近何か騒ガシクナイ？」

「ソウカ？ドコカラ？」

「天井カラ」

「上ニハ何モナイゾ？」

「ソウナンダケドサ・・」

第40話

店の引き渡しから一ヶ月が過ぎた。

「ふう、今日の分はこれで最後だ。ほれホワイトさん、納品書だ」

「いや、毎日これだけの物を作るデラ殿の方がお疲れであろう。さ、水を用意したぞ」

「やあありがたい。頂こう」

そう。

仮住まいの庭先に停められたデラの飛行機からマスターのMRAPへと次々移されている物。

それはリクライニングチェアだったのである。

「美少女が隙だらけの格好でリクライニングチェアで寝てる店があるらしい」

出所は今となつては解らないが、噂はあつという間に町中に知れ渡つた。

ゆえに店先の扉の陰から、そうした姿を期待して頬を染めて覗きこむ男が今日も現れる。

そのたびに内心青筋を立てた加古が音もなく背後に忍び寄るのである。

その後の経過を見てみよう。

「いらつしやいませ」

「ひつ！あ、かわ・・・い、いえ、店員さんですか？」

「はい。さあどうぞお入りください」

「あ、いや、あ・・・ああはい・・・もしかしてあの子かなあ・・・」

「何をお探しですか？」

「へっ？あ、え、ええと・・・あ、そうだ。リクライニングチェアをですね」

「それでしたらこちらなんていかがですか？機械生命体の方でもお使いいただけますよ

？」

「へえ、サンプルですか」

「いえ、私が買った物なんですけど、他にサンプルが無くて。良かったらおかけになりますか？」

「せんか？」

「良いんですか!？」

「ええどうぞ」

「・・・うわ・・・うわわ・・・うわあ」

「座り心地は如何ですか？」

「はい・・・とっても・・・いい匂いです」

「このスイッチでリクライニング出来ますよ。横になってみてください」

「あー．．いいですねえ．．柔らかくてハリがあつて．．膝枕されてるような．．」

「如何ですかー台？」

「いいですねえ．．」

「仕様はこちらと同じでよろしいですか？」

「いいですねえ．．」

「ではこちらにサインを。納期は今ですと一ヶ月頂きます。お届け先もご記入ください
ね」

「いいですねえ．．えっ？」

「お買い上げいただき、ありがとうございます」

この加古の「まさか今更買わないなんて言わないよな？」という満面の笑顔にぐうの音も出ない。

そして請求書を見て真っ青になるのである。

そんなわけでデラは必死になってリクライニングチェアを作っている。

そしてマスターとMRAPは完全に宅配便と化しており、最近はホワイトも同行するようになった。

MP40が自分の商売を休んで手伝うと申し出たが、マスターは真面目な顔で首を

振った。

「君とお客様の間で信用問題が起きてはいけないからね。大丈夫、何とかするさ」

「は・・はい・・マスター様の仰る通りです・・ううう」

がくりと床に手を着くMP40と、小さくガツツポーズを取ったホワイトである。

今日も届け先は20件。

それはデラが日に20脚作るのが限界であるが故だったが、マスターの限界でもあった。

ゆえに掘削の方は1cmも進んでいない。

慣れた手つきでMRAPにチェアを積み込んでいくマスターに、加古が声をかけた。

「マスター」

「ん？今日も悪いが夕飯は各自で食べておいてくれ。数件、遠いお客さんが居るんだよ」

「しばらくさあ、店休みにしない？」

「なんでだよ」

「だって・・せつかくチェア買ったのに・・私が座る暇ないんだもん」

「自業自得という言葉を知ってるか？」

「ひどすぎる」

「オリファイ開店以来というか、空前絶後の売り上げなんだぞ？」

「だつてえ．．．私のチェアが傷む．．．」

「じゃあ加古、これから20台売ることとに金貨1枚ボーナスをやろう。それで新しいチェアを買え」

「やる！」

「よし」

やり取りを聞いていたホワイトは、水を飲むデラの傍に寄つて囁いた。

「相変わらず．．．過酷なオーダーのような気がするんだが．．．」

「うむ。この豪華仕様のチェアを1台売るとマスターの懐には金貨1枚の仲介料が入る契約だ」

「20台で1枚という事は．．．」

「5%キックバックという事じゃが、それを一瞬で決めるといふのが」

「さすがだな」

「じゃが、オーダーの数は徐々に減つておるからう」

「どういふことだ？」

「今作つておるのはバックオーダー分じゃが、追加分は製作分より少ない」

「最近は？」

「日に3件くらいかのう。金貨5枚もするチェアとしてはまだまだ異常な売れ行きじゃ

が

「1ヶ月の賃料なみだからな・・ところでデラ殿」

「うむ？」

「家賃と言えば、この家の家賃は誰に支払えばよいのだ？気になっていたのだ」

「ああ・・いらんよ」

「どういうことだ？」

「この家はワシのじゃよ。使つとらんかったがな」

「なぜ？」

「ここらは職人が多いから大丈夫かと思つて買ったんだが、結局怖がられての」

「ああ・・そういうことだったのか」

「化け物屋敷と呼ばれて価値も下がったから放つといた。だから別に金など要らん」

「解つた。マスターには言つておくか？」

「いや。マスターがここに住み続けるならその時言えばよい。迷わせては可哀想じゃ」

「デラ殿は、本当にマスター殿に色々配慮されているのだな」

「このくらいどうという事はない。本音を言えば、ここは住みよい土地じゃがね」

「住み始めてからの経験だが、私もそう思う。治安も良い」

「こつちで決めてくれればとは思うがの。いや、そこはマスターの好きにすればよい」

「・・そうだな。ではまだ内密にしておこう」

「わしに聞いたら大丈夫だと言われたとでも言っておいてくれ」

「解った」

マスターがMRAPから降りてきたので、二人はさりげなく離れた。

「デラさん」

「なんだ？」

「あの椅子つて、オーバーホールできるかな？」

「どういうことだ？」

「加古が買った椅子、ほぼ客向けサンプルになっちゃったでしょ」

「うむ」

「だから消耗部を取り換えてやりたいんだけど」

「もちろん可能じゃよ。骨格の矯正も行える」

「おいくらで？」

「あの仕様なら表皮の張替えと軽微な修理込みで金貨1枚かの」

「じゃあ予約してもらえるかな」

「デラはマスターの目をのぞき込んだ」

「加古ちゃんがもう1脚買えるほどはボーナスが出ない見込みだな？」

「多分そう・今の時点でも売れすぎだよ。いくらなんでも」

「元々年間2台の予定だったからの。ではわしの方もあと20台前後の追加と見込んでおく」

「そういうことで。とはいえ、バックオーダーがまだまだあるからなあ・・・」

「やつと残り400台を切ったくらいじゃよ」

「最初は1日で50台以上売れたからねえ」

「あの時は本気で加古ちゃんの隣でチエアを作つてやろうかと思つたな」

「どういうことです？」

「デラはくすくすと笑つた。

「そしたら客は店に入る前に逃げるじゃろう？」

「デラさん・・・それはもう少しリスクが減つてからだよ・・・」

「そうじゃの。武器を持つてる客が居らんとも限らんか」

「デラさんが安心して来られるように、住まいと店を分けたんだしさ」

「解つとる解つとる。冗談だよ」

「まあ、皆が目の前の現実を普通に認識してくれたらとは思うけどね」

「ここに居る面々で充分じゃよ。さて、わしはまた今日のノルマを作りに戻る」

「ペース落して良いし、休みも取つて良いから、体調優先で」

「この体は燃費と頑丈さが取り柄だから。大丈夫だ」

「何かあつたらすぐ相談してくださいよ？」

「わかっとなる。ではな。ああ、ホワイト殿・またな」

「デラから声をかけられたホワイトは小さく頷いた。

第41話

「というわけで、今日はデラさんが加古のチェアを持ってきてくれました」

「・・・」

「どうした加古・・・おいおい何で泣いてるんだ」

「おかえり・・・おかえり・・・マイチェア君」

「たった2日無かったただけだろ」

「2日間もなかったの！」

そう。

リクライニングチェアの爆発的な売れ行きは、およそ2か月で収束した。

マスターが加古にキックバックを約束してから18台目である。

涙目であと2台と呟く加古に、おまけしてやると言つてマスターは金貨1枚を手渡した。

だが、一瞬晴れた加古の表情は再び曇ってしまった。

「買い直すには足りないね・・・2か月分お小遣い貯めれば買えるけどさ・・・」

「世の中にはオーバーホールというやり方があつてだな」

加古ががぼりとマスターの方に向き直った。

「あのチェアで出来るの？」

「出来るらしいよ。金貨1枚で。予約しておいた」

「やった！いやったああああ！わーい！」

「ほら、MRAPに積んで家に持って帰るから手伝え」

「はーい！」

そしてその翌日から2日かけてデラがオーバーホールしてくれた、という訳である。

デラは首を傾げながら口を開いた。

「骨格やシヨックアブソーバに異常はなかったからの。表皮とクツシヨンを新品にしといたぞ」

「クツシヨン傷んでた？」

「いや・・痛みというより・・色々な臭いが、な」

「あーそうだった。整髪料つけてるお客さん結構多かったんだよ・・」

「そういうのは嫌だろう？クツシヨン代は加古ちゃんが頑張ったからサービスだ」

「わーい！」

マスターは加古に訊ねた。

「で？そのチェアは店に持ってくのか？自室に入れるのか？」

「お店になくて良いの？」

「店にはちゃんとサンプル置いてもらうよ。デラさんに頼んでおいたんだ」

「ふうん・・デラさん」

「うん？」

「サンプルどれかな？表皮は同じ？」

「これだ。高耐久フアブリックじゃよ」

「クツシヨンは硬いやつ？」

「そこまでじゃないが、サンプル用に耐久性重視だ。座り心地は異なるじやろう」

「んー」

サンプルを撫でながら厳しい表情で考え込む加古を他所に、マスターはデラに話しかけた。

「それで、そろそろ推進装置に取り掛かれそうかい？」

「今日持つてきたぞ。チェアのサンプルと一緒にMRAPに積んでいけばいい」

「助かるよデラさん、あの店の賃借期限は半年だからね」

「もうあそこに構えてしまったらどうだ？知名度は抜群じやろうに」

「いやあ・・その知名度が微妙な方向だからさ・・」

「まあ・・下心満載で覗いた客が悪いんじゃないの」

「でも、開くとしても別の場所かなあ・看板出す前で良かった」

「まあその辺は掘削結果から考えても良からうよ」

「そうだね・・・おい加古、どうするんだ？」

加古はフアブリック版サンプルを撫でながら頷いた。

「・・・うん、自分で買ったチエアは自室に入れる」

「解った。じゃあ階段上げるの手伝ってやろう」

「ありがと」

「よし、掘削部のリモート操作もOKだな」

「自走式じゃから、万一の際は強制的にここに帰るようにしてあるぞ」

「うん。でないと困るよね」

「あの、マスター様これは一体・・・ここ、お店の地下ですよね？何を始めるおつもりなんでしょうか？」

地下の物置で突っ走るテラとマスター、久しぶりに戻ってきて事情が解らないMP40という構図である。

おろおろするMP40にホワイトがかいつまんで事情を説明した。

「なるほど、それでは賃貸期間のうちに掘りつくさないといけないんですね？」

「いや、多く見つかるなら店を買ってしまえば良いだけだからな」
「なるほど。ところで加古はどうしてこの場に居ないんです？」

ホワイトは上を指さした。

「店舗に置いたリクライニングチェアで眠っているのだろう」

「また騒ぎにならないと良いですね・・・」

「そうだな」

マスターが掘削機を部屋の中央に置くと、デラが制御系の操作盤に命令を打ち込んでいく。

程なくドリル部を回転させながら、駆動装置付き掘削機は少しずつ掘り始めたのである。

店を借りてから4ヶ月が過ぎた、ある日。

1Fから物置に向かってMP40が下りてきた。

「マスター様、ホワイトさん、お茶をお持ちしました」

「やあ、ありがとうMP40。ホワイトさん、休憩にしましょう。状況はどうですか？」

「変化はないな。1回の掘削分で小さめの塊が2つ3つあるくらいだ」

物置の中央では休みなく掘削が行われ、抜き取った土をホワイトが作業機で確認して行く。

触媒石と分かった塊はホワイトが足元のバケツに入れる。

確認が済み、触媒石を除いた土はマスターが埋め戻しの作業に用いていく。

掘削量に対して物置は狭いので、そうするしかなかったのである。

マスターは頷いた。

「あまり浮かない表情ですね」

「ああ。事前調査というか、今もそうだが、センサーの反応規模に対して採取量が少なすぎることだ」

「期待したほどじゃなかった、と?」

「そうだ。折角ここまでマスター殿に手配頂いたのに申し訳なくてな」

「気にしないでください。店の売り上げだけで機材や賃料の合計以上に稼いでますし」

「・・・うーむ」

「今手元にあるので価値はどれくらいなんです?」

「そちらもちよつと困ったことになってな」

「どうということですか?」

「先日見つけた古い相場表では金貨5千枚にはなりそうだが、最新の相場情報がどうしても見つからない」

「相場表が無いんですか？」

「ああ。不要になるわけがないんだが：それに、産出量もこの10倍は期待してたのだがな……」

「色々納得出来ないってことですね？」

「そうだ」

考え込むホワイトの傍らで、MP40がバケツに半分程入っている石の1つをつまみ上げた。

「これがそうなんですよね・私にはどれが触媒石なのかさえ分らないです」

「うん？例えばそれは触媒石をかなり多く含んでいるぞ」

「これがですか？」

「ああ。この辺りだな」

「へえ……」

ホワイトは頷きながら机の上にある石の1つを手を取った。

「それに似たような色をしているが、こっちは全く含んでいない」

MP40は2つの石を交互に見ていたが、やがて首を振った。

「同じものにしか見えません・・・」

「まあセンサーが無いとそうかもしれないな」

マスターはMP40から受け取った茶をすすりながらホワイトに声をかけた。

「このペースで行くと、やはり後2ヶ月くらいですかね」

「うむ。1ヶ月余裕を見ての半年だったが、チェア騒動で2ヶ月消費してしまったからな」

「ですね」

「掘削分のストックがあるうちは、もう少しペースを上げよう。2週間は短縮出来るだろう」

「もう採算は充分取れますから、無理しないでくださいいね」

ホワイトはくすつと笑った。

「ああ、大丈夫だ」

その時、1階の店に來客があった。

「ごめんくださいーい、デボル&ポボル不動産ですけどー」

「あつ、いらつしやいませ。マスターですかね？」

「ええ、お願いします」

加古は応接セットへ案内した後、地下へと降りて行った。

「マスター？」

「どうした加古」

「不動産屋さん来てるよ？」

「ああ、家賃か・・・ん？それにしても早いな・・・解った」

その頃。

「ネエ父サン」

「ナンダイ？」

「ヤツパリオカシイヨ。断層モナイノニ地震ガ続クナンテ」

「地球ノ地殻変動ハマダマダ未知ノ領域ガ多イカラナ」

「ソウカナア・・・」

「安カツタシ、アル程度ハ我慢シナイトナ」

「ソツカ・・・」

第4 2 話

「あーなるほど、今月中に購入か終了の判断をして欲しいという事ですね」

「ええ。今月末で5ヶ月になりますので、ご意思は確認しておきたいのです」

「あと10日という事ですね・・解りました」

「よろしくお願いします・・ところで如何ですか？商いの方は」

「少し前までは椅子が良く売れてたのですが、最近はこんな感じですね」

マスターはそう言つて、客の居ない店内を指さした。

「なるほど」

「ところで、ご存知なら伺いたいことがあるのですが」

「なんででしょう？」

「この店についての噂は何か耳にしていますか？」

「んー・・」

不動産屋はしばらく顎に手をやって唸っていたが、首を傾げた。

「店員さんが可愛いとか、高いけど良い椅子を売つてるとか、ああ、あとは・・」

「あとは？」

「噂がデタラメじゃないか、というのがありましたな」

「噂、ですか？」

不動産屋は遠くにいる加古をちらりと見た後、マスターに小声でささやいた。

「恐らくあちらの方だと思うのですが、居眠りしてないじゃないか、と」

「居眠り？」

「その、なかなか刺激的な格好でお休みだとの噂がですね」

「ええ・・・」

げんなりしたマスターの様子を見て、不動産屋は肩をすくめた。

「まあ、そういうお姿を期待されていた向きには期待外れだったようですね」

「うちはいかがわしい商売ではないので」

「でしような・・・正直言えば話題になるほど聞こえてはきていません」

「なるほど」

「ご心配であれば、もう少し営業活動をなさっても良いかもしれません。ここらは競争が激しいですからね」

「解りました。その辺も含めて10日以内に返事を出します」

「お願いしますよ。では、私はこの辺で」

「ありがとうございます」

「ああ、ちなみにですけど・・・」

「なんででしょう？」

「表のMRAPって、営業車なんですか？」

「ええ。遠方にも届ける必要があるので・・・」

「砂漠でお店を開かれていた時から乗ってらっしゃるんですか？」

「いえ、その頃乗ってたMRAPは吹き飛ばされましたね。新しく買ったんですよ」

「ありゃあ、それじゃあローンですか。うちの分もあるし大変ですねえ」

「あつちは即金で買いましたよ。金利が高かったんでね」

「えっ？・・・あれ、本格的な装甲車ですよね・・・よほどお値打ちだったんですか？」

「普通の中古相場位だと思いますが・・・」

「はあ・・・そうですか。あ、いや、すいません色々聞いちゃって」

「いえ」

「では、よろしくお願いいたします」

「ええ。それでは」

不動産屋を見送ったマスターは少し考えていたが、玄関を閉めるとclosedのプレートを下げた。

そして加古に目で合図をし、二人で地下に下りていったのである。

「なるほど。それでは借りたままだと来月は撤収準備にかからねばならないのだな」

ホワイトの発言に、マスターは頷いた。

「ええ。どうするかを意思を今月中に、返すなら撤収後に原状回復をすることになります」

加古は肩をすくめた。

「もういいんじゃない？ 上で利益出てるんだから、こつちは適当に終わらせても・・・」

MP40はそつとホワイトの方を見ながら言った。

「ですが、ホワイトさんの測定結果ではまだまだ出そうなんですよね？」

ホワイトは渋い表情のまま口を開いた。

「現に、採掘分を除いてもまだ地下から多数の反応がある。だが鉦脈とは言い難い分布
図なんだ」

「どういうことですか？」

「地点によつて反応の強弱があるのはともかく、あまりにも直線的で立体的なんだ・・・」

「人工的という事ですか？」

「うむ。あと、関連があるか解らないのだが、反応のある周辺に空間がありそうなのだ」

「空間ですか・・・」

「それもかなり大規模なもののようにも見える。だが地下にそんな空間があるものなのか・・・」

マスターが続けた。

「触媒石が測定 of 邪魔をしているのでは？」

「確かにその他のセンサーに比べて触媒石の反応は優先して表示されるのだが・・・」

「それでも疑問が残る、と」

「ああ。どうにも不可解な反応の仕方なのだ」

「ふうむ・・・」

ホワイトは頬杖をついた。

「本当の所はともかく、私としては損を出すくらいならここで手を引いても良いと思う」

MP40は触媒石をつまみながら言った。

「なんかこれって、コンクリートみたいですよね」

ホワイトは頷いた。

「言われてみれば・・・確かに細かな石を混ぜて押し固めたようにも見えるな」

マスターは首を傾げた。

「地下にそんなものがあるという事は、古代建物の基礎でも残ってたんですね」

「いや、さすがにそんな時代の物が残ってはいないだろう・・・」

「ですよね。ですが、この辺りは古くからある街だとリーリヤも言っていましたよ?」「うむ。この家も時間が経っている。ただ、それよりは採掘した石の方が年代が経っているようだ」

「どのくらいだと思われませんか?」

「結晶化の具合から見て6〜7千年・・・というところか。触媒石自体はもつと古いようだが」

「今から7千年前というと・・・古代戦乱期末期ですか」

「あるいは停戦直後、だな」

「・・・考えにくくないですか? そんな時期に地下に何を作ったというんです?」

「最終戦争に備えて、人類軍がシエルターを作っていたのかもしれないな」

「それと触媒石反応とのつながりが解らないのですが」

「簡単な話だ。我々にとって触媒石は人類で言う食料と思えばいい」

「つまり長期に渡って立てこもるために備蓄していたと?」

「そういうことだ。これさえあればアンドロイドはエネルギーを充填させられるからな」

「なるほど・・・では地下空間があつて、その中に備蓄資材として触媒石が眠ってる可能性がある、と」

「完全な推定だがな」

「ふーむ」

MP40と加古は、それぞれ2つずつ湯呑を持って1Fから戻ってきた。

「マスター、お茶だよ」

「うーん・・おお、ありがとう」

「ホワイトさん、どうぞお召し上がりください」

「すまないな」

加古から受け取ったお茶を一口すすったマスターは、ホワイトに声をかけた。

「ホワイトさんは掘ってみたいですか？」

ホワイトは苦笑した。

「推定が多すぎるから、以前の司令官としてであればここで止めただろうと思う」

「ええ」

「だが、感情を持つ今の自分という意味であれば、確かめたい気持ちはある」

「なるほど」

「だが、マスター殿に金銭的、体力的に負荷をかけているのではないかと心配している」

「うーん、この際ですから1つ伺いたいのですが」

「ああ」

「楽しみを、見つけられてますか？」

「ん？ どういうことだ？」

「ホワイトさんは今、自主的に家事や私の手伝いをしてくださってますが」
「うむ」

「元々は砂漠で出会っただけですから、無理にして頂く必要はないのです」

「・・・」

「ですからうちにいる間も、楽しんで頂ければなと思うんですよ」

「それはその・・・一緒に居るだけで毎日楽しいぞ？」

「そうですか？」

「ああ。私は皆と違って起動してからの時間が短いから、趣味とかそう言う物を持ち合わせてはいない」

「でしようね」

「だから今は見聞きする物事が全て新鮮で興味深い。ルールを解除した自分の反応も含めてな」

「なるほど」

「ただ、あまり何もかもが変わってしまうとそれはそれで戸惑うと思う」

「そうですね」

「だからマス・・皆と暮らす今の生活がちやうど心地良いと、お、思っているのだが・・」
ホワイトはそつとマスターの方を見た。

マスターは笑顔で頷いた。

「それなら気の済むまで居て頂いて良いですよ。ずっとでも構いませんし」

「ほ、本当か？ずつとでも良いのか？」

「ええ。むしろ手を貸して頂いて助かってますし」

「そ、そうか・・そうか・・それならそうさせて頂く」

MP40はずつと茶をすすりながら内心溜息をついていた。

ホワイトさんがあれだけ勇気を出して言ったのに、マスター様は全くお気づきじゃないですね・・

ふと、加古と目が合った。

二人は目で同じ事を思っていたことを確認しあうと、互いに小さく肩をすくめたのである。

第43話

数日後。

「ごめんください、デボル&ポボル不動産ですけど」

「あつ、いらつしやいませ。マスターですね？」

「ええ、お願いします」

加古は応接セットへ案内した後、地下へと降りて行った。

「マスター、不動産屋さん来たよ。ただ、今日は2人いるよ」

「ほう。んー・ホワイトさん、一緒に来てもらえますか？」

「人数合わせ以外に何か役割はあるか？」

「条件交渉の時に適当に振りますので、難色を示してください」

「解った」

「いやあどうも。ご連絡頂いたので伺いました。こちらは手前どもの社長のデボルです」

そういつて不動産屋は傍らの女性を示し、デボルがニツと笑った。

「デボルだ。よろしくな」

「本日はよろしくお願ひします。こちらは・・・ホワイトさん？」

マスターは簡単に紹介しようとホワイトの方を見て驚いた。

ホワイトが目を見開いて固まっている。

その様子に不動産屋は戸惑っていたが、デボルは小さく頷いた。

「ヨルハ部隊の生き残りかな？特徴が似てる」

ホワイトはゆつくりと頷いた。

「すると、貴方はレジスタンスの生き残りか」

「ああ。アネモネのキャンプに居た。コアだけね」

「コアだけ？」

「私は停戦後、酷く壊れた状態で発掘されたんだが、アネモネがコアだけ別の義体に移植してくれたんだ」

「ほう」

「だからコアだけは昔からの物さ」

「・・・」

「ただ、コアも埋もれて長い間停止状態だったもんでね、レジスタンスの頃の記憶は途切

れ途切れなんだ」

「そう、か」

「そんなわけだけど、あなたは？」

「ヨルハ部隊のバンカーで司令官をやっていたよ、私の別個体だな」

「そう、か。コマンダーモデルね・・・ん？別個体？」

「ああ。実際に指揮を執っていた個体はバンカーの墜落時に運命を共にしたようだ」

「・・・」

「私は予備個体として保護ケースに入っていたから助かった。目覚めたのはつい最近だ」

「どのくらい・・・前任者から記憶を引き継いだんだい？」

「個体同士の直接の引継ぎはない。私が知るのは西暦11945年3月に第243次降下作戦が始まる前までだ」

「デボルが目を細めた。」

「11945年、ね。あの年は無茶苦茶だった。私の元の義体が数十万トンの瓦礫に潰されたんだよ」

「どういう経緯だ？」

「機械生命体が山のようにデカイ砲台を作ったんだけど、その最下階の入り口をこじ開

ける手伝いをしたのさ」

「ほう」

「開けた時点で瀕死だったんだけどさ、最終的にその砲台が崩れてきてぺっちゃんこさ」
「・・・その記憶があるのは気の毒だな」

「いや、そうでもないんだ」

「なぜ？」

「あのう、とりあえずおかけになりませんか？」

4人が声の方を向くと、加古が苦笑しつつ飲み物を置いた盆を持っていた。

「ああ、ありがとう加古。ではあちらのテーブルへどうぞ」

マスターに促され、3人は静かに応接コーナーへと向かったのである。

「話の腰を折ってしまつてすみませんでした」

冷茶のグラスを4人の前に置いた加古がぺこりと頭を下げた。

ホワイトが首を振った。

「いや、いつまでも立ち話では失礼だったから丁度良かった。こちらこそ申し訳ない」

デボルはひらひらと手を振った。

「良いよ。今となつてはこんな化石のような話を分かってくれるのはアネモネ位だから
な」

「アネモネは生きているのか？」

「デボルは頷いた。」

「ああ。自警団のボスやりながら隠居したいとか寝ぼけたこと言ってるよ」

「自警団か、彼女らしいな。レジスタンスと何か違うのか？」

「相手が機械生命体だけじゃなくなっただってどこかな？最近では鉄クズ追い払ってるよ」

「鉄血の事か？」

「そう。追いつくたびに規模が大きくなるって頭抱えてたよ。ここ数ヶ月は見ないけど」

「最後に見たのはいつだ？」

「デボルは腕組みをして少し考えたあと、傍らの不動産屋に向いて尋ねた。」

「・・・5ヶ月くらいか？ルザレフ」

「ええ、こちらの物件をご紹介する1ヶ月くらい前だったかと思えますので」

「ホワイトは頷いた。」

「なら当分来ることはないだろう」

「デボルは眉を顰めた。」

「なぜ解るんだい？」

「このエリアを占領していた鉄血は、我々が壊滅させたからな」

部屋に数秒間、奇妙な沈黙が流れた後。

「・・・は？」

最初にそう眩いたのはデボルだった。

ホワイトは肩をすくめた。

「我々は砂漠に店舗兼住まいを構えていたが、鉄血に襲撃されてな」

「・・・」

「まあ色々協力を取り付けられることが出来たから、殲滅した」

「・・・いや待ってそれおかしい」

ようやく正気を取り戻したデボルはブンブンと勢い良く首を振った。

「なぜだ？」

「あのさ、鉄血の連中は最後に500体規模で来たんだよ？大型戦車とかハイエンドも混じってたし」

「遊撃大隊かもしれんな。こんな奴が居なかったか？」

ホワイトはペンを持つと、テーブルに置いてあったペーパーナプキンにデストロイヤーの似顔絵を描いた。

デボルが何度も頷いた。

「そう！そう！こいつ！迫撃砲バンバン撃ってきやがってさ、うちの物件が7件も台無

しにされたよ！」

「それなら消しておいたから心配しなくていいぞ」

「いやだからどうやって？」

ホワイトは肩をすくめた。

「どうと言われてもな・・・MOABで、という事になるな」

「は？モアブ？・・・MOABって人類史にある化け物みたいな爆弾？」

「ああ」

「えっ現存してるの？生まれてこのかた見たことないんだけど」

「知り合いが趣味で再現したのを提供してくれてな」

「趣味で・・・再現？大型爆弾を？」

「ああ」

デボルはルザレフと顔を見合わせ、にへらと笑いながらホワイトに向き直った。

「そ、そいつは・・・豪気だね」

「だから心配しなくていい」

「あ、あは、あははははは」

じつと様子を見ていたマスターは軽く咳払いし、デボルに向かって話し始めた。

「それで、こちらの物件なんですがね」

「へっ? あっ、ああ、むっ、無理して買わなくていいからな?」

「無理はしてないのですがお願いがありました」

「お、お願い?」

「ええ。このブロックの周囲5軒って空き家ですよね?」

デボルに視線で尋ねられたルザレフは頷いて答えた。

「はい。いずれも売り物件となっておりますが」

「じゃあまとめて6軒買おうとしたらお幾らになりますかね?」

「まとめて!?!」

デボルとルザレフが声を揃えて叫んだので、店内の少し離れた所でやり取りを聞いていた加古はくすくす笑った。

マスターはほんと、切り出すタイミングが上手いなあ。

完全に不動産屋の二人はホワイトさんにビビってるからねえ。

「・・・従いまして、えー、6軒を合計しますと金貨7332枚です」

「・・・で?」

マスターに促されたルザレフはごくりと唾をのんだ。

「で・・・と、おっしゃいますと?」

「まとめて買うとお幾らに値下げしてくれますか?」

ルザレフが青い顔で見てきたので、デボルは溜息をついた。

「ええと、マスターさん」

「はい」

「パンじやないんだから5個買うと1個サービスなんてことは無いんだよ？」

「ほう。値引きなしですか」

「まあ、手数料でちよつと手間が省けるから、端数の32枚切つて7300枚くらいかなあ」

マスターは何いを立てるかのように、恐る恐るホワイトの方を向いた。

「あの、ホワイトさん・・・」

声をかけられた途端、ホワイトはスツと目を細めた。

「ダメだ。もつと交渉しろ」

「はっはい・・・かしこまりました」

マスターに上目遣いに見返されたデボルは背中にきゅつと力が入った。

これは・・・ホワイト司令官はかなりお怒りだね。

まあこの街区は全部塩漬け物件だから、全部で2000枚くらいの買値だった。

今までかかった手数料と維持費が500枚くらいかな。

後々を考えれば機嫌を損ねない方が良いけど・・・もうちよつと交渉してみよつかな。

欲しそうだし。

「あーじゃあ大バーゲンで6500枚だ!どうよ?」

デボルの答えを聞いた後、無言でそっとホワイトを見るマスター。

ジト目でマスターを見返した後、ハイライトの消えた目でデボルを一瞥したあと、首を振るホワイト。

デボルは様子を伺いながら一呼吸置いた。

「えっと、金貨6000枚が買取値だからさ……それ以上は勘弁してくれよ」

ホワイトは目を瞑り、口を開いた。

「……デボル社長」

「はい?」

「コマンダーモデルには幾つか珍しい機能が備わっていてな」

「はあ」

「その中に、アンドロイドの嘘を検知するセンサー、というのがある。尋問用にな」

デボルがびくりと跳ねた後、滝のような冷や汗を流し始めた。

「へっ……へえ……そ、そ、そうなんですか……」

デボルは隣のルザレフを肘でつついたが、完全に置物と化していたので、この役立たずと心の中で叫んだ。

「・・・まだまだ、潤沢な利益を乗せているな？」

「ひいっ」

「私も鬼ではないが、高掴み出来るほど金持ちでもないのにな」

「あつあの」

「幾らだ？」

「えっ」

「幾らの利益まで妥協すると聞いている」

加古は店の奥でそつと頷いていた。

確かにホワイトさんは先日貰った金貨千枚も全てマスターにあげてしまった。

だからホワイトさん「は」せいぜい金貨数枚しか持つてない。

嘘は言つてないけど、限りなく確信犯だよねえ・・・まあ黙つてよつと。

しかし普段のホワイトさんとはかけ離れた振る舞い・・・それも堂々としたもんだわ。

やるねえ、演技派だねえ・・・

それから2回提示した値段を突っぱねられたデボルは、涙目で告げた。

「3000枚。もう本当に赤字なんで勘弁してください」

「んー？」

目を瞑つたまま、なおも疑わし気に眉を吊り上げて返事を返したホワイトに対し、マ

スターが口を開いた。

「あーいや、そこまでしてもらうつもりはないので：じゃあ3300枚で利益出ます？」

デボルはホワイトの眉から目を離さずに答えた。

「でっ．．出来れば．．3600枚．．くらい．．だと良くなって．．」

ホワイトがうつすらと目を開けて自分を見たので、デボルは震えだした。

「ひいいいつ．．やつやややつぱりいいですう」

マスターは机の下でホワイトの膝を軽く手で押さえながら返事をした。

「じゃあ3500枚で良いですかね？」

「えっ？はい！結構です！」

「では契約書だけ交わしてしましましょう。権利書は対価と引き換えて良いですから」

「ありがとうございます．．」

デボルは契約が成立した事よりホワイトが殺意交じりの視線を止めたことに感謝していた。

1583年ぶりにチビるかと思ったよ！コマンダーモデル怖いよ！

ポポルに言いつけてやる！

その、帰り道。

「やあ、生きて出られましたねえ。シャバの空気はウマいってやつですか」

「あんた何もしてないでしょ」

店から見えなくなる角を曲がったところで、腰を叩きながら言うルザレフを、デボルはジト目で見つめた。

ルザレフは肩をすくめた。

「でも私だっいたら交渉決裂とするか、泣きながら原価提示するかどちらかでしたよ？」

「泣くなよみつともねえなあ」

「それにしても、さすが社長ですねえ。あの状況でなお金貨1000枚の利益を確保するなんて」

「フン」

デボルは煙草に火をつけ、ゆっくりと紫煙を吸い込み、吐き出した。

そしてにやりと笑った。

「でなきや社長なんてやってられねえよ。帰るぞ」

「はい、社長」

「ところでさ、ルザレフ」

「はい」

「珍しく私を連れてったのは、ああなることを分かってたのかい？」

ルザレフは営業車の後部座席のドアを開けながら頷いた。

「私は・・そういう勘が働きますのでね」

デボルは乗り込みながら苦笑した。

「お前も大概だな」

「でなきやこの地で不動産屋などやってられませんか。さあ、帰りましょう帰りましょう」

「よっし！久しぶりにがつぽり儲けた大商いだからな！ケーキ屋行くぞケーキ屋！」

「はいはい、かしこまりました」

頷いたルザレフはドアを閉め、運転席へと向かったのである。

第44話

「というわけで店の周辺は全部うちになったんだけど、あつちに引越さないか？」

その日の夕食後、仮住まいで久しぶりに全員揃った顔を見回しながらマスターは切り出した。

MP40がそつと手を挙げたので、マスターは頷いて促した。

「え、ええと、そもそもなぜ金貨3500枚も支払って1ブロック全ての建物を購入なさったのですか？」

マスターは頷いた。

「良い質問だ。こつちの仮住まいの方が住宅地として整備されてるし、洞窟の中だから安全だ」

「はい」

「ただ、幾つか問題がある。1つはデラさんの飛行機が相当長い事タキシングしてるでしょ」

「そうですね」

「あとはご近所さんの目が多いってのもある」

「何か嫌な事がありましたか?」

「毎朝デラさんの飛行機からMRAPにチェアを積み替えてた頃、ウルサイと言われた事が、ね」

途端にMP40の目からハイライトがログアウトした。

「えっ・・・いつ、どなたからですか?お聞かせ頂けますか?すぐに駆除してきますよ?」

「いや過ぎた事だから・・・落ち着けMP40。もういいの!行くなよ?良いな?」

「・・・マスター様が仰るなら仕方ありませんね」

「ま、その点店の方は外だから音は響かないし、近くにある空き地を使えば飛行機も離着陸出来る」

「はい」

「だったら居住区画と店舗を分けて、あつちで住んだ方がデメリット無くなるでしょ?」
「なるほど、さすがマスター様です!」

敬意の籠った目でマスターを見るMP40を横に、加古はジト目で呟いた。

「要するにマスターは大きな音が出る趣味の仕事を夕食後にやっても文句言われなくな
いんですよ?」

途端にホワイトとMP40から疑いの目で見られたマスターは明後日の方を向くし

かなかった。

「やっぱりね・・そんなことだろうと思つたよ。で、建物作り直すの？」

「そのつもりだよ。まだ今ならこつちに住みながら建て直せるからね」

ホワイトがそつと手を挙げたので、マスターは頷いた。

「もし可能であれば、一旦更地にして、もう少し本格的に掘つてみたいのだが・・」

「油田並みについて事ですか？ k m単位で？」

「いやいや、そこまで本格的ではないが、そうだな・・25 mくらい」

「掘る地点は変わらさずですか？」

「ああ」

「じゃあ店を閉じて1Fの床を抜いて、掘削機を大型化しますか？」

「なるほど。それなら露天にするより悪天候でも続けられるな」

「他の5軒もそれが終わるまでは取り壊さないでおきましょう。問題は・・」

「問題は？」

「この仮住まいをそこまで貸してくれるかどうかですね・・」

ホワイトは頷いた。

「特に問題は無いとデラさんから聞いている」

マスターは頬杖をついた。

「少なくとも賃料があるはずなんだけど、デラさん大丈夫としか言わないんだよねえ」
ホワイトは肩をすくめた。

「特に賃料とかはかかってないらしい。好きに住めと言っていた」

「じゃあ職人さんの誰かの家なのかなあ・・ここ出る時にデラさんに御礼しないとなあ」
加古はフフツと笑った。

「デラさんが来やすいようにあつちに居を構えるんだって言えば良いんじゃない？」

「それはそうだが、だから何だ？」

「デラさんの事考えてるよって伝われば良いんだって」

「当たり前じゃないか」

「当たり前じゃないんだと思うよ」

「？」

首を傾げるマスターの前に、MP40は口を開いた。

「ええと、そうなるとう明日からお店は休みにされるんですか？」

「そうだね。ちょうどバックオーダーもないし。あ、MP40は今回いつまでこつちに居られるの？」

「一番早いお客様があつちだから・・あと7日間ですね」

「お、ちよつとゆつくりできるんだね」

MP40は苦笑した。

「お客様の絶対数が減ってるので、喜んでばかりもいられないですけど」

マスターはMP40の表情を見て、すっと真面目な顔になった。

「なあ、それはその、客が戦死したって事かい？」

「ええ。鉄血に殺されてるのがほとんどです。あとはミュータントと正規軍の戦闘に巻き込まれたとか」

「・・・なあMP40」

「はい」

「新しい店舗が出来たら、一緒にここで働かないか？」

「えっ?」

「君を待つてるお客様が居るだろうから、すぐにとは行かないだろうけどさ」

「・・・」

「その、私の大切な人がそういう戦地の只中に行くのは心配なんだよ」

「大切な・・・ひと・・・」

「もちろん。でなきや誓約の指輪なんて渡さないよ」

MP40はあつさり頷いた。

「辞めます。いえ、もう辞めました」

「えっ」

「お客様には資金繰りに行き詰ったと伝えておきます」

「いやいやいやいや待ちなさいMP40」

「へ？はい」

「君が配ってるものはライフラインでもあるのだから、ちゃんと代替手段を紹介してあげて」

「ああ、その辺はご心配なく」

「？」

「戦地にお水を届ける商売は、利益率が高いので競争が結構激しいんです」

「・・・ほう」

「配達中に自分の身を守れば良いので、戦術人形、艦娘、機械生命体、アンドロイド、誰でもやってます」

「へえ」

「ですからお客様も買える物、配達周期、お値段など色々な方向から比較して選んでますよ」

「一番多いのは戦術人形なの？」

「いえ、艦娘ですね」

「艦娘？」

「卸業者と提携して、昔から戦地での配送を業としているベテランが多いです」

「そうなの？」

マスターの視線を感じた加古は頷いた。

「だつてこちら、もう海で仕事する事ないからね。兵站関連の仕事する子は多いよ」

「へえ」

「FOLMEが1次卸、2次卸全部牛耳ってるつても艦娘に有利だし」

「鼻屑目はあるんだらうね」

MP40が溜息をついた。

「はい。艦娘だと卸値で買えたりするんで価格では競争出来なかつたですね・・・」

「なるほどなあ・・・まあ、お客さんにちゃんと代替手段が揃うなら良いけどさ」

「解りました・・・ではその確認の為にもう1回巡回してきます」

「うん。じゃあ次に帰ってきたら一緒に働こう」

「はい。すぐ戻ってきます」

「とりあえず、今回の休みを楽しむと良い。その合間に改装を手伝ってくれたら嬉しいな」

「解りました。何をすれば良いですか？とりあえず店の床を明日の朝までに全部剥がし

「おけばいいですか?」

「そんな酷いこと言わないから。まずは休みなさい」

「かしこまりました」

マスターは面々を見回した。

「じゃあまずは店を畳んで、床を剥がして、もう少し深く掘ってみる」

面々が頷く。

「そして良いかなとなったたら6軒全部更地にして新しい店と住まいを作る、でいい?」

加古はニヤリと笑った。

「マスターは工作室作るんでしょ? 私もクッション部屋欲しいな」

マスターは何度か頷いた。

「皆、それぞれ居住用の部屋と趣味部屋の2部屋構成にしとくか。それも良いな」

ホワイトが肩をすくめた。

「それならあまり長引かせても申し訳ないな。短期間で確認しよう」

マスターが首を振った。

「日頃色々手伝って頂いてるんですから、気の済むまでどうぞ」

「そ、そうか?」

「ええ。多分その間、加古達は新しい住居の間取り図でも書いてるでしょう」

マスターが指し示した先では、既にMP40と加古が部屋配置で言い争いを始めていた。

「なるほど、な」

ホワイトは苦笑しながら頷いた。

第45話

それから数日後。

「・・・」だな

ホワイトは一人、商店街の外れの方にある1軒の店の前で立ち止まった。

看板には「デボル&ポボル不動産」と書かれていた。

「いらつしやいま・・・あれ、ホワイトさんじゃないか。何かあったか?」

店では奥の方にデボルが一人座っており、ホワイトに気づいて近寄ってきた。

ホワイトは軽く首を振った。

「いや、契約の方ではない。先日話に出ていたアネモネの仕事を知りたくてな」

「アネモネの? 行くのかい?」

「そのつもりだが、何か問題があるか?」

「えーっと、徒歩で?」

「距離によるが・・・」

「間違いなく車で行った方が良くよ、後はアポイントも取つといた方が良くね」

「・・・どういう意味でだ？」

訝しがるホワイトに、デボルは肩をすくめた。

「簡単な話、アネモネが居る所はこの居住区を守る前線基地だ。鉄血と間違われたら50口径で撃たれるよ？」

「なるほど」

「それに、視察とか行つてたら会えないかもだからね。話は通しておいた方が良い」

「そういう事なら納得だ」

「良かったら連絡してあげるけど？」

「頼めるか？ ついでに連絡先も知っておきたい」

「OK、それを教えて良いかも聞いたくよ。そこにかけてて」

デボルは応接セットを指さすと、耳に手を当てて通信を始めた。

ホワイトは勧められた席に腰かけ、店内を見回していた。

所狭しと並ぶ物件情報を興味深そうに眺めていく。

「なるほど、耐荷重的にアンドロイドなら1名まで居住可能か。そういう配慮も必要なのだな」

その時、デボルが近づきながら声をかけてきた。

「なあホワイトさん。都合の悪い日はあるかい？」

「特には無い」

「解った・・ああ聞こえてたか？特に無いってさ・・ああ解った。連絡先は・・」

そんなやり取りを幾つか交わした後、デボルは数枚の紙を手に応接セットのソファへ座った。

「お待たせ。アネモネは明日は日が昇ってる間ならいつでも良いらしい」

「解った」

「場所の地図がこれ。ちよつと小さいけど」

「ああすまない。今はここだと思っただが良いか？」

「あつてるよ。この道は荒れてる。このルートの方が行きやすいかな」

「解った」

「で、アネモネの連絡先はこれ。戦闘中とかだと繋がらないけどね」

「それはそうだろうな」

「移動手段はある？良かったら車出してあげるけど」

「そこまでしてもらうのは気が引けるな」

「私も久しぶりにアネモネの顔見とくのも悪くないなと思っつてさ」

「明日の都合は良いのか？」

「ああ」

「では、頼もう。よろしく願います」

「良いの良いの。こないだは久しぶりに儲けさせてもらっちゃったし・・・あつ」
途端にジト目になるホワイトに、ぐくりとつばを飲み込むデボル。

「・・・やはりあれでもだいぶ儲けは出ていたな?」

「あははは・・・でないと経営出来ないよ」

「・・・まったく、それなら最初の値段は何だったんだ」

「この辺りでは大きな金額の取引では普通に値引き交渉あるし、その為に手厚く利益乗せておくんだよ」

「そういうものか。ならば遠慮せずもうあと一時間くらい話せば良かったか?」

「いや、あれはもうあれ以上交渉の余地はなかったよ?」

「まだ儲けたと言ったではないか」

「儲けなきや商売続けられないよ」

「ふむ。それもそうか。では明日は何時にする?」

「内部時計の現在時刻は1325時で合ってる?」

「ああ」

「じゃあ明日の0900時にここで待ち合わせで」

「解った」

「ホワイトさん一人？」

「そのつもりだ」

「ん。じゃあ営業車用意しとく」

「頼んだぞ。ではな」

そう言っ出ていったホワイトを目で追いながら、デボルは肩をすくめた。

「アネモネに、記憶はあまりないみたいと伝えとくよう頼んどいたけど、どうなることやら・・・」

その日の夕食時。

「えっ、じゃあホワイトさんの知人とお会い出来そうという事ですか？」

「そうなる。だからすまないが、明日も現場を離れて良いだろうか？」

「ああ、大丈夫ですよ。まだ設計図に基づいて測量とマーキングしてるだけですし」
そう。

加古が笑顔の接客で高級リクライニングチェアを売っていた店舗は綺麗に片付けられた。

表のガラスには養生シートが張られ、玄関のドアノブには店舗改装中と掲示されている。

それでも日に数名は店を訪ねてきて肩を落として帰っていく男達が居たりするが・・・

そして店の中では地下から地上へと突き抜けるほどの採掘施設がまさに建てられようとしていたのである。

加古も頷いた。

「まだまだホワイトさん居てもすることないから何日か抜けても大丈夫だよ」

「そうか」

「あたしやMP40は外に知り合いとか友達居るけど、ホワイトさん一人だったし」

「・・・」

「旧交を温められると良いね」

「・・・ああ。ありがとう、加古」

「にひひ」

マスターはふと、顎に手をやりながら言った。

「えっと、そのアネモネさんの所まではどうやって行くんです？MRAP出しますか？」

ホワイトは首を振った。

「いや、デボル社長が同行してくれる。営業車を出してくれるそうだ」

「道案内という事ですか？」

「社長もアネモネに会うのは久しぶりらしくてな、付き合ってくれることになった」

「そうですね・・・じゃあ」

そう言つてマスターはキッチンに取つて返すと、小さな木箱を1つ持つてきた。

ホワイトは首を傾げた。

「それは？」

「お酒ですよ。積もる話もあるでしょうから手土産にされては？」

「私は自身の体験ではなく、記録にあるだけなんだ。前任者の引継記憶さえもないから
な・・・」

ホワイトはそう言つと、寂し気に微笑んだ。

マスターは木箱を紐で結わえ、持ち手を作りながら続けた。

「それならそれで、そう言つてしまひましょう。その上でそこから始めれば良いんです
よ」

「・・・それで良いのだろうか」

「それでも共有出来る物があれば話は始まる。たとえ同形式のアンドロイドだという事
だけでもです」

「・・・」

「だつてホワイトさんは、かつての仕事仲間だつたという為だけで会いに行くんですよ
ね？」

「・・・ああ」

「そういうことです。誰もが、仲間を見つけたいんですよ。ゆっくり話してきてください」

ホワイトはマスターを見た。

マスターはにつこり笑って箱を差し出した。

「もし想像と違って、仮に拒絶されても私がここに居ます。決して一人にはなりませんから」

ホワイトは箱を抱えてうつむいた。

そして少しした後、小さく頷いたのである。

翌日。

「ねえマスター」

「なんだ」

「尾行するのにMRAPは不適當だと思っただけだなあ」

「MP40の装甲車の方が良かったか？」

後部座席に居たMP40は首を振った。

「大して変わらないと思います。むしろ武装がある分見つかった時に厄介かもしれませ

ん」

「なんで?」

「アネモネさんて確か、この道の先にある司令部の総司令官だったと思うんですが・・・」

マスターはMRAPを急停止させ、MP40に振り返った。

「ちよつと待て。アネモネさんは自警団のボスと聞いてたんだが?」

「ええ。彼女達は自らを自警団と名乗ってます。合ってますよ」

「・・・えつ、自警団ってせいぜい10人とかそれくらいのイメージなんだけど?」

「少なくともこの先にある自警団の総司令部だけでも200名は常駐してますよ?」

「・・・加古」

「んー?」

「俺は進むべきかな、引くべきかな?」

「どっちでも。マスターに撃ってきたら殲滅するだけだし」

MP40も頷きながら言った。

「ええ。そんなふざけた真似をしたらどうなるか、しっかり学んで頂かねばなりませんね」

マスターは二人の目を見て頷くと、MRAPのギアをバックに入れた。

こいつらはやる。絶対にはや。

ホワイトさんも心配だが、それ以上に間違いがあつてはいけない。

第46話

「ようこそ、自警団へ。それとデボル社長、お久しぶりです」

「調子はどう？」

「最近は落ち着いてますよ。さ、こちらへどうぞ」

デボルの運転する営業車がそびえたつ門に近づくと、門は軋んだ音を立ててゆっくりと開いた。

そして駐車場で待っていたアンドロイドとデボルはそんな言葉を交わした。

ホワイトは周囲を見渡した。

アンドロイドと戦術人形が混じった部隊のようだ。

皆武器を携行しているが、地对空ミサイルといった大型の兵器は無さそうだ。

せいぜいロケットランチャーか対物ライフルまでか。

そうなると先日の遊撃大隊相手では苦戦しただろうな。

「ホワイトさん、よそ見していると置いてくよ？」

ふと声の方に振り向くと、少し先にある建物のドアを開けて待っているデボルの姿が見えた。

「すまない。すぐ行く」

ホワイトは急ぎ足でデボルの元に向かった。

「こちらでお待ちください」

「悪いね」

案内された一室は壁一面に大きく地図が映し出されており、様々な記号が地図上で動いていた。

ホワイトは一瞥しておおよその状況を理解した。

特に脅威はなく、定期巡回のみというところか。

「待たせたな。私がアネモ．．ネ．．」

背後から聞こえた声が途切れたので、ホワイトはゆっくりと振り返った。

そこには記録されていたプロフィールの顔写真とそっくりな女性型アンドロイドが立っていた。

ただし、こちらを見て呆然とした表情である。

ホワイトは苦笑いをした。どこから説明したものだろうか。

「まあとりあえず自己紹介しようか。あたしはデボル。不動産探す時に思い出し出てくれ」

デボルの気軽な声で我に返ったホワイトは、アネモネに微笑みながら口を開いた。

「私はホワイトだ。実を言えば初めましてなのだが、記録上は久しぶりともいえるな」

ホワイトの一言を聞いたアネモネはぴくりと眉を跳ねたが、すぐに頷いた。

「私はアネモネ。自警団の総司令官だ。今日の用向きは何だろうか？」

デボルに視線で促されたホワイトは、そっとマスターが持たせてくれた箱を掲げた。

「その、私の経緯を説明したいのと、おかしな話かもしれないが旧交を温めたいと思つてな」

デボルはアネモネを見て、自制心を働かせてくれたことに感謝していた。

もしホワイトが当時の事を記憶していたら、到底今のようなセリフは出てこないからな。

「・・・なるほど。では貴方は地球に墜落した後の記憶しかないのだな？」

「その通りだ」

アネモネは頷いたホワイトを見て、じとりとした視線をデボルに向けた。

私にどうしろというんだというアネモネの非難するような視線を受けたデボルは肩をすくめた。

「それとは別にもう一つ、アネモネさんには知っておいて欲しい事があるぜ。最近の話

「さ」

「なんだ？」

「近頃は鉄血の連中、来なくなつただろ？」

「ああ。どういふ風の吹き回しか知らないがな」

「追い払つたんだつてさ、ホワイトさんと愉快的な仲間たちが」

「……は？」

「デボルはホワイトの方を向き、壁面の地図を指さした。」

「あれでどの辺りをどうやったのか、教えてあげてよ」

「ホワイトは頷いた。」

「ああ。少し地図が狭い。もう少し広域の物に切り替えられるか？」

「……はい？」

「デボルとアネモネの声がピタリと重なつた。」

「……そして最後にこの拠点へMOAB1発を発射し、西半分も消した。以上だ」

「……」

「ホワイトは言い忘れたことは無かつたかと思ひ返していたが、ふと、全く声が聞こえないことに気が付いた。」

そして二人を見てびっくりとなった。

二人とも、ぼかんと口を半開きにして呆然とした表情でこちらを見ていたからである。

ホワイトはとっさに、自分が根本的に技術用語を間違えて用いたのかと考えた。

そして恐る恐る訊ねた。

「え、ええと、その、今の時代では用語の使い方が変わったとかがあるかもしれない」

「……」

「解らなかつた事があつたら言ってくれ・・なんでも説明する」

しばらくの沈黙の後、アネモネがゆっくりと頷いた。

「・・いや、解らなかつたわけではない。強いて言えば、今日の今日まで謎だった事が全て解つた」

ホワイトはアネモネの言葉の続きを慎重に待っていた。

アネモネは続けた。

「貴殿の作戦決行日、うちの部下が移動中の鉄血の大隊が爆発で消し飛んだのを目撃している」

「空のあちこちに白い線のような雲が出来て、その先ですさまじい爆発が次々起きたことも」

「莫大な兵力を有していた鉄血の基地が真つ黒に抉り取られた大地に変わり果てたことも」

「なにより、その日を境に鉄血の小型戦車1台すら見かけなくなったこともだ」

「我々はこのあまりにも不可解な出来事をずっと調査していたが・・・そういうことだったのだな」

ホワイトは恐る恐る訊ねた。

「オペレーターとは密にやり取りをして着弾位置を調整したが、貴殿側に被害があったのか？」

アネモネは首を振った。

「いや、こちらの損耗は無い。むしろ何故無かったのかと疑問を持つ程の威力だったがな」

「鉄血以外に損耗を出すなど命令したからな・・・良かった」

ほっと胸をなでおろすホワイトを見て、アネモネは初めて苦笑を浮かべた。

「貴方は間違いなく、バンカーのホワイト司令官ではないな」

ホワイトは眉をひそめ、アネモネを見返した。

「い、いや、私は確かにバンカーで運用される筈だったコマンダーモデルなんだが」

アネモネは首を振った。

「そうじゃないんだ。バンカーで指揮していた鬼司令官とは性格が違うといえれば良いか？」

「鬼司令官？」

アネモネは目を細めた。

「バンカーで指揮を取っていた貴方の前任者はな」

「ああ」

「カアラ山で私も含め、降下作戦に従事したアンドロイド部隊全員を見殺しにしたんだが」

「！」

「我々の救援要請に対して「派遣する為の損耗に対するメリットが無い」から許可出来ないと言ったんだ」

「……」

アネモネはふつと笑った。

「多分、「貴方」はそんな答えにならないんじゃないか？」

ホワイトはややあつてから、頷いた。

「時に非情な決断をしなければならぬだろうが、それでも・私には言えないだろうな」
デボルはニツと笑って頷いた。

「だろうね。この前の交渉見ててそう思ったよ」

ホワイトは疑わし気な目でデボルを見た。

「どうしてそう思った？」

「あの時ホワイトさんはアタシの嘘を見抜くセンサーを持ってたんだろ？」

「今も持つてるが？」

「だったら最後に3000枚って言った時にも、まだ反応があったはずだ」

「ああ」

「どうして値下げの追及を止めたんだい？」

「それは・・・マスターがもういいと言ったからだ」

「あん？マスターって、あの男だろ？ホワイトさんの部下じゃないのか？」

「違う。マスターは私の恩人で、私がお仕えするお方だ」

「・・・えー、すっかり騙されたなあ」

デボルは両手を自分の後頭部に持って行きつつ唸った。

「騙したとはどういうことだ？」

「あたしはてつきり、ホワイトさんがGOサインを出さないと買わないだと思ってた

よ」

「ほう」

「でも意思決定者はあのマスターだったとはね。一杯食わされたよ」

ホワイトはデボルに向けてニイツと笑った。

「食わしてくれたのはそちらも同じだろう？金貨何枚儲けた？」

デボルも意地の悪い笑みを返した。

「それは企業秘密となっております」

アネモネはじつと二人のやり取りを聞いていたが、小さくため息をついた。

「・・・うむ、それなら話は別だ。ホワイト殿」

「あ、ああ。すまない、話の途中だった」

「いや、先程の話の通り、貴方はバンカーのホワイト司令官と瓜二つの外見だが、中身はまるで違う」

「・・・」

「そして何より、貴方の作戦によって我々の部下が多数救われたのは事実だ」

「・・・」

「私はデボルと違ってホワイト司令官との記憶も持ち合わせているが、折り合いをつけていこうと思う」

「・・・」

「私の部下を救ってくれたことに感謝を。そしてこれからの友人として迎えたいが、ど

うだろうか？」

ホワイトは頷き、すまなさそうに首を傾げた。

「ありがとう。それと、貴方にそんな仕打ちをした者と一緒の外見で、惑わせてしまつてすまない」

アネモネはくすくすと笑つた。

「大丈夫だ。絶対に同一視出来ないほど違う性格だから間違えないよ」

デボルはホワイトが床に置いていた木箱を取り上げ、ポンと叩いた。

「ところで、これの中身は何だい？」

「マスターがくれた酒だ。中身は私も解らないんだ」

「へえ。じゃあこれで3人で固めの杯と行かないか？」

二人はしつかりと頷いた。

第47話

・・・トクツ・・・トクツ・・・コツ・・・コツ・・・コツコツコツ

テーブルに置かれた3つのグラスに、ボトルから琥珀色の液体が注がれていく。

3つに入ったことを確認すると、椅子に腰かけたまま、デボルは頷いた。

「色々やり方はあるだろうけど、アタシの流儀で行くぜ」

同じく腰かけたままのホワイトとアネモネが頷いたので、デボルはグラスの1つを取った。

「さ、皆も1口飲んで」

こくりと飲むと、グラスを隣のホワイトに渡す。

「で、私はアネモネさんのグラスを頂くよ・・・さ、もう1口」

こくり。

「最後。もう1回回して、受け取ったら1口」

2人が飲んだのを見て、デボルは肩をすくめた。

「本当はここでグラス叩き割るんだけど、床を汚したら不味いだろう？」

「ついでにグラスも余裕が無いんだ」

アネモネが苦笑しながら頷いたので、デボルはグラスを持ち上げた。

「じゃあ飲み会が終わるまで今持つてるグラスを使うって事で。乾杯！」

「乾杯」

3つのグラスが重なり、カチンと澄んだ音色が響き渡った。

そして。

「でっひゃっひゃっひゃ！それでアネモネったらビービー泣いてさあ」

「止める忘れろ今すぐに！」

「ほほう」

「ホワイトも今から覚えるな！」

「・・・ういっく・・・ねる」

「まったく、デボルは酔うと碌なことを思い出さないな・・・あーそこで寝るな」

アネモネは溜息をつきながらホワイトのグラスに酒を注いだ。

「ありがとう」

ボトルに栓をしつつ、アネモネは首を振った。

「なんというか、デボルとポポルみたいか？いやもつと似てるな」

「どういふことだ？」

「ええと、デボルには双子のポポルが居るのは解るか？」

「ああ。記録にはある」

「デボルはこんな感じで社交的でやり手。ちよつと粗雑だが明るい」

「ああ」

「ポポルは内向的で、丁寧で、物静か」

「ちよつど逆だが・・ホワイト司令官はそんなに私と真逆なのか?」

「アネモネは複雑そうな表情をした。」

「逆とまでは言わない。ああつと、本人に面と向かって言ってるようで気が引けるが:」

「構わない。前の個体がどのように振舞っていたかは知りたかったのだ」

「時には情のある判断も下すが、基本的には全体を考えた冷酷な決断を下す・・あと」

「あと?」

「部屋の片づけは破滅的に苦手だったらしいぞ」

「仕事人間だったということか?」

「それは世の中の仕事人間と呼ばれる者達への宣戦布告ということか?」

「い、いや、そういうつもりで言ったわけではない・・能力の全振りというか・・」

「冗談だ・・ところでこの酒を持たせてくれたマスターという方だが」

「うむ」

「・・・機械生命体か?アンドロイドか?」

「人間だ。艦娘化技術を応用して強化されているそうだが」
「に、人間だつて!？」

ガタリと腰を浮かせたアネモネをまっすぐ見ながら、ホワイトは頷いた。
「私の記録にも、人間は既に絶滅したとあったからな、気持ちは解る」

だが、その一言にもアネモネは目を白黒させた。

「なっ!?なんだつて!?!きつ記録つて、ヨルハ部隊が来た頃には人類は月に行つたんじやないのか!？」

ホワイトは首を振った。

「それは人類軍が考えたフェイク情報だ。人類は月には行つてない」

「・・・絶滅と判明したのはいつ頃の話だ？」

「西暦4200年頃と記録にはあつた」

「待つてくれ・・・じゃあ我々がレジスタンスとして戦いを始める遙か前の事じゃないか」
頭を抱えたアネモネの背中を、ホワイトはそつと撫でながら言った。

「だが、それは人類軍が把握していた範囲ではという話だ。実際は現存しているのだから」

アネモネはがばりと身を起こした。

「そ、そうだ。艦娘化技術で強化されたとかいったな？」

「ああ。その仔細は私も聞いていないが、艦娘化技術で強化したクローンに元の個体の記憶を入れたらしい」

「・・・」

「そうした人を複数人作り、ランダムな期間コールドスリープさせていたようだ」

「なるほど・・・まあ今の地球環境で人類が生きられるとは思えないからな」

「マスターはその保管エリアの最後の一人だったらしい。他の個体の消息は不明だ」

「・・・そうか」

ホワイトは再びアネモネの背中を優しく撫でた。

「これだけ安全が確保された居住地があつてこそ、今マスター殿は安心して暮らせている」

「・・・」

「つまりアネモネ殿が今までやってきたことは、何一つ無駄ではなかったのだ」

「・・・」

「この地の平和を守ってくれて、ありがとう。おかげで人類が一人、確実に救われたのだ」

アネモネは黙ったまま、グラスを両手で握り、ぎゅつと目を瞑っていた。

その背中小刻みに震えているのをホワイトは掌で感じつつも、何も言わなかった。

ただただ、ゆっくりと。

夜が明けるまで、ホワイトはアネモネの背中を撫でていた。

「本当に良いのか？この酒は貴重な品だぞ？」

「友情の印という事で受け取ってくればありがたい」

翌朝。

日が昇ると早々に身支度を整えたホワイトとデボルは、営業車に乗り込もうとしていた。

そこに見送りつつホワイトに声をかけたアネモネという構図である。

3人とも二日酔いしていないのは、さすがアルコール分解機能を持つアンドロイド、という事であろう。

アネモネはガリガリと頭を搔いた後、木箱を小脇に抱えた。

「それでは返すわけにはいかないな」

「ああ」

「また機会があつたら寄ってくれ」

「連絡する。居住区内には居るのだがな」

「・・・訪ねてきてくれてありがとう。過去のトゲが幾つか抜けて、気が楽になった」

デボルはニツと笑った。

「じゃああと5万年は自警団のボスでいられそうですね。安心しましたよ」

「おい勘弁してくれ」

「あと、ホワイトさんの居る店は雑貨屋だそうで、色々手配してくれるみたいですよ？」
「たとえば？」

「デボルはバックミラー越しにホワイトに尋ねた。

「お取扱商品をどうぞ」

ホワイトは急に振られたので、慌てて指折りながら言った。

「椅子等の内装品や、兵器を含めた設計製作、ああ、アンドロイドのエネルギー補充も考えて・・・」

「「えっ!?!」」

「アネモネどころかデボルまで真顔で振り向いたのでホワイトはびっくりとした。

「な、なんだ？」

「ちよつと待つて最後の詳しく」

「エネルギー補充には触媒石の高純度粒子が必要になる筈だぞ？」

ホワイトはそこまで聞いてからしまったと思ったが、

「少量だが備蓄がある。まだ思案中の話だから内密に頼む」

と、小声で返すのがやっとだった。

「……」

アネモネは真面目な表情で少し考えた後、デボルに向かつて言った。

「デボル。解つてると思うがこの話は秘匿しておけ。私も部下にも伝えない」

デボルは頷いた。

「ああ。雑貨店オリファイが明日の朝には瓦礫の山になつちやうからな」

アネモネはホワイトに真剣なまなざしで、ゆっくりと話しかけた。

「ホワイト殿。デボルが言うのは大げさではなく、今や触媒石は持つてるだけで殺される理由になる」

「そこまで逼迫してるのか」

「全ての産出地で掘りつくされた。だから過去に精製された在庫が見つかる度に紛争が起きている」

「すると、ネット上にあつた原石1gで金貨2枚というのは……」

アネモネは首を振った。

「今では最も少なくて済むヨルハ型ブラックボックス1基分でさえ金貨2万枚と言われている」

「1基分……1ミリグラムで？」

「ああ。ただそれは、すぐ使えるような高純度粒子に加工されてればの話だ」

「鉱石では？」

「未精製の原石なら1グラムで1万枚くらいか？だが実物が無いから何百年も取引が成立していない」

「なんてことだ・・だから最近の相場が無かったのか」

「それくらい危ない代物だ。人ごみの中で触媒石などと言ってはならんぞ？誰が聞いているか解らん」

「解った。うちの者達にも徹底しよう」

「・・その、どの状態でお持ちなのだ？」

「鉱石で、ごくわずかだ」

ホワイトはとっさにそう言ったが、頭の中ではバケツ半分程ある触媒石の光景がよぎっていた。

あれがあると知られたら、大真面目に戦争が始まるかもしれない・・

ふと、アネモネが首を傾げた。

「あと、どうしてそれが触媒石だと解ったのだ？」

「私には触媒石専用のセンサーがあつて、それが反応しているのだ」

アネモネは頷いた。

「なるほどな。コマンダーモデルなら運営する為にそういうセンサーが装備されていてもおかしくはない」

「アネモネ殿も持つているのか？」

「いや、私は元々兵士だから持つてない。私の周囲でも聞いたことは無いな」

ホワイトは肩をすくめた。

「つまり、このセンサーの存在も言わない方が良いわけだな」

「そうだな。それがあれば確実に産地が分かるってことだからな」

「その情報を得られて良かった。この礼はいずれまた」

「私もマスター殿に挨拶がしたい。人類に会うなんて初めての事だからな」

「そうだな。私も今のところマスター殿しか見たことが無い」

デボルが驚いた顔で再びホワイトに振り返った。

「えっ!? マスターって人間だったの? 艦娘かと思ってた」

ホワイトは頷いた。

「艦娘化技術で強化された人間、だそうだな」

「へー、類は友を呼ぶって事かあ」

「どういう意味だ？」

「珍しいコマンダーモデルが、これまた珍しい人類と一緒に居るってこと」

ホワイトは心の中で、ついでに珍しいミュータントも居るぞ、と呟いた。

アネモネはそつと車から一步離れた。

「引き留めて悪かった。そろそろ部隊が交代する時間で忙しくなる。早く行った方が良い」

デボルは頷いた。

「はいはい、じゃあちやつちやと帰りますか。ホワイトさん、シートベルトしめて」

「ああ、もう締めている」

「よつし。じゃあアネモネさん、またな！」

「ああ、近いうちにな」

アネモネは開いた門から走り去る営業車の後姿を眺めていたが、やがて司令室へと戻っていったのである。

第48話

「ええと、要するにトンデモナイ物を掘り当てちゃった的な状況ですか？」

恐る恐る訊ねたマスターに、ホワイトは小さく頷いた。

「ああ。反応のある塊を集めただけだから不純物も多いだろうが、軽く5kg以上あるからな・・・」

MP40が蒼褪めた顔で呟いた。

「アネモネ総司令官の話で考えれば・・・金貨5000万枚分ってことですよ・・・」

ホワイトは首を振った。

「どの程度の不純物割合までを原石と言うかが解らない。実質1/1000くらいかもしれない」

「それでも50万枚分ですよね・・・もう天文学的数字で想像が付きません・・・」

加古は肩をすくめた。

「更には言えば、世界で、もうそれしかないかもしれないってやつでしょ」

マスターは頬杖をついた。

「ええっと、うちら以外でここに触媒石があるって知ってるのは・・・」

「デラさん、リーリヤさん、デボルさん、アネモネ総司令官、かな？」

「うっかり喋りそうなのは・・・」

ホワイトが軽く手を振った。

「アネモネとデボルは価値を解ってるから心配はいらないだろう」

「となると・・・リーリヤさんか」

「ああ・・・職人だから世間の相場とか興味なさそう・・・」

「そういう意味ではデラさんも危ないかもな」

「二人には明日、そういう物だと言いに行こう」

「そうだな。まずは最優先で話をしてこよう。二人の身の安全のためにも」

翌日。

「へー、良かったじゃないですか」

ホワイトから説明を聞いたリーリヤは、ビスを締め終わるとホワイトに向かってニツ

と笑った。

「それはそうなのだが、あまりに高額過ぎて雲をつかむような話だな・・・正直現実感が無

「い」

「まあそうでしょうね」

ホワイトは記憶をたどり、リーリヤには最初に見つけた塊しか見せていない事に気が付いた。

なのであの塊が金貨数万枚の価値がありそうだと説明したのである。

リーリヤは数万枚という単語を聞いても特に反応しなかったので、むしろホワイトが驚いた。

「その、リーリヤは大金に慣れているのか？」

リーリヤは頷いた。

「私の実家って、アンドロイドの階級の中でも上の、貴族と呼ばれる立場まで上った事があるの」

「ほう」

「だからそこそこ長い期間、不自由なく暮らしてたことがあるんだけど」

「・・・」

「途中でクーデター起きちゃって、家族は散り散り、両親は殺されちゃった」

「なっ・・・」

「それでも逃げ延びる時に母が持たせてくれた金貨はまだまだ万単位で残ってるの」

「なるほど」

「だから金持ちはもうこりこり。強奪しようとか夢にも思わないから安心して？」

「いや、そうではなく、誰かに話してしまうと身の危険が生じるという話だ」

「大丈夫。アンドロイドにとって触媒石がどれだけ貴重かは良く知ってるもの」

「ちなみに、最近の相場を知らないか？」

「最近？相場表には「産出無し、見つかった都度応談」って書かれてるよ」

「大変なことになったな・・・」

頭を抱えたホワイトを見て、リーリヤはくすりと笑った。

「面倒だったらFOLMEに引き取ってもらったら？」

「どういうことだ？」

「今、世界で触媒石の粒子を保有していると噂があるのはFOLMEの総本部だけだから」

「・・・」

「アンドロイド最後の希望って言われてるしね」

「・・・良く解った。ああ、朝食の準備を邪魔してすまなかった」

「気にしないで」

「では、くれぐれも内密に頼むぞ？」

「はい」

ホワイトがMP40の装甲車に乗り込むのを、リーリヤは見つめながら呟いた。

「・危険な秘密を知ってしまったアンドロイドは殺せつてのがバンカーの掟だったのになあ・・・」

リーリヤはフツツと笑った。

「さてはマスターと付き合つて、ホワイトさん丸くなったのかしら？」

同じ頃。

「マスターは何かそういう神に崇られてるんじゃないか？」

「そういう神って？」

「疫病神か、トラブルの神か、騒動の神か、ボケとツツコミの神か・・・」

「・・・納得出来る根拠が豊富過ぎて悲しくなってくるよ」

「いきなり迫撃砲で撃たれるとか、ダメーで店を開けば商品がバカ売れして本業が進ま
んとか、なあ」

「そうだね・・・」

「で？わしが誰かに喋るなよって念押しにでも来たのか？」

「危険だからね。一応」

「その前にわしがごく一部の職人か、お前さん達を除いて会話が可能かどうか考えてく

れんか」

「・・・えっ？待ってくれデラさん」

「なんだ？」

「じゃあどうやって生活物資とか仕入れてるの？」

「宅配兼集金をドローンがやってる通販しか頼めないんだが？」

「ああ・・・そういう・・・」

「そこまで限定しても最近は業者が豊富にあるからの。特に困らん」

「まあDIYの材料は戦場で拾ってくればいいもんね」

「外装や骨格とかならそうじゃな。壊されやすい部材は運次第だが」

マスターはふと気づいた様子でデラに訊ねた。

「そういえばデラさん、鉄血とか戦術人形のコアは備蓄あるって言ってたでしょ」

「ああ」

「ブラックボックスも備蓄してるの？」

デラは一気にジト目になった。

「あんな2個重ねただけで周囲3km吹き飛ばす危険物なぞ誰が持つか」

「随分具体的だね」

「実体験に基づいとるからの。おかげで住まい1つ丸々消し飛んだわ。厄種以外の何物

でもない」

「なるほど・・・だからなのかな」

「なにがだ？」

「ブラックボックスとして備蓄出来ないから、ニーズがあるのに戦場に放置されてるのかもって話」

「1度使われたら別の者が使うのは不可能らしいからの。危ないだけの代物を持ち帰るバカは居らん」

「安全なブラックボックスの備蓄方法とブラックボックスからの粒子抽出方法か・・・」

デラがジト目でマスターを見た。

「うっかり加古ちゃんがり取り落として起爆って未来しか見えんぞ？」

「・・・あー・・・ボケの神の本領発揮って感じだなあ」

「止めておけ止めておけ。とりあえず金はあるんじやろ？」

「なぜか知らないけどトラブルの度に金が増えてくよ」

「あと5回くらいトラブルが起きれば貴族になれるかも」

「引き換えのトラブルのレベルがシャレにならない気がする」

「HCB 誤起動とかかの」

「宇宙のチリにはなりたくないよ」

「ともかく、わしの方は話す相手が居らんが、まあ状況は分かったから万が一機会が来ても話さんよ」

「ありがとう。あ、そうそう。結局あの店の周囲も丸ごと買ったんだよ」

「あの1ブロック全体をつてことか？ああ、採掘用か」

「いや、採掘は前も言った通り店の地下に垂直方向だけだよ」

「じゃあどうしたつていうんだ」

「店舗兼住宅にしようと思つてさ」

「住まいなら今の所を使えばよかろう・何かあつたか？」

「ん、まあ、ちよつと音の関係でご意見を頂いちやつてね」

「ほう・・・どこのどいつだ？話をつけてきてやるぞ？」

「デラの目のハイライトが消えたので、マスターは慌てて首を振つた。

「良いの良いの。それにデラさんの飛行機も来にくいでしょ」

「・・まあな」

「店の方なら洞窟の外だし、1ブロック買えば店と住まいをきつちり離せるし」

「ふむ？」

「そしたらデラさんいつでも気兼ねなくうちに来れるでしょ？」

「・・わしの飛行機の為か？」

「まあ、私が気兼ねなく工作やりたいつてもあるし、どうせならデラさんが来やすい方が良いじゃない」

「……」

「……何か変なこと言ったっけ？」

「……いや」

マスターは唇を噛んで小さく震えるデラの様子を見て首を傾げていたが、

「そんなわけで、申し訳ないけど採掘が終わって、新しい建物が出来るまであの家を貸してほしいんだよ」

「……構わんぞ」

「で、何度も聞いてるけどあの家の家賃大丈夫なの？今なら普通に払えるけど」

「いらん。大丈夫だ。何度も言っとる」

「……そう。じゃあ用事はこれだけだから。今は営業してないからいつでも遊びに来てよ」

「解った」

デラはマスターの乗ったMRAPが遠くに去っていくのを、ただただ見つめていた。

第49話

「とういわけで、次のDIYは精錬施設にするよ」

「は？」

ホワイトとMP40、マスターと加古の揃った食事時。

マスターは良い笑顔で言いきった。

「ホワイトさんが精錬プラントの構築方法も知ってるっていうからさ、作ってみようか
と思ってる」

ホワイトが頷いたので、MP40はおそろおそろ口を開いた。

「あのう、触媒石を高純度の状態で持つても、あまり良い事が無いように思えるんですけ
ど・・・」

「小さくなるから隠しやすくなるよ？」

「今もせいぜいバケツ半分くらいですし・・・」

「もつと出るかもしれないじゃない？」

「それはそうですが・・・そもそも現状をふまえても採掘を続行なさるんですか？」

「逆に、するしかないって結論なんだよ」

「逆に？」

「今採掘を止めて、掘った分をFOLMEに売るとするだろうか？」

「はい」

「でも地下からは反応が続いてるわけだよ」

「はい」

「それが知られたら、店はどうなると思う？」

「あっ」

「その通り。夜討ちか打ち壊しか特殊部隊突入か知らないけど、絶対平和な展開はない」

MP40はこくりと頷いた。

「だったらもう掘りつくしてしまつて全部FOLMEに渡しちゃう方が良いでしょう」

「なるほど！さすがマスター様です」

「そうだろうそうだろう」

加古がジト目で呟いた。

「精錬プラントなんて大物作れるとなると腕が鳴るよねえ」

「黙秘します」

「うつきうきですつて顔に書いてあるよ。黒マジックの極太で」

「極太か」

「極太です」

「知られてしまつては仕方ないな」

「なによう」

「FOLMEへの売却益の2%でどうだ?」

「えっ」

「アネモネ司令官情報を思い出せ。鉱石より精錬状態の方が単位重量当たりの値段が高かつただろ?」

頷くホワイトを横に、マスターは続けた。

「鉱石なら1グラムで1万枚だが、精錬状態ならなんと1ミリグラムで2万枚だ」

「えっちよつと待つて、2000倍も違うの?」

「そうだ。仮に鉱石で売つて加古の取り分が100枚だった場合・・・」

「いちじゅうひやくせん・・・につ20万枚!?!一生遊べるじゃん!」

「協力してくれるかな?」

「やる!」

「よし」

MP40は静かに紅茶をすすするホワイトに耳打ちした。

「ええと・・精錬によって何%くらい廃棄扱いになるんです?」

「実績記録としては80〜99・8%だな」

「2000倍が最悪4倍まで下がるわけですね」

「元々2000倍はありえない。最大でも400倍だな」

「勝手に誤解した加古が悪いと」

「ノーコメント」

MP40は肩をすくめた。最悪の割合でも損はしないけど。

「私、予定では明日出発なんですけど、もう少し居た方が良いでしょうか?」

ホワイトは首を振った。

「出来れば早めに戻ってきて欲しい。精錬施設が出来上がる頃に戦力が必要になるはずだ」

「なるほど。では早く帰ってきます」

「どれくらいかかる?」

「最後の配達もあるので、頑張っても2週間から2週間半くらいですかね」

「解った。それ以上早く完成しないように手を回しておこう」

「よろしくお願いします」

「無事に帰ってきてくれ。頼む」

「はい」

MP40はにこりと笑った。なんかホワイトが指揮官っぽい。

「では、行ってまいります」

「気をつけてな」

「早く帰ろうと焦るなよ。ちゃんと待ってるから」

気遣う様子のホワイトとマスターに対し、

「ざくつと行つといで〜」

と、加古はひらひらと手を振るのみであった。

MP40はジト目で加古を見返した。

「本当に最後まで心配してくれないんですね」

「あんたがやられるなんて想像もつかないからね」

だが、MP40はスツと背筋を伸ばすと、

「私の居ない間・・・マスターをよろしくお願ひします」

そう言つて頭を下げたので、加古は目を細め、

「任せな」

と、短く答えた。

「ほう、精錬プラントか。7千年ぶりくらいに聞いたな」

「古代戦乱期末期にあってそんな単語を聞いたんです？」

「うん？」

マスターの問いに、遊びに来ていたデラはふと顎に手をやった。

「はて、そういえばどこでじやったかなあ・・・」

「まあそれはそうと、あの自走ユニットって何mくらい掘れます？」

「うん？どうせこの狭い範囲じゃから100mくらいは楽に行けるじやろうよ」

「なら採掘ユニットはそのまま行けますね」

「どうということじゃ？」

「ホワイトさんは25m付近まで掘ってみたいそうなんですよ」

デラはホワイトに訊ねた。

「そうじゃ、先日の探查結果で描いたイメージ図面を見せてもらえんかの？」

ホワイトは書棚から図面を入れたケースを取り出した。

「・・・これか？」

「ああそうじゃ。これ、もう少し深い所まで描けるかの？」

「深い所？今回掘削する所はこれよりもっと浅いが・・・」

「この辺りの形に何か見覚えがあるような気がするの」

「解った。少し待ってくれ」

ホワイトは地下室の採掘ポイント付近に立ち、じつと目を瞑って数分間動かなかった。

やがてゆっくり目を開けて作業机に戻ってくると、真つ白な紙にさらさらとペンを走らせる。

「およそ深度200mくらいまで探知したんだが・・・こんな感じだ」

書き上げられていく図面を見て、マスターとデラは目を見張った。

「デッ、デラさん・・・」

「マスター・・・これは間違いないな・・・」

最後の1辺を記したホワイトは首を傾げた。

「なんだ？知ってるのか？」

デラが頷いた。

「これは核シエルターの構造じやな。物資の保管も可能な大きいものじゃ」

マスターは腕組みをしながら呟いた。

「でも、それにしても地上へのアクセス手段がないね・・・」

ホワイトは眉を蹙めた。

「深さ方向は200mくらいだが、水平方向は500mくらい探知しているぞ？」

「ええ。シエルター全体が書き切れてますからね」

「デラは首を傾げた。」

「地上にアクセス出来ない核シエルター？昇降路が土に埋もれたか？」

「その可能性はあるけど、この辺り見て。さらに下に続いてそうじゃない？」

「確かに・・・地下方向に通路がありそうじゃない。どうということだ？」

その時、ホワイトがパタリとペンを落としたので、マスターとデラはホワイトに向き直った。

「どうしたのホワイトさん？」

「まっまさか・・・いや、そうか・・・なんてことだ」

「どうしたんです？」

「・・・機械生命体の建造物・・・かもしれない」

「なあるほど。確かに理屈は通るよね」

マスターは頷きながら続けた。

「最終戦争が近づいていることを悟った機械生命体は生き残り策を立てた」

「まずは触媒石を掘れるだけ掘り集め、それを地下シエルターに埋めた」

「戦争が終わってから地上に引き上げる操作をし、自分達の補充に使いつつ新たな産地を探す、か」

ホワイトは頷いた。

「機械生命体は地下に大規模な建造物を作ることが多いからな・・・」

「でも確かに独占する意味のある物質ですからね」

「ああ。地上の触媒石を掘りつくせば、我々アンドロイドは世代を問わずエネルギー補充が出来なくなる」

デラも頷いた。

「兵糧攻めを兼ねたという事なら、地下の異常な備蓄量と地上の現状も納得できるのう」

マスターはびくりと眉をはねた。

「つてことはさ、もしかするとシエルター内に警備兵とかいるんじゃないの？」

ホワイトが頷いた。

「その可能性は十分にあるな。個体かシステムかは別として」

デラはにやりと笑った。

「ならば戦闘の準備も必要じゃな」

マスターはホワイトに訊ねた。

「機械生命体の警備兵を簡単に一掃出来る方法ってあるんですか？」

ホワイトは頷いた。

「簡単ということならEMPだろう。電磁波だ」

「電磁波・・・うん？それならHCBで良いんですね？」

「強すぎるだろう。買った敷地どころかこの町丸ごと炭になるぞ？」

「あのサイズじゃなくて、シエルター程度の威力に小型化したら？」

ホワイトは首を振った。

「触媒石まで小さくなってしまうが？」

「あつ・・・」

「EMPだけで十分だと思うぞ・・・」

デラは肩をすくめた。

「シエルターの外側から用いてもEMPは効かんじやろう。触媒石を考えればHCBも

使えんしな」

「とすると？」

「シエルターの一部を壊して入ってみて、敵が居ればEMPで片付ける、かのう」

「ホワイトさん」

「なんだ？」

「これがシエルターだとして、触媒石はこの中にあるという位置関係で合ってますか？」

ホワイトはややあつてから頷いた。

「一番強い反応は確かにその辺りだ・・・まあ、他は反響ノイズなのかもしれんな」

第50話

それから数日後。

「ふーい・・・こんなもんかな」

「マスター殿、そっちも一段落か？」

「ええ」

「では一休みとしないか？ コーヒーを淹れようかと思うのだが」

「良いですね、お願いします」

「ああ、解った」

ホワイトはサイフオンの用意をしつつ、ふふつと笑った。

ようやくマスター殿が一休みしたい時の体調的特徴が割り出せたようだ。

心拍数、呼吸数、周囲湿度、脳波・・・センサーフル活用だ。だが使える物はすべて使う。

その時、ホワイトの通信装置が呼び出し音を鳴らしたのである。

「誰だ・・ん？ アネモネか・・・こちらホワイト、どうした？」

「先日話したが、マスター殿との面会はいつ頃可能だろうか？」

「ちよつと待つてくれ・・・」

ホワイトは保留モードにして一瞬考えた後、マスターに声をかけた。

「マスター殿。アネモネ総司令官が一度会いたいと言っているのだが」

マスターはキョトンとした顔で答えた。

「構わないですが・・・なぜ？」

ホワイトは頷いて答えた。

「我々アンドロイドは、人類をエイリアンから守るために戦うという名目で作られたからな」

「へえ・・・」

「だから、自分達が命を賭して守った証、つまり現存する人類と会いたいのだ」

「それは、アイデンティティの証明として、という事ですか？」

「うーん・・・もつと単純な気持ち・・・敬愛する主人という感じが近い」

「そんなもんですか・・・私で良いんですかね？」

「良いと思う。そして、少なくともこの居住区に居る人類は貴方だけだ」

「なるほど。私で良ければいつでもお越しく下さいとお伝えください」

ホワイトは回線の保留モードを解除した。

「待たせたな、マスターはいつでも良いとのことだ。就寝時間以外ならいいのではない

か？」

「では、早速ですまないが小1時間ほど後でも可能か？」

ホワイトは1時間後程度では夕食時にはまだ早いと判断した。

「構わないだろう。1〜2時間は時間が取れるはずだ」

「ああ・・解った。そうか、私はついに人類に会えるんだな・・楽しみだ・・」

「気を付けて来るんだぞ。位置情報は送っておく」

「うむ。ああつと、一人で行った方が良いか？」

「そうだな。一人なら・・見せられる物もあるだろう」

アネモネは一瞬でピンと来たらしく、少し声色がこわばった。

「ああ、解った。それでは一人で向かうとしよう。では1時間後に」

「1時間後に」

通信が終わったことを確認したホワイトは、マスターに向かって言った。

「アネモネは1時間後に来るそうだ」

「1時間後？随分早いね」

「・・まあその、それだけ楽しみにしてて待ちきれないのだろう」

「ほんと私なんかで大丈夫なのかなあ」

「大丈夫だ。少なくとも私は出会ってから1度も落胆したことは無い」

マスターはにこりと笑った。

「ありがとう、ホワイトさん」

「おつ・・おおおオリファイ雑貨店はここでしょうか？わ、わわつ、私はアネモネで少し落ち着こうか。色々台無しだぞ？」

ドアを開けたホワイトの姿を認識したのか、一気にアネモネの両肩がぐりと下がった。

「なんだホワイトか・・脅かすな」

「ただ単にドアを開けただけだ。緊張しすぎだ。さあ入ってくれ。お茶を淹れよう」

「ありがとう」

その時。

「~~わ~~あ貴方がアネモネ総司令官ですね？いつもお世話になっております」

「!!!」

!!!部屋の奥から出て来てアネモネに頭を下げたのは他ならぬマスターであった。

アネモネは凍り付いたように動きを止めていたが、たつぷり10秒ほどしてから再起動した。

「あ、ああ、ああああアネモネいます。よろしくある」

そんなアネモネを見て、ホワイトはジト目になっていた。

「おいおい、総司令官とか全て脇においても今の君は完璧にポンコツだぞ？」

そんなホワイトの思いを他所に、マスターはつかつかとアネモネに歩み寄る。

「さあさあ、玄関ではなんですから。どうぞ応接間に。さあどうぞこちらへ」

「はっはい！お邪魔しましたゆー！」

「どうぞ、お口に合うか解りませんが」

そう言いながらマスターは紅茶とクツキーをアネモネの前に置く。

ソーサーごと持ち上げたアネモネだったが、傍目にも明らかほど震えており紅茶が見る間に零れていく。

カチカチと音を立てているのはカップとソーサーか、それともアネモネの歯か。

「ええと、私程度にそんなに緊張しないでください．．．大丈夫ですよ」

マスターは、そつとアネモネの手に自らの手を添え、カップを机の上に戻させた。

そして濡れ布巾を持ってきた加古に目配せして紅茶を拭かせつつ、アネモネの向かいの席に腰を下ろした。

「確かに私は人類ですが、元々一般市民で、今も御覧の通りただの雑貨屋の主です」

「．．．」

「むしろ私の方が、ここでの平和な生活を守って頂いてる事に感謝しなければなりません」

「・・・」

「大変だと思いますが、毎日ありがとうございます」

「・・・」

「ところで今日は、どういった御用事でしよう？」

マスターの最後の言葉で我に返ったアネモネは、しばらくの間マスターの顔をじっと見つめた。

何度か迷ったように視線を動かした後、アネモネはそつと口を開いた。

「・・・マスター殿は、旧世界の記憶もお持ちなのか？」

「えっ？ああ、旧世界ですか。断片的ではありませんが」

「その、もし良ければ、人類が大勢いた頃の地球の日常を、お、教えてくれないうか？」

「人類が大勢居た頃の・・・日常の話ですか？」

「ああ。本当に普通の日の事を、だ」

「へー、マスターって鎮守府みたいなところで働いてたんだね」

「軍じゃないぞ、普通の民間企業だからな」

「なんていうかさ、組織の中で働くって意味」

「ああ、そういう意味ではそうだね。今は自営業というか個人商店だもんなあ」

マスターは覚えている限り詳しく、旧世界の文化、気候、食事や1日の過ごし方などを話して聞かせた。

ゆえに到底夕食前に終わらず、状況を察した加古が包丁を握った。

そして折角だからと、マスターはホワイトとアネモネも夕食の席に招いたのである。

食事をしながら話を続けるマスターに先のような感じで相槌を打っているのは当然加古である。

アネモネは目をキラキラさせていた。

旧世界の話も、人類と共にする食事何もかもが新鮮だったからである。

「加古は電車は解るか？」

「電車？ ああ、大本営前とかの駅から乗るやつでしょ。早く進むでつかい鉄の箱」

「まあそうだけど・・・え？ じゃあ通勤とかは？」

「ツウキン？ 雑菌の親戚かなにか？」

「あーそりやそうか。鎮守府だと宿舎は敷地内か？」

「えーつと、うちはそうだったね。敷地の外に寮がある鎮守府もあつたよ」

「でも徒歩圏だろ？」

「そうだね。せいぜい5分くらい。緊急出勤あるし」

「鎮守府と寮がもつと離れてて、寝る所と仕事場の間を移動する事を通勤っていうのさ」

「へーでもなんで離すの？」

「会社に近い場所は対価が高くてな。離れないと庶民の予算では買えないんだよ・・・」

「どのくらい離れるの？」

「電車か車で1時間か2時間位だな。電車の場合は大體立つたまま乗ることになる」

「うへえ・・・じゃああたしは永遠に「さらりいまん」とやらにはなれないなあ」

「まあ、そんなんが旧世界の私が居た頃の話だよ・・・あ、そうだアネモネさん」

「へっ？あ、はい」

「貴方が聞きたかつた話は、こんな感じで良いですか？知りたいことがあればお話しますけど」

「いや、どれも全く知らなかったことだから楽しく聞かせてもらっている」

「それなら良かった」

「・・・ただ、そうした世界と現在は、あまりにもかけ離れているな」

「そうですね。1日の寒暖差も昔はせいぜい15度くらいでしたが、今は70度以上ですからね」

アネモネは俯きがちに続けた。

「その・・マスター殿はもう少し早く我々が地球を奪還出来ていれば・・と思うか？」
マスターはきよとんとした。

「戦争を始めるのは一人の馬鹿者ですが、終わらせるのは一人では無理ですよ？」

「・・・どうということだ？」

「誰か一人が終わらせようと頑張っても、全体が続けようという意思を持っていけば終わらない」

「・・・」

「終わらせた方が良くという機運と利害関係が当事者双方に広く伝わらない限り終われないんです」

「・・・」

「だからアネモネさんお一人が背負い込む問題ではありません。皆がその時合意したと
いうだけです」

「・・・そう、言ってくれるのだな」

アネモネは小さく頷いた。

第51話

マスターは頷くアネモネからホワイトへと視線を移した。

「ところで、ホワイトさん」

「ああ」

「人類は絶滅したと思われてたんですよね」

「ああ」

「エイリアンの方はどうなったんです？」

ホワイトは首を振った。

「解らない。少なくとも私に記録されていた情報では生死までは解らない。ただ長い事確認されていない」

「じゃあどこかでひよっこり会えるかもしれないですね」

ホワイトは苦笑した。

「そんなことを言うからマスター殿はアタリを引くのではないか？」

加古は肩をすくめた。

「どっちかというとはズレじゃない？」

「違うない」

夕食の席に、笑いがあふれている。

アネモネはそつと水の入ったコップを口にしながら思った。

別に自警団の部下達と仲が悪いわけではないが、雰囲気はドライなものにさせている。

それは遙か昔、私達がデボルやポボルにしてしまったことの反省からだ。

別に、あのデボルとポボルが暴走したわけでもないのに、同型機というだけで疎外感を与えてしまった。

いや、迫害と言うべきか。

終戦後、私はたまたまガレキに押し潰された二人を発見し、その扱いを任せられた。

私は引き取ってコアを直し、エネルギーを充てんした同型の別義体へと移植した。

何か月もかかる大変な作業だったが、なぜそこまでしたのだと問われれば、罪滅ぼしと答えるしかない。

同型機というだけでしてしまった事への償いとして。

到底許されないだろうが、それでも、そうしたかったのだ。

私の周りにも、こんな笑顔の溢れる空間を作れたら・・・いや、許されないか。

アネモネは食卓を囲む3人の笑顔を見ながら、悲しそうに目を細めた。

その様子に気づいたマスターは一瞬口を開きかけて、やめた。

「・・・よし、片付け終わり！加古お疲れな」

「あーい、おやすみ」

「歯磨き忘れるなよ」

「はーい、じゃあねー」

加古がふらふらと部屋に戻っていくのを見たマスターは、棚からボトルとグラスを取り出した。

そしてホワイトに向かって小さく手招きしたのである。

「ホワイトさんホワイトさん」

「なんだ？」

「アネモネさんイケるほう？」

「酒か？ああ、先日は喜んで飲んでいたぞ・・・そういえば言っていなかったな。すまない」

「いやいや良いの良いの。じゃあこれ食卓に持ってってください」

「・・・ほう。この前のはボトルが違うな。これも酒か？」

「ええ。私は何かつまめる物を用意していきます。先に行つて、引き留めててください」

ホワイトはマスターの目を覗き込んだ後、こくりと頷いた。

「ああ。わかつた」

「この間もご馳走になつたのに、それではあまりにも申し訳ない」

しきりに遠慮して家を辞しようとするアネモネを、ホワイトが引き留めていた。

そこにツマミを皿に乗せたマスターが現れた。

「食後なんで少しだけ、珍しい物を用意しましたよ。さあアネモネさん座つて座つて

ホワイトさんも」

ホワイトはぐいぐいとアネモネをリビングのソファへと押しこんだ。

「突然押し掛けたうえに、ここまでしてもらつて本当に申し訳ない」

アネモネがマスターに頭を下げたとき、マスターはふつと真顔に戻つた。

「それでは、お話頂けませんかね?」

「ん?何を話せばいい?触媒石の事か?」

「いえ、夕食の席で、どうしてあんなに悲しそうな目をしていたのか、その理由についてです」

アネモネが息を飲んだのを横目に、ホワイトは黙つたままボトルから酒を注いでい

た。

「なるほど・デボル社長とポポル会長とは、そんなに長いお付き合いだったのですね」
「とはいっても、全てを記憶しているのは私だけだし、容量オーバーで失われた分もある
が・・・」

アネモネはグラスから一口呷りながら答えた。

マスターはひよいとつまみを口にした後、ゆつくりと話し始めた。

「一度、これまでの事に終止符を打ってみませんか？」

「終止符？」

「ええ。デボルさんもどことなく覚えている感じで、アネモネさんも悩んでいる」

「・・・」

「でもそれらは現在進行形の話ではなく、終わった事です」

「・・・」

「黙っているとしこりとなっていけますから、終止符を打つために口にしてはどうで
しよっつ」

「・・・デボルに何を言えがいい」

「アネモネさんの気持ちですよ。過去に罪悪感を持っている事、謝りたい事、これからを
楽しくしたい事」

「・・・都合がよすぎるのではないだろうか」

「そうしたかったから、義体移植をされたんでしよう?」

「・・・デボルは、移植された事を喜んでいるのだろうか。違うなら私は余計な事をしたただけだ・・・」

「それこそ、デボルさんにしか解らない事ですから聞いてみては?」

「うーん・・・」

眉を顰めるアネモネの肩を、ホワイトはそつと叩いた。

「迷う気持ちは解る。私も直接の記憶がないままアネモネと会うのは最後まで迷いがあつた」

「・・・」

「だがマスター殿に、全て打ち明けた上でそこから始めれば良いと言われたのと・・・」

「・・・と?」

「仮にアネモネに拒絶されたとしても、マスター殿は味方でいてくれると言ってくれたのだ」

アネモネはフツと鼻を鳴らした。

「このタイミングで惚気を聞くとは思わなかったな」

ホワイトの顔が真っ赤になった。

「んなっ!？」

「そりや愛する旦那様が傍に居てくれるなら、私の反応がどちらでも大丈夫だろうなあ……」

「あう……」

そんなホワイトの反応を見て、マスターが肩をすくめた。

「いや、私とホワイトさんは夫婦の関係ではありませんよ?」

アネモネがきよとんとした顔になった。

「この堅物のホワイトがこんなデレデレになるほど好いているのか?」

「へ?」

ぼかんとするマスター。

真つ赤になった顔でアネモネを見たまま固まるホワイト。

何かおかしなことを言っただろうかと二人を交互に見るアネモネ。

奇妙な静寂はたつぷり一分ほど続いたのである。

「あ、え、ええと、あ、そ、そうだったんですか。すみません気づかなくて……」

「い、いや、その、わ、私もハッキリとは言ってなかったし……」

妙にぎこちなく、頬を染めたまま再起動したマスターとホワイト。

この場面で自分はもう振る舞おうかと悩むあまりグイグイ酒を呷り続けるアネモネ。

そんな中、マスターがぼつりつつぶやいた。

第52話

「あ、だからホワイトさん、膝枕で耳かきしてくれたんですね」

「膝枕で耳かきだと!? ラブラブか!？」

ホワイトが返事をする前にアネモネが光の速さで食いついた。

大慌てで両手を振りながらホワイトが否定する。

「ちっ違っ! あ、あれはただ単にマスター殿に癒しを提供しようとしてだな」

「癒し!? あ、ああそうか。本当にバンカーのホワイト司令官ではないのだな・ああびっくりした」

マスターは首を傾げた。

「バンカーのホワイト司令官というのは、ホワイトさんの前任の方ですか？」

アネモネはこくりと頷いた。

「ああ。バンカーという衛星軌道上の基地からヨルハ部隊を率いていたホワイト司令官だ」

「その人だったら思いつかないってことですか」

「やらないだろうな・ああでも人類に対してなら優しくかったのか? いや・でも・」

「アンドロイドに対して厳しかったんですか？」

「一言で言えば人使いというかアンドロイド使いの荒い人だった。戦況を考えれば仕方ないのだが・・・」

「じゃあうちのホワイトさんとは違いますね」

「なぜ言い切れる」

「ホワイトさんは先日の対鉄血戦で、アンドロイドを始めとするオペレーターさんに優しかったですから」

「そうなのか？」

「ええ。指示も的確で評判良かったですよ」

茹で蛸もかくやというほど真っ赤になったホワイトを見て、アネモネはプツと吹き出した。

「あははっ！そんなに恥ずかしがらなくても良いじゃないか！」

ホワイトはじとりとアネモネを見返した。

「もう助けてやらん」

「そんなに怒るな・・・ああ、よし、解った。ええと、マスター殿」

「はい？」

「マスター殿は、ホワイトの事を好きか？」

アネモネの問いに、マスターはびくりとして答えた。

「えっ？」

「片方だけの気持ちをごにしましては不公平だろう？」

「・・・ええと、それはlikeではない方ですね」

腕を組んで考えるマスターを、息を殺して見つめるホワイト。

ボトルからなみなみと自分のグラスへと注ぐアネモネ。

ややあつてから、マスターはグラスを見つめながら話し始めた。

「そうですね。ホワイトさんとは、汚染地域の廃墟群でお会いしたのが始まりでした」

「だから最初は、お店を手伝ってくれたりしても、たまたま一時的に居るお客様と思って

いました」

「ですけど、店が鉄血に襲われて、ホワイトさんが報復作戦の陣頭指揮を執ってくれた頃

から」

「私の中での認識が、客人から、なくてはならない人にならなくなっていったんだと思います」

「ただ、ホワイトさんが、本当はいつか旅立つつもりかもしれないという可能性を考え

て」

「そういう意思を縛るような言動は避けようと思ってました」

マスターはそこまで言うてから、そつとホワイトの方に向いた。

「・・・もし、ずっと居てくださるなら、その、ちゃんとします、よ?」

マスターの視線を受け止めながら、ホワイトはぎこちなく答えた。

「え、ええと、あの、ちや、ちやんと・・・とは?」

「ぶ、プロポーズとか、指輪とかですかね」

「あ、ああでも、あ、アンドロイドには誓約の指輪とかケツコンカツコカリの指輪とか無いのだが・・・」

「普通に結婚指輪で良いんじゃないですか? 人類の風習ですけど・・・」

「じつ人類の風習をアンドロイドなんかに適用して良いのか?」

「人間だろうがアンドロイドだろうが、そこに貴賤は無いと思いますよ?」

「そっ・・・そう・・・か」

アネモネはグラスの酒を飲み干すと、ホワイトに向いて言った。

「それで、何と答えるのだ、ホワイト殿?」

「何をだ?」

「マスターの質問に、だ。妻になって、ずっとここに残るのかという、な」

「・・・」

何度か口をパクパクさせていたが、やがてきゅつと目を瞑ると、

「・・・それはその、ずっと、ずっと居たい。私の居たい場所はここだけだから」

蚊の鳴くような小さな声で、ホワイトはマスターに答えたのである。

「いやあ、思わぬ大役だったが、どうにか果たせたかなあ・・ふう」

マスターの家を辞したアネモネは、白い息を吐きながら呟いた。

現在進行形でアルコールを分解しているの、外の凍り付くような寒さも気にならない。

「思いを口にして、そこから始めれば良い、か」

アネモネは苦笑した。

まさにそんな例を間近で見たわけだが、さて、自分は何から出来るだろうか。

店から少し離れた所で待機していた装甲車から部下が降りてきて、さつと後部ドアを開けた。

アネモネは後部座席に滑り込むと、その部下に微笑んだ。

「ありがとう」

「えっ」

「長い事待たせてすまなかったな。帰るぞ」

「あつ、えつ、はつ、はい！」

慌てて運転席に向かう部下を見ながら、アネモネは頷いた。いきなりだったが、ちよつと照れた笑顔を返してくれた。少しづつ、少しづつ変えていこう。

翌朝。

「まあ、そうなるだろうと思ってたよ」

「え？いつから？」

「MRAPのセンサーにホワイトさんが引つかかった時から」

「最初からか？まるで予知能力だな」

「あのポンコツ人形とほとんど同じ経緯を辿ったしね」

「MP40とは砂漠の只中だっただろう？」

「そういうことじゃない」

これがマスターがホワイトと結婚すると告げた時の加古の反応である。

もちろんジト目で、しかもむしゃむしゃとパンを齧りながらであることは言うまでもない。

「もつと驚くかと思ってたよ」

「驚くところが何も無いもん」

「予想通りだつてことか？」

「どんぴしゃだよ。むしろこれ以外の結果になるほうが驚きだつての」

「そうか・・・」

加古は「コーヒーでぐくりと食べ物と喉に流し込むと、ふうと息を吐いた。

「まあ良いんじゃない？もうホワイトさん居ないと困るレベルだし」

「そうだな」

「で、なんかやってあげるんでしょ？」

「ああ。加古達と同じく、指輪を渡そうと思ってるんだけどね」

加古は二人を見てからマスターに視線を戻した。

「一応さ・・MP40が帰ってきてから渡しなよ？」

「今から発注して製作期間考えとそんなもんだろうな」

「そうじゃなくて」

「へ？」

加古は視線で「このマスターどうかしてください」とホワイトに訴えた。

それを見たホワイトは静かに目を瞑り、無理だとばかりに首を左右に振った。

そんな二人が同時に重い溜息を吐いたのを見て、マスターはますます首を傾げたので

ある。

第53話

「ようこそ、いらっしやいませ」

「やあ、また来てしまったよ。用立てて欲しいものがあつてね・・・」

ホワイトを連れたマスターは、MRAPで以前指輪を用立ててくれた職人の仕事場を訪ねていた。

職人は小首を傾げた後、マスターに向かって言った。

「・・・失礼ですが、こちらのご婦人はアンドロイドでらっしやいますよね？」

ホワイトは頷いた。

「ああ。だいぶ古いモデルになるがな」

職人の物言いたげな視線を感じたマスターは苦笑した。

「あー、えつとね、なんとというかその、色々あつてね」

「たしかこういう時、旧世界では「爆発しろ」といって手榴弾を投擲申し上げるのが礼儀でしたな？」

「そんな礼儀無いよ。デマだよそれ」

「左様でしたか。それで、今回のご入用の物は？」

「・・・結婚指輪を1組お願いします」

職人は二人にはつきり聞こえるように、ゆつくりと答えた。

「マスターにとつては3つ目の、ですか？」

「はい。3つ目です」

職人は一瞬ホワイトに視線を向けてから、つまらなさそうにマスターを見た。

「おや、そちら様に秘密ではなかったのですか・・・そうですか」

「皆同居してるからね。・・・ん？いや、もし秘密にしてたら今頃修羅場じゃないの？」

「ですから面白い情景になるかと思つたのですが、期待外れでしたなあ」

「酷いなあ」

「さて、次々手籠めにしてハーレム一直線のマスター殿はどのようなデザインをご所望

ですか？」

「物凄く言い方が刺々しくくない？」

「とりあえずデザインの検討前準備金として金貨33枚くらい頂きましょうか」

「もう勘弁してください」

流れるように追ひ詰められていくマスターを見て、慌ててホワイトが口を挟んだ。

「あ、いや、違うんだ。決してマスター殿は我々を誑かしたわけではなくてだな」

職人はホワイトを見返すと、ニヤリと笑った。

「なら、冗談はこのくらいにしましょうか。それで基本の型ですが・・・」
マスターはほつと胸をなでおろした。

「ご発注頂き、ありがとうございます」

マスターは店の外に出た後、疲れ切った表情でMRAPのドアを開けた。

「さあどうぞ、ホワイトさん乗ってください」

「ええと・・・その、大変だったな」

「あの職人さんは腕は確かなんですけど・・・冗談というか悪戯が好きで・・・」
「確かに」

ホワイトはマスターと共に見た指輪の最終デザイン画を思い出した。

センスがあつて普段使いにも支障がなく、きらりと引き立たせるものだった。
前金で金貨5枚も取られていたが。

「だから宝飾系ではいつもお願いするんですけどね。今日は特に酷かった」

「ふむ。なぜだろうな」

「それはまあ、ホワイトさんが美人だからですよ」

「なっ何故だ？」

「うらやましいぞってことですよ・私が彼だったら間違いなくそう思います」

「そつ・・そうか・・そういえばマスター殿は、以前に麗しき女性と言ってくれたな」
「ええ。見るたびにそう思ってますよ」

「・・・」

「とにかく、2週間後の出来上がりを楽しみに待ちましょう」

「そつ・・そうだな」

頬を染めてうつむくホワイトを横に、マスターはMRAPを発車させたのである。

マスターの住まいを離れて1週間。

MP40は今日も装甲車で戦場を駆け抜けていた。

「こんにちは。MPL宅配です。お水をお持ちしました」

「おー？もうそんな時期か。こっち置いといてくれ」

「はい」

「そんなわけですみません。商売を畳むことにしたのでこれが最後のご挨拶になります」

「お嬢ちゃんはず水が切れる前に来てくれたから助かってたんだが・畳むんじやしよ
うがねえな」

「お詫びに、今回の料金はサービスとさせて頂きます」

「おつ、そうかい？悪いね」

「今までありがとうございます。ご武運をお祈りします」

「ありがとう！お嬢ちゃんも元気でな！」

装甲車に戻ったMP40は、メモリにあるリストからまた1つ契約先を消去した。

支払い手続きが無い分、予定のペースより2日ほど短縮出来ている。

「さて、次のお客様の所へ行きますか」

MP40は装甲車をゆっくりと発進させた。

同じ頃。

「すると、この配管部分に銅の網を固定しておけば良いのですね？」

「ああ。長さを半分にして、2枚並列で入れたほうが良い」

「直径方向に1/3ずつの均等間隔で良いですか？」

「いや、網同士の間隔を狭めて、中心に近い・・こと、この辺りだな」

「それは何故？」

「網と網の中心部と外部で圧力の差が生じて、ここからこういう流れが生まれるのだ」
「なるほど、ベンチュリ効果ですね」

お茶を運んできた後、加古はなんとなくホワイトとマスターの会話を聞いていた。

指輪を発注してからというもの、二人は朝から晩まで寄り添って精錬プラント製作に没頭している。

ただし甘い雰囲気というより教授と助手のような会話であるが。

加古は肩をすくめた。

何言ってるかさっぱりだし、食事時に引つ張り出さなきゃならない人が倍に増えちゃった。

それでも一歩も外に出ないし。

……今夜は見た目普通の激辛麻婆豆腐にしてやろうつと。

……べつ別に寂しくないし。

その時、加古の通信機が鳴った。

「はいはい、どちらさん？」

「望月だよー」

加古はぴくりと眉を吊り上げ、通信機を操作しながら答えた。

「およ、珍しいじゃん。どうしたの？」

「たまには茶でもしばこうかと思つてき。暇？」

「いつ？」

「今」

「急だねえ」

「思いたつたが吉日つていうじゃん」

「まあね。別に良いけど30分ぐらい後で良い？」

「じゃあ店で待つてる。地図送つとくから早く来てね」

「解つた」

望月との通信後もしばらく通信機を操作していたが、やがて加古はマスター達に声をかけた。

「あたしちよつと出かけてくる。ここから出ないでね」

マスターが振り返つた。

「ん？ FOLMEか？ 気をつけてな」

「ちよつとね。もう一回言つとくけど、この部屋から出ないでね？」

「食事時まで出ないのは知ってるだろ？」

「念の為。じゃーねー」

そういつて加古は地下へと続くドアを閉めると、ひよいと大型の棚を持ち上げ、ドアの前に置いた。

「さあて・・・早く早くう・・・っと、獲物獲物〜♪」

加古は素早く2階に上がると、押入れの隅から黒いカバンを引っ張り出した。

荒目のファスナーを開け、中の物を取り出す。

油紙を外し、取り出したXM109の動作を確認する。スコープの取り付けも・・・狂いなし。

弾丸は徹甲弾系を少しと、劣化ウラン弾かな。派手に行かなくちやね。

サブウェポンはレイジングブルのM454でいいや。カスール弾いっぱいあるし。

っと、やつとかかかってきたな。

加古は通信機の受信ボタンを押した。

「ハロー〜無沙汰。で、相手解った？」

第54話

通信先の相手は不機嫌そうに答えた。

「あのねえ、久しぶりの連絡が解析依頼つての止めない？しかも30秒で調査しろって無茶過ぎだよ」

「こういうことは時間が命なんだもん。今度奢る」

「だもん、じゃないわよ。ええとね、発信元はゴロツキの事務所。構成員は機械生命体とアンドロイド」

「で？」

「ええと待って・・・ああ、今あなたの居る所に車両2台で向かってるみたい」

「どっからくる？」

「このままなら西の路地ね。予想では480秒後」

「2台とも？」

「そうね・・・あ、あとあなたの地点から東に75mの所に既に1台いるわ」

「なるほどね。それで全部？」

「ええ。人数までは解らないわね」

「奴らの構成員リストとボスの連絡先は？」

「このあと送るわ」

「さんきゅ」

「あんたまた何かやったの？」

「何も」

「その割には相手さん、持つてる車ほぼ全部出してきてる感じよ？総力戦仕掛けられてない？」

「バカの決めた事なんかどうでもいいんだよ」

「どうしてバカだって解るのよ？」

「望月が電話かけて来るはずないっての。それにあたしの主に銃を向けるような奴だから」

「なるほどね。じゃ頑張りなさいよ、アズラール」

「はあい。サンキューな」

通信を切った加古は、カバンを背負って1階に降りると、そのまま表へと出る。

玄関先で急いで靴を履くように爪先を地面に叩きつつ、さりげなく左右を眺める。

(東75mに車両1、人数4、なるほどね)

そのまま正面の路地に入ると、手近な電柱を登り始めたのである。

一方、その車両の中では。

「大佐、警備の者は出たようです」

「ああ。相手は2人だ。西からくるBC分隊の合流を待って一気に突入するぞ。抵抗するなら殺せ」

「解りました・・・しかしあんな工事中のボロ家に本当に金が唸ってるんですかい？」

「あの一帯を丸ごと買い占めたり、MRAPを即金で買ったらしい」

「・・・もう使い切ってたりにして」

「じゃあ不動産屋襲ったほうが良いんじゃないかね？」

「いや、デボル&ポポルには手を出すな。自警団とつながってるってのもあるし、な」

「あーそらダメだ」

「・・・大佐、B分隊、C分隊来ました」

「よし、C分隊は裏を塞げ。Bと我々が正面から突入する」

「了か」

そう言つて運転手がエンジンをかけようとした、瞬間。

ドズズン！

「はあ!? C分隊の車が吹っ飛んだぞ!?!」

「バカな！ボディもガラスも防弾仕様だぞ！攻撃ヘリでもいるのか!」

「ヘリの音はしない！攻撃主が解らんが撤退するぞ！もたもたするな！」

だが、運転手は大佐に怒鳴り返した。

「大佐！エンジンが動きません！イグニッションが回らない！」

「直ちに車を捨てる！建物側と後ろから出る！GOGOGO！」

弾かれたように4人は車から脱出し、手近な路地に飛び込んでいく。

ドズン！

その背後で大きな爆発音がした。

「大佐！Bチームから連絡！狙撃により車両大破3名死亡、サブリーダーのブラボーのみ生存！」

「これで車両全滅か。よし、撤退プランD！撤退プランDだ！行け！」

部下がメンバーに怒鳴る。

「急げ急げ！バラバラの路地に入れ！通信ONのまま逃げろ！狙撃に留意！」

大佐はついてきた部下に囁く。

「Cチームと連絡は取れたか？」

「はい。3名死亡、運転手のキロのみ生存」

「クソツ！プランDで逃げろと伝えろ」

「はい」

大佐と部下1人は細い路地を駆けて行く。

1つ、また1つ。路地同士の交差点にぶつかる度に神経が昂る。

「左クリア」

「右クリア。いけ」

歩兵にとって姿の見えないスナイパーほど怖い物は無い。

確認用ミラーではゴマ粒のようにしか映らないアパートの窓。

屋根上の空調機の陰、給水タンクの脇、非常階段。

どこだ、狙撃手はどこにいる!?

今撃たれていないのは安全な場所だからか、見つかってないだけか、引き金を引いてないだけか。

「ガハッ・・・」

通信機から嫌な声が出た。

大佐は眉をひそめながら通信機を握る。

「アルファより全員へ。点呼だ、送れ」

「ブラボー、異常なし」

「デルタ、異常なし」

「エコー、異常なし」

「フォックストロット、異常なし」

・・・答えが1つ足りない。

「くそ、キロがやられた」

狙撃手は活動中で、まだ我々を狙ってるって事だ。

大佐は通信機を握った。

「プランD続行せよ、急げ」

角を抜け、階段の陰に飛び込む。

万一の為に逃走車を置いて良かった。

後にくエコーに声をかける。

「ついてきてるか？前方クリアだ」

「ええ大佐！追跡者なしです！」

「よし」

あと3ブロックの間に狙撃手を始末出来ればベストだが、欲はかかないでおこう。

それから15分。

大佐は物陰から、反対側の建物の脇に停めてある逃走車を見ながら考えを巡らせてい

た。

完全な失敗だ。どうしてこうなった。

ボディガードと思われる艦娘を外におびき出すまでは上手く行つてたはずだ。外部に警備を頼んでいたのか？

大佐は周囲に気を配りつつ、無線機を握った。

「アルファより全員へ。点呼と状況報告だ、送れ」

「ブラボー異常なし、周囲に敵見当たらず」

「デルタ異常なし、周囲に敵は見当たりません」

「エコー異常なし、周囲に敵なし」

「フォックスロット異常なし、周囲に敵見当たらず」

「よし、乗り込むぞ！G O G O G O！」

大佐は無線機に叫ぶと、一気に逃走用の車両にむかつて走った。

それぞれ別の方角から走ってきた3人が素早くドアを開け乗り込んでいくのが見える。
る。

ブラボーが後部座席のドアを開けて手招きをしているのが見えた。

あと20 m

あと15 m

あと10 m

あと5 m

バタン!

一瞬遅れてエコーが助手席に飛び込んだのを見て、運転席のデルタに怒鳴る。

「行け行け行け行け!こんな場所とはおさらばだ!」

デルタの運転は信用できる。とにかく今は撤退して態勢を建て直さねば。

車はタイヤを鳴らし、白煙を上げながら路地を飛び出した。

「路地をジグザグに行け!まっすぐ走るな!」

「了解!」

「・・・逃がすと思ったかい?有罪」

加古のX M 1 0 9から放たれた劣化ウラン弾は逃走車の燃料タンクに命中した。

炎に包まれる車を確認した後、加古は手早くX M 1 0 9をカバンに仕舞い、階段を下りていった。

1時間後。

ドアをノックする音に、男は唸り声で返事をした。

素早くドアが開き、敬礼する部下に頷いて続きを促す。

「失礼します。大佐から定時連絡がありません」

「・・・何分遅れてる」

「5分です」

「車のビーコンは？」

「それが・・・」

ピピッピピッ！ピピッピピッ！

部下が話し始めた時、男の通信機が鳴動した。

男は部下に片手を上げて制すると、黙って通話ボタンを押した。

第55話

「ハロー」

「誰だお前は」

「誰でも良いんだよ。どうせお前が何かを改めれば良い段階は過ぎたんだし」

「どういふことだ」

加古はヘッドセットを調整し、セーフティを解除した。

「部下は燃えた。お前達が今回裁くりストの最後なんだ。手短にやるよ」

トリガーに指をかけた時、スコープ越しに、窓を振りむいた男と目が合った。

「濁り切った目だねえ。有罪」

加古は規則正しく、反動が収まるごとにトリガーを絞っていく。

スコープの先に見える機械達が、部屋が、建物が、原型を失っていく。

ガラスが砕け、柱が折れ、爆風と火炎に包まれていく。

空になったマガジンを引き抜き、装填済みのマガジンへと入れ替える。

ボルトハンドルを後方に引き、弾をチャンバーに送り込む。

スコープを眺め、無表情のまま攻撃ポイントを定める。

再び一定間隔でトリガーを絞っていく。

発砲する毎に周囲の埃が吹き飛ばされて舞い上がり、加古は白茶けた色に染まっ
ていく。

ついに火柱は建物の屋根を突き抜け、全体が崩れ落ちていった。

その時、建物の傍に急停車した車両に気づいた加古は、スコープをそちらに向けた。

「ああなるほど、お前だったんだ」

加古はスコープから目を離さず、ヘッドセットの通信機を操作すると、程なく耳慣れた声がした。

「・・・はっはい、ああええと、で、デボル&ポポル不動産です。ちよつと今立て込んでまして」

「ミスタ・ルザレフ。追加だ」

「ん？あ、ああ雑貨屋オリフアイさんところの店員さんですね？追加って何の事です？」
「残念だったね、小遣いの稼ぎ口がなくなってます」

「えっ？」

「今着てるスーツも、ピンストライプのシャツも、随分高級な物じゃないか」

「えっ？」

「あいつらは直接手を下した罪を今償った。お前は奴らを導いて金を稼いだ罪を償う必

要がある」

「なっ・・・なんのことだか」

加古はスコープを見る目を細め、ニイっと笑った。

「ああ見たことがある目だ・・・何度も何度も見たことがある目だよお、ミスタ・ルザレフ」
「どっ！どこだ！どこから見てる！」

「それは嘘つきの目って言うんだよ。有罪」

加古はトリガーを引き絞り、乗車しているルザレフごと車を吹き飛ばした。

「マジか嘘だろ・・・いや、加古ちゃんを疑ってるわけじゃないんだ。その、ショックでさ」
「・・・そう」

加古がデボルの店を訪ねた時、デボルは普段通りに接してきた。

ゆえに加古は証拠を淡々と語っていったが、次第にデボルは顔色を失っていった。
今は両手を額にやっつてうめいている。

やがてデボルは薄目を開け、天井を睨んだ。

「くっそー、じゃあミーズリ一家の件も、あつくそ、じゃああれもかなあ・・・」

「何かあったの？」

「うちで大型取引するとき即金で払った連中が妙に襲われるって噂があったんだよ」
「放置する方が悪い」

「・・・そうだな。ルザレフが警備会社と契約してたからそこで済ませちまった・・・」
「・・・一応渡ししておく。これ、奴の家で見つけたから」

デボルは加古が手渡したノートをめくり、デボルは首を振った。

「おいおい、律義に売った記録つけてたのかよ・・・完全に真つ黒じやねえか・・・」

「この様子だと、今回始末したゴロツキとしか取引してないみたい」

「・・・」

「奴らも消したし、あたしはこれで手を引くよ」

「・・・加古ちゃん」

「ああ」

「ありがと。これでもう、うちに悪い噂が立つことは無いよ」

「・・・別に感謝なんて要らないよ」

「汚れ仕事やらせちまったから、むしろ詫びるべきか？何か出来ることは無いか？」

「なら、この居住区内、あるいは近所で、他にこういうバカは居ない？」

「情報って事か？」

「そう」

「解った。まとめるなり気づくなりしたら伝えるよ。手段は？」

「この宛先にテキストメールで」

「・・・解った。ゴロツキの事務所崩落の件はアタシからアネモネに説明しとく」

「・・・そうして」

デボルはドアに向かう加古に声をかけた。

「な、なあ」

「？」

立ち止まり、少しだけ振り向いた加古を見ながら、恐る恐る続ける。

「雑貨屋オリファイで見た時とだいぶ印象が違うんだけど、お前はどっちが本来なんだ？」

加古は光の無い目でデボルを見返した。

「マスターが居なければ、あたしはこんなもんだよ」

そして加古はそつと左手を顔の傍までもっていく。

「マスターに危害を加えようとする奴は、どこに居ようとも消す。それがあたしの出来る事さ」

デボルが頷いたのを見て、加古は店を出ていった。

ドアが閉まると同時に、デボルはどきりと椅子に腰を下ろした。後から来た小刻みな震えが止まらない。

加古の目は、本当の戦を見てきた目だ。

敵も味方もなく撃ち合い、絶望に塗りつぶされた地べたを這いずった者の目だ。間違いなく最終戦争に兵士として加わっていたのだろう。

土に埋もれてたあたしとは違う。

「デボルう、ちよつとマグカップ貸してほしいんだけど」

ポポルの声が近づいてくる。

「デボルどこく？あ、もう、居るなら返事してよ……デボル？」

俯いた自分の顔を覗き込むポポルの顔が見える。

「どうしたの？」

デボルはぼつりぼつりと答えた。

「……ルザレフが、裏切者だった」

「んー？横領でもしてたの？」

「金持ちの客情報をゴロツキに売って、襲わせた」

ポポルは顎に手をやった。

「……あー、ミーズリさん家の件？」

「それもそう。記録では7件やってる」

デボルが手渡した紙をポボルは一通り眺めた後、肩をすくめた。

「どうするの？ アネモネさんに始末付けてもらう？」

「いや、始末はもうついた。いや、オリファイの加古ちゃんがつけてくれた」

「じゃあそのゴロツキの処分を手配するの？」

「それも加古ちゃんがやってくれた」

「・・・そっか。じゃあオリファイさんに御礼に行かないとね」

「ああ」

「で、デボルは何でそんなにガツクリ来てるの？」

「・・・ええと」

「うん」

ひよいと屈みこみ、下からまっすぐ見上げてくるポボルを見て、デボルは理解した。なるほど。もしポボルが殺されたら、あたしはそいつらを絶対に許さないだろう。

たとえどれだけ不利だと解つても。

「・・・加古が言ったんだ。マスターに手を出すならそいつを殺しに行くつて」

「ふんふん」

「その時の目が怖くてさ、ウイルスに冒されたアンドロイドの目より狂気に満ちてた」

「そっかあ」

「・・・あれ？」

デボルは自分の震えが止まってる事に気が付いた。

「どうかしたの？」

「震えが・・・止まった」

「話してすつきりしたんじゃない？ところでマグカップ1つ貸してくれない？」

「え？あ、別に良いよ」

「ありがと。プリン作ってるんだけど器が1つ足りなくて」

「マグカップサイズの？」

「でっかい方が美味しいでしょ！ちまちま何個も食べてられないもん！」

「ほんとポポルはプリン好きだよな・・・」

「今回はカスタード風味だよ！出来たら1個あげるね！」

パタパタと台所に戻っていくポポルの後姿に、デボルは頭を下げた。

ポポルは何故か昔から、アタシが一人じゃどうにもならない時にああやって助けてくれる。

・・・プリン好きなのも昔からだけど。

第56話

「ただいまー」

「お帰り．．．どうした？砂嵐にでもあったか？」

「えっ？」

全身埃まみれで戸口に立ち、ぼうつと返事をする加古を見たマスターは、その手を取った。

「．．．．おいで。ホワイトさん、ちよつとそのままにしておいてください」

「あ、ああ、解った」

洗面所に連れてくると、マスターは加古の両肩に手を置いた。

「何があった？加古」

「．．．」

「乱暴された．．．わけではないな？」

「違うよ。そんなヤワじゃないって」

マスターはお湯に浸したタオルを洗面台で絞ると、ゆつくりと加古の顔を拭いた。

「時折加古は、そんな目をするなあ」

「・・・そう?」

マスターは加古が手にしていたカバンに目をやった。

「ああ、そうか。また護つてくれたんだな?」

「・・・マスターは気にしなくていいよ」

マスターはタオルを洗い籠に置くと、ぎゅつと加古を抱きしめた。

「・・・埃ついちゃうよ」

「私に戦う力が無いばかりに、苦労を掛けてすまない」

「・・・」

「ありがとう、加古。いつも護つてくれて、ありがとう」

「・・・うん」

加古はそつと、マスターの背に腕を回した。

マスターはいつもこうやって、作業を終えた私に感謝してくれる。

私の身に沁みついた狙撃という作業は、行うたびに私をあの頃へと引きずり戻そうとする。

崩壊液をバラまいたクソどもが憎いか！

レギオンを連れてきたクソどもが憎いか！

我々に牙を剥くクソどもが憎いか！

黙れ！眉一つ動かすな！心を乱すな！

敵への憎しみを！

亡き戦友への鎮魂の思いを！

薄汚れた戦場に付き合わされる恨みを！

全て弾に込め、奴らに撃ち込んで解らせる！

壊せ！崩せ！潰せ！相手は魂すらない邪悪な塊だ！

毎日、司令官からそう言われ続けた私に。

疲れ果て、疑う気力もなくなり、盲目的に信じていた私に。

戦友にさえとぼけた笑顔の仮面を被り、一人の時はただただ無表情だった私に。

そんな私に戻りそうになるのを、マスターが護ってくれる。

出会った瞬間にまばゆいばかりの光をくれた人。

友と笑う事を、安らかに眠る事を、ご飯を美味しいと思う事を、楽しい事ばかりの毎

日をくれる人。

マスターに襲い掛かる愚か者を消した事で地獄に落ちるなら本望だ。

代わりに私は今、救われているのだから。

マスターは加古から手を離し、話しかけた。

「ほら、風呂沸かしてやるから入っておいで。そんな埃まみれじゃ気持ち悪いだろう？」

「・・・もうちよつと」

「うん？」

もうちよつとだけ・・・このままでいさせてください。

加古がそう思いつつ腕に力を籠めると、マスターは頷いて加古の頭を撫でた。

二人の左手で、ケツコンカツコカリの指輪が鈍く光っていた。

その夜。

「んあー？私が電話？するわけないじゃん」

「でしょ。一言目で偽物と分かったよ」

「せめて睦月姉えくらいにしとけよつてなあ」

「いや、それも無理があるじゃん。一般回線だよ？」

「あーありえねえなあ。姉貴達なら暗号回線でやるなあ」

「でつしよ？」

睦月は情報大隊の斥候部隊に長らく所属していた。

ゆえに機密保持に関しては徹底的な教育を受けている。

「どつちにしろさあ、そんなバカだから壊滅させられるんだよ」

「マスターに手を上げるなんてありえないよね」

「んあ？ いやそつちは知らねー」

「じゃあどこ？」

「加古を出し抜いて警護対象を襲えるって判断すること」

「・・・」

そう。

私はよく、鎮守府で最終防衛者を任せられたよ。

でもそれはさ望月、気配を殺しきれぬから居ても気にならないって話だよ。

同じ理由で任される事の多かった川内と二人で肩をすくめてた。

気配が無いからって忘れ去られて、任務が終わっても劳いの一言もなかったし。

私達は亡霊か。

そんな余りにも寂しい理由だから望月にも、今でも言えないけどさ。

「あれ？なんか嫌な思い出だった？」

スピーカーからトーンの変わった望月の声が聞こえてくる。

「まあ、司令官との記憶はなかった事にしたい物が多いから」

「そっか。ごめんね」

「良いよ。ともかくまあそんな事があつたよつて話」

僅かな沈黙の後、望月は口を開いた。

「・・・加古、ちよつと変わったよね」

「どういう意味で？」

「昔を昔と思えるようになってきた、そんな感じ」

「えっ」

「前に連絡くれた時はさ、まだ前線で戦つてる時そのまま感じてた」

「・・・」

「最終戦争から何年経つても、加古は鎮守府の加古のままだった」

「・・・」

「あたしじやどうしようもなかったし、一部の理由は解るからさ」

「・・・」

「私だつて如月姉えを轟沈させた日の事は忘れられない」

「・・・」

「崩壊液をぶちまけた大陸のバカガキ共がとことん憎かった」

「・・・」

そう。

崩壊液汚染は、まず海洋に広がった。

大陸では北蘭島事件と呼ばれているらしい。

深海棲艦、あるいは艦娘は、一定濃度以上の崩壊液に触れると気が狂ってしまう。

目は赤く光り、誰彼構わず襲うようになる。

大本営は治療は不可能だと結論付け、汚染者と呼び、直ちに雷撃処分しろと命じた。

そして多くの場合、身近に居る者達が執行を担う事になる。

それは如月が汚染された時の望月であり、古鷹が汚染された時の加古であった。

二人は同じ気持ちで姉を雷撃処分したと知り、強く抱き合った。

そして泣いた。

規律違反として営倉入りさせられてからも、ひしと抱き合ったまま泣き続けた。

だから二人は、戦争が終わってもこうして連絡を取り合っている。

「ごめん。なんか今夜は加古の触っちゃいけない話ばかり向かっちゃうね」

「ううん。もし昔を昔と思う振る舞いが出来てるならさ」

「うん」

「それはマスターのおかげだから」

「そっか。ケツコンカツコカりはしたの？」

「した」

「うわマジか。あー、旦那だって言ってたもんな」

「うん」

「じゃあ今度ご祝儀持つてくよ。何が良い？」

「高級ステーキ肉」

「ないわー・・・もうちよつと残るものにしようぜえ」

「素敵な思い出が頭に残るよ！」

「ええ・・・しよーがねーなあ」

「A5和牛が良い」

「買えねーよ」

「ご祝儀なのにい」

「ご祝儀だからって何でも許されると思うなよお？」

「えー」

「・・・もういいや。適当に見繕つてくから」

「適当」

「良い言葉だろお？2つの意味があるからな」

「望月はどつちの意味で言ってるのかなー？」

「怖えよ。ちゃんと考えて適切と思われるものを持つてくよ」

「A5和牛」

「どんだけ肉好きなんだよ。買わねーよ」

「適切」

「それを判断するのはあたしだから」

「ちっ」

「まー楽しみにしてろよー?」

「はいはい。じゃあ寝るわー」

「おーまたなー」

通信を終えると、加古は苦笑した。

「どうせロクなもん寄こさないからなあ．．」

だが、通信でさえ解るほど、自分は変わったのか。

だったら私は、もつとマスターと一緒に居る。

轟沈する瞬間まで。

「．．おやすみなさい」

加古は目を瞑った。

今日はマスターといっぱい触れ合えたから、きつと朝まで眠れるはず．．．

第57話

数日後。

「まっ、マスター様はご無事ですかっ!？」

そう言つて勢いよく店の戸を開けたMP40を、マスターはきよとんとした目で見返した。

「どうしたの？ 私は無事だけど？」

「よ、良かった・表に変なガラクタが増えたので」

「ガラクタ？」

「・・・ご存じなかったんですか？」

「私とホワイトさんはずっとここに泊り込んで作業してたからね。加古しか外に出てない」

「・・なるほど。ちょっと失礼します」

MP40は察したとばかりに加古の方に近寄つて行った。

「加古」

「肉は？金の延べ棒は？」

「そんなもの買ってきません」

「えー、お土産ないのー」

「どこの世界に肉や金の延べ棒を土産に買ってくる人が居るのかと」

「あたしは大歓迎だよ？」

「そんなことはどうでも良くて。表のは現在進行形ですか？過去形ですか？」

「過去形だよ。あんな連中引きずる訳ないじゃん」

「相手は？」

「15名1組織。あと不動産屋の営業がドブネズミだった」

「ほう・・あいつですか。その上は？」

「デボルは知らなかったみたい。知らせたらガツクリ来てたし」

「演技ではないと？」

加古の目からハイライトが消えた。

「あたしが目を見て間違えるほどポンコツだって言いたいの？」

MP40は首を振った。

「だったらとうの昔に戦場でガラクタになってる、ですか」

「そういうこと」

「つまり、約束を守ってくれたって事ですな」

「・・・まあね。けつ、結果的にだけど」

MP40はニツと笑ってカバンから小瓶を取り出した。

「なら差し上げます。最後に仕入れたジンジャーエールです」

加古は受け取りながら苦笑いした。

「これが報酬ってんなら、随分高いジンジャーエールだね」

「お土産というのはこんなもんですよ」

「ま、もらつとくよ・・・ああそうだ」

「なんです?」

「おかえり」

MP40は一瞬キョトンとしたが、にこりと笑った。

「はい。ただいま戻りました」

「車・・・だね。表がこんなになつてるとは思わなかつたよ」

MP40が帰宅して一段落した頃。

マスター、ホワイト、MP40、そして加古は店の目と鼻の先で朽ち行く残骸を眺めていた。

ホワイトは肩をすくめた。

「これらはいつ処理したのだ？加古」

「1週間くらい前かな」

「・・・ああ、埃まみれで帰ってきた日か」

「そうそう」

マスターはくしやりと加古の頭を撫でた。

「お前の事だから本拠地まで攻め登ったんだろ？」

「・・・でないとまた来るから」

「もう来ないと考えて良いのかな？」

「うん。大丈夫」

「いつも護ってくれてありがとうな、加古」

「うん」

ホワイトはそつとMP40の隣に近寄り、ささやいた。

「・・・羨ましがるのは良いが、よだれ出てるぞ」

「・・・はっ！っい！」

「ところでだな、MP40」

「えっ？あつ、はい、なんででしょうか？」

「その、私達の約束を覚えているか？同志よ」

MP40は同志という一言を聞いた途端、ピクリと肩を震わせた。

「んっ？その単語が出るという事は、マスターと上手く行きましたか？」

「い、色々紆余曲折はあったのだが、そういうことになった。だからその・・・」

MP40はにこりと笑った。

「ええ、もちろん。今度は私が証人になりますよ」

「あ、ありがとう」

「何かしらの儀式はなさる予定ですか？」

「実は結婚指輪が・・・今日出来上がる予定なのだ」

「おお。じゃあ受け取ったらすぐ挙式ですね！」

「そ、そうなる。いや、なつてほしい」

「どうしてです？」

「ドキドキしてブラックボックスが破裂しそうだ」

「それは真面目にシヤレになりません」

「ほ、本当に爆発する訳な・・・ない・・・はず・・・たぶん」

MP40は小さく首を振った。

「出来るだけ早く進めましょう。それで一家全員滅亡なんてオチは最低です」
「うむ」

それから1時間ほど後。

マスターは恐る恐るアクセサリ職人の仕事場を訪ねていた。

「こっ．．．こんにちは．．．」

「おや、モテモテでウハウハのマスター様じゃありませんか」

「もうそれでいいよ．．．指輪出来てるかな？」

「今日はお一人ですか．．．申し訳ないですが今更キャンセルはできませんよ？」

「解ってるよ。受け取りに来ただけだよ．．．ええと、お金は足りたかい？」

「お待ちください。お品物と清算の手続きをいたしましょう」

アクセサリ職人は優雅な足取りで棚に向かうと、引き出しをさつと引き抜いてカウンタ―に戻ってきた。

「お待たせしました。結婚指輪です。こちらが旦那様用、こちらが奥様用です。ご確認

を」

マスターはそれぞれ箱を開け、満足そうに頷いた。

「ああ、イラスト画より格段に素晴らしい。いつもながら惚れ惚れする仕事ぶりだ」
「当然です」

「・・・泣けるくらい高かっただけの事はあるよ」

「後金で金貨15枚くらい追加で頂きましょうか？」

「勘弁してください」

「冗談です。それと、こちらの金貨3枚は前金からのお返しです」

「えっ、良いのかい？」

職人はにこりと笑った。

「私からのご祝儀です。ご結婚おめでとうございます。お三方と末永くお幸せに」

「・・・うん、ありがとう」

マスターは照れ笑いを返しつつ、職人ときゅつと握手したのである。

同じころ。

「あ、ああ、後は何だ？ 後は何があればいい？」

「ホワイトが落ち着きを取り戻せば良いんじゃないか？」

そう。

仮住まいの方ではMP40と加古、そしてリーリヤが調理を進めていた。会場はデラとラシヨルフに加え、デボルとポボルが設営を進めていた。

そしてガチガチに緊張するホワイトの隣にはアネモネが付き添っていた。

「なっ、何を言ってる。わ、わわ、私はいつも通り、ふっ普段通りだぞ?」

アネモネはポケットから取り出したスキットルの蓋を開け、中の液体をぐくりと呷った。

「無理があり過ぎるだろう・・・とにかく座ったらどうだ? 式はまだ先だ」

「・・・それは酒か?」

アネモネは頷いたが、ジト目でホワイトを見た。

「そうだが、やらんぞ? 今飲んだら絶対お前は酒乱になるに決まってる」

「・・・ダメか?」

「ダメだ」

「ああもう、旦那様はいつお戻りになるのだ! 緊張して死にそうだ!」

「まだ1時間少々しか経ってないし、この間その店に行った時は片道1時間かかったの
だろう?」

「そうだが、それがどうした! ああ旦那様はまだか!」

「・・まさしくポンコツだなあ」

その頃、キツチンでは。

「オーブン前退避！灼熱の鶏肉を搬送するぞ！」

「了解！退避！繰り返し！退避！」

リーリヤは包丁を持ったまま苦笑した。どういうノリなのよ、この二人・

「3・2・1！アチアチアチアチ！」

「メディック！メディック！」

そう言いながら普通に食卓へローストチキン運んでるのよね・二人ともちゃんとミトン嵌めてるし。

仲の良い事・・よし、サラダはこんなもんなつと。

第58話

一方、会場ではポポルがデボルの袖を引いていた。

「ん？どうしたポポル？」

「ね、ねえデボル・・・あの人襲ってこない？美味しく食べられたくないよ・・・」

「あの人？ああデラさん？大丈夫だよ。ほら、目が緑じゃん」

「緑だから安全とか赤だから危険とかそういうレベルで判断していいの？」

「アンドロイドだって機械生命体だって艦娘だって似たようなもんじゃん」

「時折デボルの肝っ玉が羨ましく思うわ・・・」

「それに、この物件買ってくれた人だし」

「売ったの!？」

「もうずいぶん前だけどさ」

「そつか。じゃあ知ってて当然か」

「あとはさ・・・」

「デボルはそつとポポルの耳元でささやいた。

「たぶんあのファミリーの中で最も常識人だから」

「ええ・・ミュータントが一番まともなの?」

「アタシのゴーストがそう囁くんだよ」

「また深夜アニメ見たの?」

そんな二人を横目に、デラとラシヨルフは什器を動かしていた。

「デラさんよう、テーブルとか椅子とか重すぎねえか?」

「アンドロイド対応だからな」

「あー、なるほど。花嫁ちゃんアンドロイドだったな」

「そういうことだ」

「で、結局この家はマスターにやるのかい?」

「いや、今の店の所に家を建てて引越すらしい」

「そっか。じゃあこの家どうすんだ?」

「また放っておくよ」

「要らねえんなら俺っちが買っても良いぜ?今なら金あつから」

「ほう?買った値段で譲っても良いが」

「なんぼよ?」

「金貨5600枚」

「・・・なんでそんな高えんだよフリーズしかけたよ。つーかりーリヤこの近所だろ?」

「警備兵常駐区画だからな。ああ。リーリヤは私より前から住んでるな」

「なんてこった。どいつもこいつも金持ちかよお」

「買うか？」

「萎えた」

「そうか」

「・・・あとはあのテーブルをそこで良いのか？」

「そうじゃの。あれは重いから二人で持とう」

「おう」

「・・・あ、あの」

「なんじゃ？」

「恥ずかしいのですが」

「そうじゃろうな」

「じゃあ向こう向いててくださいよ！あるいはお散歩に出るとか！」

「ここまで準備させといてそれはないじゃろう」

「そーよそーよ」

「さあ男らしく一気呵成に語りなさい！すぱーっと！」

「ヒューヒュー！」

「頑張ってくださいマスター様！」

「早くしないとご馳走冷めちゃうよ〜」

そう。

帰ってきたマスターは挨拶もそこそこにリビングに連れ込まれた。

そこにはめかしこみ、顔を真っ赤にして立ち尽くすホワイトがいた。

ホワイトの周囲には当然のように全員が勢ぞろいしていた。

そしてプロポーズをどうぞと大げさな身振りのラシヨルフに促された、という状況である。

マスターはデラ達をジト目で見た後、うおっほんと咳払いをした。

そしておもむろに、受け取ってきたばかりの小さな箱を取り出し、ふたを開けた。
ごくり。

デラ達が指輪をよく見ようと箱の方に視線を移した時、マスターはそつと切り出した。

「え、ええと、まだ本当に現実感が無いのですが」

「・・・」

「砂漠の廃墟でお会いしてから今の今まで、私はホワイトさんを見るたびにドキドキします」

「・・・」

「それくらい麗しく、お任せした仕事は完璧にこなされ、いつも大人な態度でいてくれて」

アネモネはぶるぶると震えながら笑いをこらえていた。

しまった！さっきのあのうろたえぶりを録画すべきだった！

「私達とはひと時の間だけ、たまたま一緒に居る高貴なお方、そんな気がしてました」

「・・・」

「あの夜、アネモネさんの後押しがあつたおかげで、こういう運びとなりました」

「・・・」

「ホワイトさん」

「・・・はい」

「麗しき貴女を、これからも大事にします。だから、一生、付き添ってください」

「・・・途中でエネルギー補充するのは、構わないか？」

「ええ。何度でも」

「随分長い間お付き合い頂くことになるが？」

「構いません」

「・解った。不束者だが、このホワイト、残る全ての時を添い遂げると、やつ、約束しよう」

アネモネがニツと笑った。

「おいおいホワイト、随分男前な返事だな？」

リーリヤが肩をすくめた。

「どっちかというマスターが娶られるみたいよね」

MP40がふるふると首を振った。

「だつダメですよ皆さん！神聖な席を茶化しちやダメなんです！」

加古が頷いた。

「うちの時は皆でさ、こうやったよ？」

そう言いながら、加古はパチパチと手を叩き始めた。

MP40が、ラシヨルフが、デラが。

リーリヤが、ポボルが、デボルが、そしてアネモネが続いていく。

温かい拍手の中、マスターとホワイトは互いに指輪を嵌めあい、そのまま抱き合つて口づけをした。

途端にMP40と加古が反応する。

「あー！わっ！私の時はそんな良い事してくれなかったですー！」

「あたしにも無かった！ぎゅーって！むちゅーって！あたしもして欲しい！」

「プハツ！あとで！あとでやってあげるから！今いい所だから！」

「今！」

「して！」

「今はホワイトさんとの時間だから！今夜ちゃんとしてあげるから！」

「旦那様」

「えっ？ホワイトさん・旦那様呼びにするんですか？」

「旦那様！」

「はい！」

「・・・こっ・・・今夜は・・・初夜であろう？それとも私に一人寝をさせるのか？」

「阻止！」

「そこで変な団結しないの！」

「私達だって！」

「無かったもん！」

「あーもう！あの時は爆撃を受けた直後で寝床自体がなかったからでしょうが！」

MP40と加古に詰め寄られたマスターはぐいぐい迫る二人を押し戻しながら叫んでいた。

もう式次第も何もあつたもんじやない。

4人の様子を見て苦笑するデラに、アネモネが囁いた。

「いつもこんな感じか？」

「ああ。大体マスターの家はこんなもんだし、これからもうじやろうよ」

「ふふ。来るたびに面白い場面が見られそうだ」

「本当に来るたびに面白い事があるぞ。時間があれば足を運ぶと良い」

「そうか」

「わしはこんな身じやから、あまり足繁くとはいかんがの」

「なぜだ？別に誰も気にしていないように見えるが？」

そう言われたデラは、ふと顎に手をやった。

「・・そういうえば、加古ちゃんもMPの嬢ちゃんも、以前に比べれば普通に接してくれるなあ」

「傍から見て違和感を感じないぞ？」

「・・・そう、か」

「気にせず来れば良いじやないか。何だったら私を誘ってくれてもいい。一緒に行こ

う」

「こんなのが一緒だと気持ち悪いじやろう」

アネモネはスツと目を細めた。

「・・デラ殿」

「うん？」

「私は9千年以上、戦場に身を置いてきたからこそ言うのだが」

「・・」

「真に気持ち悪いのは、性根の腐った奴が裏切る時の目だよ」

「・・」

「それに、我々は負傷など日常茶飯事。外見の損壊なぞ見飽きてる」

「・・」

「私はそう簡単に自分の勝手に外出出来ん。外から誘ってもらう方が出やすいのだ」

「・・」

「私を助けると思ってる、な？」

「・・マスターの周りには、変わり者が集まるなあ」

「お互いにな」

アネモネの目を見つめた後、デラはこくりと頷いたのである。

第59話

「あー！肉の一番美味しい部分全部持ってたあ！」

「名前でも書いてあったか？俺っち見えなかったぜえ」

「半分返せえ！」

「・・・ほらよ」

「どう考えても半分じゃな・・・あー食べたあ！」

「うめー」

「ラザニアの残りもらうわよ」

「あー待つて待つてええ！」

その後の披露宴も、結婚式以上に賑やかな雰囲気で。

テーブルのあちこちで笑い声と喧騒が生まれていた。

ホワイトはそつと、マスターの肩に頭を乗せた。

「どうしました？疲れましたか？」

「・・・いや」

マスターはホワイトの肩に、そつと手を乗せた。

「ずっと、こんな明るい毎日だと良いですね」

「ああ。私は最初、自分の役割の無い世界で起動したことを嘆きましたが・・・」

「・・・」

「マスター殿と出会えて、皆と出会えて、本当に良かった」

「・・・」

「きつと前任者は、バンカーでここまで幸せではなかっただろう」

「解りませんか？意外に楽しかったかもしれない」

「・・・ふふ。そうだな。解らないな」

「ええ」

「私が解るのは、今の私が幸せだという、ただそれだけだ」

「・・・ずっと、仲良くしていきましょう」

「ああ」

ますます盛り上がる喧騒の中、マスターはそっとホワイトの肩を撫でていた。

「うーい、飲んだ食った。こんな楽しい宴席は久しぶりだったぜ！」

「ちゃんとアルコール分解してくださいよ？」

「大丈夫！デラさんが送ってくれるぜ！」

フラフラしているラシヨルフと、それをジト目でみるデラ、見送るマスターという図である。

「すみませんデラさん、ラシヨルフさんをお願いします」

「任せておけ。どうせ飛行機ですぐだ」

「・・・うぷ・・・吐いて良い？」

「パラシュートなしのスカイダイビングをやりたいんだな？」

「なら離陸前に放出しとくぜ・・・ゲロ袋ある？」

「どつかにあるじやろう・・・やれやれ・・・」

「お、お気をつけて・・・今日は来てくれてありがとうございます」

「またなあ、マスター」

「では失礼するよ。また明日な」

「はい。また明日」

MP40はリーリヤを見送っていた。

「じゃ、あたしも帰るね」

「リーリヤさん、今日は来てくれてありがとうございました」

「いいのいいの。ラシヨルフも言っただけど楽しい宴だったし！じゃーね！」

「また遊びに来てくださいいね！」

加古はデボルとポボルが営業車に乗り込む所まで付き合っていた。

「じゃ、アタシ達も帰るな？」

「うん。あー・・・デボルさあ」

「おう」

「後任見つかった？」

「そう簡単には居ないよ。けど、だからと言ってアイツで良かったわけでもない」

「・・・」

「そんな顔すんなよ。こっちは気にしてないからさ」

「・・・そっか」

その時、後部座席の窓を開けて、ポボルが顔を出した。

「そうそう、私も言い忘れてました」

「えっ？」

「うちのお店を救って頂いて、面倒な連中も奇麗に片付けてくれたこと、本当に感謝して

います」

「・・・」

「私達は治療用のアンドロイドだから、ほとんど戦闘力はないんです」

「・・・」

「だからあなたがやってくれなかったら、アネモネさんをお願いしなきゃいけなかった」
「・・・」

「またお店に来てくださいいね。今度はお菓子をご馳走しますから」

デボルがニツと笑った。

「高確率でプリンだけどな」

ポ。ポルが頬を膨らませた。

「プリン美味しいじゃない！」

加古がくすつと笑ったので、デボルは頷いた。

「それで良いんだよ加古。あんたは何も間違っちゃいねえんだからさ」

「そうですよ。私達が困った事になる前に助けてくださったんですから」

加古は数回、小さく頷くと、そつと営業車から離れた。

デボルはそれを合図に営業車のエンジンをかけた。

「じゃあな、たまには遊びに来いよ！」

「お待ちしてますからね！」

「うん。またね」

二人の乗った営業車が小さな砂煙を上げて去っていくのを、加古は小さく手を振って見送った。

ホワイトはアネモネと別れを告げていた。

「これに懲りず、また遊びに来るといい」

「ああ。今度はデラ殿と来るかもしれない」

「デラさんと？ どういうことだ？」

「なに、私は総司令官という立場上、自分から遊びに行くとは言い難いのだ」

「・・・そうだろうな」

「だから所用を作ってもらう役を、デラ殿にお願いしたのだ」

「なるほど」

「その・・・皆にとつて、デラ殿の外見は今でも受け入れがたい物か？」

ホワイトは首を振った。

「私も最初は怖かったが、1度話せば大丈夫だった。加古やMP40も怖がっているようには見えん」

アネモネは頷いた。

「それならいい。デラ殿ご本人が一番気にしてる感じだったのでな」

「そうか。私達は平気だと伝えてやってほしい」

「解った。では、部下を待たせているので、これで失礼する」

「・・・アネモネ」

「なんだ？」

「ありがとう。アネモネの一押しが無ければ、今日という日は無かった」

「それが友達というものだ。違うか？」

アネモネはパチリとウインクすると、軽く片腕を上げながら去っていった。

翌日。

「いよいよ、ですね」

「ああ。いよいよだ」

マスターとホワイトが見上げる先には、高密度かつ整然と配された管と大きさまざまなタンク。

幾つものランプは全てグリーンの明かりが点いており、モーター類が静かな回転音を立てている。

そして、二人の前の操作パネルには大きくREADYの文字が灯っていた。

満面の笑みを浮かべ、何度も頷く二人の後ろでは、呆れ顔のMP40と加古が居た。

「初夜に精錬装置の構造考えてるマスターもマスターだけどきさあ・・・」

「お二人揃ってパジャマのまま夜通し突貫工事で作り上げるって・・」

「初夜とかムードとかまるで無いよな」

「まあその、似たもの夫婦ってことなんでしようね・・」

「でも、あたしはああはなりたくない。譲れないラインはある」

「そうですか？ 私はマスター様の言う通りにしますけど」

「もうちよつとでイケるゝって時に閃いたとか言つて研究室へ飛びこまれても良いの？」

「・・・そつ・・・それ・・・は・・・」

「無理しない方が良いよおゝ？ ほれ？ ほうれ？ どーなのよう」

「・・・うー」

「あたしは絶対嫌だ。マスターの後頭部張り飛ばしてベッドに連れ帰る」

「そこまで出来る加古が羨ましいです。私は多分研究室の柱の陰に居るだけです」

「柱でイつちやうの寂しくない？」

「そういう意味じゃない！ 加古のバカ！ デリカシーゼロ！」

騒がしくなりつつある二人を他所に、マスターは触媒石の入ったバケツを手を取つた。

ホワイトはマスターから幾つか触媒石の原石を受け取り、計量した後投入口へと落

とした。

そして二人は再び操作盤の所に帰ってきたのである。

第60話

「ここはホワイトさんがスタートを押してください」

「・・旦那様になってもさん付けなのか？」

「よっ呼び捨て希望ですか？」

「ああ」

「えっ、えっと・・・じゃあ、す、スタートボタンを押してくれ、ほっ・・・ホワイト」

「ああ」

溢れんばかりの笑顔でスタートスイッチを押し込むホワイト。

「READY」の文字が「Operation」に変わる。

モーターの音が大きくなり、ガリガリと砕く音と共に配管内をゴウンゴウンと音が巡る。

上の方で蒸気弁が作動したのを見て、ホワイトは頷いた。

「よし、第1窯が規定温度に達した」

マスターは操作盤を見て頷いた。

「想定電力量で充分収まっています。発電機異常なし」

「さあ、マスターが昨夜思いついたアイデアが功を奏するか、だな」

「ええ・・上手く行つて欲しいのですが」

「配管を途中でツイストさせるなんて当時誰も思いつかなかつたからな」

「じゃあこれが初ですか」

「ああ、初だな」

「二人で行う、初めて、ですね・・」

「なんだか照れるな・・」

加古はげんなりした顔でMP40に告げた。

「あれのどこがどう照れるのかなあ・・」

MP40も似たような表情で頷いた。

「ちよつと上級すぎますね・・」

「朝ごはん作つてこようか・・」

「そうですね・・」

そして案の定、加古達が朝食だと言つて上に連れていくまでマスター達は操作盤の前に居たのである。

「ど、どうでしょう？出来てますかね」

「慌てるな。息がかかったら粒子が舞ってしまうかもしれない」

「なるほど。ではマスクをしますか」

「良いアイデアだ」

「ふわーあ、出来たあ？さっさと売って肉買いに行こうよ」

「加古、飽きるの早すぎです」

朝食後。

熱々のコーヒーをもどかしげに啜り終えたマスターは、一目散に地下へと舞い戻った。

一足先にホワイトが戻っており、精錬処理は終わったと告げた。

ただし正真正銘の初動作であり、ホワイトは慎重にログを解析していた。

そしてようやく、取り出し口と書かれた引き出しの前に立ったのである。

マスクをつけたマスターが引き出しのロックを外し、同じくマスクをつけたホワイトが引く。

「……へえ」

「綺麗……」

加古とMP40が目を見開いてそう呟いたように。

取り出し口に溜まった触媒石は、粒子状になった時特有のキラキラとした輝きを放っていた。

「・・・」

マスターとホワイトは無言で互いに頷くと、そつと引き出しを傾け、濾紙の上に粒子を落としていく。

最終的に触媒石の粒子は、光りを放ったままガラスの小瓶へと納められたのである。

ホワイトはマスターから手渡されたガラスの小瓶を、重量計測器へとそつと装填した。

ホワイトは映し出された重量を見て即座に言った。

「廃棄率は68%だ。マスター、これまでの記録を大幅に更新したぞ！」

「やった！ホワイト！」

「マスター！」

ひしと抱き合うマスターの肩を、加古はつんつんと突いた。

「ねえねえ」

「ん？なんだ？」

「いや泣かなくても良いじゃん・・・何がどうなったの？」

「今まではな、不純物として捨て去る割合を80%とするのが最高だったんだよ」

「ふんふん」

「それを68%まで下げる、つまりもつと触媒石を原石から拾い上げること成功したんだよ」

「ふんふん。あと3行で」

「・・・ええとつまりだな」

「あと2行」

「加古の取り分が」

「あと1行」

「当初の予定より1.6倍になった」

「・・・えっほんと?」

「ほんと」

「2000倍じゃなくて3200倍って事?」

「その計算は間違ってる」

「だって2000倍って!」

「単位重量当たりの価値は2000倍だが、68%は廃棄されるんだから掛け算にはならん」

「・・・私でも解るように3行で」

「だから原石で売るより640倍上がるの」

「どっから640って数字が出てきたのさ?あと2行」

「単位重量当たり2000倍で、68%廃棄するって事は32%残るって事だろ?」

「うん」

「だから2000x0.32で640だろうが」

「うん・・・」

「お前狙撃の時に弾道計算やるだろ・・・」

「いちいち計算なんかしてたら殺されちゃうよ。勘だよ勘」

「頭良いんだか悪いんだか・・・まあとにかくそういう事だ。損はしないから」

「ふーん」

「全然実感してないな?」

「うん」

「はあ・・・」

「がくりと肩を落とすマスターと首を傾げる加古という構図を横に、MP40はホワイ
トと話をしていた。」

「廃棄率が80%から68%に下がるのはどれくらい凄い事なんですか?」

「そうだな・・・人類軍最初の精錬プラントは99.8%を捨てていたんだ」

「はい」

「一方で同時期の機械生命体側のプラントでは95%の廃棄率だと推定されていた」

「はい」

「採掘量が同じとして、何倍取れることになる?」

「・・・25倍」

「そうだ。そしてそれが、我々アンドロイドが機械生命体に劣勢となった理由だ」

「あ」

「我々が1体分作る間に、奴らは25体完成させていくのだ」

「・・・絶望的ですな」

「人類軍側は1体の高機能化と高耐久性を追い求めながら除去率の低下を死に物狂いで探していた」

「・・・」

「私に残された記録では80%まで低下させたが、機械生命体側は70%後半まで下げたらしい」

「・・・えっ、じゃあ68%というのは」

ホワイトが頷いた。

「もしも1万年遡れたら、アンドロイドが機械生命体に有利な戦況を作り出せただろうし」

「・・・」

「今であつても、一度精製処理を通つて廃棄されたスラグから、更に触媒石を取り出せる可能性がある」

「・・・ホワイトさん」

「なんだ？」

「もしかして今回私達が探し当てたのは、それじゃないんですか？」

「古い時代に、高い除去率で捨てられていた頃のスラグという事か」

「それなら現存することの辻褃はあいますよね」

「ふむ。確かに1度精製処理を経たスラグなぞ見向きもされないからな」

MP40は原石の1つをつまんだ。

「私にはこれが、溶かして押し固められた物のように見えるんです」

「ふむ」

「鉄鋼スラグつてコンクリートの骨材とかに使われたりするじゃないですか」

「確かに、触媒石スラグも鉄鋼スラグとさほど変わらない」

「仮にそうだとしたら、シエルターの中にあるだけじゃなくて」

「シエルトー自体を形作るコンクリートそのものに含有される可能性があるという事か
！」

「はい」

「それは気づかなかった！その前提で早速再計測してみよう！」

ホワイトは採掘地点へと駆けていった。